

Love

信州大学教育学部における
地元教育機関と連携した「教育参加」の実践



信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

まえがき

漆戸 邦夫（教育学部長）

学校教育の成否は、幼児・児童・生徒の教育に直接携わる教員の資質能力に負うところが極めて大きいと言われます。今日の学校にはいじめや登校拒否など深刻な問題が山積しており、教科指導の面でも、生徒指導や学級経営の面でも、教員には新たな資質能力が求められています。特に教員養成段階の学生や若い教員には、子どもや学校教育に対するしっかりしたものの見方が必要であると考えられます。生きた幼児・児童・生徒観、教育観を身に付けるためには、子どもたちと実際にふれあったり子どもたちの様子を観察する機会が大切であります。

折りしも、本年度文部省により初めて国立の全教員養成系大学を対象に「教員養成学部フレンドシップ事業」が導入されました。教職を志す学生が種々の体験活動等において児童・生徒と直接ふれあい、ともに学ぶことは、教員としての実践的指導力の向上を図る上で大変有効であります。そのふれあいの場や機会を、教員養成大学と地元教育委員会等が連携・協力して提供することがこの事業の主なねらいかと思われまます。

このフレンドシップ事業を成功させるために、本学教育学部学生を受け入れていただいた、県下教育機関は実に9機関以上に及びました。また、シンポジウム「フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか」を企画いたしましたところ、長野県教育委員会をはじめ県下の関係教育機関から、また大学関係では北は秋田大学や福島大学から、南は広島大学や大分大学まで多数の大学からご参加いただき、盛大に開催することができました。主催した信州大学としましては大変心強く、深く感謝申し上げる次第であります。

このフレンドシップ事業をきっかけにして、教員養成大学と地元教育機関の間の連携が今後益々深められ、地域と大学が一体となって学校教育の指導者養成を行い、地域の期待に応えうる優れた教師が育つことを念願するものであります。

この冊子は、平成9年度信州大学教育学部が実施いたしました「教員養成学部フレンドシップ事業」の実践報告書であります。先生方のご批正、ご指導をいただきたいと思います。

Web上では非公開

Web上では非公開

目 次

まえがき		教育学部長 漆戸 邦夫…………… 1
カメラが駆ける 信大“教育参加”プログラム……………		2
目次……………		4
1. 教員養成学部と地元教育機関との連携		
(1) 温かいご支援に感謝	附属教育実践研究指導センター長 藤沢謙一郎……………	6
(2) 体験からの体得を願って	国立信州高遠少年自然の家所長 松下俱子……………	7
(3) 信州大学との連携	長野県教育委員会生涯学習課長 本道亜紀子……………	8
(4) 感謝多謝!	教育学部附属松本地区学校園長 吉本隆行……………	9
2. 信州大学におけるフレンドシップ事業の構成		
	実践センター 土井 進……………	10
(1) 平成9年度「教育参加」実施計画……………		11
(2) 「教育参加」全体会の授業内容……………		13
(3) 1年生の教職に関する意識調査結果……………		17
(4) 「教育参加」に関するアンケート調査結果……………		18
(5) 第四期「信大YOU遊サタデー」実施報告……………		19
3. 「教育参加」の学生を受け入れた側からの実践報告		
(1) 学生が幼稚園で作業している姿に地域の好感	附属幼稚園副園長 塚本節子……………	21
(2) 今をどう生きたらよいかを自問する大事な機会……………		27
	附属松本小学校副校長 中田育成	
(3) 学校教育全般についての理解の深まり	附属松本中学校副校長 堀内 泰……………	31
(4) 若い心に	長野県松本盲学校長 野口忠世……………	35
(5) 聞きごたえのある大学1年生の語り……………		41
	国立信州高遠少年自然の家専門職員 唐澤久樹	
(6) まず体験、その中から意義	長野県松本青年の家次長 古幡健夫……………	52
(7) 人間関係の形成・子どもの見方の変化	長野県小諸青年の家次長 浅井莊一郎……………	53
(8) 学生の参加状況と態度の問題点	長野県須坂青年の家次長 森山俊一……………	55
(9) 危機的教育課題に挑戦する若者への期待……………		59
	長野県阿南少年自然の家次長 貝原 豪	
4. 「信大YOU遊サタデー」の出張と他大学との連携		
(1) 子どもたちと共に自然体験を	長野県自然保護研究所 陸 斉……………	69
山あそび	理科専攻4年 千葉綾子……………	70
(2) 未来のパパ、ママが家庭教育事業を支援……………		74
	長野県教育委員会佐久教育事務所指導主事 上原美次	
出張YOU遊サタデーin乙女の森フェスタ	家庭専攻4年 佐々木美恵……………	75
(3) 遊び心をもって子どもたちの心の中へ……………		77
	国立信州高遠少年自然の家事業課長 花田準一	
出張YOU遊サタデーin高遠	社会専攻4年 中村典史……………	78
(4) ひまわりっ子ランドの創造を目指して……………		80
	長野県社会部青少年家庭課長 本藤一衛	
出張YOUサタin更埴ーチャレン児プラザ2 1ー	理科専攻4年 宮沢 元……………	81

(5) 「国大わくわくサタデー」と「信大YOU遊サタデー」の交流……………	82
	社会専攻4年 中村典史
(6) 初代はただ突っ走るのみ	横浜国立大学4年 中村早苗… 84
(7) 広島大学「愉快的土曜日」との連携	倉敷市立福田南中学校 角田正和… 86
5. 長野地区附属学校で始まった「教育ボランティア」	
(1) 子どもとの関わりと指導者としてのけじめ	附属長野小学校副校長 加藤達人… 89
遠足における児童理解	障害児教育専攻4年 前田剛良… 90
(2) 教師としての資質向上を教育ボランティア活動に期待……………	91
	附属長野中学校副校長 今村資泰
裏方ではなく貴重な実践、経験の場	英語専攻4年 尾澤真由美… 93
(3) ひまわりの会の取り組み	附属養護学校副校長 中山邦彦… 94
「あすなる会」のポーリング大会に参加して	国語専攻4年 桐山 潤… 95
ひまわりの会「あすなる山遠足」報告	社会専攻4年 宮下美保… 96
6. 「教育参加」の学生を送り出した側からの実践報告	
(1) 松本地区教官の関わりと学生の状況	国語教育講座 上條 厚…97
(2) 異文化から学ぶ	国語教育講座 徳井厚子…103
(3) 教育参加のレポートを読んで	理科教育講座 中村正人…104
(4) 人間性を取り戻す大きな役割	英語教育講座 山崎達朗…105
(5) 学生への励ましの言葉と教育実習への橋渡し	実践センター 土井進・東原義訓…106
7. シンポジウム「フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか」……………107	
(1) 講演「教員養成とフレンドシップ事業」……………	109
	教育職員養成審議会臨時委員 小林輝行
(2) 実践報告	
①フレンドシップ事業を契機とした信州大学と地元教育機関との連携……………	126
	信州大学助教授 土井 進・長野県阿南少年自然の家次長 貝原 豪
②学生が創造する「信大YOU遊サタデー」……………	134
	社会専攻4年 中村典史・家庭専攻4年 佐々木美恵
③秋田大学におけるフレンドシップ事業の試み……………	150
ーこれまでの自主的な学生活動と秋田市教育委員会との連携を通してー	
	秋田大学教授 浦野 弘
④「実践的指導力」の中身を問うフレンドシップ事業……………	156
	福島大学助教授 鈴木庸裕
⑤「教員養成学部フレンドシップ事業」の概要	新潟大学助教授 岡野 勉…162
⑥自然体験からフレンドシップへ	上越教育大学講師 濁川明男…165
⑦「学外活動体験」の実践ーその内容と運営ー……………	171
	横浜国立大学教授 小泉秀夫・横浜国立大学講師 山本 光
⑧広島大学学校教育学部フレンドシップ事業 愉快的土曜日……………	177
	広島大学教授 高橋 超
(3) シンポジウム報告ー子どもを媒介とした大学と地域社会の連携ー……………	183
8. 信州大学のフレンドシップ事業に関する新聞報道……………185	
あとがき	附属教育実践研究指導センター 土井 進…193

1. 教員養成学部と地元教育機関との連携

あたたかいご支援に感謝

附属教育実践研究指導センター長

藤 沢 謙 一 郎

平成8年度に開設した「教育参加」も2年目を迎え、大学内外の多くの方のご協力をいただき、無事終了することができました。ここに厚くお礼を申し上げます。

本年度は、教員養成学部フレンドシップ事業（文部省、平成9年度新規事業）の助成を受け、地域の教育関連機関と連携をはかりご協力をいただく中で、多くのメニュー（体験の場）を用意することができました。これにより、昨年の反省として残された①学校教育機関だけでなく社会教育施設での体験、②ウイークデーだけでなく、土・日曜日にも参加できる場を、といった課題が解決できました。

一方、学生を受け入れてくださいました関係機関では、入学間もない多様な学生にとまどわれたこともあったとお聞きしていますが、参加学生のレポート等をみると、学生なりに多くのことを学んでいるように思われます。時間と空間を共にする「参加」を通して、そこに参加している自らの意義を問う営みが、学生の中に少しずつ見えてきているように感じられ、うれしく思います。この自らを問うことを出発点として送る学生生活の日々に、教師としての力量の基礎が形成されていくのではないかと考えます。

4年一貫の教員養成カリキュラムの中で、1年次に位置づけられたこの「教育参加」授業は、開設してまだ2年目です。今年度ご協力くださいました関係諸機関との反省会では、この授業に対する率直なご意見と評価に加え、「教員養成に役立つならば、お役に立ちたい」というありがたい言葉をいただきました。教育実践研究指導センターでは、この温かい支援に感謝し、来年度以降、さらに充実したものにすべく取り組んでいるところです。この冊子は、今年度の「教育参加」の実践記録です。この教育実践記録に、学生が実践的指導力の基礎を身につけるもの（姿）を見つけることができるように思います。

省みて、改めてご協力、ご支援くださいました関係諸機関の皆様にお礼を申し上げます。ご次第です。



体験からの体得を願って

松下 俱子（国立信州高遠少年自然の家所長）

一年半前のことだったか、信州大学教育学部に「教育参加」という授業が始まったと聞き、大変興味を覚えた。子どもたちの行動が問題になると、多くの場合「子どもの体験不足」が指摘され、さらにその元には「教師の体験不足」があるとされる今日であるが、その「教師の体験不足」のうちでも少子社会で育った教師および教師希望の学生方の「子どもたちとともに活動する体験の不足」は当然ながら非常に重大な問題であろう。いま、教師希望の学生方が教師になる前に実際に子どもに触れるのは教育実習の何週間かだけだと聞いている。

少年自然の家は県立であれ国立であれ、子どもたちが豊かな大自然のなかで、仲間と一緒に泊まりながら自然観察や実験、野外生活、制作活動を経験することを主な目的とする社会教育施設である。仲間は学校のクラスメイトであったり団体のメンバー同志であったり家族だったりするが、教室でエンピツとノートを持って机の前に緊張してすわっている時とは全くちがう子どもたちの姿に出会うことができる。学校や団体や家族が予め活動の予定を立てて、それに従って過ごす利用の仕方もあるが、少年自然の家が、子どもたちのいわゆる現代的課題を解消または改良できるよう支援することを願って、特別な目的で企画する主催事業に応募する形で利用する仕方もある。主催事業は毎年年度計画を立て、職員、専門講師、ボランティア指導者、学生ボランティアが事前からの準備を重ねて実施する。実施後は評価・反省を合わせて、次の機会への課題とする。こうした過程を重ねていくのである。大学が「教育参加」の場の拡大を計っておられることを知り、私は必要であれば、少年自然の家を場の一つに加えて頂くことにしようと考えた。大学と少年自然の家双方にとって、前進に役立つと思われたからである。

大学のために

- ・「教育参加」の現場が一つ増える
- ・教室以外の場で子どもに触れる機会が得られる
- ・宿泊を含む生活の中で子どもをとらえることができる
- ・生活の流れの中で、不測の事態に出会い、対応しなければならない経験をする
- ・教育活動の場面を作り上げるためのさまざまな仕事があること、多くの人が仕事を分担していることを知る経験をする

少年自然の家のために

- ・事業に参加する子どもが大人の指導者だけでなく、年齢の近い兄、姉的な人と出会う体験ができる
- ・職員など指導者層は若者の発想に触れ、以後の事業計画に参考となる学びができる

「教育参加」への場の提供は第一年目を終えたばかりである。参加された学生方や担当教官からどのような評価を頂くか少々緊張している。不十分な点は徐々に改良していくとして、この提供が、学生方が実体験を経て「生きる力育て」に役立つノウハウの一つでも体得してくださり、「生きいき先生」となられるために多少なりとも役立てば幸いだと思っている。

信州大学との連携

長野県教育委員会生涯学習課長
本 道 亜 紀 子

信州大学教育学部の学生の皆さんが長野県青年の家・少年自然の家で実施する主催事業にボランティアとして参加するという、この長野県フレンドシップ体験は、県教育行政と教員養成機関との連携、さらには社会教育の推進や生涯学習の振興という点からも大きな意義があると考えます。

平成9年度は、松本青年の家、小諸青年の家、須坂青年の家、阿南少年自然の家の4所の主催事業に延べ79名の学生の皆さんの参加をいただき、事業のスタッフとして、時には子どもたちのお兄さん、お姉さんとして活躍していただきました。

なかでも、阿南少年自然の家で実施した「ふれあい自然体験キャンプ」は、短期キャンプと長期キャンプを合わせると6泊8日にわたって子どもたちと寝食を共にする長期のプログラムであり、様々な共感や感動の体験があったことと思います。教育実習とはまた別の意味で、学生の皆さんには学ぶところが多かったのではないのでしょうか。

今、青少年教育は、いじめや不登校の問題をはじめとして様々な課題に直面しております。課題解決に向けて、21世紀を担う子どもたちに生活のゆとりを確保し「生きる力」を醸成するためには、教員の資質向上、学校週5日制への対応、学校のスリム化と体験学習の重視といった方向が強く求められています。そのため、これからは、学校教育のみに偏することなく社会教育での取り組みを含めて総合的に取り組んでいく必要があります。青年の家、少年自然の家等の青少年教育施設は、教育における学校・家庭・地域社会の連携と青少年の体験活動の場としての役割が期待されています。

この長野県フレンドシップ体験事業はまだ始まったばかりであり、10年度に向けて、参加者へのオリエンテーション、事前研修、受入れ体制等、課題とすべき点も少なくありません。

この事業を通して教育参加される学生の皆さんが青年の家・少年自然の家の事業のなかでその若い力を遺憾なく発揮していただくとともに、本事業が優れた教員養成の一助として、また、学社融合の一つの方策として先見的な成果があがることを願ってやみません。

感謝多謝！

吉本隆行(教育学部附属松本地区学校園長)

今年2年目の「教育参加」は、松本地区の附属学校園や長野県松本盲学校に加え、本年度は国立信州高遠少年自然の家や長野県青年の家及び少年自然の家等5カ所にもお願いし、活動の舞台が広がりました。一方、学生にとっては2回以上参加することにより、多くの機会と継続性の観点から一層充実した科目になって参りました。延べ800人にも及ぶ学生を相手に、この「教育参加」に携わられた関係諸先生方の御心労に深く感謝申し上げます。

今やこの「教育参加」については全国国立大学附属学校の全国大会や北信越地区の大会等で、各大学や附属学校の参加者から高い興味と関心を頂いております。

教育学部の学生たちはこれまで、3年生の教育実習の場で初めて教室における子どもたちと接し、子どもたちの純真さやその活動力に鮮烈な感動を受けてきました。それまでは子どものたちと触れ合うこともなく、自分が何学部にも所属しているか分からないような状態でただ単位を修得し、教師を志すものとして何を勉強したらよいかもう一つしっかりした目標が定まらないまま2年余りを過ごしてきた学生が多いようです。1年生の若く柔軟な時期に、子どもたちと関わりを持ち、子どもたちの行動や思いに触れ、教える先生の姿を見、学校や社会施設での行事とその取り組み等の観察や考察を通して理解を深め、同時に教育への関心や意欲を高めるきっかけを作るこの「教育参加」は、その後の学部での勉強に大きな影響を与える貴重な機会であります。

学生の感想の中でよく言われていることは、子どもたちが元気で明るいこと、授業に積極的に参加し、先生の質問にみんなが一斉に集中し、勉強のレベルが高いこと、また、子どもたちが物事に一生懸命取り組み、各自が独自の意見を持ち、そうしていながら人の意見もよく聞く姿に感心し驚いています。学生が関わっている子どもと同時代の頃の自分とを比較して、授業がびっくりするほど生き生きしていること、それは大学の講義にも見られないことであるという耳の痛いことを書いています。そして子どもたちの自立性の高さは学生を凌いでいると脱帽し、まさに子どもから学んでいる状況にあり、教育参加への関わりをより多く持つことを望んでおります。

反省については、場に即した服装、礼儀、挨拶が出来なかつたり、連絡もなく休むんだり、平気で遅刻する学生がいるなど、多くの先生方からご指摘を頂き、躰に関する指導不足は私たち自身の反省でもあります。

各学校・施設の先生におかれましては、どなたも好意的に学生受け入れにご協力下さり、ご懇切なご指導に厚く御礼申し上げます。さまざまな反省に立ち、来年度も「教育参加」が計画されておりますが、今後とも教育学部学生の教育にご理解いただき、ご指導ご支援下さるようよろしくお願い申し上げます。

2. 信州大学におけるフレンドシップ事業の構成

附属教育実践研究指導センター 土井 進

平成9年1月29日付の文部省高等教育局大学課教育大学室、高橋誠記室長名の「平成9年度教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費要求書の提出について（照会）」の留意事項において、

- (1) 教員の養成段階において、学生が種々の体験活動を通して、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設けるものであること。
- (2) 上記(1)の趣旨を内容とする授業科目を開設すること。
- (3) 都道府県・指定都市教育委員会等と連携・協力すること。

の3点が提示されていた。この一言一句に接した時、信州大学教育学部において平成6年度から実施してきている「信大YOU遊サタデー」や平成8年度から開設した授業科目「教育参加」の趣旨が、文部省においても高く評価され、政策化されるまでに至ったことに深い感動を覚えた。それとともに教育委員会等との連携がまだできていないことが課題として浮かび上がってきた。

そこで、授業科目としては「教育参加」をあて、土曜日、日曜日に学生が参加できる教育活動を拡大する観点から、長野県教育委員会生涯学習課を訪ね、県内の6つの青年の家・少年自然の家との連携・協力をお願いした。本道課長から温かいご理解をいただき、平成9年6月12日（木）に附属教育実践研究指導センターで第1回企画運営協議会を開催することができた。出席者は、松本知恵子（生涯学習課社会教育係長）・渡辺貴則（生涯学習課社会教育係・指導主事）・古幡健夫（松本青年の家次長）・浅井荘一郎（小諸青年の家次長）・森山俊一（須坂青年の家次長）・佐藤恭博（望月少年自然の家次長）・貝原豪（阿南少年自然の家次長）・藤沢謙一郎（附属教育実践研究指導センター長）・東原義訓・土井進（附属教育実践研究指導センター）であった。この協議会の結果、2年目を迎えた「教育参加」の問題点であった土曜日、日曜日に学生が参加できる教育活動を拡大するという課題が一挙に解決されることになった。

文部省から提示された3つの条件を満たす取り組みは「教育参加」だけである。しかし、「信大YOU遊サタデー」も授業科目にこそなっていないが、フレンドシップ事業の趣旨に十分合致する取り組みであるので、これも含めて予算申請することにした。また、今年度から長野地区附属学校で4年次生を対象とした「教育ボランティア」（授業科目ではない）を開始したが、これもフレンドシップ事業の一環として申請した。したがって、信州大学教育学部における平成9年度のフレンドシップ事業は「教育参加」「信大YOU遊サタデー」そして「教育ボランティア」の3つによって構成されている。



【教育参加の授業風景】

平成9年度「教育参加」実施計画

1. 授業の位置づけ

松本で開設する「教育参加」“Teaching Experience”（1単位）は、「臨床経験」の科目として実施する。

2. 「教育参加」の目的と意義

「教育参加」は、教育に関心を抱いて教育学部に入学した1年次生が、

- ①附属松本学校園、長野県松本盲学校で行われる教育活動に参加すること。
- ②附属松本学校園で行われる3年次生による教育実習を参観すること。
- ③国立信州高遠少年自然の家で行われる教育活動に参加すること。
- ④長野県青年の家・少年自然の家で行われる教育活動に参加すること。

を通して、子ども理解、教師理解、学校理解を深め、教育への関心・意欲を高めることを目的とする。

1年次生が、学校や社会教育施設で行われる教育活動の実際場面に参加したり、教育実習の様子を参観したりすることによって、子どもたちや教職員との触れ合いを体験することは、教育への認識を深める機会となり、4年間にわたって教科専門科目、教職専門科目等を履修していく上での基礎となる。

3. 「教育参加」の基本方針

- (1) 担当機関は附属教育実践研究指導センターとする。
- (2) 「教育参加」連絡会において実施計画案を策定し、実践センターの常任委員会、運営委員会の議を経て決定する。
- (3) 「教育参加」連絡会の構成員は次の通りとする。
附属教育実践研究指導センター長および専任教官、教育学部松本分室教官代表及び分室全教官、附属松本学校園長、附属学校園副校長代表、附属幼稚園副園長、附属松本小学校 副校長、附属松本中学校副校長、長野県松本盲学校長、国立信州高遠少年自然の家所長
- (4) 「教育参加」は、教育学部教官、同松本分室教官、附属松本学校園教官、長野県松本盲学校教官、国立信州高遠少年自然の家の協力を得て実施する。

4. 「教育参加」の実施方法

- (1) 受講者：平成9年度入学の1年次生（約300名）
- (2) 実施時期：通年、変則集中（金曜日5コマ目、夏期休業中、土曜日など）
- (3) 単位認定：小・中・養・幼課程は必修、生涯スポーツ課程は自由選択。
レポートと出欠状況により、センター専任教官が認定する。
- (4) 実施方法：次のメニューの中から2つを選択して「参加」し、レポートを2週間以内に提出する。（支障がない場合は3つ以上選択しても構わない。）
①附属幼稚園の教育活動 ②附属松本小学校の教育活動 ③附属松本中学校の教育活動
④長野県松本盲学校の教育活動 ⑤附属松本学校園での3年次生の教育実習 ⑥国立信州高遠少年自然の家での教育活動 ⑦長野県青年の家・少年自然の家での教育活動

5. 「教育参加」の授業計画

	月 日	授 業 内 容	実施会場	担 当 者
全 体 会	4/18 (金) 5 17日 (16:20～ 17:50)	オリエンテーション 「教育参加」の目的 「参加」メニューの紹介 提出書類の記入	20番教室	センター長、専任教官 教育学部松本分室教官 附属幼・小・中教官 長野県松本盲学校教諭 高遠少年自然の家所長
	5/16 (金) 5 17日	参加者からの報告会 レポートの書き方	20番教室	センター長 センター専任教官 教育学部松本分室教官
	6/20 (金) 5 17日	参加者からの報告会 連絡・調整・相談		
	7/18 (金) 5 17日	参加者からの報告会 教育実習の参観のしかた		
	10/3 (金) 5 17日	参加者からの報告会 「教育参加」アンケート調査		
参 加	通年 (5月～ 12月)	附属幼稚園の教育活動	附属幼稚園等	附属幼稚園教官
		附属松本小学校の教育活動	附属松本小学校等	附属松本小学校教官
		附属松本中学校の教育活動	附属松本中学校等	附属松本中学校教官
		県立松本盲学校の教育活動	長野県松本盲学校等	長野県松本盲学校教諭
		国立信州高遠少年自然の家の教育活動 長野県青年の家・少年自然の家	国立信州高遠少年自然の家 信州大学	国立信州高遠少年自然の家職員 青年の家職員
教 育 実 習 参 観	8/20 (水) ～8/30 (金)	附属幼稚園での教育実習	附属幼稚園	附属幼稚園教官
		附属松本小学校での教育実習 附属松本中学校での教育実習	附属松本小学校 附属松本中学校	附属松本小学校教官 附属松本中学校教官 14専攻の実習参観教官 センター長 センター専任教官

「教育参加」全体会の授業内容

第1回全体会

1. 日時：4月18日（金）16:20～17:50
2. 会場：共通教育センター 20番教室
3. 参加者：教育学部1年生 351名
4. 内容： 司会：東原義訓
 - (1)あいさつと講師紹介 藤沢謙一郎（5分）
 - (2)「教育参加」の授業計画 土井進（5分）
 - (3)「参加」メニューの紹介
 - ・附属幼稚園（10分）
 - ・附属松本小学校（10分）
 - ・附属松本中学校（10分）
 - ・長野県松本盲学校（10分）
 - ・国立信州高遠少年自然の家（10分）
 - (4)副担任からのあいさつ（10分）
上條厚・駒村哲・中村正人・折口築・寺沢宏次・山崎達郎・徳井厚子
 - (5)質疑・応答
 - (6)提出書類への記入

第2回全体会

1. 日時：平成9年5月16日（金）16:20～17:30
2. 会場：共通教育センター 20番教室
3. 内容：
 - (1)「参加活動一覧表」の配布と説明（20分） 土井
 - (2)すでに「参加」した学生からの報告（30分）
 - (3)レポートの提出方法（10分） 上條
 - (4)「信大 YOU 遊サタデー」の紹介 実行委員会の学生
 - (5)出席カードの提出

第3回全体会

1. 日時：平成9年6月20日（金）16:20～17:30
2. 会場：共通教育センター 20番教室
3. 内容：
 - (1)すでに「参加」した学生からの報告（30分） 土井
 - (2)レポート提出上の諸注意（10分） 上條
 - (3)メニュー変更の調査（10分） 土井
 - (4)出席カードの提出

第4回全体会

1. 日時：平成9年7月18日（金）16:20～17:30
2. 会場：共通教育センター 20番教室
3. 内容：
 - (1)レポートの提出について（10分） 上條
 - (2)すでに「参加」した学生からの報告（10分）
 - (3)教育実習の参観について（10分）

- (4)夏休み中のメニューについて(10分) 土井
- (5) 夏休みを有意義に過ごすために(30分) 徳井・駒村・寺澤・中村・折口・藤沢
- (6)出席カードの提出

第5回全体会

- 1. 日時:平成9年10月3日(金) 16:20~17:30
- 2. 会場:共通教育センター 20番教室
- 3. 内容:
 - (1)夏休み中に「参加」した学生による報告(30分) 土井
 - (2)メニューの変更調査
 - (3)「教育参加」アンケート調査
 - (4)大学時代に学ばなければならないこと(20分) 折口・山崎

「教育参加」レポートの提出方法

(1)レポートの【形式】

- ・A4版の用紙を用い、字数は、1000~2000字とする。
- ・写真やパンフレットなどの資料を添付してもよい。
- ・学籍番号、記名を忘れず、ホッチキス等できちんととめること。
- ・提出先の副担任教官名を明記して提出する。

(2)レポートの【内容】

- ・原則として次の項目が含まれるようにすること。
- ・参加した「行事・活動」名
- ・参加した日時、会場名
- ・参加した「行事・活動」を選んだ理由
- ・子どもの様子
- ・教師の様子
- ・学校の様子
- ・参加して得たことを、今後の自分の研究課題にどう結びつけるか。
- ・感想など

(3)レポートの【提出方法】

- ・終了後2週間以内に副担任教官宛に提出する。
- ・提出場所は3階の南支援室で、そこに置いてある段ボール箱に入れる。

(8:30~17:00)

(4)レポートの評価

レポートは、次の4段階で評価する。

- A:形式が整い、内容も充実している。
- B:形式や内容面にやや不十分な点が見られる。
- C:形式や内容面に手抜きが見受けられ、今一步の努力が望まれる。
- D:未提出

大学生が学ばなければいけないこと

山崎達朗（教育学部 英語教育講座）

1. 前置きであり、同時に本論であるのは、大学生の集団行動についてである。今さらながら、集会での行動をとにかく言う必要はないはずなのだが、現在の大学生には私語が多すぎるので、とにかく静かに聞いてほしい。集会はこれから行動を起こすための、基本となる集まりであり、授業担当者の話を聞かずに何が得られるのだろうか。どんな行動を起こせるだろうか。先生はエンターテイナーではないのだから、思い切り堅い話をするかもしれないし、君たちの興味に合わない話かもしれない。しかし、必要だから集まってほしいわけで、その意味を理解しないのははなはだ不見識と言わざるを得ない。クラシックコンサートなどで写真を撮ったり、私語を慎むのが常識なのはご存知だと思う。そこまで厳格に言うつもりはないが、授業で先生の話に耳を傾けるのは社会のルールである。友達との話なら教室外でやるべきだ。先生は準備をして、メッセージを伝えようとしているのだから、聞いてもらえなければ頭にもくるし、ため息も出る。君たちがいずれ教師になったり、集団をまとめる立場に立ったときに、私の言っていることが実感として分かると思う。誤解しないで欲しいのは、授業中は緊張して笑ってもいけないと言っているのではない。クラス全体が笑うということは、それだけ先生の話をよく聞いているという証拠で、これはプラス評価である。いけないのは教室にいながら、授業を無視した独自の営みである。
2. 大学は自分から行動するところであり、そこが義務教育や高校とは違う。まず入学時ホームルームが無いことが分かると、かなり精神的ダメージを受けるようだ。つまり、身の置き所が無いと感じ、落ち着かないようだ。さらに授業も自分で選択しなければならないし、未知の場所で一人で暮らすという試練も同時にやってくる。それだけ皆さんは行動的にも心理的にも大人になるように期待されているのである。良く考えてみると将来は就職にせよ、結婚にせよ大きな節目の中で、自分の積極的な行動と決断が要求されていることがわかる。ルールがひかかれている小・中学校時代の方が人生にはまれなのである。ここで言いたいのは、その行動力を生かしてあと3年半で何か「これだけはやった」と誇れるものを一つだけでいいから残してほしいことである。大学4年間などあっという間に過ぎる。目標は今立ててほしい。目標は具体的なほど達成感がある。私は英語の教官だから、英語の話をすると、英検の準1級などはかなりいい目標だ。社会的にも価値があり、これからの若者はもっと国際的でなければならないからだ。とにかく目標は自分で決めてほしいが、多少背伸びをしたものでなければ意味が無い。ある程度のプレッシャーは人の能力を引き出すので目標は人に宣言した方がいい。
3. スキー複合の荻原健司やドジャーズの野茂英雄はよく競技やゲームを「楽しむ」という言葉を使う。これは大事な精神である。全力を尽くして燃えている

人はやはり違うと思う。何をやるにせよ心を入れて燃焼している人は、第三者が見てもすがすがしいし、本人も楽しめる。

皆さんも大学生時代を楽しんでほしい。目標が何であれ、心を入れてほしい。そうすれば結果は自ずとついてくると言える。そして楽しむにはプラス思考 (positive thinking) が大切である。マラソンの有森裕子ではないが、努力している自分をほめることも大切だ。勉強のみでなく、友達関係やサークル活動、バイトなどで疲れることも多いだろう。この心身の疲れもマイナスに解釈することなく、皆さんにとっては心身ともに将来の糧になると信じるプラス思考が大切だ。時間をもてあましくすぶることなく、力いっぱい燃えれば自ずと「大学生時代を楽しんでいる自分」を発見するに違いない。

今までの話をまとめると、一、社会的ルールを知ること、

二、ひとつ目標を達すること、

三、プラス思考で大学生生活を楽しむこと、

ということである。



1年生の教職に関する意識調査結果

1年生を対象とする「教育参加」の授業を改善していくための資料とするために、次の2種類の意識調査を実施した。調査日は第1回目の全体会が行われた平成9年4月18日（金）である。回答数は350名であった。

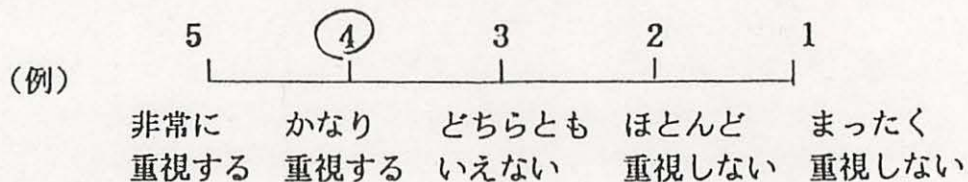
1. 教職志望度

あなたの、今の教職志望の強さはどれですか。当てはまるものを1つ選んで番号に○印をつけて下さい。

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| ①「教職にしか就職は考えていない。」 | 159名(45.4%) |
| ②「主として教職志望だが、条件がよければ会社などでもよい。」 | 89 (25.4) |
| ③「教職でも会社・官庁などでも、どちらでもよい。」 | 42 (12.0) |
| ④「主として会社・官庁志望で、それらが駄目の場合は教職でもよい。」 | 17 (4.8) |
| ⑤「会社・官庁などにしか就職は考えていない。」 | 6 (1.7) |
| ⑥「大学院、自営業などのつもり。」 | 21 (6.0) |
| ⑦ 未回答 | 16 (4.5) |

2. 教員適性判断（自己評価で重視するもの）

あなたは、自分が教師に向いているかどうかの判断をするとき、次の12項目において、それぞれの程度重視しますか。次の5段階尺度で、○をつけて下さい。



	5	4	3	2	1	5と4を合計した割合
①自分の個性や性格	104	179	59	4	1	81.4%
②こどもに対する好き嫌い	103	152	60	27	7	73.0
③教職への使命感や熱意	103	149	79	13	4	72.3
④専門的な知識や技能	54	152	107	31	3	59.3
⑤創造性や独創性	81	141	109	11	2	64.4
⑥話し方のうまさ	58	131	128	26	5	54.2
⑦人間関係の円滑さ	91	148	97	11	1	68.6
⑧常識の豊かさ	85	159	89	14	3	69.6
⑨体力や健康	81	145	92	24	3	65.4
⑩社会的な視野の広さ	123	159	61	2	3	80.9
⑪教師の社会的地位	7	25	147	110	58	9.2
⑫経済的な安定	10	44	157	92	45	15.4

「教育参加」に関するアンケート調査結果

調査日：平成10年10月3日（金） 第5回目の全体会において
 被調査者：平成9年度「教育参加」受講者 323名中303名の回答 回収率 93.8%

次の(1)～(11)の項目について、例にならって5段階尺度で○印をつけて下さい。

	5	4	3	2	1
(例)					
非常に			どちらとも		全く
そう思う			いけない		そう思わない

1. 自分が参加した（参加予定の）メニューを念頭において

- | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | | | | |
|--|-----|--------|-----|--------|----|--------|----|--------|----|-------|
| (1) 「教育参加」では、子どもと心のふれあいがあったと思う。 | 77 | (26.0) | 94 | (31.7) | 51 | (17.2) | 49 | (16.5) | 25 | (8.4) |
| (2) 「教育参加」を通して、子どもの心に寄り添う共感が向上したと思う。 | 57 | (19.1) | 127 | (42.7) | 73 | (24.5) | 31 | (10.4) | 9 | (3.0) |
| (3) 「教育参加」では、教師や施設職員との交流があったと思う。 | 64 | (21.5) | 90 | (30.3) | 93 | (31.3) | 34 | (11.4) | 16 | (5.3) |
| (4) 「教育参加」では、教師や施設職員が行う仕事の様子にふれることができたと思う。 | 109 | (36.7) | 125 | (42.0) | 42 | (14.1) | 18 | (6.0) | 3 | (1.0) |
| (5) 「教育参加」は、学生にとって有意義な授業科目であると思う。 | 165 | (55.1) | 80 | (26.7) | 41 | (13.7) | 10 | (3.3) | 3 | (1.0) |

2. これからの3年半の学生生活の中で習得していききたいと思う資質・能力について

- | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | | | | |
|---|-----|--------|-----|--------|----|--------|----|-------|---|-------|
| (6) 教科に関する専門教養を習得していききたいと思う。 | 156 | (51.4) | 97 | (32.0) | 41 | (13.5) | 6 | (1.9) | 3 | (0.9) |
| (7) 教職に関する専門教養を習得していききたいと思う。 | 147 | (48.5) | 105 | (34.6) | 40 | (13.2) | 7 | (2.3) | 4 | (1.3) |
| (8) 人間に関わっていく実践的指導力の基礎を習得していききたいと思う。 | 182 | (60.2) | 88 | (29.1) | 27 | (8.9) | 3 | (0.9) | 2 | (0.6) |
| (9) コンピュータ活用能力を習得していききたいと思う。 | 106 | (34.9) | 100 | (33.0) | 76 | (25.0) | 17 | (5.6) | 4 | (1.3) |
| (10) 趣味や特技を伸ばし、幅広い教養（人間的魅力）を習得していききたいと思う。 | 211 | (69.8) | 67 | (22.1) | 21 | (6.9) | 2 | (0.6) | 1 | (0.3) |

第四期「信大 YOU 遊サタデー」実施報告

1. 「信大 YOU 遊サタデー」のねらい

- ①信州大学教育学部の学生が、自分の得意とする分野で、学生時代でなければできないようなユニークなアイデアによる遊びや学びの体験講座を開設することによって、学生生活の活性化を図る。(学生生活の充実)
- ②教育学部教官や学生の持っているすぐれた教育力を地域社会に開き、貢献することによって、教育学部と地域社会とのつながりを深める。(大学開放)
- ③学校週五日制に対する地域社会や家庭の取り組みがまだ試行錯誤の状況にある現在、教育学部が率先して子どもたちに遊びや学びの場を提供することによって、学校週五日制時代の地域教育力の蘇生に努める。(学校週五日制時代)
- ④教育学部には幼・小・中・高・特殊の各学校の演じ・児童・生徒に対応できる学生が学んでいる。この学生たちが事故の持ち味を発揮して子どもたちと関わることによって、教師となるための実践的指導力の基礎を身につける。(実践的指導力)

2. 「信大 YOU 遊サタデー」の実施日時

- 第11回 平成9年 5月24日 (第4土曜日) 12:30~16:00 (松本キャンパス)
第12回 平成9年 9月27日 (第4土曜日) 8:30~16:30 (長野キャンパス)
第13回 平成9年 11月8日 (第2土曜日) 8:30~16:30 (長野キャンパス)
出張 平成9年 9月13日 (第2土曜日) 10:00~16:00 (長野県立歴史館)
出張 平成9年 10月11日 (第2土曜日) 9:00~17:00 (国立信州高遠少年自然の家)
出張 平成9年 11月9日 (第2日曜日) 9:00~14:00 (小諸市民会館)



3. 学年別参加者数と指導にあたった学生数

	第1～10回	第11回	第12回	第13回	合計
幼稚園	182	38	20	47	287
小学生1年	253	21	17	27	318
2年	298	26	24	44	392
3年	277	25	21	48	371
4年	260	17	36	43	356
5年	319	12	19	18	368
6年	115	7	11	9	142
中学生	41	1	13	8	63
高校生	95	1	0	3	99
一般成人	254	49	26	16	345
合計	2115	197	187	263	2762
学生	863	96	96	89	1144
(キャプテン)	(189)	(14)	(21)	(19)	(243)
(スタッフ)	(674)	(82)	(75)	(70)	(901)
学部教官	13	4	4	2	23
地域社会人	19	3	1	0	22
開設講座数	161	11	20	18	210

出張YOU遊サタデー 参加者数と学生数

	歴史館	高遠	小諸
参加者	約 400	約 300	約 250
学生	13	33	12
学部教官	1	1	1
開設講座	2	5	3

なお、別冊として『第四期「信大YOU遊サタデー」の実践－体験的学習の指導による実践的力量の形成－』（全258頁）をまとめたので参照していただきたい。



3. 「教育参加」の学生を受け入れた側からの実践報告

学生が幼稚園で作業している姿に地域の好感

附属幼稚園副園長 塚本節子

1、実施内容

- (1) 春の遠足 23名 ・ 各学年にわかれて子どもの引率補助
・ 子どもたちとあそび

○ 年少 つくし組と一緒に 子どもの姿から

目的地の美須々公園まで、およそ1.5kmくらいで、なんと1時間近くかかったのです。その1時間の間に感じたことは、子どもたちの性格や行動は本当に十人十色であるということです。積極的に話しかけてくれる子ども、話しかけるとやっと小さな声ではなしてくれる子どもなど本当にさまざまでした。

帰ってきて教室の滑り台の上で、2人の男の子がとっくみあいのけんかをはじめました。はじめに手をだした子がもう一人の子の襲撃にあい、大きな声をあげて泣き出しました。近くにいた私はとめに入ろうかとそわそわしていたのですが、担任の先生は落ち着いた顔でじっとケンカの様子を見ていらっしゃいました。私は不思議に思いました。後で聞くところによると「ケガをしない程度のケンカならすぐに止めないでやらせておくのも子どもにとっては大切なこと」だということでした。これをお聞きした時、なんて教師という仕事は奥が深いのだろうと思いました。

○ 年中 たんぽぽ組と 心がひらくまで

「普段あまりふれ合うことのない幼稚園児と楽しみたい」と幼稚園児と一緒に過ごせる時間が多そうな遠足を選びました。その中で一番感動したのは、最初話しかけても小さくうなずくだけの子が最後には話しかけてくれたことです。しぶとく声をかけていたらだんだん心を開いてくれました。まだまだ、力不足ですが、私の思いに答えてくれたことがとても嬉しくおもいました。

私が行き帰りの中で引率していると、必ず列もくちゃくちゃになってしまい、自分の担当の子が散らばってしまうことがおあったのですが、先生たちが引率していると2列にならんで、すごいなあと思いました。

- (2) こいのぼり運動会前日準備 5名

当日の係活動 24名

○ 「子どもたちにあわせることの難しさを学んで」

感動と発見の連続でした。どんなにさわいで、動きまわっていても《かけっこで》自分の番がきたと気づくと、みちがえるほどキリッと引き締まった顔付きにかわることです。園児のお兄さんお姉さんとして参加してください。と言われとても素敵に感じられてワクワクしてしまいました。これまで教育というと師弟の関係しか思いつかなかったのですが、とても視野が広がったように思えます。

○ 「先生方のたいへんさ」

幼稚園は小中学校と異なり、勉強を教えなくてよいため気楽なものだろうと単純に思っていたが、全くのまちがいであった。一人一人の子どもを理解したうえで、機を逸せずに行うというたいへんさは、今の私には想像すらできない。私たちなど一人平均4～5人の子どもを相手にしただけなのに、半日でへばってしまった。

先生方を見ていておもったことは、子どもが好きでなければ並大抵の精神では務まらないであろうということであった。

(3) 誕生会参加 6月から1月まで毎月3名～12名の参加 総計47名

6月20日の誕生会 出し物 保護者 お絵かき歌
先生 牛乳パックの王国で
副園長先生 お話

最初に驚かされたのは、元気が有り余るほどの子どもたちの様子でした。お絵かき歌はまさに父母のみなさんと子どもたちのキャッチボールといった感じで楽しんでいました。

牛乳パックで作った遊び道具を紹介するというものでしたが、副園長先生によると、単に子どもを喜ばせるだけでなく、その後、子どもたちが自分たちでその遊び道具を作ることを促すことも目的としているということでした。

幼稚園では、あそびの中に、子どもたちの創造力向上させるという要素を含ませているということに驚きを感じました。

「先生方はゆっくりと・・・」

先生方は園児たちにわかりやすく、大きな声でゆっくりと、簡単な言葉を使って話していました。園児が元気よく自己紹介ができたり、歌を歌ったりした時は「しっかりできたねえ」とか「元気よくできましたねえ」ときちんと褒めてあげていました。本当に子どもたちを喜ばせるためには、子どもたちの自主性を引き出し“自分でやった”という満足感を持たせることであると思います。

(4) 秋の運動会 前日準備 5名

当日の係活動 13名

「朝の会」から 必要なメリハリ

幼稚園へは、園児が来る少し前に行き、再度打ち合わせをしてから、朝の会へと行きました。部屋にはいると、子どもたいあそんでいました。そこへ、先生が入ってこられて、みんなに並ぶようにおっしゃいました。子どもたちはあそびに夢中で、なかなか並ぼうとしませんでした。すると、先生はまだ並んでいない子どもの名前を呼び、その子の場所を教えていました。遊んでいた子どもたちの中には、自分の場所がどこかわからないから遊んでいたということを知りました。それでもまだ、他の子とおしゃべりをしている子がいて、先生がその子の名前を何度もよんでいるのに、聞かなかったから先生が急にまじめな顔をして、その子の名前を呼びました。すると、みんなも急に静かになりました。幼稚園の先生はいつも笑っていて優しいというイメージがあったけれど

も、そんなじゃだめだということも知りました。きちんと言わなければいけない時には、別に《おこる》という意味ではなくて《まじめ》になって、ダメだという事を、子どもに教えなければならぬのだと思いました。私は今まで小さい子に対して、そういうメリハリというものが足りなかったという事がわかりました。

(5) 幼年教育研究会にむけての準備 8名 前日準備 6名 参観 10名
「気にかかる子」に自分の姿をみた

園児たちは生き生きとした表情で元気に遊んでいました。たくさんの先生方が観察をしており、中には熱心にメモをとったり、一人の子をずっとビデオカメラで撮っていたりする人もいたけれど、子どもたちは全くおかまいなしで、あそびに夢中していました。

たくさんの園児の中で一人、とても気にかかる子がいました。T君という4歳の子です。何かで遊んでいるわけでもなく、じっと何かをみつめているのです。そんな彼を先生は手を引いて皆の所へ連れていきますが、いつのまにかいなくなってしまうのです。私も話しかけてみましたが、目は合わせてくれるけど、それだけで、服の裾をかんでしまいました。

後で聞いたのですが、Tくんは、朝登園してきたとき、泣きじゃくっていたそうです。そんな彼を先生はしばらく抱きしめてあげたそうです。しばらく泣いた後、T君は先生から離れて、園庭へ出て行ったそうです。先生はそんな彼を見て、ようやくいつものペースを取り戻したんだなと思ったそうです。

私も小さい頃、保育所へ行くのがいやで泣きながら祖母におんぶされて通園していたので、彼の気持ちが少しわかるのです。

(6) 落ち葉掃き・遊具のペンキ塗り 3回 総計 22名

今回は子どもたちにやさしい先生方が、作業を行う職員として活動しているところを見ることができました。子どもたちに接する先生方は比較的ゆっくり行動していますが、この落ち葉掃きをやっている先生方は無駄のない動きでできばきと作業されていました。子どもたちのいないところで黙々と作業をする先生方を見ることができました。厚くつもった落ち葉が消えたことに気づく子どもたちはほとんどいないでしょう。人に気づかれない作業であってもやらなければならないことがあると改めて気づいた1時間でした。

肥料にする 落ち葉

落ち葉を集めた後、それを集めて花壇につかう肥料をつくっている場所に運びました。今回の教育参加で思ったことは、自然とのふれあいを、とても大切にしているということでした。2度の教育参加を通して、幼稚園の先生方の生活、特に裏方の仕事の苦勞をかいま見た気がします。これから、私たちが教育者への道を歩むにあたって、楽しいことばかりでなく、重労働もあることを身体を使って知ることができたのは、将来の選択の、良きアドバイスをしていただいた気がします。

2 反省

- ① 春の遠足、運動会、落ち葉掃きなど、人手がたりないので、たいへん助かった。教育参加の学生がいたからこそ、計画どおりおこなえたのではと感謝している。
- ② 子どもたちがいないメニューがいくつかあったが、学生さんたちは、園舎や遊具などから幼稚園の様子を感じることができたようである。
- ③ 落ち葉掃きでは、落ち葉を集めることの意味（落ち葉が肥料になること、そのままにしておくと、近所の迷惑になってしまうこと）を説明し、学生に気持ち良く取り組んでもらうことができた。
- ④ 年度当初の計画と日時が変更になることがあり、土井先生や学生さんにご迷惑をおかけしてしまうことがあった。
- ⑤ 落ち葉掃きや砂場の整地をしている様子をタウン情報に取り上げてもらい、園の下の力持ちとしての「教育参加」をアピールできたと思う。
- ⑥ 運動会では、事前に用具の出し入れの分担や内容を説明しておいたことにより、きびきびと動く学生さんの姿が見られた。
- ⑦ 地域に開かれた大学として、学生さんが幼稚園で作業をしている姿は地域の人々に好感を与えている。

3 来年度にむけて（課題）

- ① 「教育参加」のメニューの中に秋の遠足を付け加えたい。
- ② こいのぼり運動会及び秋の運動会では、保護者及び家族が運動会を見に来る。また、入園を希望されている方が見に来られることもある。そのとき、教育参加の学生も幼稚園職員として見られることになる。そこで、幼稚園職員としてふさわしい服装、身だしなみなどをしていくように具体的に制限をしたい。それに同意した上で参加するようにしていきたい。
- ③ 誕生会では、会場の後方で参観してもらい、感想を書いてもらっている。可能ならば、教育参加の学生さんにも、5分程度の出し物をしてもらうことも考えたい。その方が、より積極的な参加になると思われる。ただし、事前に打ち合わせや準備をすることが前提である。打ち合わせや準備ができるかどうか。
- ④ 今年度のメニューのほかに、参加可能な行事、作業がないかどうか検討していきたい。（倉庫の清掃・剪定等）

おひさま

信州大学教育学部附属幼稚園
たんぼ組学級通信
平成9年 5月13日(火)
NO. 26



5月

大学生のお兄さんやお姉さんと 遠足に行ってきたよ

大学生のお兄さんお姉さんと一緒に蟻ヶ崎公園へ遠足に行ってきました。遠足では、何と言っても急な滑り台が人気でした。私が子どもに誘われて一緒に滑っても怖いものなのですが、子どもたちは平気で滑っていました。

また、山の斜面を登っては、お尻で滑っていく子どもたちがいました。大学生のあるお姉さんも自分のジーパンが汚れるのもかまわずに、子どもたちと一緒に土まみれになってあそんでいました。子どもの立場になって一緒にあそんでくれたお兄さんお姉さんでした。

ある学生の「子どもたちは、自分の思っていたよりもできることが多いですね。今日は、とても疲れたけど、楽しかったです。子どもたちからなにか、エネルギーをもらったようでした」と微笑みながら話してくれた言葉が、印象的でした。



～学生の感想より～

遠足は楽しかったですか？
私は、みんなと遊べてとても楽しかったです。

また、いっしょに遊びました。
私は、すてきな幼稚園の先生になるためにがんばります。
すずき あい より。

楽しい一日をありがとうございました。
いきました。みんなと話をしていると、ついついニコニコしてしまいます。
みんな、いろんな事を知っていてびっくりした。水でびしょ濡れの子や、砂だらけの子、みんなすてきだったよ。また一緒に遊びましょうね。
ゆせき えつこ



とても楽しい遠足でした。
いっしょに、お話ししてくれた子や、花をつんできてくれた子たち、たくさんやさしくしてくれました。
みなさん、ありがとうございました。
また、みんなであそべる日がくればいいですね。～さいとうたけみ～

一緒に遊んでくれて
ありがとうござい
ました！
名前もたくさんつけてくれてありがとう。
またきます。
じゅん。

遠足に決まってから、とても楽しかったです。
そして今日、みんなと遊べてとてもうれしかったです。
また一緒にあそぼうね。
あめみや ももこ。

連絡とお願い

- たんぼ組購読本の6月号がきましたので、本日配布いたしますのでお持ちください。
- 親睦スポーツ大会ご苦労様でした。「がんばったで賞」ということで、がんばりが認められた良い賞をいただきました。係のお母さん方もご苦労様でした。

明日の予定

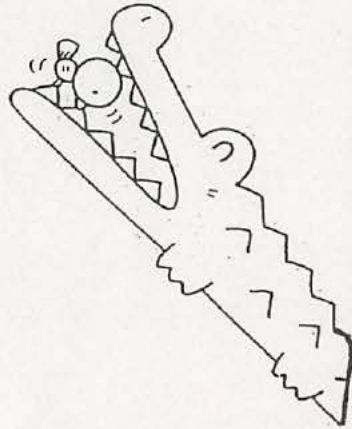
14日(水) 集金日・PTA理事会 登園 8:50 降園 2:00

おひさま

信州大学教育学部附属幼稚園
たんぼ組学級通信
平成9年 5月31日(土)
NO. 41



「先生、この子かんでくるんです」～運動会の様子から～



昨日は、お忙しいなか、鯉のぼり運動会をご観くださいましてありがとうございました。お子さんの様子はいかがでしたでしょうか。また、お楽しみいただけただでしょうか。装飾や片付けなど、PTAのみなさんの協力があって大変ありがたかったわけですが、同じく教育参加の学生さんの力も大変助かりました。クラスにも4人の学生がやってきてくれました。

そういえば、「ぎゅー、っば」と言って丸山先生が指導してくれた始めの体操をしようとしていたときに、教育参加の学生が、「先生、この子かむんですが・・・」と言ってきました。どういうことかと思っ

て目をやると、なるほどクラスの〇〇さんが、にこにこ笑って学生の服をかんでいます。学生が「ねえ、放してくれない」と言っても、ずっと笑ってかんでいます。学生はその時、「私は嫌われているのだろうか？」と不安に思っていたようです。

私は、その時の学生の服をかんでいる〇〇さんの顔を見て、「これは大丈夫」と思いました。大人の目から、ただ単に「人の服をかんで放さない」という行動だけ見ると、「いけないこと。しからなきや」になってしまうわけです。しかし、この〇〇さんは、学生が来てくれたことが嬉しくて、それを伝えるための手段がその学生の服をかむという出方しか思いつかなかったのです。

私は「子どもは、嬉しいとき、好きだよっていうときに、言葉でなくていろんな表現をしてくるからね。許してあげて・・・」と学生に言いました。そのすぐ後、〇〇さんは服をかむのをやめて、「ねえ、ここ（かんでいた場所）ぬれてるよ」とその場所を指差しながら、ほほえんで言いました。

その言葉は、「ここに、私のかんだ印が残っているよ。もう、私と友だちだよ」とも言っているように思いました。

運動会の感想～教育参加の学生から～

「休憩の時に、グラウンドにいたら、小さな子が、わざわざ外まで来て、おやつのお菓子を持ってきてくれました。本当に嬉しかった」と言っている学生もいました。たんぼ組の学生は、こんなことを書いてくれました。

今日は、とても貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。はじめは、子供たちのパワーにあっというまに倒れてしまいましたが、とても楽しかったです。教師を目指し一生徒として、ヒョコッ子以下の私に子供たちが「先生」とよんでくれて本当にうれしかったです。ありがとうございました。相原小学校 社会 相原

小さい子どもは好まれている気持ちにはあつたけど、実際に子どもたちと相手にするとうまくいかなかった。戸惑うことが多くて、子どもたちのパワーに圧倒された。でも、子どもたちからいろいろ言われて嬉しかった。とても楽しかったです。教員になりたという気持ちがいそいそ増え、よい経験になりました。大日 義子(言語)

連絡とお願い

★PTA講演会が3日にあります。リズム室の外にもスピーカーが出ますので、お子さん連れの方でも安心して聞くことができます。是非ご参加ください。

来週の予定

2日(月)衣替え	登園8:50	降園2:00
3日(火)PTA講演会	登園8:50	降園2:00
4日(水)お話の会・内科検診・担任出張	登園8:50	降園2:00
5日(木)プール開き・眼科検診・PTA作業	登園8:50	降園2:00
6日(金)参観日(全園)	登園8:50	降園12:00
7日(土)土曜日課	登園8:50	降園11:20

今をどう生きたらよいかを自問する大事な機会

附属松本小学校副校長 中田 育成

1. 実施内容と反省

- (1) 運動会前日準備 9月 6日(土) 13:50~16:00 27名
トラック作成、テント張り、装飾(万国旗張り、看板付け等)を係の児童・教師と共に行う。
反省・教育参加により前日・当日ともに係活動が充実し、ありがたかった。と同時に、学生にとっては、初めて子ども達に接する訳で、一つ一つの触れ合いや係わり方が、貴重な体験になったと思われる。
・学生は夏休みに入るため、休み前の7月中に、ある程度見通しを持った計画を学部へ提出できるようにすることが望ましい。
・事前の打ち合わせ等に不備もあったであろうが、欠席者が目立った。仕事内容のほかに、子どもとの接し方等、指導にあたっての心構えを話し、教育参加としての意義を理解できるように努めた。
・自分から仕事を考えたり探したりしながら、一生懸命取り組む姿が見られた。また、子どもとの接し方にも好感が持てた。
- (2) 運動会当日 9月 7日(日) 7:10~ 24名
係活動、競技等の準備・補助に参加、後片付けを、係の児童・職員と共に活動する。
反省・参加した学生は、早朝より登校し、前日の打ち合わせ手順に沿って、子ども達とともに活動する姿が見られた。
・分担外のことにも状況を見ながら進んで手を出す姿が見られ、大きな行事を運営する際の心くばりのあり方を実感できることにもつながった。
・前日欠席した学生はこの日も来ないケースが見られた。
- (3) 教育実習の参観(1) 8月26日(火) 10:35~12:00 61名
参観(2) 8月28日(木) 10:35~12:00 44名
教育実習中の本学部3年次生の授業の姿から、教育の何たるかについて学ぶ。
反省・100名以上の参観があったということは、教育実習への関心の強さがうかがわれる。
・参観姿勢はたいへん熱心で、やはり、教育実習の実際を肌で感じたり、先輩の指導ぶりから学んだりして、教育学部生として、2年後の己が姿を重ね、心に期するものが多かったと思われる。
・服装も他の機会や打ち合わせ会に比して、整っていた。
- (4) 秋の遠足(全校縦割り、9コース) 10月 8日(水) 7:50~16:00 47名
6年生が計画立案をし、班長副班長のところで付き添い教官と下見をしたうえで、全校児童に呼びかけ、当日を迎える。そこへの引率参加である。
反省・6年生が、それぞれの班の中心になって実施する、縦割り行事を体験できたことは、学びが大きい。
・各目的地とも、教育参加の学生が、子ども達と一緒に楽しく遊ぶ姿が見られ、

子どもと学生が個々にかかわり合える場となった。

- ・引率中の交差点における安全指導の仕方を、事前にもう少し扱った方がよい。交差点等の動きに戸惑いも見受けられた。

(5) 学習指導研究会各係の仕事 1月31日(土) 7:30～ 19名

受付・案内・会場作成、駐車場案内誘導活動に参加し、係の教官と活動することを通し、行事運営の経験や指導力伸長を願う現場教師の思いを実感する。

反省・教育参加の学生が、受付と駐車場の仕事を引き受けて、気持ちよく取り組んでもらえた。

- ・受付については、一般受付2名、書籍販売1名、ビニール袋渡し1名と分担し、マナーもよく、誠意をもって取り組んでもらえた。
- ・駐車場の案内については、大雪の後遺症もあったので、案内箇所が多く、参加してもらえてありがたかった。次々に来校する参会者への案内を通して、学習指導研究会への理解も得られたのではないかと思われる。当日は、8時前から最寄りの箇所へついてもらえた。

(6) 全体的な反省

- ・参加した学生は、きちんとした目的意識を持って取り組んでいる姿が感じられ、教育参加の意義が定着しつつあるように思える。
- ・事前の打ち合わせに来校する学生の服装は、学部の受講時と同様で構わないが、上履きについては、学部と異なり、下履きでは入室できないので、上履きを持参できるよう徹底願いたい。
- ・学校行事の運営に直接参加したり、教育実習中の先輩の指導ぶりを参観したりすることにより、教育参加開設時の「1年生の段階から子どもや教師や学校への理解がより深められるならば、学生は教師になるために今後どんなことを学ばねばならないかがはっきりすることになり、2年生以降教科専門科目、教職専門科目および教育実習を受ける際に、意欲的にこれらの授業に取り組めることが期待される。」(平成8年度「教育参加の開設と学生の反応」まえがき：センター長漆戸邦夫先生)という願いが徐々に浸透し、具現されつつあるように思える。

2. 参加した学生の感想

(1) 運動会参加

- ・このメニューを選んだのは、運動会当日ということで、一生懸命運動している子ども達を見たかったことと、終了後の片付けで、子ども達と接することができるかなと言った期待があったからです。～略～ 運動会が終わり、いよいよ係の仕事です。会場の係の仕事内容は、テントとパイプ椅子の片付けで、決して重労働というものではありませんが、わたしの黒いジャンパーは終わったときには真っ白でした。椅子を運ぶときには、PTAの方々などが自分で使った椅子を運んでくださったので、すぐに終わってしまいました。問題はテントの方で、枠組みをくずすのは男の人がやりましたが、テントの屋根の部分たたむのが一苦勞でした。1枚目は、会場の係担当の先生が説明しながらやってくくださったので、子ども達も上手に動いてすんなりとうまくたたむことができたのですが、わたしと子ども達だけでやった時は、「次はこうして!」ということをうまく説明することができず、苦勞しました。子

どもに説明することの難しさを実感しました。わたしが誘導するのがあまりにも下手なので、きっと子ども達もやりにくかったと思うのに、見捨てずについて来てくれてうれしかったです。次に、そのたたんだテントと杵組みを物置に運びました。大学生なら二人くらいで運べそうなものを、子ども達は5、6人で運びます。しかもよろよろしているので、見ていてハラハラしてしまいました。杵組みの鉄柱は一輪車の乗せてはこびましたが、自分から進んで引っ張って行く子、ふざけて上に乗ろうとする子など、いろいろな子がいて「みんなで交替で引っ張って行こうよ。」と言うのが精一杯でした。子ども達と働くのってこんなに疲れるのかと思いました。でも、途中で、「ここにソバを作っているの。」とか「今日のお弁当はネ。」とかいろいろ話してくれたので楽しかったです。「教生のお姉さん」と呼ばれたのがちょっとくすぐったい気分になりました。はやく「先生」と呼ばれる日が来ればいいのにと改めて思いました。とてもいい経験ができました。夏休みの思い出の一つです。

(2) 教育実習の参観

- ・私が参観したのは、4年生の東組で、ちょうど水泳の授業でした。そもそもこの教育実習参観を選んだ理由は、2年後の夏にある教育実習のことが頭にあったからです。教育実習を参観することで、先輩方の姿をしっかりと見、その姿から言葉で表せない何かをつかみたいと思ったからです。それと同時に、先生方の様子、子どもの様子を客観的な視点から見つめたいと感じたからです。授業が始まると、実習をしている先輩方のこの1時間の授業に対する事細かな計画にも驚きました。どのような説明で、児童がどのような反応を示すかというような、予想される学習内容までをもしっかりと考えてあるのです。いよいよ記録会が始まりました。どこかの大きな大会と同じ形式で、「第1コース〇〇君」という形でしたが、今回の教育参加で最も勉強になったのが、このようにコールした後で、実習生が、児童一人ひとりの性格やその他の良い所を一言ずつ言ってあげていたことです。それを言われている本人は、少し照れ臭そうに、でも、とてもうれしそうにしていました。また、まわりの子ども達は、それに拍手したりうなずいたり、楽しそうに反応していました。たった一言であっても普段あまり言われない所をほめられるとだれでもうれしいものです。それが先生からだ余計にうれしくなってしまうものです。今回の教育参加に参加できて、本当に勉強になりました。教師が言う一言一言に、子ども達はいろいろな反応をしていました。それだけに教師の言う一言は、子ども達にとってとても影響があるものです。自分が教育実習生として訪れるときまでに、子ども達の前に立っても恥ずかしくないように、自分自身を磨き、子どもの成長にプラスになるようなことを言える人間になっていきたいと思います。今から広い視野を持って世の中を見つめ、幅広い教養を身につけたいと思います。

(4) 秋の遠足参加

- ・一番最初の教育参加の授業の時に、“目的地まで自分の足で歩く、1年生から6年生までの縦割りの遠足で、お弁当はお握りとお茶だけ”と言う説明を聞き、ユニークなメニューだと思い、この「秋の遠足」を選びました。わたしが参加した刈谷原隊は、距離が長いため、2年生からの参加でしたが、山道を歩いて疲れた2年生の

リュックを上級生が持ってくれたり、高い所にある“あけび”や“くり”を採ってみんなに分けてくれたり、上級生が小さい子達のめんどろをよく見ている、他の学校でもこのような縦割り遠足があったらいいのにと思いました。普段の学校生活の中では、あまり係わりのない他の学年の子ども達が仲良くなるよい機会だと思いました。わたしの小学校時代では想像ができないくらい、学年など関係なくみんな仲がよくて驚きました。先生方は、出発する前や目的地に着くごとに、子ども達の人数を確認し、記録していました。学校の外へ子ども達を連れ出すのは、こんなにも気を使い大変なことかと改めて思いました。最近「今の子どもは自主性や行動力に欠ける。」ということをよく聞きますが、「これをしなさい」とか「これが終わったら次はあしなさい」というように、上から指示する教育ではなく、子ども達に“きっかけ”だけを与え、自分たちで計画や準備をするというこの縦割り遠足のよう教育が今必要なのではないかと思います。今回初めて、子ども達に「先生」と呼ばれ、何だかすぐったいような、その反面うれしいような変な感じでした。元気な子ども達と一日一緒に過ごしたり、引率の先生方の仕事を見せていただいて、やっぱり先生は魅力がある仕事だと、改めて実感しました。

(5) 学習指導研究会参加

- ・わたしがお手伝いしたのは、駐車場の案内係で、駐車場の方向を示す板と旗を持って、道端に立っているものでした。朝の8時から9時30分までの1時間半、寒い中で立ち続けるのはとても寒くて辛かったです。研究内容がどのようなものなのかということを見たり、先生方からお話を聞くことができるのではないかと考えていたのですが、それができなかったのもとても残念でした。けれども、人に何かを教え、理解させるというのは、難しいことです。自分が分かっていることでも、いざ相手に教えようとする、うまく説明できなくて、説明してもなかなか理解してもらえず大変でした。それが小学生ともなると、ますます大変だと思います。子ども達に理解できる言葉で、分かりやすく説明することも大変ですが、授業の間、子ども達の意識を集中させ続けるということはかなりの苦勞を要するのではないかと思います。今回の研究会に多くの先生方が参加して見えるのを実際に目にして、子ども達に教えることの大変さを改めて感じさせられるとともに、若い先生方が多かったのを目にして、若い先生方の意欲を感じました。私も数年後には教育実習をすることになり、すぐには行かないかも知れませんが、教員になるだろうと思います。その時、どれほどの意欲を持って子ども達に教えることができるのだろうかと思うとともに、若い間だけでなく、いつまでも魅力的な授業をしようという意欲を持ち続ける教師になりたいと思いました。

3. 終わりに

画期的な教育参加システムが発足して2年度目を終了しようとする今、大きな意義を改めて認識させられる。まずは、少なくとも教職を目指す思いで教育学部を選択した学生が、感想に見られるごとく、また、子ども達との直接の触れ合いの姿を附属教官として目の当たりにし、1年次にこのような体験ができることが、実習に向け、さらには将来の教職に向け、多くの学生が、自身の課題意識を鮮明にし、今をどう生きたらよいかを自問する大事な機会になっていることを思う。

学校教育全般についての理解の深まり

附属松本中学校副校長 堀内 泰

1 実施内容

- 1) プール清掃ペンキ塗り
期日 5月17日(土)
○水泳クラブの生徒とともにプールをデッキブラシで磨きペンキを塗り、壁面を保護する。更衣室床のペンキ塗りも併せて実施。参加学生7名。
- 2) プール開きの模範泳法
6月 3日(火)
○プール開きの際、水泳クラブの生徒とともに模範泳法として、いろいろな泳ぎ方を示す。参加学生1名。
- 3) 松本城清掃
期日 6月 7日(土)
11月 8日(土)
○ボランティア委員会主催。生徒とともに清掃活動を行う。集めたごみや枯れ葉を捨て場に運ぶ。
6月の参加学生10名、11月の参加学生9名。
- 4) 市中体育大会の写真撮影と応援
期日 6月14日(土)
生徒の活躍の姿を写真撮影する。応援委員会と協力し、生徒と一緒に応援する。参加学生8名。
- 5) 燕登山の付き添い
期日 7月24日(木)
~25日(金)
○2年生とともに行動し、体調を崩した生徒の荷物を運んだり、危険個所での安全指導を行ったりする。
参加学生1名。
- 6) 高遠旅行の付き添い
期日 7月24日(木)
~25日(金)
○1年生とともに行動し、飯ごう炊さんの指導や星の説明の他、道路横断の際の安全指導などを行う。
参加学生0名。
- 7) 男女バスケットクラブ指導補助
期日 7月30日(水)
○クラブに参加し、顧問の指導の補助を行うとともに、模範実技を演じる。
- 8) ミシンの調整
期日 8月 1日(金)
○ミシンの清掃、調整、手入れなどを家庭科の教諭とともに
に行う。
参加学生2名。
- 9) 吹奏楽クラブ指導補助
期日 8月 2日(土)
○楽器別に演奏法や基本練習について指導する。
参加学生7名。
- 10) 演劇クラブ大道具作り
期日 8月11日(月)
○附中祭の発表で使用する大道具やステージバックを、演劇クラブの生徒とともに製作する。
参加学生6名。
- 11) 教育実習生の実習授業の参観
期日 8月21日(木)
~28日(木)
○実習授業を参観し、3年時における教育実習の様子を知ったり、期待が持てたりできるようにする。
参加学生、21日31名、22日17名、25日12名、27日8名、28日8名。
- 12) 男女バレーボールクラブ指導補助
期日 9月 4日(木)
~ 5日(金)
○クラブに参加し、顧問の指導の補助を行うとともに、模範実技を演じる。
参加学生6名。

- 13) 英語授業のTT ○モデル対話をしたり、学習の遅れがちな生徒への個別指導をしたりする。
期日 9月16日(火) 9月の参加学生5名。11月の参加学生5名。
11月13日(木)
- 14) 陸上クラスマッチ補助 ○計時・決勝・監察など、各系の活動を行う。
期日 9月19日(金) 参加学生12名。
- 15) 写生会補助 ○写生地までの交通安全指導や個々の生徒への絵画指導をする。
期日 9月29日(月) 参加学生15名。
- 16) 女鳥羽川清掃 ○ボランティア委員会主催。生徒とともに清掃活動を行う。
期日 9月30日(火) 集めたごみや枯れ葉を捨て場に運ぶ。
参加学生14名。
- 17) X階段ペンキ塗り ○係の生徒とともに、階段のペンキをはがし、新たにペンキを塗る。
期日10月4日(土) 参加学生8名。
- 18) 先輩の話 ○進路指導として、中学校生活、受検、高校生活などについて、生徒の参考になる話を15分程度する。
期日11月6日(木) 参加学生12名。
~21日(金)
- 19) 社会科の教材作りとTT ○社会科の授業で使う教材を作るとともに、社会科教諭の補助として授業に参加する。
期日11月13日(木) 参加学生5名。
- 20) 落ち葉運び ○生徒とともに落ち葉を花壇に運び、土作りをする。
期日11月18日(火) 参加学生21名。
- 21) 木材加工授業のTT ○木材加工の授業において、遅れがちな生徒に対して個人指導をする。
期日11月20日(木) 参加学生20日2名、21日2名。
~21日(金)
- 22) リサイクル物の積み込み ○生徒会活動で集めたリサイクル物をトラックに積み込む手伝いをする。
期日12月20日(土) 参加学生7名。

2 参加した学生の感想文から

1) 松本城清掃に参加したWY生

僕は今回の教育参加で松本城清掃に参加しました。これに参加した理由は、現在の中学生が松本城清掃という奉仕活動を、どのようにみんなで協力し合い清掃するかを自分の目で見たかったからです。

まず、松本城に早朝全員が集合し、教育参加に参加した信大生は一人一人担当が決められ、僕は1年C組を担当することになりました。最初は、生徒になんて話しかけようとか、どういうふうに接しようとか、いろいろなことが頭をぐるぐる回っていました。そんなことを考えているうちに各クラスごと移動し、それぞれの分担場所へ行きました。そこで、僕が最初に驚いたのは、その移動中、1年C組の担任の先生から、「先生よろしくお願ひします」と礼をされたことです。生徒からは「先生」と呼ばれるのかなと思っていたけれ

ど、まさか先生から「先生」と呼ばれるとは思っても見なかったので、一瞬なんだか恥ずかしい気持ちになりました。

それから清掃場所に着き、1年C組のみんなの前で自己紹介をしてから、班ごとに清掃を始めました。このときもみんなはてきぱき始めて、だるそうにしている生徒は僕の見たとろ一人もいませんでした。そして、僕も一つの班と一緒に清掃することになり、その班とゴミや落ち葉を拾ったり、草を取ったりしました。清掃中はあまり私語はよくないことだけど、生徒とコミュニケーションをとるためにいろいろその班のみんなと話し仲良くなれました。みんなと清掃しているうちにみるみるきれいになり、ある女子の生徒に「先生が一人ふえただけでやけに早くきれいになったね」と言われ「ありがとう」と返事しましたが、そこはみんながまじめに協力してやったからだと思いました。

ここで僕がこの教育参加に参加した理由でもある、生徒のやる気というものを感ずることができました。また、担任の先生はさすがに生徒を扱うのがうまくて、将来のために参考になることがいろいろとありました。先生はこういう力も持たないといけないんだと実感しました。また、僕がこの松本城清掃に参加して感じたことは、まず生徒の純粋さでした。僕が1年C組で自己紹介したときに「こんにちは」とあいさつすると、元気よく「こんにちは」とあいさつしてくれました。これは基本的なことだけど、今の中・高・大生でできる人は少ないと思います。あと、生徒の清掃に対するやる気です。ある生徒が少しなまけていると、別の生徒が「どうせ清掃するなら、すごくきれいにしようよ。もう少しだから頑張ろうよ」と言っているのを聞いて、なんかいいなと思いました。この松本城清掃で、自分の奉仕活動に対する考えが変わったし、生徒と先生という関係を初めてこの時第三者として見れて、今まで感じなかったことも気づいたような気がします。最後に、この松本城清掃に参加して、本当によかったと思いました。

2) 吹奏楽クラブ指導に参加したMY生

「今日一日、皆さんは先生です。」朝、附属松本中の吹奏楽顧問の先生に、こう言われました。すごく魅力的で、嬉しいような、恥ずかしいような、ちょっと複雑な気持ちになりました。それとともに、学生ではなく、先生であると言うことに大きな責任感を感じました。顧問の先生は、この一言によって私達に先生という立場には常に責任感が伴うというのを教えてくれました。

ところで、いざ指導に入ると、これがなかなか難しく、戸惑ってしまいました。私がなぜこの活動を選んだかという、自分が大好きな吹奏楽を中学生にももっと楽しんでやってもらいたいと思ったからです。私も実際中学生だったときに、近隣の高校から吹奏楽部のお兄さん・お姉さんが来て指導してくれたことがありました。その時の楽しかった思い出は今でも胸に残っているほどです。だから私も中学生に、より一層吹奏楽に親んでもらえたらなあと思っていました。そのためにも、いろんな技法を教えてあげたかったです。しかし、指導を始めて数分後、教えるということの難しさ、大変さを思い知らされました。頭の中では、もっとこうの方がいいということが分かっている、中学生にそれをうまく伝えられないのです。要するに、頭の中で感じていることが、うまく言葉で表現できないのです。これは実際に楽器を演奏して見せることによって何とかカバーしましたが、すごく反省しています。言葉でうまく表現できないというもどかしさは、もちろん私も感じますが、それ以上にそれを聞いている中学生が感じているであろうからです。飽く

までも、中学生の前では私は先生。先生が自信を持って教えていれば説得力がありますが、逆にあいまいなことしか言えなかったら、生徒は信じていいのかさえ分からなくなり不安になるでしょう。このことを深く考えさせられました。

しかし、救われたことに、私が教えていた生徒達は分からないことがあったら、どんどん質問してきてくれました。これはすごく有り難かったです。それにすごく親しみやすい子たちばかりで、私にも気さくに話しかけてくれました。私が実演してみせると「オー、すごい。私にもやらせて！」と言って、楽器に熱中する姿も見られました。こういうやる気のある姿勢は、教える側にとってすごく嬉しいものでした。また、こういう子供達に「M先生」と呼ばれたときの嬉しさ、恥ずかしさ、心地よさは、今でも忘れられません。ずっと心に残っています。

今回の教育参加を通して、一番強く感じたことは、「絶対に先生になりたい」ということです。今回はたった半日の先生体験だったので、教員という職の明るい部分、楽しい部分だけを味わったことになると思います。しかし、実際は、そういう表の部分だけではないでしょう。やはり裏の苦しい辛い部分もあると思います。けれど、私は先生になりたいのです。教育という仕事を通じて、子供達と体ごとぶっかっかしてみたいのです。そのために今回得た反省点「教える」ということについて、これからの大学生活で、じっくり勉強し克服していきたいと思っています。

3 反 省

- ・ 生徒理解ばかりでなく、学校教育全般についての理解を深めることができるとともに、3年次の教育実習への心構えを持つことにもつながり、たいへんに意義がある。
- ・ 教育参加の体験後の感想等から、教育学部の学生としての自覚の高まりが感じられる。
- ・ 服装や身なり等については、次第に場にふさわしいものになってきた。事前の指導が次第に定着してきている。
- ・ 3年生の教育実習授業の参観は、先輩や生徒の姿から多くのことを学びとる良い機会である。参観のマナーについては概ねよかったが、記録をとろうとしない学生があり、学ぶものとしての基本的な姿勢づくりを普段から心掛けたい。
- ・ 自分から積極的に生徒の中に入っていける学生と、溶け込むのに時間のかかる学生がいる。何れにしても、生徒とのかかわりから自分をしっかりと見つめ直し、振り返るよい機会となっている。
- ・ 本年度は英語科と技術科・社会科でTTを取り入れたが、授業に直接参加する体験を積み重ねる上からも良かった。

4 課 題

(1) 附属学校として考えたいこと

- ・ 教育参加の内容（メニュー）の適否を検討し、生徒とともに活動できる内容を増やしていきたい。

(2) 学部をお願いしたいこと

- ・ 事前の連絡や指導については附属校でも行うが、訪問者としての基本的なマナー等については学部でも更なる指導をしていただきたい。
- ・ 学部での講座の時間と教育参加の時間との重なりの見極めは附属校ではできないので、重ならないようにご工夫いただくとありがたい。

若い心に

長野県松本盲学校長 野口 忠世

本校における「教育参加」実施の状況は、以下のページで示すような内容です。全ての計画が終了した後、参加していただいた学生さん達のレポートを、読ませていただきました。それらの内容を見ると、この「教育参加」という臨床経験という試みが大変有効であることを感じさせられました。

(1) 視覚障害及び盲学校に対する認識

ほとんどの学生さん達が、視覚障害や盲学校について実際の姿を知らなかったということです。このことは、学生だからというのではなく日本の社会がそういう環境であることの現れであると思えました。盲学校にはどんな人々がいてどんな学習をしているのか、視覚に障害のある人々の生活とかいうことは、一般社会の中ではなかなか意識されないということでしょう。そのことが、障害に対する考え方や理解、日常生活における私たち自身の行動を現在の段階に止めている大きな原因だと思えました。多くの学生さんが、「教育参加」の経験を通して「見えない」「見えにくい」ということがどういうことなのかを真剣に考えさせられた様子が、レポートから窺えました。そして、多くの学生さんが自分の考えや感想を書いてありました。それだけでも、盲学校としてこの臨床経験に協力させていただいた意味があったと思われました。

(2) 教師の在り方について

教師の生活の多くの部分は、その子にとって喜びや意欲を生み出すものは何かについてとらえ・判断し・工夫し実践し・評価して、自発的な活動を生み出していく状況をいかにつくり出していかにかかっているようです。盲学校は「視覚障害」という情報障害をどう埋めていくかという課題がはっきりしていることによって、学生さん達が教師の在り方について純粹に考えてくれているのがよく分かりました。また時にはその純粹さゆえに、現在の教師の手立てに疑問が湧いてきている人がいることも窺えました。これは大変貴重なことに思えました。これは、是非質問したり討論したりしてほしいと思いました。

(3) 自分を見直す

私たちは「視覚障害」や「盲学校」について多くの方が関心をもち事実を知ってほしいと希望しています。レポートの中に、一緒に行動するうちに心が通じあってきたこと、視覚障害の人々の耳を傾けたり肌触を生かしている姿から人間の機能のすばらしさや可能性について感動したこと、視覚障害のある人も特別ではないことなどが多く書かれてありました。それは自分を見なおす材料ともなっているようで、有り難いことに思えました。

若いみなさんの感じ考えていることは、いつの時代でも新しい社会の夢となります。この経験がみなさんの日常生活に行動として示されたり、語り合われたりしながら一人一人の意識を深めさらに多くの人々の関心と呼び覚ましていってくれることと思いました。

No	活動名	活動内容	日時	人数	備考
1	体育祭 小学部	運動会の練習や当日の競技に参加し、競技参加の補助や共に運動を楽しむ。	6月13日	3	運動着
2	小学部体育の授業	体育（柔道、簡単ボール）	11月(6回)	8	運動着
3	小学部秋の遠足	川遊び（梓川）	9月3日	3	
4	スケート教室 (幼小、中)	美鈴湖のスケート場で児童、生徒とスケートをする。	1月13日	3	スケート靴
5	小学部クラブ活動 (旭町小)	交流活動のクラブに参加	毎週水曜日 2:15~3:10	0	
6	中学部クラブ活動	生徒ともにクラブへ参加	10月以降毎週曜日	5	
7	中学部秋の遠足	遠足へ参加	11月4日	5	遠足の費用
8	中・普合同体育	体育の球技のゲームに参加する。	11月(4回)	5	運動着
9	部活動【ソフトボール】	部活動の練習に参加（盲人野球）	5~7月毎週3:40~	5	運動着
10	部活動【バレーボール】	部活動の練習に参加（盲人バレー）	4~6月毎週3:40~	5	運動着
11	普科【作業学習】	作業学習の授業に参加し、学習援助する。	毎週曜日 11:00~ 12:40	0	
12	普科【キャンプ】	キャンプに参加	7月22・23日	1	キャンプ用品
13	スキー教室	学校行事「スキー教室」(小中普)に参加	1月20日	2	スキー服

1 学生の参加状況・態度

- ◇ 連絡がなく休む学生がいて残念だった。
- ◇ 「人とかかわる」ということを大切に考えてほしい。
- ◇ 積極的な態度で参加し、わからないことを自分からどんどん尋ねてほしい。
- ◇ 参加すると予定したメニューについては、事前打合わせや当日の欠席は避けてほしい。
- ◇ 部活動へ参加した学生は、取り組みがたいへん前向きで試合などにも応援にきてくれた。
- ◇ 中普合同体育では、生徒と一緒に体を動かし、接してもらいとてもよかった。
- ◇ 小学部、中学部の遠足では、よく話をしたり、面倒を見てくれ、児童生徒も先生以外の人との接し方や親しみ方が学べてよかった。
- ◇ 単位のためという感じを受けるし、欠席についても学生の都合で休んでしまう。

2 今後の課題や要望

- ◇ 1行事に1回参加というのではなく、同じ学生が特定の部科に年数回参加しないと生徒との関係や様子がとらえられないのではないか。そのために大学側は、他の講義等柔軟に対応できるよう配慮すべきではないか。
- ◇ せめて一つの単元に最初から最後まで参加することが必要に思う。
- ◇ このような機会を学生に提供しようとする姿勢は賛成である。反省をもとに参加する側も受け入れる側も改善すべきところは改善し、よりよい教育参加にしたいものだ。
- ◇ 来年度も一定期間、授業に参加できるように配慮してほしい。
- ◇ 選択によって軽重ができるだけないように配慮してほしい。
- ◇ 今後もより多くの学生さんにかかわってほしいと思う。1回と言わず、何回も同じ人が参加しこの教育参加を将来の仕事の『宝』となるよう有意義なものにしてほしい。また、大学側もそのように配慮・改善に努力していただきたい。

3 まとめ

上記のように課題も多いが、一番学生に望むことは大学の講義と違うということを理解してもらいたい。つまり、自分が希望して選んだメニューについては、責任を持って最後まで努力してもらいたい。大学の講義を休む感覚で休んでもらうとそれにかかわっている大勢の人が迷惑をするということ。学生を受け入れるために準備をしてくれている人達がいることを忘れないでほしい。

要望にもあるように教育参加のために講義を休まなければいけない時は、届けのようなものを提出して、教育参加のメニューに出やすいような配慮はできないものか検討して下さい。

学校としては、できるだけ多くのメニューを準備して学生を受け入れたいと考えています。この教育参加の意義を大切に考えたいし、教員になるならないは別として貴重な体験ができると考えている。是非、やる気のある学生は大勢「教育参加」を取ってほしいと思う。

教育参加メニュー「小学部体育」

10月下旬～11月中旬

参加学生9名

担当 小学部

1. 全体の活動内容

「マラソン」・・・交流校のマラソン大会に向けてコースでの練習。

子供とペアで準備体操、マラソンでタイムを取る。

「柔道」・・・素足になり、準備体操から受け身練習、技のかけ方などパディを組み行う。

◎子どもたちの活動の中にスムーズに入っていく、子どもたちも学生さんの名前を覚え、楽しそうに活動していました。素足になって受け身や寝技の練習を楽しく時には、真剣に取り組まれている姿が印象的でした。

「簡単ボール」・・・子どもたちが創り上げてきているボールゲーム。ゲームのルール、動きなど見たり、アイマスクをして一緒にゲームを楽しむ。

2. 参加の様子

- ①子どもたちとの出逢いの授業は、交流校のマラソン大会に参加するためのコースに出る練習でした。何時間かマラソンの練習を重ねてきている子どもたちとすぐに一緒に走ってもらうには少しハードかなと思いつつも、小学部の実態としてその子のペースに合わせてマンツーマンで走るには職員の手が足りず、二人の学生の教育参加はとても有り難くそれぞれに子どもをお願いすることになりました。その一人Mさんは、弱視児で4年生の元気な男の子S君の手を取って走ってくれました。S君はMさんの手の柔らかさを感じながら、時々会話をしながら走ったことが楽しかったと未だに話してくれます。Mさんはどうだったでしょう。終わった後、二人とも少し苦しそうでしたがさすが若さで一緒に走り抜いてくれました。初めての授業が子どもたちと共に活動する授業できっと戸惑いはあったでしょう。
- ②マラソン大会が終わるとすぐ柔道の授業では、準備体操・受け身練習を子どもたちとペアで行ってもらいました。子どもの動きを見ながら、子どもの様子をだんだんに理解してもらえたのではないかなと思います。
- ③小学部の子どもたちが3年前から創り上げてきているボールゲームで、「簡単ボール」という名が付けられたものがあります。ルールなどを創り出す過程をチームの一人としてアイマスクをしてゲームをし、子どもの指示で動く中で視覚障害の一端に触れたのではないかなと思います。
- ④体育の授業外、近くの店に小学部で買い物に行った時偶然、行き会ったMさんから声をかけられ喜んだS君。参加が終わっても、そんな関係が持てることはうれしいことです。

3. 反省と課題

- ・難しいと思いますが、1つの単元を通して参加してもらおうと子どもの様子を理解してもらえしより深い関わりが持てる。ある単元の1時間だけだとちょっと何かをやった終わりになってしまう。何時間か参加した学生の中には、子どもに対して好ましい援助ができたり、準備等で教師の手伝いを自然にしてくれる学生の姿が見られた。

1 目的地……松本市弘法山

2 日程 ……集合8:40—県ノ森9:10—千鹿頭池10:10 —弘法山着11:20 —弘法山発
13:30 —筑摩神社14:30 —学校着15:20 —解散15:30

3 参加の様子

11月4日(月)、快晴。中学部の秋の遠足は、チャレンジ遠足。自分の力に合わせてスピードや道を選択して、目的地、弘法山までいこうと計画する。片道7km前後なのでそれほど、たいへんではないが、生徒5名の実態はさまざまで、車椅子を使っている生徒や、補助が必要な生徒もいるので、信大生の方がくることを、心強く思っていました。参加された方は男性2名、女性3名の計5名でした。打ち合わせは、本校教務が持ち物等の連絡で、ペアを組む生徒は当日出発の会で決定し、歩きながら、各担任の先生と注意事項などについて、話しながら理解していってもらった。

ちょうど、生徒1名を担当してもらったので、1日ゆっくりかかわってもらえることができ、生徒のことを理解してもらいよい機会になったと思う。はじめは、何を話したらよいかと迷っている様子で、会話がはずまないペアもありましたが、弘法山に着く頃には、しっかりうちとけているように見えました。

12時少し前に、目的地に到着し、弘法山の散策や、斜面を滑り降りたりと、楽しみ、お昼は、お弁当ととん汁をいただきました。大学生のみなさんも手作りや、市販のお弁当や、パンなど各自で持ってきてもらいました。「さあ、一緒に食べましょう」と声はかけたのですが、生徒5名に、職員8名なので、なかなか生徒のそばにいけなかったようで、一人ずつ食べている姿が多かったです。

車椅子を使っている、M生とペアだった女性は同じ敷物に座り、お話をしながら、食事をしました。M生は視力だけでなく、聴覚にも障害があるので、指文字でお話します。指文字を覚えながら、自己紹介したり、お話ししながら昼食後をゆっくり過ごしました。途中から、他の女性2名も加わって、みんなで指文字を覚えていました。

帰り道も。ペアを変えず、学校まで。打ち解けた会話がきかれるようになっていました。何を今したらよいかを判断して動いてくれる姿もみられました。

無事、学校着。解散会。生徒からは楽しい1日という感想が多く。信大生の方からは、勉強になった、また、学校に遊びに来たい。指文字を覚えられてよかったなどの感想発表がありました。生徒が寄宿へ帰ってあと、職員室で職員の反省会を簡単に行い、解散となりました。帰りの表情は、朝の時よりいきいきしてみえたように思います。

大学生の生活からすると、遠足の1日は、日常と離れた特別な1日なのではないかと思えますが、特別な1日を胸に、また一緒に仕事をできる日が来たら、お互いによい影響をあたえあえるのではないかと思います。年をきくと、19歳といわれ、中3の生徒たちと4歳しか変わらない事に改めて驚きました。小人数の本校の生徒からすれば、よいお兄さんお姉さんたち、アドバイスをもらえる身近な人になりうるなあと感じました。

4 反省と課題

- ・1名欠席だったが、5名で生徒一人とじっくり関わる事ができてよかった。
- ・1年生のためか、教育参加という感じより、交流という言葉に近いような印象をうけますが、生徒にとっても、年齢の近い人と過ごすよい体験になっていると思う。
- ・個人差は多少あったが、積極的に関わってくれたと思う。遠足は関わりやすくよいと思う。
- ・今回は、1名だけでしたが、生徒たちは、楽しみにしているので、欠席はできるだけ避けて欲しい。

教育参加メニュー「部活動グラウンドソフトボール」
5月～8月 毎日 参加学生 6名

松本盲学校 野球部監督 野澤嘉高

信州大学教育参加も2年目を向かえ、多くの大学生が本校を訪問した。将来を担う学生達に楽しく有意義な体験をしてもらいたいと考えている反面、学習活動や生徒の実態について説明する時間が十分取れないこともあったのではないかと反省している。

本年度行われた教育参加の中で特に印象に残った事例があった。放課後の部活動に3ヶ月にわたる長期間参加し、部員と一緒に練習してくれた学生達がいた。積極的に参加してくれたA生の事例を紹介するとともに、信州大学教育参加がさらに充実することを期待したい。

1. 野球部の活動

5月初旬野球部の練習開始。

練習内容

- | | |
|------|------------------------|
| 4:00 | 準備体操、ランニング、サーキットトレーニング |
| 4:15 | キャッチボール |
| 4:30 | バッティング練習、走塁練習 |
| 5:00 | 守備練習 |
| 5:30 | 片づけ、反省 |

6月9日(月) A生が一人で学校を訪れ、顧問より内容や日程についての説明を聞く。
その後、授業に支障のない月、火、木曜日の練習に参加する。

6月中旬 仲良しのB生やC生も参加するようになる。

7月16日(木)、17日(金) 長野市で開かれた北信越盲学校野球大会に応援参加する。

8月8日(金)、11日(月)、12日(火) 夏休み中の特別練習に参加する。

2. A生の活動の様子、感想

- ・「視覚障害者がどのようにソフトボールをやるんだろう？」という好奇心から選んだ活動であったが、何回か参加するうちに生徒や職員の名前や特徴を覚え楽しくなったようだ。
- ・どんな練習も生徒と一緒に活動していた。グラウンドに横になって腹筋や背筋トレーニングもTシャツを泥だらけにして取り組んでいた。
- ・B生、C生も来るようになり、友達同士での会話も弾み、一層楽しくなったようだ。
- ・「一緒に練習している職員の生徒への接し方や心配りが分かるようになり、参考になった。」と感想を言っていた。

3. 成果と課題

(1) 大学生の中には遠慮している姿も見受けられる。よく見て、良く聞いて、自分でやってみることで学校現場の様子や雰囲気は体験できると思われる。

(2) A生のように何回も活動に参加できると生徒との間に信頼感が生まれ、いそう有意義な体験になると思われる。

(3) 将来教師をめざす多くの大学生が本校の教育活動に興味を持って参加している。我々教師もその期待に応えられるような指導を示せるようにしたい。

聞きごたえのある大学1年生の語り

国立信州高遠少年自然の家
専門職員 唐澤久樹

1. 「教育参加」オリエンテーションでの話 (於：共通教育センター)

待望し、憧れていた大学生活がスタートし2週間ほどたちましたが、新しい環境での生活にもうなれたでしょうか。春の安曇野から見る北アルプスの残雪はまた一段といいでしょう。さて、国立信州高遠少年自然の家は、ユニガンザクラで有名な高遠町の杖突峠という峠から、山に入った茅野と高遠の境にあります。この間まで残っていた雪もすっかり消え、からまつ芽吹きが始まったところです。

さて、皆さんは少年自然の家あるいは青年の家といった青少年教育施設を利用したことがありますか。本来これらの施設は、豊かな自然環境の中で、子どもたちが思いっきり自然体験をしたり、集団で宿泊や生活をしながら人間関係を創っていく場として設置されました。国立の少年自然の家は、全国で14ヶ所あるんですが、当所は13番目にでき今年で6年目を迎えた施設です。

当所の特長は、エリアが「晴ヶ峰高原」という尾根と尾根にはさまれた谷間にあり、硫黄沢という自然の川に添ったからまつ林に囲まれていること。宿泊棟が全部分散型の素敵なログハウスやロッジでできていることなどです。また、全国で一人の女性所長である松下所長のもと、職員がみんな和気藹々と協力しながら事業に取り組んでいるのも、誇れる特長のひとつです。

少年自然の家の事業は、大きく分けて2つあり、ひとつは「受け入れ事業」もうひとつは「主催事業」です。

「受け入れ事業」というのは、日常的な利用団体に対する対応のことで、当所は年間6万人余の方々自然体験や交流活動などの目的で利用しています。「主催事業」というのは、当所が教育的・先導的なねらいを持って企画し、広域的に参加者を募って実施する事業で、家族や子ども、指導者などを対象とした事業を年間30事業近く実施しています。

今回の「教育参加」の授業では、皆さんにはこの「主催事業」の活動補助を中心に参加していただこうと計画しています。今までの先生方の話(付属小・中・ろう学校など)は学校教育の範疇でしたのでイメージしやすかったと思いますが、これからの話は社会教育が中心となりますので、ややイメージしにくいかもしれません。

「主催事業」の活動補助というのは、学校を離れて地域や家庭のなかにある子どもたちが、自然の中でいろいろなテーマを持った体験をする事業時の活動を補助してもらうものです。具体的な事業名や活動の中身は別紙を参照して下さればわかりますが、中には、1週間以上子どもと一緒にキャンプ生活をしながら野外体験をする「冒険への旅立ち」という事業や、3回シリーズで自然や生き物について子どもと探検・調査をする事業もあります。

我々は、生涯学習社会の形成が求められている今日、学校教育とは違った社会教育的視点から、子どもや大人の活動に関わっていくことで、より広範囲なもの見方(多様な価値観を測るものさしを持つこと)ができる教師になる、お手伝いができたらと考えています。

2. 「教育参加」メニュー

(1) 「教育参加」メニューの内容

国立信州高遠少年自然の家

NO	活動名	内 容	日 時	人数	備 考
I	主催事業の活動補助	<p>当所の主催事業（含・学校週五日制対応事業）の活動の補助を行なう。</p> <p>◆事業の内容は別紙参照</p> <p>【連絡事項】 参加を希望する学生は、期日や対象・趣旨を確認の上、参加したい事業名を事前に当所まで連絡をする。 （但し 5月～12月の実施事業に限る。）</p> <p>なお、子どもだけの参加事業ではグループのリーダーやカウンセラーとして活動することもある。</p> <p>また、事業の内容や日程の一部の企画立案にも参加できるよう当所としては配慮したい。</p>	別紙参照	数名	<p>野外活動ができる服装（事業ごと連絡）</p>
II	野外活動エリア等の点検・整備	<p>当所の活動エリアの保全・点検・整備等の活動を補助する。</p> <p>（例）</p> <p>・標示板の作成・設置</p> <p>・ハイキングコースの整備など</p>	別紙参照	数名	<p>作業活動ができる服装</p>

【留意事項】

- ①主催事業の活動補助では宿泊を伴うので、用具等準備をして参加すること。
◆宿泊施設
「当所 ボランティア棟」
- ②宿泊にともない以下の実費がかかるので用意すること。
◆食事代（1日3食-1110円）
ボランティア対応料金
シーツ代 140円
- ③事業実施に当たり準備（事業企画や用具・エリアの確認など）からの参加が臨床経験上大切になってくるので、できるかぎり前日に来所すること。
- ④「教育参加」時の送迎については、
当所～茅野駅間とし指定された時間までに、茅野駅に集合すること。
（時間は各事業によって参加者に通知する。）
- ⑤教育参加が決定した学生に対しては、日程表や実施要項などを送付する。

NO	事業名	内 容	事業実施日	人数	備 考
1	君は自然環境調査員 -子ども自然 探検クラブ (3回シリーズ)	・参加者(小・中学生)のグループリーダーとして生活面や事業活動の補助を行なう。 ・自然環境や生物についての調査研究活動を行なう。 (活動例-ホタル・アマゴの生態観察 アニマルトラッキングなど)	① 7/20~21 ② 9/27~28 ③ 2/28~29	5~6 名 程度	○2回通して参加できる学生 その中で子どもの行動観察等も可能である。 ③の3回目はできるだけ参加を希望 ♣長靴
2	冒険への旅立ち	・冒険長期キャンプについての体験的研修の機会とする。 ・長期キャンプへの参加者の(小・中学生)リーダーやカウンセラーとして活動する。 (活動例-野外炊飯やキャンプ生活全般のリード 移動キャンプの引率・補助 ソロキャンプの引率・補助)	7/29~ 8/4 (6泊7日)	5名 程度	○全期間を通じて参加できる学生 ♣ザック等
3	花かおる高原につどう	・事業の活動補助として用具の準備や活動エリアの確認、資料準備を行なう。 ・事業にも補助的に参加して、周辺の植物などについての研修を行なうことができる。(活動例-地衣類の調査 高山植物の調査など)	6/28~29	2名 程度	
4	信州高遠 フェスティバル	・施設解当事業の活動補助として用具の準備や活動エリアの確認、資料準備を行なう。 ・フェスティバルの諸活動の補助的担当となる。 (活動例-クラフト作り 飲食物・品物販売など)	10 /11~12	8名 程度	

NO	事業名	内容	事業実施日	人数	備考	
5	土はともだち -親子農業 体験クラブ (3回シリーズ)	<ul style="list-style-type: none"> ・事業の活動補助として用具の準備や活動エリアの確認、資料準備を行なう。 ・参加家族とともに菜園での野菜作りなども行なう。 (活動例-野菜作り・草取り調理活動など) 	① 6/14-15 ② 7/12-13 ③ 9/13-14	4名程度	○3回通して参加できる学生 その中で子どもの行動観察等も可能である。	
6	わくわく信州高遠	秋物語	<ul style="list-style-type: none"> ・事業の活動補助として用具の準備や活動エリアの確認、資料準備を行なう。 ・参加家族とともに、四季折々の自然の中での諸活動の活動を行なう。 (活動例-ハイキング) 	10 /25-26	2名程度	
		冬物語	<ul style="list-style-type: none"> 植物観察・採集 しめ縄作りなど) 	12 /13-14	2名程度	

野外活動エリア等の点検・整備「教育参加」メニュー

NO	活動名	内容	日時	人数	備考
1	当所 標示板の作成と設置	<ul style="list-style-type: none"> ・当所活動エリア内の標示板の作成と設置の補助を行なう。 	5月中	10名程度	○できれば平日の参加を希望

3. 主催事業ごとのまとめ

- 主事業名 **君は自然環境調査員** ① H 9. 7/20~21
(3回シリーズ) ② H 9. 9/27~28
1. 教育参加学生 7名 (男子6名・女子1名) ③ H 10. 2/28~3/1
2. 事業内容

①趣旨

周辺河川の生物や水質について観察・検査方法を学び、自然とのふれあい・自然環境のあり方について理解を深めるとともに、参加者どうしの交流を図る。

②活動内容

河川の水生昆虫を中心とした水質調査 - 千代田湖から天竜川までの河川や水生昆虫の調査から始めグローバルな視点で生き物と水の関係を調査した。

ホタル・アマゴ・小動物の生態調査 - 季節ごとにテーマとなる生き物を決めて、その生態に迫る調査活動を行ないながら、自然と生き物の関わりを学ぶ。

ホタルの巣箱作りやアマゴ料理体験 - 体験活動を重視し、木工体験や調理体験などによって子どもたちの生活能力の育成も図った。

3. 教育参加学生の活動内容

- ①準備活動として - 活動エリアの下見と危険個所の確認。観察や調査に必要な物品の準備。参考資料の印刷や製本。会場作り。クイズの準備。
②参加者との関わり - 子どもたちの班ごとのリーダーとして、生活面や学習面などの全体的な援助。クイズやゲームの時間の企画・運営と指導。
③その他 - 日常的な業務に関する協力。所内の整備・清掃など。

4. 教育参加学生 研究テーマ及び感想

研究テーマ

- 自然や生き物とのふれあいの中で、子どもの成長や関心・心の変化をどう読み取るか。
○子どもたちを指導する側にたってみて、自分はどう行動するか。

感想

- ・私は今回の活動に参加して、明かに前回よりは進歩したと思います。その第一は子どもに向き合ったときに、前回より自然に接することができたことです。
・子どもの関心が意外なものにむけられていることに興味を感じた。子どもへの注意や指導が難しく、子どもが言うことを聞かなかったりと大変であった。ほめることは簡単だが、叱ったり、注意することの難しさを実感した。
・充実した日々だった。自然の中で子どもだけでなく幅広い年齢の人たちと一緒に生活でき、いろいろなことを学び充実していた。成功も失敗も喜びも後悔もたくさんあったが、どんな体験も経験すること自体が、人間の成長につながると私は思っている。

5. 担当者の感想及び反省

- 3回シリーズの事業であったので、参加者の子どもたちと参加学生の人間関係がより親密になったことが挙げられる。(3回目は学生の自主的参加) 今後も個人的な関わりを続けて行ってほしい。
□2・3回目は学生の自主的な企画・運営の時間として、レクリエーションタイムを設けたが、子どもたちも積極的に参加し思い出深い時間となった。次年度は、さらに学生による自主的な参画の時間を増やしていきたい。

1. 教育参加学生 3名(男子2名・女子1名)

2. 事業内容

①趣旨

初夏の晴ヶ峰高原を科学学習の場とし、植物観察や標本作り・標本観察を通して、自然環境に対する理解を深めながら、探求心や協力しあう心を育む機会とする。

②活動内容

自然観察・植物標本採集

—硫黄沢周辺の自然観察を行った。今回、国立科学博物館との連携により、地衣類やこけ植物を中心に、興味深く観察し、標本採集活動を行った。

植物標本作り

—採集した植物をルーペや顕微鏡で観察し、植物標本作りを行った。

標本を使っての観察

—講師から、標本やスライドにより、地衣類やこけ植物等のめずらしい世界が紹介された。

3. 教育参加学生の活動内容

① 準備活動として—植物観察や標本作りに必要な用具・実験器具の準備。

参考資料製本。会場作り。

② 参加者との関わり—参加者の各グループにつき、自然観察・植物標本採集・標本作りの援助。

③ その 他—本事業の業務に関する協力。(参加者の部屋確認等)

4. 教育参加学生 研究テーマ及び感想

研究テーマ

- ・自然と触れ合う機会が少なかったので、子ども達とともに植物観察等を行い、自然に関する認識を高める。
- ・親子での参加事業であり、その関わり方について考える。植物観察では、地衣類に興味があり、見識を深める。

感想

- ・国立科学博物館の講師の方々の指導もあり、新たな興味を持つ機会となった。自然のすばらしさ(例えば、地衣類・こけ植物が共生し合っていることなど)を知ることができ、子ども達からも考え方の柔軟さを教えられ、楽しく活動できた。ただ、もう少し子ども達と遊ぶ時間が欲しかった。
- ・講師の方々は、知識が豊富なだけでなく、子ども達との接し方もとても上手で、学ぶところが多かった。
- ・小さい子ども達と接することの難しさを実感した。また、同じ教育の中でも、このような生涯学習の場としての施設について、活用の必要性を感じた。

5. 担当者の感想及び反省

国立科学博物館との連携事業であり、植物観察、特に地衣類やこけ植物についての認識を深めることができたのではないかと思う。なお、子ども達との触れ合いについても多くを学んでいただいたと思うが、自由時間をもう少し設定できればと思った。

1. 教育参加学生 2名(男子1名・女子1名)

2. 事業内容

①趣旨

自分達で行動計画や食糧計画を立て、冒険ハイキングを行うことにより、仲間との友情を深め、冒険心と困難にうち克つ精神力と豊かな心を育む。また、地域との体験交流をすることで、より活動体験の幅を広げる。

②活動内容

野 外 活 動

－野外ゲームやキャンプファイヤー・野外炊飯等、6泊7日間のキャンプ生活を通じた自主活動や交流活動。

体 験 交 流 実 習

－地元の農家(じゃがいも作り、りんご作り、花作りから選択)で、話を聞いたり、草取りをしたりする農業体験交流実習。

冒 険 ハ イ キ ン グ

－入笠山登山(往復約40km)、守屋山登山(往復約14km)から選択し、各グループの自主計画によりソロビバーク。

3. 教育参加学生の活動内容

- ① 準備活動として－事業実施前2泊3日の中で、体験交流実習先の下見及び選択資料作り。入笠山・守屋山の事前踏査。テント張りや野外炊飯、ロープワーク等の実習。キャンプ用具準備。
- ② 参加者との関わり－参加者の各グループにつき、カウンセラーあるいは本部スタッフとして自主活動を援助し、諸準備・運営にあたる。
- ③ そ の 他－日々、子ども達の状況を把握し、ミーティングを毎日行う。

4. 教育参加学生 研究テーマ及び感想

研究テーマ

- ・6泊7日のキャンプ生活の中で、どれだけ子ども達の冒険心や発見を引き出していくか。また、子ども達の行動や生活をとらえ、どれだけその中に入っていけるか。
- ・カウンセラーあるいは本部付きという立場から、この事業全体を見通し、子ども達との活動から学びとれるものを吸収し、また、サポートしていきたい。

感想

- ・最初は、私達カウンセラーの指示により行動することが多かったのに、最終日が近くなるにつれて、班員全員で協力しながら、私達の手を借りずにがんばれるようになり、とても感動した。登山では、夜中に山道を歩いたりしたことで自分自身にも自信がついたし、子ども達にも一生に一度のいい経験になったと思う。子ども達のがんばりが私達を励ましてくれ、そこから多くを得ることができた。
- ・本部スタッフは大変であった。プログラムの次から次への準備。時間が目まぐるしく回転していった。その流れに沿って多くを学び取ることができたし、本部スタッフの客観的で、裏方としての存在の大切さがよく分かった。

5. 担当者の感想及び反省

- ・この事業におけるカウンセラーの果たす役割は大きい。事前を含め9泊10日間の準備や援助は大変だったと思うが、そこから多くを学びとってもらえたと思う。

主催事業名 「土は友だち」 日時 ①平成9年6月14日～15日
ー親子農業体験クラブー ②平成9年7月12日～13日
(3回シリーズ) ③平成9年9月13日～14日

1. 教育参加学生 2名(男子2名)

2. 事業内容

① 趣 旨 親子で農業体験をとおして、土とふれあう楽しみや作物を育てる喜びを味わう。

② 活動内容

第1回

作物の播種	→ 農学部附属農場を会場に・堆肥散布・肥料散布・耕起・マルチ・マルチ穴あけ・種まき(スイートコーン、枝豆)を実施した。
農場見学	→ 農機具の実演を見学後、加工食品試食(ポン菓子等)、農場・畜舎・果樹園を見学した。
星座観察	→ 雨天のため、天体、星座、望遠鏡の仕組みについての話
野鳥観察	→ 硫黄沢周辺の野鳥観察
そばうち体験	→ 地元ボランティアの指導で信州高遠そばうち体験

第2回

野辺山農業体験	→ 農学部附属野辺山農場・真空予冷庫等の見学
レタス解体実験	→ 親子で葉、重量等を測定し、その結果を発表した。
親子の時間	→ 親どうし・子どうしの交流時間を設定した。
天文台見学	→ 国立天文台宇宙電波観測所見学

第3回

農業体験・試食	→ 作物(スイートコーン、枝豆、加工トマト等)の収穫、試食
野外炊飯	→ 秋の動植物観察と山の幸を収穫し、昼食づくり。

3. 教育参加学生の活動内容

- ① 準備活動として → ・参加者用のテキスト準備、農業体験・野外観察の用具等の準備。
- ② 参加者とのかかわり → ・農業体験・自然観察などの班別活動では各グループの活動援助を行い、子の時間は子どもたちの交流を促進した。
- ③ その他 → ・本事業の業務に関する協力。(宿泊棟の確認等)

4. 教育参加学生 研究テーマ及び感想

<ul style="list-style-type: none">・ 3回の事業の中で、子どもたちがどのように成長するか、また、自分はどうのように子どもたちと接するかを学ぶ。・ 事業をとおし、親の元を離れない子どもが、友だちと遊べるようになり、また、農場の中に一人で入り、作物を収穫できるようになった。子どもは教えこむのなく、関心を持たせることが大事と感じた。
--

5. 担当者の感想及び反省

- ・ 農業体験をとおし、自然(土)とのふれあい、親子のふれあいなど、体験活動が人間の成長に果たす役割・意義を学んだことと思います。もう少し、自由時間が必要でした。

3. 「教育参加」参加学生の感想から

【主催事業-冒険への旅立ち-】への参加学生より

私は、7/26～8/5までの10泊11日という長い期間、国立信州高遠少年自然の家主催事業「冒険への旅立ち」に参加しました。高校の時から子どもとの行事に参加したいと思っていましたが、なかなか出来ず大学に入ったら一番力を入れたいと考えていたため、教育参加という形でこのようなことができる知りとても楽しみにしていました。メニューを見た時、このキャンプに行きたいとすぐ思いました。子どもと長い期間一緒に生活する機会はめったにありません。私は参加する前に自分が本当に子どもと接することが好きで、これから本気で教師を目指せるかどうかを確かめてこようと決めていました。自分がうわべだけで教師をやりたいのか、それとも本当にやりたいのかは、すごく大切です。3年くらい子どもと接しなかった事で、気持ちが変わってしまっていないか不安だったせいもありますが、とにかくそれだけは確かめようと思っていました。

最初の3日間は、ボランティアとしてこの行事に参加した大学生などと子どもが来る前の準備や調査、誰がどの班につくかを決め打合せをしました。ボランティアの人達は去年も「冒険への旅立ち」に参加した人や、信州大学の先輩も3人いました。皆、教育に興味がある人が集まっている事もあり、話も子どもやボランティア活動が主で先輩としての意見を聞くことが出来たり、自分の考えを先輩たちに聞いてもらう事ができ、初めて自分が教育について勉強している様に感じました。そして、夜遅くまで子どもについて話せる楽しさ、また、この様な仲間が大学に入って初めて出来たことで、今までの自分のもの足りなさを消してくれた充実感を味わうことが出来ました。

子どもたちが来てからの、7日間は本当にあつという間でした。しかし、多くの事が得られそして、感じられた毎日でした。まず、自分の未熟さの発見です。それは、班の子がホームシックにかかってしまった時、見せてしまった甘さです。私は泣いてしまった子をただ一緒に泣いて話を聞いてあげました。その時、講師の方に「甘さを見せると余計、ホームシックになる。放っておけ。」と言われて気付きました。子どもは甘やかしていても成長しない。いつもわかっていたはずなのに、私はやってしまった。大きなショックを受けたと同時に、甘さと厳しさのバランスの難しさ、そしてそれは、少し子どもといた体験があるからといって、出来ない事を実感しました。

次に、子どもが内に秘めている力の強さに何度もビックリさせられました。私の班の子は、みんな素直で良かったのですが一つ問題がありました。それはリーダーシップをとる子がいないのです。そのため最初のうちは、ほとんどカウンセラーとしてついていた私と先輩が「次は何をしろ！」と命令する形になってしまいました。それが子ども達に安心感を与えたのか、何でも聞けばカウンセラーが教えてくれると思い込んでしまいました。これでは、子どもが成長しないと考え、手を出さないようにしてみたら、今まで何でも一番を目指して早かった行動が、うそのように最後になってしまいました。しかし、それを経験して「悔しい」という気持ちが子ども達に生まれたのか、自分達で団結して行動するようになったのです。一人一人自分で出来る事を探して助け合っていました。そして、子どもだけでご飯を作ってくれた時の感動は、いまでも忘れられません。とにかく嬉しくて涙が止まりませんでした。少しのきっかけが子どもの力を引き出してくれたのでしょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・途中省略・・・・・・・・・・・・・・・・

まだ書きたい事はたくさんありますが、最後の別れる時のあの悲しさとさみしさは何にも変えられません。でも子どもと一緒に泣いてくれた事、もう一度ここに来たいと言ってくれた事は忘れられない思い出となりました。また、自分が教師になりたいという気持ちを、強いものにしてくれました。このキャンプで自分に足りないところ、成長したところとさまざま得られた事をステップに、また子どもと一緒に成長していければいいと思います。

(女子学生)

5. 成果と課題

(1)

「高遠は大自然の中にあります。自然は人間が心を通わせるのを手助けしてくれます。子どもたちとも、仲間とも、職員の方々とも揺るぎない信頼関係を築いてこれた気がします。これからも築いていける気がします。高遠は私にとって安心できる場所なのです。教育参加の授業が信州大学教育学部に存在したことに心から感謝します。」

□学生にとって、学校教育を離れた社会教育施設での体験が、それぞれの主催事業への参加で多様な体験を積むと同時に、今後の学生生活のひとつの方向づけにも影響し得たこと。

(2)

「・・・子どもと接することは大きな楽しみでした。私は子どもと一緒にいるだけで本当に嬉しく、心まで楽しくなります。・・・また来年も来たいな。」
「・・・今では人生の最高の授業として高遠に来ています。これからもさまざまなことを子どもに教えてもらいながら、自分自身を創っていきたいです。いつまでも子どもの心を持ち続けるように。このまま子どもが好きでいられるように願いながら・・・」
「・・・子どもは無邪気です。・・・この自然の家に来た時の子どもたちは一段と輝いて見えます。子どもたちの中にある可能性というか、何か宝石の玉のようなものがすごく光っている感じがします。」

□子どもたちとの自然の中での体験を通して、好奇心旺盛でエネルギッシュな子どもの本来の姿に触れることができ、子どもと接することに喜びを感じ得たこと。

(3)

「・・・たくさんの自然に関することを学ばせてもらいました。今まで知らなかったことがほとんどで、自然の重要性・大切さを身に沁みて感じる事ができ、今までのどんな勉強よりも自分の身になったと感じます。」

□参加事業の内容により多少異なるが、全体として「自然保護」「環境保全」といった今日的課題と直接的に関わり、体験を通して認識を深めることができたこと。

(4) シリーズものの事業参加学生は、参加者との絆が回を重ねるにつれて深まり、プログラムの一部を学生だけの企画や運営に任せて実施することもあった。今後は当所の計画段階から、学生の自主的・自発的な事業参画の場を設定し、学生にとって更に成就感のある「教育参加」プログラムとしていきたい。

(5) 学生にとっては臨床的に子どもとの関わりを学ぶ場であったわけだが、1年生ということでまずは遊びや活動を通して、子どもと密着しながら生活することを中心とした。時には、指導的な対応を要する場面を逃してしまうこともあったが、今後も

子どもと共に活動して仲良くなることを通じて、場に応じた子どもとのスタンスも測れることも指導していきたい。

(6) 「教育参加」事業への参加については、事前の参加予定者は、事業によってはカウンセリングリーダーなどの中心的なスタッフとして活動してもらうよう準備していることもあるので、間近になっての不参加がないように配慮したい。

(7) 「教育参加」により来所した学生が、その後当所の活動補助のボランティアとして登録し、引き続いて活動している者も出てきている。ボランティア活動を学ぶ機会として、今後も参加後の関わりを大事にしていきたい。

6. まとめにかえて - 『コ・ク・ハ・ク タイム』

当所のボランティア棟の一室は、主催事業の度に講師やボランティア・学生らの反省会兼交流会の場となる。多少の飲み物なども入ると、事業の反省だけでなくいろいろな話題が飛び出して楽しい会になるのだが、ここ2～3年この会での恒例となっているものに、『コ・ク・ハ・ク タイム』というものがある。これは数年前の社会教育実習生を受け入れた時に、期せずして始まったことであり、明かりを消して、リレー形式でその場の一人一人が「自分」について語る時間なのである。もちろん、語らない自由もあるのだが、当然そこに居合わせる職員も「自分」を語る。それは、学生時代の失恋の話であったり、自然の家職員としての悩みにおよぶこともある。

そんなコクハクタイムは、今年教育参加の学生が加わり、大学1年生としての自分が語られることによって、より聞きごたえ語りごたえのある交流の時間となったように思う。ある女子学生は、「今信州大学に居ることは、最も望んでいた自分の進路ではなかったんです。」という語り出しで、今置かれている自らの環境に対しての不安を涙しながら語ってくれた。また一人の男子学生は、自分の研究してきた自然科学の道と教師への道、どちらを選ぶか悩んでいることや、子どもたちと接することへの不安を訴えた。そしてそんな仲間の悩みや訴えに回りの学生も本気で応えた。またその話に人生の先輩である講師やボランティアの方々も加わり、心を込めて聞き、自分の体験談も含めて腹を割って話して下さった。うれしかったのは、当所の事業に参加して、自然の中で子どもたちとふれ合うことのすばらしさを体感し、「小学校の教師になりたい。」という気持ちを新たにした学生が何人もいたことである。

時を忘れて一人一人が語り合うこの『コ・ク・ハ・ク タイム』は、当所の教育参加学生にとって事業の中での自然体験や子どもや家族と触れ合うことと同様に、貴重な時間であったように思う。ある学生は、「最近合同コンパで友達と話していても何か物足りないような気がするんだ。」と話してくれた。誰でも「自分」を語りたいし、聞いてほしいという欲求は持っている。そんな本音を出し合う場や仲間が、この高遠少年自然の家で広がってきたとすればありがたいことである。

また、次年度もこんな仲間の輪が、この高遠で更に広がり深まっていくことを願ってやまない。

まず体験、その中から意義

長野県松本青年の家次長 古幡健夫

- (1)「お城不思議探検隊 --- 松本城の七不思議 --- 」
 - ◎ 9月27日(土) 8:30~16:00 4名
 - ・松本城の歴史と不思議(講義)
 - ・城郭と庭園周辺の実地探索(ウォークラリー)
- (2)「アウトドアライフ イン OHMINE」
 - ◎ 10月25日(土)~26日(日) 14:00~16:00 2名
 - ・宇宙や星についての講義、星空観察会
 - ・昼食の野外炊飯
 - ・身近な植物を使っでの遊び
- (3)「めざそう!コスモポリタン --- 国際交流 --- 」
 - ◎ 11月15日(土)~16日(日) 9:00~14:00 9名
 - ・留学生との話し合い
 - ・レクリエーションスポーツ
 - ・立食パーティー
 - ・野外炊飯
- (4)「昔の遊びにチャレンジ! --- 竹うま・たこ作り・こま回し --- 」
 - ◎ 1月24日(土) 9:00~16:00 13名
 - ・竹うま作りと竹うま乗り
 - ・たこ作りとたこあげ
 - ・いろいろなコマ、木ごまの着色とこま回し

2 反省

- ・どの学生もおおむね事前の心構えがしっかりしており、家職員の補助的な仕事を適宜買って出る場面が多かった。事前の打合せや指導が十分できないので心配したが、その点ありがたかった。
- ・参加する子どもが保護者同伴のため、子どもとの関わりに難しい面もあったが時間がたつにつれて深い関わりをもつ場面も見られた。
- ・当青年の家としては「参加者としてまず体験してほしい。意義はその中から得られる。」という視点から学生の参加を受け入れた。おおむねどの学生も楽しみながらの参加状態と受けとめている。
- ・教諭として永年勤めてきた青年教育指導員や次長との関わりは学生にとっても学ぶ点は多いと思われる。積極的に関わってほしい。

3 課題・今後の方向

- ・どの事業も相当精密な計画のもとに進められているので、予定されていた学生に無断あるいは急な欠席連絡を受けた結果、当方としては非常に困惑した。この点の改善をはかりたい。
- ・地元でもあるので許す限り最大限の学生の受け入れをしたい。その中から「教育参加」の趣旨をどのように生かすことができるのかを探っていきたい。

「教育参加」は、教育学部に入学した1年次生が、学校・青年の家等での教育活動に参加することを通して、子ども理解、教師理解、学校理解を深め、教育への関心、意欲を高めることを目的としてはじめられ、今年度6月、趣旨説明を大学の担当される先生方から受けた。それを受けて、当小諸青年の家では趣旨に添いそうな4事業を参加可能な事業として報告し、1事業に学生の参加を得た。ここでは参加のあった事業の内容、参加学生の感想、成果、課題等について記したい。

1. 実施内容

- (1) 事業名 「レクリエーションのつどい」
—晩秋！浅間山麓周遊の旅—
- (2) 期日 平成9年11月8日（土）～11月9日（日）
- (3) 趣旨 「菊薫る晩秋の浅間路を『時速200キロの新幹線』・『ゆったり信濃鉄道』・『山びこ小海線』を乗り継ぎ利用して、小諸、軽井沢及び佐久平を回り、往時の鉄道建設の苦勞を偲びつつ、新交通網による郷土の発展を考えながら浅間山麓の絶景を肌で感じ取り、参加者の交流を深める」
- (4) 参加者 県民一般 36名（こども13名、大人23名）
- (5) 「教育参加」で学生に期待したもの
 - ① 班別行動時の班長 ・人員の掌握および人員の報告
・行動の計画と引率
・班別行動時班員相互の意思の疎通
 - ② 交流会 ・交流会への積極参加と運営補助
 - ③ 生活上の係活動 ・係としての役割の遂行と係員への指導

2. 成果（「 」内参加学生のレポートの抜粋）

(1) 人間関係の形成

「年齢、住んでいる環境も違う人とどういったコミュニケーションをとるべきか、考えもなく、話す話題さえ悩んでしまった。ここが学校との大きな違いだと感じた。小学生であれ、中学生であれ、同じ年齢の子供たちは自らの好奇心で友人関係を作っていこうとするが、この企画では、家族などの強い結びつきがあり、どうも積極性を欠いてしまう。しかし、私の不安は当日には消えていた。その場その場で会話はできたし、小学生以下の子供たちも私がコミュニケーションをとろうとすれば、それにこたえてくれた」

「子供たちとはすっかり仲良くなり、一般の人々とも楽しくおしゃべりができました。自分自身、結構人見知りする方で、そう簡単に知らない人としゃべることは出来なかったのですが、今回は全くそんなことはなく、気軽に接することが出来ました。」

(2) 子どもの見方の変化

「子どもは一見とても幼そうだけれども、自分が興味を持った事に対しては、そこへんの大人にはまねできないものがあるなと思った。」

(3) こどものあつかいかたへの理解

「子どもだけで来ていることが多く、その世話をするのが精一杯でした。僕が世話した子どもはとても列車のことに詳しく、駅の中をいろいろと回り、珍しい列車を見ては、写真を撮っていました。さんざん連れ回されおかげで、こっちはくたくたになってしまいました。」

(4) 専門性の向上

「僕も保健体育を専攻しているので、レクリエーションについても授業をやってきました。しかし、指導所員を見て思ったことは、レクリエーションをどんなに知っていても、教える人が明るく、元気を出さないと皆はついてこないんだということです。指導所員はあっという間に子供たちに慕われ、いつのまにか僕達も自然と体が動いていました。僕もいずれ保健体育を教えることになるかもしれないので、とても良い勉強になりました。」

3. 課題・来年度への方向

(1) 参加学生の数の把握

あくまで学生の希望によるため、青年の家で期待する人数の確保が保障されない。今年度は、希望の全く無かった事業があり、事業案作成の段階で、教育参加があるものとして計画したが、計画の変更を余儀なくされてしまった。

(2) 参加学生の意識の格差

今年度は参加者全員が意欲的に活動してくれたが、今後もこのような意識で参加してほしい。

(3) 学生との連絡

学生個人との日程等の連絡になるため、うまく連絡がとれない。今年度は、集合時間等を郵送したのにもかかわらず、打ち合わせ時間に遅れてくる学生があった。また、電話連絡等にも不便を感じた。

(4) 本年度は事業の関係で、教育参加の趣旨である子どもとの触れあいの少ない事業への参加をお願いすることとなってしまった。来年度は、子供たちの中に入り込み、いっしょに生活し、触れ合いながら体験を深められる事業での参加を計画し、お願いしたい。

学生の参加状況と態度の問題点

長野県須坂青年の家次長 森山俊一

1. 取り組みの概要

長野県須坂青年の家でのフレンドシップ事業の取り組みを報告する。平成9年度の主催事業の活動補助「教育参加」メニューは、5事業で実施した。事業内容は峰の原高原ふれあいゴルフ基礎講座、秋の高原植物、クラフトのつどい、スノーボード、青年スキーであった。ここでは、事例を列挙しながら当所でのフレンドシップ事業の概要について述べる。

2. 教育参加の受入基本方針

教育参加については、平成9年6月に信州大学教育学部、長野県教育委員会生涯学習課、県内6カ所にある県少年自然の家（望月・阿南）、県青年の家（小諸・松川・松本・須坂）の代表による実施打ち合わせ会議で、平成9年度の活動を支援する意見交換をし、スタートをきった。信州大学の学生が活動できる場の確保について、大学側が県教委に協力を要請。県教委生涯学習課も「連携はいい機会。各家の事業内容を見直すことも検討したい」と前向きな姿勢を示した。当所では、職員会議を開催し、今後の受入について話し合いをもった。その中で、確認をした点については、次の事である。教育参加を受入れる場合は原則として前日泊の入所とする。学生の氏名を事前に確認をし、次長が直接学生と連絡調整、資料等を送付する。対応責任者は次長とし、主催担当者と連絡を密にする。主催活動補助を学生が主体的、積極的に展開できるように全員で指導助言をしながら、学生と共に主催事業を連携協力する。

3. 日本体育大学社会教育研究会の教育実習

当所では、昭和60年頃より、日本体育大学社会体育研究会の大学生を社会体育教育実習生として受入れている。次に、その教育実習について報告する。

受入れ事業は夏と冬の長期休業期間を利用する。夏の場合は7月25日から8月2日までの期間とする。1団4名の構成とする。（男子学生2名、女子学生2名）で1団は4泊5日での実習とする。夏・冬ともに2団構成で実施する。

（1）実習日誌記録

1997年7月27日（日曜日）

6時30分 起床

7時00分 朝のつどいリード（スピーチ指導）

7時20分 事務室、所長室清掃（清掃、机の上を拭く、職員の茶の準備等）

7時40分 朝食

8時30分 職員朝会 日程説明と本日の予定（教育実習生は職員室にて日程確認）

8時45分 本日の作業キャンプテントのペグ確認（キャンプ場倉庫）

10時30分 事務作業補助（印刷室にてパンフレット作り）

12時00分 昼食

13時00分 生涯学習ボランティアセミナー（研修生とボランティア活動）

14時00分 退所前の部屋点検（青年教育指導員と一緒に巡回し指導、整理整頓）

14時30分 退所式（職員と一緒に出席）

15時30分 清掃・部屋点検・退所式〔東条剣道〕

- 16時00分 全館のモップ交換・清掃用具の確認作業（庁務技師の補助作業）
*全員参加で協力する。
- 17時00分 職員夕会 日程確認と明日の予定（教育実習生は職員室にて日程確認）
- 18時00分 夕食
- 17時00分 教育実習生ミーティング
- 22時30分 消灯・就寝

（2）研修参加者の意見・感想

- ①日本体育大学の教育実習生のレクリエーション指導、ウォークラリーの時の適切なアドバイス、常にキビキビした動作大きな声での指示等とても良いです。
- ②教育実習生からの挨拶やフレッシュな姿は感動的です。
- ③日体大のお兄さん、お姉さんと、体育館で遊んでもらって嬉しかったです。
- ④僕は剣道をやっていますが、将来は日体大で頑張りたいです。

（3）日本体育大学教育実習生の実習日誌

- ①自分から仕事を見つけることができずにいたように思います。3年目でやる内容はわかっているわけですので、下級生をリードできるように指導したいと思います。明日はもっと自分で仕事を見つけて動けるようにしたいと思います。
- ②今日は、教育実習3日目ということで、ある程度慣れた部分もあり、いろいろと仕事が出来ようになってきたが、見落とす部分や仕事をしていて細かい部分が出来ていないところを自分で見つけられるようになって来たので、細かいところに注意していきたいと思います。
- ③今回で冬を含め4回目の社会教育実習になったわけですが、4回目にしても新鮮な気持ちで活動できました。100人相手にゲームをやってみて、凄く良かったと思い、また交流できそして迫力のあるキャンプファイヤーを体験でき良かったです。

日本体育大学の社会教育実習の活動で評価できる事は次の点である。

- ①常に職員室を拠点としている。次長・青年教育指導員・技師の動きをすぐ理解できる。
- ②常に、一緒に行動する。（指導助言をうけながら実践できる。）

活動事例	清掃用具の点検	庁務技師の指導助言
	モップの交換	書記・庁務技師の指導助言
	部屋の点検	青年教育指導員の指導助言
	レクリエーション	次長・青年教育指導員に指導案提出後、直接指導
	ウォークラリー	青年教育指導員の指導助言

- ③社会教育実習生は、先輩と後輩がペアになる。先輩が後輩をリードする。
- ④長い伝統の上にたちながら、積極的な姿勢で行動する。
- ⑤万事研修の事、素志貫徹の事、自主自立の事、先駆開拓の事、感謝協力の事の五誓を目標に実践活動をする。
- ⑥学生ができるだけ表に出て研修生を指導する、職員が補助をする。（反省と取り組む課題を会議の中で確認をする）
- ⑦教育実習日誌を毎日書き次長に提出する。教育実習日誌を回覧する。
- ⑧報告・連絡・相談を常にし全員で協力をする。
- ⑨主催事業の計画やタイムスケジュールを常に確認し率先した行動に移れるようにする。

4. 主催事業「秋の高原植物」に教育参加した信州大学学生レポート抜粋

①野外観察では、こんなにも多くの種類のキノコが山の中にあるのかと正直驚いた。一つ採るとまた一つ見つけるという風にいつの間にか夢中になっていた。参加者中、一番大きなベニテングダケ（有毒）を発見し、手に入れることができ、一人でうかれてしまった。私は今回のつどいに参加して、人の素朴さ、優しさ、暖かさを感じることができた。青年の家の職員さん達は、私達に大変親切にしてくださり、これからの生活に必要な先輩のアドバイスなど様々な話をしてくださった。意見を押し付けるのではなく、一つ一つの物事を諭すように話してくださるので私も素直に受け取ることができた。

②先に、参加者の人たちはすぐに打ち解けたと書いたけれど、そうとは言いきれないところも中にはあります。一人で参加された70代のおばあさんがいて、他の人たちと世代が違うせいか、寂しそうな様子でいるみたいで少し気になりました。それに、特に男性の中にはあまり社交的でない人もいて、例えば、食事の時間なんかで話すきっかけがつかめない様子で、どこことなく居心地悪そうにしている人もいました。でも、そんな時には、職員の人達がやさしく声をかけたり、冗談を言って場を盛り上げたりなさって、さすがだなあと感じました。職員の皆さんは、今までに何度もこんなふうに関心を持って色々な受講生を青年の家に迎えて、一緒に色々な活動をしてこられたのでしょう。その経験の中で、皆が楽しめるようにするためにはどうすればよいか、スムーズにセミナーを進行させるにはどうしたらよいかというような、ノウハウを身に付けてこられたのだと思います。

（1）長野県須坂青年の家での教育参加の実施にあたっての注意事項

実施にあたっては、次のような点を特に注意するよう教育参加学生へ指示をした。

- ①「教育参加する主催事業についての事前理解をする。」
- ②「研修施設のスケジュールの確認をする。」
- ③「責任感、約束は守る。五分前行動をする。仕事は最後まできちんと実行する。」
- ④「報告・連絡・相談を確実に行う。」
- ⑤「安全には十分注意する。」

所の研修目標である、「規律」・「友愛」・「挑戦」を研修生と共に努力する。

（2）主催事業の活動補助「教育参加」人数と参加状況

事業名	内容	事業実施日	人数	備考
生涯学習 ボランティアセミナー	講演、講義 環境ボランティア 視察研修	7/25~27	0	参加希望なし
峰の原高原ふれあい ゴルフ基礎講座（Ⅱ）	講義、 バンカー、パター 合理的なスウィング アプローチ練習 ラウンドプレー	9/ 7~ 8	3	男子2・女子1参加
秋の高原植物	講義、スライド 野外観察 植物観察	9/20~21	3	男子1・女子2参加

事業名	内容	事業実施日	人数	備考
四阿山登山	登山の講義 スライド説明 登山	10/ 4~ 5	0	参加希望申込 取り消し
クラフトのつどい	リースづくり コカリナづくり	11/ 8~ 9	1	女子1参加
ベイシックスノーボード	スノーボードの基礎 安全指導・ビデオ	12/20~21	4	男子2・女子2参加
青年スキーのつどい	スキー指導講習	1/17~18	4	参加申込13 男子4参加

(3) 学生の参加状況と態度及び反省点

- ①参加すると言っておきながら、当日近くになると「参加できない。」との連絡があり、準備をしているのに残念であった。
- ②主催事業の内容理解が不十分のまま、参加した学生がみられる。
- ③スポーツの主催事業に参加した学生は、目的がはっきりしているもので、喜んで参加していたが、「教育参加」の趣旨を忘れ職員との連絡や事務分担で不満が残った。
- ④積極的な態度で参加し、わからない点を自分からどんどん尋ねてほしい。
- ⑤座席を決めてあるので常に連絡のとれる場所で待機してほしい。(指示がうまく入らなかった。)
- ⑥青年の家への参加者は子供だけでない、年配の方や年上の方との交流のチャンスもある機会をとらえ、進んで交流すれば学ぶ点はいくらでもある。(日常ではできない経験や交流を積極的にしてほしい。)
- ⑦今後も須坂の場合は事前の準備からの参加を希望する、所内生活のオリエンテーションや裏方の準備の大切さを職員と一緒に、主催事業を打ち合わせながら取り組んでほしい。
- ⑧挨拶やスピーチをすることにより、人前で大きな声での説明ができる機会をいかしてほしい。

(4) 今後の課題や要望

- ①教育参加は平成9年度から開始したばかりであるので課題や問題点もあるが、会議等で反省や受け入れ側の問題点も改めながらよりよい教育参加にしたい。
- ②受け入れ側の担当者が大学生への事前説明をする機会を設定してほしい。
[平成10年度は実施の方向で話し合いがもたれた。]
- ③教育機関の特色を理解するには、一度この施設を理解する必要がある。学科単位やゼミナール単位、サークル単位でもよいので研修で施設を活用して理解してほしい。
- ④教育参加学生には、実習日誌をつけて反省をしながら活動にいかしてもらっている。今後も続けていきたいと思う。
- ⑤社会教育施設で行われる教育活動の実際場面にも学ぶ姿勢があれば、教育上自分にプラスになることは多くの点であるので積極的に学ぶ必要がある。
- ⑥担当者会議や連絡会等で、緊密な連携が必要である。

危機的教育課題に挑戦する若者への期待 —「ふれあい自然体験キャンプ」実践報告—

長野県阿南少年自然の家次長 貝原 豪

実践の方向

中学生による殺人事件は、社会に大変なショックを与えた。事件が特異だっただけに、大変センセーショナルに扱われた。しかし、最も危惧すべきことは、問題が大きければ大きいほど、対策は緊急を要するとして、次々に打ち出されるが、ほとんどが対症的なものに終始し、本質的解決には踏み込めないことにある。今回の対策も、(残念なことであるが)やがては形骸化し、メディアを騒がす新たな問題が発生したとき、取り残されていくことになることは容易に想像できる。問題行動といわれている「校内暴力」「非行」「いじめ」「不登校」「自殺」等の事例をみれば、当時いろいろと対策と称して実施されてきたが、何ら解決に至っていない現状をみれば明らかなことである。もし、今回の事件を発生させる根底に、今までの事件と共通の問題要素が基盤に含まれているとすれば、大きな問題であり、早急に、真の対策を講じなくてはならないことになる。

今回の実践報告では、上記に述べた、問題行動発生の原因や基盤を検討するものではなく、その発生を前提とした上での、子供への接し方という点で報告する。しかし、実践を進める上での指導の方向は、以下の内容から決め出した。

問題行動発生の原因や基盤を成すものの大きな要素として、「人間関係の希薄化」を指摘する。この傾向は、今日の社会構造の変容、特に1960年代以降の消費経済社会への変容に伴う必然的現象とした。なぜなら、子供の教育、特に乳幼児の低年齢期からの親子関係は、思春期のアイデンティティー形成期における人間関係と深い関係がある。この親子関係には、身体的にも精神的にも直接的な触れ合いが必要であり、しかも触れ合いの場が時間的にも空間的にも保障されていなくてはならないのである。しかし、今日の家庭環境をみれば、健全な親子関係を作り出す状況にないことは、多くの文献により指摘されている。この家庭の不幸な状況は、家庭に責任があるというよりは、社会全体の動きが、家庭における人間関係の希薄化を生み出しているものであり、この傾向を1960年代以降の日本の社会全体の動きとした。

家庭と地域との人間関係が希薄化するこの流れの中では、多様な価値観が孤立化し、個別化の名の下に、一貫性をともなわない人間関係を生じさせることとなった。もはや、家庭の経済的状況が原因なのではなく、家庭における人間関係の形成に、原因が移行してきているのである。社会や家庭の人間関係の変容を、家庭そのものが受容できるうちはよいが、弊害化してきたときには、家庭において最も弱い立場にいる子供に被害が及ぶのは当然である。今日の青少年の、問題発生の原因や基盤が、思春期におけるアイデンティティーの形成過程の問題と深い関連があるとすれば、極めて重大な問題である。なぜなら、アイデンティティーの形成は、今日の最も重要な課題であり、しかもこの解決には、対症的対策では到底解決できない深刻さと困難性を含んでいるからである。地道にしっかり

と時間をかけて、見通しを持った対策が講じられなくてはならない。

しかし、いったん価値観が多様化し、個別化してしまった家庭は、個々の責任の下に人間関係の回復を図ろうとはしなかった。どこからも問題の深刻さを指摘されず、自ら気付くことよりも、懸命に社会の変容に順応しようと努めていた。子供が危機的状況に陥り、救いを求めて来た時には既に手遅れになっている場合が多かった。なぜなら、思春期に至ってからの人間関係の回復は、幼児期のそれよりは、精神的にも身体的にも、かなりのエネルギーを要し、時間的にも取り組みの継続性が必要となるからである。今日おかれている家庭の状況は、時間的に継続する取り組みの困難性は明らかである。

もう一つの問題は、このようにして起こるべきして起こった問題の原因を、全て学校教育現場に向けてきたことである。社会と家庭の「人間関係希薄化」から生じた問題の責任転嫁を教育現場にしても、解決されようがないのは当然である。むしろ学校教育現場の問題は、その原因の認識が甘く、見通しをもった対策が立てられなかったことにある。原因と対策を考える前に、「学校叩き」の対応に追われていたことも事実である。

教師の感受性と学級集団

学校教育の原点は、教師と子供の「接し方」から生み出される人間関係にあり、この接し方を生み出す「人間性」は、家庭環境から生み出されてくる。従って、子供を相手とする教師の人間性も、家庭のあり方に左右され、その家庭は、社会環境のあり方に左右される。このことは、「人間関係希薄化」の社会の流れの中で育ってきた教師の占める割合が多くなってきていることも指摘できる。個別化の中で多様な価値観を身に付けている教師が多くなってきているということである。教育を考えると、教育現場がこの教師集団の変容を、家庭や社会環境の変容と同様に捉えられているかどうかということは、「学校」自身として、解決への決定的な方向付けをしていくことになる。

三つの「子供を育む環境」をあげたが、対策を取り組むときに最も効果が大きいのは、家庭である。しかし、家庭に期待することはその多様性からみても、問題意識の認識からみても、問題解決能力（養育能力）からみても、極めて困難である。反面学校現場の視点から見ると、人間関係形成においては低学年に最も可能性が期待できるものの、思春期あるいは思春期前期に至ってからは困難性を高めてしまう。しかし、明確な方向性と指導対策を持ったときには、十分その効果が期待でき、家庭や地域社会に対しても、啓蒙的効果の可能性が期待できる。

何よりもまず考えなくてはならないことは、今日報道されているような、問題行動を起こしてしまったり、潜在的に起こさざるを得ない子供達の存在以上に、その子たちを取り囲み、一緒に生活していこうとする子供たちの方が多いいということである。つまり、社会の変容の中で、それぞれに家庭で、受容可能な人間関係を身に付けてきている子供達の方が多いのである。問題行動に対応することは勿論重要なことであるが、問題行動とされる事例の回りや、外側の子供の存在も忘れてはならない。つまり、学級集団は、価値観が多様化され個別化されたそれぞれの家庭の、受容可能な人間関係を背負ってきている子供達によって構成されているのである。このことは、学級集団の質によって、子供達の人間関

係は大きく左右されることになる。そして、人間関係受容という観点から見れば、基本的な生活習慣定着期の低年齢期が最も重要であり、この獲得過程が思春期のアイデンティティ形成に大きく影響を及ぼしていくことになる。どうしても、人間関係の形成にとって、良い環境を作ることは急務であり、最も重要なことである。悪い環境の中では、受容可能な子供の柔軟な心は、どんどん悪くなってしまふのである。

今日の危機的教育課題が、「思春期におけるアイデンティティの形成過程」にあるとすれば、人間関係の形成が十分可能な、温かい学級集団を低年齢期から作る必要があるとされる。この集団によって、家庭で悩みをもった子供の心は癒されていけることになるからである。受容可能な柔軟性に富んだ心を持つ低年齢期に、自分以外の価値観に触れ、共に生活することは、自己と相手の存在に気付き同時に人格をも認識していくことになる。価値観の多様性を次第に認めていくことは、思春期に至ってのアイデンティティの形成に、なくてはならない「接し方」の経験である。ここに、子供の心を感じ反応できる感受性を持った教師の存在が、必要となってくるのである。子供の心を感じ反応できるということは、子供の心の多様性を感じ取れるということである。つまり、個別化した価値観の多様性を、感覚的に捉えられるかどうかということである。そのためには、教師の感受性が柔軟で、敏感でなくてはならず、しかも、価値観の多様性に流されないしっかりとした自己、つまり教師自身のアイデンティティが必要となる。

「ふれあい自然体験キャンプ」

ふれあい自然体験キャンプは、長野県教育委員会生涯学習課によって、不登校の子供達のために企画され、長野県阿南少年自然の家と同望月少年自然の家それぞれに実施主体がおかれたキャンプのことである（資料1、2参照）。このキャンプ実施に当って、特に配慮されたことは、「学校の匂いをさせない」「管理的にならない」ことと、キャンプ生活の世話は、大学生を中心にした若者に任せようということであった。阿南少年自然の家には、今回の教育参加で延べ30名の信州大学教育学部の学生が参加してくれた。

キャンプは、短期キャンプ（1泊2日：7月12日～13日、教育学部生13名参加）と長期キャンプ（5泊6日：8月2日～7日、教育学部生17名参加）の2種類が企画され、それぞれ参加者は不登校の子供とそうでない子供との混在参加とした（どちらのキャンプも学生には、不登校対象児童生徒名は明らかにしていない）。

短期キャンプは、子供と親の参加とし、親子別々の活動や合同の活動を用意した。特に親の活動では、学習会や懇親会を用意し、孤立し閉鎖的になりやすい、不登校の子供を抱える家族への配慮をした。また、子供時代への回帰経験をというねらいから、子供と同じ活動を親同士で行った。期間の長い長期キャンプは、子供のみ参加とし、活動内容を明確にして子供に示し、参加の方法や実施計画は子供に任せようとする立場を取った。しかし、長期キャンプでは、学生を含めた参加者（子供達）が全く初対面から、生活をスタートさせることになるので、初日と2日目は、時間的に制約される活動を組み入れ、身体をまず動かすことに重点をおいた。そして、子供と学生との心の触れ合いの生まれる場の設定を、以降の活動に用意した。

④ 保健室登校や不登校のみなさんへ

私達阿南少年自然の家では、昨年、不登校のお友達も参加して「ふれあい自然体験キャンプ」を実施しました。たくさんのお友達が集まって、ボランティアの大学生のお兄さんやお姉さんと、ワイワイガヤガヤとっても楽しく生活しました。大勢なので、どの子が不登校や保健室登校の子なのか、全く分かりません。それに自然の家は学校ではありません。参加者の皆さんの、たくさんメッセージの中から、不登校のお友達（中学生女子）とお母さんのメッセージを紹介します。

さあみんな、読いあって、少年自然の家にやっこないか！

① 昨年のお友だちからのメッセージ

すごくよかった。とにかく、自由で言うのがいいです。何がいかって聞かれると、困るけど、とにかくいろんなことができたから、すごくいい時間でした。自分たちの好きなことができる。自分達のやりたい事ができて最高でした。友達やスタッフの人としゃべったことや、川や山へ行ったこと全部が楽しくって、家に帰るのが嫌でした。

それに、このキャンプで、自分に自信が持てました。自由時間は自分のやりたいことをさかしてやるから、自信が持てたのかしれません。いろんな友達としゃべって、スタッフとしゃべって、無理をしなくて、自分をそのまま出せた自分が好きになりました。

すごく楽しい6日間でした。がんばって行ったキャンプじゃなくて、楽しんでやったキャンプでした。スタッフのお兄さんお姉さんありがとう。無理をしなかった自分にもありがとう。山で見た星はすごくきれいで、川で食べた魚もおいしくて、班のみんなで作って食べたカレーもおいしくて、全部がVery Good!でした。最高のキャンプでした。

(中学生 女子)

② お母さんからのメッセージ

5泊6日という長いキャンプ。先生方をはじめ学生の皆様には、大変お世話になり有難うございました。

家からあまり出たがらない子供でしたので、学校からキャンプの手紙をもらってきて、「友達と一緒に行ってみたい。」と言った言葉が嬉しくて、さっそく申し込みました。

こんなに長い間、家を空けるのは初めてでしたので、親としては最初とても心配でしたが、本人はそんな心配はよそに、しっかりキャンプ生活を楽しんできてくれたことがとても嬉しく、大変感激しました。普段家ではどうしても依頼心が強くなってしまっていますが、この貴重な体験を通し、少しではありますが、自分で考えて行動することができるようになってきたように思います。本当に行かせて良かったなと、有り難く思いました。

(小学生男子 母)

③ 参加についての原則是？

県内の小中学生ならだれでも参加できますが、希望者が多い場合には、原則として不登校あるいは保健室登校の皆さんとその友達を優先します。

④ 短期キャンプは保護者（家族）の皆さん同伴が原則ですが、子どもさんが参加されなくても保護者懇談会（不登校で悩んだことのある方のお話等）には保護者のみの参加もできます。

⑤ 長期キャンプは、子どものみの参加が原則です。また、短期キャンプに参加した皆さんが優先です。

④ 参加料金は？

① 短期キャンプ 3,800円 ② 長期キャンプ 18,000円

どちらも、食費や保険料金などの実費です。集金は当日します。なお、長期キャンプでは、選択プログラムによって若干の差異が生じますが、申込受付時にご連絡いたします。

あつと遊びに来てみませんか！

短期キャンプ 7月12日(土)~13日(日)

※詳細は申込決定後別途お知らせします

7月	午前	午後	夕	夜
1日目	子ども	受付時刻までに少年自然の家まで各自でご集合ください。	仲間作りタイム 楽しいふれあいタイム [8:00]入浴	
12日(土)	保護者	[集合] (1:00)	親子猪鍋会食 (2:30-5:00) 子供時代に返って！	座談会・学習会 (7:00-9:00) [9:00]入浴
2日目	子ども	カレー・オムレツ・リング! みんなで作り、カレーの味をさがしましょう。そしてお母さんのお分まで、おいしくつくとね!	野外炊飯! (12:30-1:30) 親子参加者会食	
13日(日)	保護者	[8:30-10:30] (10:30-12:30) フリータイム 子供時代に返って!! 地元の特産品を味わったり、作業工場の社産を味わったり、できるでしょうか...? ※解散予定 (2:00)		

〇〇保護者の皆様へ
ご案内のように短期キャンプでは、子供さんがたの活動とは独立した。保護者の皆さんの活動も準備をしています。
家庭や職場の義務からちょっと離れて、自然の家へいらっやいませんか、ゆっくりゆったりと、自然の中でちょっと深呼吸してみませんか...そして、野外炊飯や竹トンボを作りながら、子供の頃を思い出してみせんか...きつときつと「忘れかけていた子供時代」を思い出します。楽しかったり、悲しかったり、苦しかった子供の頃のことも。

持ち物
野外活動のできる服装・帽子・運動靴・上履き
洗面用具・バジャマ類・軍手・雨具・懐中電灯
筆記具・健康保険証（コピーでも可）

申し込み
下記申込書を切り取り、郵送またはFAXで阿南少年自然の家まで申し込んでください。なお、締め切りは短期キャンプ6月28日・長期キャンプ7月19日です。

申込先 長野県阿南少年自然の家 ☎399-15 下伊那郡阿南町西条2332
お問合せ ☎0260-22-3315 FAX 0260-31-1015

ふれあい自然体験キャンプ参加申込書

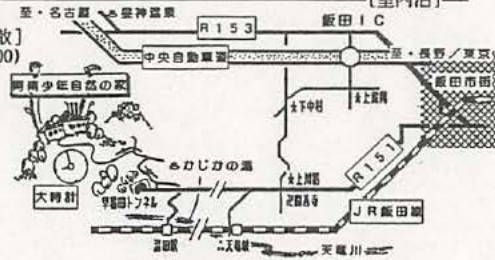
※詳細は記入ください

(ふりがな)	児童・生徒	年齢	保護者	印
氏名	男・女	才		
学校名・学年	(小・中) 学校			学年
住所(連絡先)	市・郡			()
参加希望に	<input type="radio"/> 1: 短期・長期とも参加する。 <input type="radio"/> 2: 短期のみ参加する。 <input type="radio"/> 3: 長期のみ参加する。			

山と川とちよつと遠足

長期キャンプ 8月2日(土)~7日(木) ※詳細は参加決定後別途案内いたします

月 日	午 前	午 後	夕・夜
8月2日 (土)	(午後1時までは集合) 仲間作りタイム (お兄さんお姉さんみんなと友達)		
8月3日 (日)	ちよつと遠足 (選択プログラム)	夜間ハイク準備	[室内泊] グループごとの夜間登山
8月4日 (月)	朝の山頂生活 「上る朝日に ヤッホー!!」	下山の後は温泉! 「かじかの湯」の 大冒険	[室内泊] 夜の山の大探検だ! 星空観測・山頂野宿
8月5日 (火)	野外炊飯 朝食とお昼の おむすび作り	和知野川で川遊び! 「いわな」のつかみ取り 塩焼きがこれまた最高!	[テント泊] テント村づくり・野外炊飯 野外炊飯 夕食 キャンプファイヤー
8月6日 (水)	お別れ遠足 「天竜川の大自然」(ライン下り)		[室内泊] お別れパーティー
8月7日 (木)	荷物の整理	お別れ焼肉大会 [解散 (2:00)]	[室内泊]



(1)中央自動車道「飯田IC」から車で約40分。
(2)★印は、「飯田IC」から「国道151」に出るために、右左折する交差点の名称です。
(3)JR飯田線「温田駅」より、路線バスが出ています。15分程乗り「壺割」で下車、徒歩5分です。
※自家用車の場合「国道151」上の山腹の「大きな時計」が目印となります。

参加児童・生徒の状況

現在の健康状態 (具体的に)	既往症など
不登校傾向の有・無 (見崎観など)	[有・無]
要望など	

小中学生のための

ふれあい自然体験キャンプ

君の笑顔に会いたいけ



短期キャンプ

期 日 ----- 7月12日(土)~13日(日) 締切6月28日(土)

対 象 ----- 小中学生及びその保護者(家族) 合計100名

長期キャンプ

期 日 ----- 8月2日(土)~7日(木) 締切7月19日(土)

対 象 ----- 小学5~6年生と中学生 合計50名

場 所 長野県阿南少年自然の家

〒399-15 下伊那郡阿南町西条2332

☎0260-22-3315 FAX 0260-31-1015

子供との「ふれあい」に期待するもの

「ふれあい自然体験キャンプ」を通して、教育学部の学生、特に教員を目指している学生に期待したものは、子供とのふれあいの「感覚的受け止め」の経験である。子供の心を感じ取ることのできる教師の「感受性」とは、その教師の人間性による感覚的な心の共鳴あるいは響き合いのようなものであり、マニュアル化された客観的基準によって示されるものではない。教師自身が、いかなる人間関係の中で、いかに過ごしてきたかが問題となるのである。アイデンティティ形成の真っ只中にある学生達の心と、参加した子供達の心を、直に共振させることは、今後の彼等の生き方に新しい方向を示せるのではないかと考えたのである。

従って、学生も子供と同じ立場で参加し活動する立場をとった。つまり、学生に「子供時代」に返ってもらったのである。一般の教育実習にみられるような、指導案作成に当るキャンプの活動計画立案などはしないのである。子供と一緒に活動班に入って、子供と同じ活動メニューが示され、好きなように活動するのである。子供達より数年年長のお兄さんお姉さんとして、自ら活動を楽しむのである。そこには、当然子供を管理しようとする意識や、指導目標に追い込まなくてはならないとする使命感は要求されない。むしろ、活動班の年長者（リーダー）としての、悩みや戸惑いを、自己の問題として直接感じることになった。少なくともキャンプでは、班単位の活動がプログラムされており、班ごとに活動が任されていたからである。自己主張すれば、当然子供は退くことになるし、子供の心と共鳴すれば、子供は心の窓を開いてくるからである。つまり、このキャンプでは、教師の立場に立って接するのではなく、子供の中に入って、子供と同じ立場になり、しかも、年長者としての判断と行動が要求され、しかも子供達に対して責任をとらなくてはならないのである。学生が今日まで培ってきた人間性そのものが、子供達の前にさらけ出されることになり、その反応は、実にシビアに子供によって示されるのである。なぜなら、このキャンプは「学校」の先生によって管理されていないからである。

この、子供の心と学生の心との「ふれあい」は、アイデンティティの形成において、子供にとっても学生にとっても、相乗効果的に作用したと思われる。なぜなら、子供にとっては、家庭や学校という管理された環境から一步出て、少年自然の家という開放的な環境の中で、しかも、無理解に管理しようとする姿勢の感じられない学生が、理解しようとする姿勢で接してくれるからである。自分の人格が傷付けられないことを、感覚的に感じ取った子供は、自己の心の窓を開こうとし、そこには、相手の存在と自己の存在とを容認していこうとする姿勢が同えるからである。

一方学生にとっては、自分の心に共鳴し、満足してくれる子供の笑顔を見たとき、相手の心に働きかけたことの反応として、子供の心を感じ取ることが出来る。しかも、その反応が、強要や義務的なものではなく、本心からの無意識の反応として感じ取れたとすれば、感覚的に、「与える愛情」の喜びを、自己の中に感じ取ったことになるのである。「与える愛情」への充足感を感じ取ることのできた学生は、育ってきた人間関係の中に「与えられた愛情」に対する喜びが経験されていたからである。今、自らが、自分よりも弱い立場の子供に「接する」ことによって、自らが与えた愛情の感受を、相手の中に見出せることを認識し、それを喜びと感ずることができるということは、教師にとってはなくてはなら

い感覚である。この充足感の経験こそ最も必要なことである。愛情に対する自己認識を深め確立していくことは、この時期の人間形成に重要な位置を占める。

子供の反応及び学生の反応

-----子供からの手紙（不登校中学3年生女子）-----

私は、4泊5日だったけれど、今年も、とってもすてきな体験をさせてもらいました。今年が最後だったので、行ってよかったと思いました。今度参加できるとしたらスタッフだと思います。絶対に、スタッフとして参加したいと思います。とってもすてきな体験キャンプに参加できた私は、幸せです。

今年も参加して、『心の宝物』を沢山もらいました。大切な宝物です。すてきなキャンプをありがとうございました。このキャンプに、スタッフとして行くことができたなら最高です。

※¹ 文中の「スタッフ」とは、教育参加の学生のこと。このキャンプでは、学生を「スタッフ」と呼んでいた。

※² この女子中学生は、昨年度も参加した。

-----不登校児母親からの手紙-----

外見的には、余りこれといって変化はみられませんが、子供の内側は、とても変わってきているのではないかと、ふと感じました。

寄せ書きの色紙を見せて、「これは私の宝物だ!」と、抱きしめていました。また、送られてきた修了証と写真を、とても大切に飾っています。これは、このキャンプでとても大切なことを学んだからだだと思います。そんな子供の様子を見てみると、これからどう変わっていくのかと、ワクワクしてきます。子供の成長を、楽しみに見守っていけそうな気がしてきました。

「私は、まだ、3回キャンプに参加できる。」と、キャンプをとても楽しみにしています。子供に、キャンプの楽しさを教えていただきましたスタッフの皆さんに、感謝の気持ちで一杯でございます。本当に有難うございました。

※¹ 「寄せ書き」は、最終日に、色紙に阿南少年自然の家の参加者全員で書いた。

※² 「修了証」は、参加者に、天竜ライン下りの記念写真とともに送付した。

-----参加学生の感想（教育学部4年生女子）-----

今回のキャンプで、私は初めて不登校の子供と触れ合いました。といっても、どの子もそんなことを少しも感じさせない、とても明るく、いい子ばかりではないかという第一印象を受けました。しかし、一晚、班の子供3人の話の中に混ぜてもらい、一緒に様々な話をした中で、どの子も皆各々に現在、そして未来の自分自身について考え、悩み、まだ幼いのに、大きなものを背負っているのだな、と感じさせられました。

また、様々なイベントを行うごとに、班の中では平気なのに、大勢で何かをすると一歩さがってしまうといった子供の様子を見て、集団生活の中で自分をうまく出せないのだな、と感じました。

このような中で、私は、スタッフとしてどのように子供に接していったらよいのか(例えばどこまで子供の意識を尊重し、どこまで集団生活の中に入れていかせるか等)、また、将来教師となり、このような子供と接していくことになった場合、どうしたらよいのか等、今まで余り考えたことがなかったことについて、考え、行動できる、とても良い機会となりました。そして、何より子供と一緒に、とても楽しく過ごせました。ただ、最後に家に帰っていく子供が、「(今までの生活に戻るから)家に帰りたくない。」と言っているのを聞いて、ふと、このキャンプは子供達にとって、どんな意味を持っていたのかが分からなくなっていました。多くの友達を作り、みんなで様々な経験をしたということは、大きなことだったと思います。しかし、これから先、自分が抱えているものを乗り越えていくのは彼女達自身で、私達は「頑張って」と見守ってあげるしかないのかな、と感じてしまったのです。勿論これから、彼女たちと手紙のやりとりをするなどして、力になれることがあったらそうしていきたいとは思いますが、彼女たちは、今回のキャンプの中から、何かを見出し、それを自分自身で、自分の生活の中に生かして行って欲しいと思います。

今回のキャンプについて考えたことが、私の中で、まだしっかりとまとまっておらず、長々といろいろ書いてしまいましたが、この経験は私にとって、本当に貴重なものとなりました。ありがとうございました。そして、皆さんおつかれさまでした。

—参加学生の感想(教育学部4年生女子)—

「ふれあい自然体験キャンプ」に参加させていただき、本当にありがとうございました。土井先生に誘われて、軽い気持ちで参加したのですが、いざ、始めてみると、考えさせられることばかりで、とても貴重な経験をさせていただきました。

ちょうど教員採用試験の一次試験の結果の届く前だったこともあり、私は本当に教師に向いているのか、私は教師という職業をやっているのか、ということを考えてながら過ごしていました。

私の班は、男の子の班だったので、最初、どのように接したらいいのか、少しためらってしまいました。教育実習の時のように、子供たちから見て「先生」という関係では当然なく、どこまで踏み込んでいいのか悩みました。今でも覚えているんですが、野外炊飯の時、自分が食べ終わったら自分の食器しか洗わないで、飯盒や鍋やビニールシートの片付けをしないで遊んでいた子に、強く怒ってしまったこと……。言ってしまった後に、強く言い過ぎたととても後悔しました。このように、とても些細なことなんです、そういうところから多くのことを学ばせていただきました。そして私も、少年自然の家の職員の方のように、大きな器で子供たちを受け入れることができたらいいなあ、と思いました。

立派な教師でなくていいけれど、子供の心の分かる教師になろうと思いました。教育実習では分からなかった事が分かり、教師になろうとしている私に、いろいろ考え

る機会を与えてくださって、本当にこのキャンプはいい経験になりました。また、このようなキャンプを催してくださった方々に、心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

—参加学生の感想（教育学部4年生男子）—

6日間お世話になり、どうもありがとうございました。私は、このようなキャンプには初めて参加したのですが、予想以上に多くのことを学び、もっと前から参加していれば良かったな、と残念に思います。

キャンプを通して感じたことは、初めて出会った時の子供達の顔と、お別れする時の顔が、完全に違っていたということです。最初の自己紹介では、本当に恥ずかしそうにしていたのが、だんだん生き生きとしてきて、子供達が何か自信につながるものを得たような感じがしました。子供達は、一人でいる時とみんなでいる時との表情が全く異なり、みんなでいる時は本当に楽しそうにしているので、できるだけ彼等が一人ぼっちにならないよう、仲間の輪を広げていく手助けをするのが、私達の大切な役割の一つではないかと思いました。また、心の中では嬉しい、楽しい、ありがとう等と感じていても、それをうまく表現できない子もいました。彼等は、いいところをたくさん持っているのだから、それを伸ばしていけるようにすることも大切だと思います。そしてそのために、子供達の話や悩みを親身になって聞き、真剣に考える姿勢を私達が持てば、彼等も自然に心を開いてきてくれるということを学びました。

このキャンプでは、子供達も私自身も、大きく成長することができたと思います。本当に有難うございました。

—参加学生の感想（教育学部1年生男子）—

子供と肩を組み、手をつなぎ、子供をおんぶしてやり、肩車をしてやり、常にスキンシップをとりました。不思議と子供はなついてくれます。中学生も例外ではありません。

一人でいる子には、バレーボールやバドミントンの輪の中へと、どんどん誘いました。そのうちに、自分から入ってくるようになりました。違う班の子供達ともとても仲良しになれました。

私自身、すごくいろいろ学べました。スタッフミーティングのときの少年自然の家の職員の方の話や、子供と直接ふれあうことで、すごい大きなものを得ることができました。教育学部に入ったのに、全然教師に近付いたという実感がなかったが、このキャンプに参加して、改めて自分が子供のことが好きで、子供と遊ぶことの楽しさが分かった。短期キャンプ、長期キャンプと参加して、自分が4年間で勉強すべきことが、少しずつ分かってきた。頭のいい教師より、子供と上手に接することのできる教師を目指して、来年もこのキャンプに来たいです。

終わりに

「ふれあい自然体験キャンプ」阿南少年自然の家実施結果

キャンプ		短期キャンプ	長期キャンプ
期 日		7月12日(土)~13日(日)	8月 2日(土)~ 7日(木)
参 加 者	小・中学生 (不登校児童生徒)	47人 (23人、49%)	52人 (24人、46%)
	保護者	39人	—
	合 計	86人	52人

(不登校児童生徒数は保護者の申告による)

保護者からの年賀状

初春のおよろこびを申し上げます。
昨年夏のふれあいキャンプで子供達が大変
お世話になりありがとうございます。
上の子はあのキャンプで何のを感じとってくれた
様で、学校を休んだり私に暴力を振ったあと
自分と戦っているようです。今では私とよく
遊ぶようになり、よく笑うようになりました。心の
コップの水をあのキャンプで減らしてこれたようです。
ありがとうございます。

危機的状況にある教育現場に対して、次々と対策が打ち出されてくる。ハード的内容からソフト的内容まで、幅広い検討がなされてくるであろう。しかし、どのような対策がなされてきても、最終的に、子供に届く末端では、子供と教師とのふれあいによる人間関係の中で、実施されることになる。

学校現場の中で、子供と教師とが、より良い人間関係が培われるように、環境が整えられなくてはならない。学校だけに責任転嫁をするのではなく、社会全体の中で、家庭と学校との役割や連携、可能性や展望等十分に検討されなくてはならない。しかし、その結論や方向が示されるまで待ってられる程の余裕は、子供の置かれている現状には全くない。

厳しい状況ではあるが、教師が子供とのふれあいの中で、教師の人間性を媒介にして、苦しい立場にいる子供に手を差し伸べるしか有効な手立てはないのである。

今回の「ふれあい自然体験キャンプ」に、教育参加として参加してくれた学生諸君の純粹で前向きな姿から、しっかりとした今後への希望と期待をみとった。ここに報告する。

※「心のコップの水」：子供は各々の心のコップに、悩みを貯めている…(親の学習会での話)

4. 「信大 YOU 遊サタデー」の出張と他大学との連携

子どもたちと共に自然体験を

陸 齊（長野県自然保護研究所）

将来の人々に、現在と同等かそれ以上の自然環境の豊かさを残すことは、常に、今を生きる人類の責任である。長野県でそれを具体化するために、研究所としてできる範囲で、自然環境および社会環境の実態把握と、情報の提供、学習と交流の場を設けるという活動を行っている。研究所の学習と交流の事業は、県民一般向けには、敷地内の「研究・観察林」の提供、「自然ふれあい講座」、「移動研究所」などの取り組みであるが、特に子どもを対象にしたものとしては、「風の子自然塾」を実施している。

「風の子自然塾」は、子どもたちに、多様な自然環境の中で自由に遊ぶ場と、遊びのきっかけを提供することを目的に、今年度は2回実施した。われわれの創造力の源である自立した自然のひとつ=森林という場で、多感な時期に五感への刺激を受けることが、将来の人生を豊かにし、自然の価値を大切にすることにつながると考えられるからだ。1回目は9月15日に、研究所の敷地内の植物を素材として、研究所のエントランスホールに“オブジェ”を作成してもらった。2回目は9月27日に、研究所の「研究・観察林」内で、“木登り・アカネズミの観察・自然の家づくり”をしてもらった。子どもたちへの対応は、なるべく多くの人数で若い人が行った方がよいと考え、いずれも学生のボランティアをお願いした。9月27日の方は、土井進先生の紹介で信大の「YOU 遊サタデー」としても位置づけただけ、教員を目指す信大の学生たちに依頼したのである。

当初は子どものことだけを念頭に置いていたのだが、聞いてみると、今の学生は、子どものころに森林の中で集団遊びをした経験があまりないということである。したがって、林の中で子どもたちと遊ぶことは、子どもにとってのみならず、将来教壇に立つ学生自身にとっても貴重な経験になったようだ。また、自然体験の意味を、学生である間に考えておく意味も大きいのではないだろうか。

一つひとつのプログラムにどのくらいの時間をかける必要があるか、という点は、実施してみるまで、よくわからなかった。そのため、当日は全体に時間が不足し、子どもたちのそのときどきの気持ちに、十分応えることができなかった。時間に追われてややあわただしくなり、それぞれが中途半端になってしまったようである。反省すべき点である。

ただ、子どもたちも、学生たちも、沢の流れや動植物の暮らす標高1000mの林は新鮮だったようで、日頃味わえない体験を楽しんでもらうことはできたと思う。

今回は、各プログラムにそれぞれ「仕掛け」をした。道具の用意や事前の準備が必要であった。しかし、もともと子どもの遊びは、一見「何も無い」場で、意外な「道具」を発見し、遊び自体を創造するところに意義がある。敢えて準備は控えて、場ときっかけだけを提供し、あとは子どもの自主性にまかせて遊びを展開させることも、図るべきであろう。そのためには、同じ子どもたちに、時間と回数を多く保障するべきかもしれない。

そのような、気軽に繰り返し参加できるような催しを、今後はもっと行っても良いのではないだろうか。また、各地に子どもの遊べる自然が増えることが望まれている現状では、この成果が、地域の里山づくりや緑地の整備へとつながる可能性もある。

それを、例えば、「YOU 遊サタデー」を経験した学生たちが、将来教師になって、地域で子どもたちやその親と共に実践できるようになれば良いのではないだろうか。

山あそび

千葉 綾子 (理科専攻 4年)

「山あそび」を開講するにあたって

今回初めて飯綱でYOUサタを開講することになった経緯としては、飯綱の自然保護研究所の方から「飯綱でぜひYOUサタをやりたい」とのお声をいただいたので、こちらもぜひやってみようという気持ちから始まった。始めは、自然保護研究所の方にキャプテンをお願いして自然に関する講座を開いてもらうつもりでいたが、学生がキャプテンをし、研究所の方はその手伝いをしてくれることとなった。

講座の内容は何回も検討を繰り返し、当日を迎える間際まで決まっていなかったという危なっかしい状態であった。キャンパスを出た場所で、初めて野外での活動を取り入れるということもあって、せっかくだからそこでしかできないことをという声もあり、飯綱でしかできないことをやることとなった。しかし、そのためには研究所の方の協力なしではできなかったことばかりであり、野外での活動の難しさを痛感することとなった。講座内容として決まった木登り、ネズミの家さがし、家作りのそれぞれには、当日を迎えるまでどうなるかわからない状態であった。それは、当日の天気も心配であったし、事前の連絡不足や、環境がどうなっているかの把握ができなかったり、どんなことに気を付けなければいけないのかその予測がつかなかったからである。すぐには行けない場所での講座開講の大変さを知ることができ、また、良い経験ができた。

講座内容について

木登り…まず木の選択から始めた。最初に決めていた木では実際には登ることができず断念し、別の木を探した。なるべく大きく足をかけ易いものを探した。はしごを用意し、木の途中からロープで保護しながら登るようにした。子どもたちの中には、怖がる子もいたが、全く登れない子は一人もなく、登れない子もいるだろうという予想を見事に打ち砕き、皆上へ上へと登った。1度ならず2度3度とやりたがる子がたくさんで、次のネズミの家探しに移動するのが心苦しかった。また、木に登らない子への配慮を一応考えてはいたが、何も指示しなくても、自分たち自らまわりの落ち葉を拾ったり、生き物を見つけたりしていて、自然への興味を見出していた。

ネズミの家探し…前日、ネズミが死んでしまわないように40個近くのねずみ取りを仕掛け、当日は10匹くらいのネズミを放した。このネズミを子どもたちが追いかけて、どこに家があるのかを探した。陸さんから、「自然の生き物であるネズミを素手で触らない」という注意を受けて、子どもたちは触りたい気持ちを押さえてネズミを追っていた。あまりの速さにすぐに見失ってしまう子もいたが、ネズミを放す時、見失わないぞと皆で必死で追う姿はかわいらしかった。

お家づくり…午後の時間を使って行われた家作りだが、時間の無い中で作ったので、長い木を組んでシートをかけるという本当に簡単なものになった。しかし、陸さんの考え通り、子どもたちにどうやったら家ができるかを考えてもらって作ったため、家作りに留まらず、

テーブルも子どもたちが考えて作るという予期せぬ行動が見られた。

飯綱とキャンパスで行うときの違い

●森の中での活動という事もあって、虫・ハチ刺されへの対応やへびに出くわしたときの対応について、薬を用意すると共に、木から落ちてしまったり、転んでしまったときに大きな怪我となってしまうたらどうすればいいのか、どこの病院へ行けばいいのか、どのようにして連れていくのか確認しておく必要があった。

●限られた時間をどう有効に使うか。余裕を持って組んだはずの予定も時間いっぱいになってしまい、全く足りなかった。1日は長いようであつという間に過ぎてしまう。飯綱までの移動の時間や、森の中の目的地までの移動の時間もかかってしまう。そんな中で、1つのことをもっと充実して行うことができると良かったと思う。子どもたちの充実感を欠いてしまったようで、時間の組み方に、少し無理が生じてしまった。しかしそれはやってみなくてはどのくらい時間がかかってしまうかわからなかったのもので、この事が次回に生かしていけたらいいと思っている。

●ゴミの片づけについて、それほど気を配っていなかったことは、大きな反省点である。というのも、子どもたちが遠足気分で来ることに気が付く事ができなかった。昼食時におやつを持ってきている子どもが大半で、その後もポケットに忍ばせて途中で食べていた。それを特別注意することはしなかったが、ゴミを落としてしまっている子どもがいたことは残念であった。それに気が付いたのも取材に来ていた方であり、子どもにすぐに指摘してくれたのでそのゴミに気が付くことができた。小さなゴミでも、ちゃんと対処するように言うべきだったと思う。

1日を通しての子どもたちの様子

Y O U サタに参加してくれる参加者の方々は、始めどの人も割と緊張した面もちをしている。飯綱への参加を決めた方々もそうであった。飯綱へ移動のバスの中でその緊張を和らげるために、どんなことをするか考えてはいたが不十分であった。飽きさせずに時間いっぱい行う事は大変であるが、決めておく必要がある。見知らぬ人との交流の場を持つこと、リラックスした気分になってもらうことは、講座を開くうえでも次に進みやすくなるから大切なことである。今回、ネイチャーゲームの小池キャプテンが、講座を始める前に2つの講座一緒に何かしようと提案してくれたおかげで、講座を始めるときには、参加者とスタッフがお互いリラックスした気分で参加してくれていた。こういった交流の場を持ったり、1日中一緒にいると、半日で終わってしまうキャンパスでの講座にはない参加者と学生とのつながりができ、閉会式ではその違いは明らかに見られた。そのため、終日の講座のよりいっそうの充実した内容を持つことは大変大事であると思う。

もし、次回があるならば

私はぜひ次期Y O U サタでも山あそびを開いて欲しいと思っている。研究所のような自然に恵まれたところでの活動はそうないだろうし、あつたとしても同じように木登りや、ネズ

ミを追いかけたりできるとは限らないだろう。今回開いてみて、子どもたちの持つ勇氣に大変驚かされた。その勇氣をどの子も自信を持って行動で示していける場をこれからもどんどん持ってあげて欲しい。男の子も女の子も関係なく、木登りに夢中になって上を目指していたときの子どもたちの輝く目を、私はどの人にも見てもらいたいと思っている。ぜひ、これをきっかけに今後も飯綱の自然保護研究所と交流を持っていただきたい。

最後に

今回、陸さんを始めとする自然保護研究所のみなさん、スタッフのみなさんのおかげで、「山あそび」を無事開くことができ、大変感謝している。講座の内容が当日間際まで決まらず、大変ご迷惑をおかけしたと共に、ご心配をおかけして申し訳なかった。みなさんのおかげで、山あそびは大きな怪我人がでることなく終わることができた。言い尽くせない感謝の気持ちを込めて、ありがとうございました。

(『第四期「信大YOU遊サタデーの実践」より転載』)



第四期 信大 YOU 遊サタデー遊学プラン

講座名	<h1 style="font-size: 2em;">山あそび</h1>	第 12 回 9 月 27 日 (終日)
		アシスタントスタッフ数 7 名
		参加者数 14 名
キャプテン名	千葉 綾子 (理科専攻 4 年)	
指導教官名	勝木 明夫 教官	

・ 講座のねらい

自然の中で「遊ぶもの」が何もないところで自分たちで考えて遊んだり、作ったりしていくことを通して、それが普段の生活の中で応用できることに気付くことをねらいとする。……

・ 講座の展開

時間	活動内容	キャプテン・スタッフの動き	子どもの様子
9:00	開会式		
9:20	バスへ移動	参加者の引率 人数の確認 持ち物の確認 体調チェック	飯綱までどのくらいかな。 忘れ物はないかな。 バスには酔わないよ。
9:30	飯綱に移動		
10:15	飯綱に到着		
10:30	飯綱隊集合	心と体のコミュニケーション (ネイチャーゲームと一緒に)	
10:50	午前の部開始	木登り (40 分) ネズミの家さがし (30 分) (雨案) 野外散策	木から落ちないように気を付けなくちゃ。 ネズミはどこへ逃げるかな? どこに家があるのかな? 葉っぱがいっぱいだね。
12:00	昼食	昼食場所の把握 (2 回目電話)	
13:00	午後の部開始	小さな家作り (雨案) しおり作り ラミネートやアルバム台紙を使って、しおりやはがきを作ろう。	家はできるかな。 どんな家ができるかな。 中に入れるかな。
14:30	片づけ始め		
15:15	信大へ出発 (バスの中で、修了証・アンケートを渡す。)	人数の確認 (3 回目電話)	
16:00	信大着		
16:10	閉会式		
16:30	解散	参加者の見送り	

未来のパパ、ママが家庭教育事業を支援

上原 美次（佐久教育事務所）

11月9日（日）乙女湖畔の小諸市公民館で開かれた「家庭教育のつどい」（県教委主催）には、家族連れ、子育てサークルの関係者など500人ほどが参加して下さった。午前中は「乙女の森フェスタ」と名付けられた親子の共同体験活動でにぎわい、午後はテーマ毎の分科会で研究協議などが行われた。

このつどいの特徴として、地域の皆さんやサークルを中心にした実行委員会を組織し、企画から運営まで一緒に作り上げていただいたことが挙げられます。市教委、育児サークル、ボランティア活動家に加え、信州大学YOU遊サタデーからも佐々木美恵副委員長さんが実行委員会に入ってくださいました。12名でスタートしたこの会は、初回から企画に熱が入り、時間を超えて話し合われました。佐々木さんもYOU遊サタデーでの実践を紹介しながら、説得力ある提案をしてくださり、その多くが当日の会に反映されました。

そんな一例が、佐々木さんが司会を務めたオープニングです。「柔らかな学生の皆さんの発想で、親子参加の事業にふさわしい和やかで楽しい演出を」という実行委員会の願いに応じ、YOU遊サタデーと上田女子短大レク研の皆さんが進めてくださいました。イチヨウの落ち葉で作ったタイトル文字、かわいいイラスト入りの背景画がステージ装飾用に製作されました。寸劇やくす玉割りで笑いが広がり、活動意欲が一気に高まりました。

YOU遊サタデーからは、当日13名の皆さんが指導ボランティアとして参加していただきました。実施前にも、中村典史委員長さんと佐々木さんが会場下見、材料の買い物、用具の手配など小諸まで出向いて準備して下さり、頭の下がる思いでした。当日は、フェスタでおこなわれた選択プログラム15講座のうち、「フィルムロケットを作ろう」「宇宙からスライムがやってきた」「大きな大きなシャボン玉」の3講座を開いて下さり大好評でした。学生さん達のエネルギッシュなパワーと子ども達の歓声に促されるように、親の皆さんも積極的に活動していました。親子で一緒に遊び、作り、挑戦する活動のなかで、親が子どもとの関係を振り返るきっかけづくりができたのではないかと思います。「子どもと半日遊ぶことができてよかった。子どものうれしそうな顔いいですね。もっと遊びたかった。」と感想を書かれた方がいらっしゃいました。日頃忙しい日々を送っているお父さん、お母さんですが、子どもと遊ぶ大切さを確かめていただけたことと思います。

ところで、乙女の森フェスタは、親子を対象とした事業である点で、子どもを対象としているYOU遊サタデーとは違っています。日頃、父親・母親とは一緒に活動する経験が少ない学生の皆さんにとって、今回のフェスタは親との接し方を学ぶ良い機会となったのではないのでしょうか。将来教師になっていく方も多いと思いますが、親との距離の取り方は、現場に入るとすぐに直面する課題だからです。また、近い将来親になっていく青年層の皆さんに、親子の関係など家庭教育に関心を持っていただけたことも成果としてあげられます。

この事業について最初から御指導いただき、共に参加して下さった信州大学土井進先生、早朝の準備から最後の片づけまで、ボランティアで参加して下さった信州大学YOU遊サタデーの皆様に改めて感謝申し上げます。

出張YOU遊サタデー in 乙女の森フェスタ

実施日時：1997年11月9日

会場：小諸市文化センター

主催者：長野県教育委員会佐久教育事務所

佐々木 美恵 (家庭専攻 4年)

【小諸で出張YOU遊サタデーを行うまでの経緯】

この出張YOU遊サタデーは、家庭教育を考える目的でイベントを行う佐久教育事務所の方から声をかけていただいたことがきっかけで行った。親子で様々な体験をすることを通して家庭教育について考えて欲しい、というイベントの主旨をくみ、親子で物づくりや遊びができる講座を開いたのだ。

【主催者側との打ち合わせ・準備】

主催者側の方とは主に私が連絡を取り、それを各キャプテンへ伝えるかたちをとった。

- ・実行委員会に出席し、イベント全体の打ち合わせと各講座の打ち合わせ(2回)(中村・佐々木)
- ・会場の下見、各講座の打ち合わせ、備品の買い物(1回)(中村・佐々木)
- ・電話で各打ち合わせ(佐々木)

【講座ごとの打ち合わせ・準備】

参加者数がはっきり把握できなかつたり、全員が会場を下見したりできなかつたので、安全面や大まかな講座の流れ、備品などを確認し合うことが主であった。当日の状況に応じて柔軟に対応していくことが多かつたり、キャンパスで行うYOU遊サタデーのように参加者の名前や年齢層がわからなかつたりしたので、事前は不安が大きかつた。

- ・参加者数などを仮定した遊学プランをもとに、講座の流れの打ち合わせ(当日変更有)
- ・講座を行う場所を示すポスター作り
- ・各備品の準備

【乙女の森フェスタに参加して】

やはり、短時間で大人数の参加者と触れ合うということは難かつたと思う。例えばスライムの講座では、時間内に全員にスライムをつくってもらおうと考えると、その説明などに精一杯で、ゆっくり参加者と話しをしたりする時間が十分にとれないのだ。これは、他の出張YOU遊サタデーにおいても同様であつたが、大切なのは、スタッフ一人ひとりが出張YOU遊サタデーに何を求め、そのために参加者とどう関わっていくかを事前に考えておくことだと思ふ。例えば今回は、親子の触れ合いを重視するという主催者側の意図をスタッフがどう組んで参加し、それによって何を得たか、が大切だと思ふ。従来キャンパスで行っていたYOU遊サタデーとはもちろん違う考えのもとで行われるイベントに参加するわけだから、その中では、自分たちのYOU遊サタデーに対する考えとどう兼ね合わせていくかが問われる。このとき、確かにまどうことも多いが、それはYOU遊サタ

デーを違った側面から見直したり、違ったことを学んだりするきっかけになると思う。

また、今回は主催者側の方の動きを見させていただき、勉強になったことも多かった。例えば、様々な講座を開くために、地域の様々な立場の方が集まって協力されていたのを見て、YOU遊サタデーも更に地域の中に入っていきたいと感じた。

最後に、私たちを快く受け入れてくださった主催者のみなさん、実行委員会のみなさんに感謝したい。

【キャンパスで行うYOU遊サタデーとの兼ね合い】

この出張YOU遊サタデーは、キャンパスで行った13回のYOU遊サタデーの翌日ということで、大変なことが多かった。3講座とも、13回で行った講座だったため、準備はほとんど同時進行で行うことができたが、スタッフの練習などはやはり13回分が中心となってしまった。また、2日連続で、前日の疲れが残ったままの出張YOU遊サタデーということで、講座中は楽しくできたが、帰路はぐったりといった感じであった。

双方を同時に進めていくために、それぞれを全く別のスタッフが関わっていければ良いが、それは人数的にも難しい。まず、自分たちがどこまでできるかを判断して出張YOU遊サタデーを取り入れ、協力し合いながらうまく両立していく必要もあると思う。

(『第4期「信大YOU遊サタデー」の実践』より転載)



(3) 遊び心をもって子どもたちの心の中へ

花 田 準 一 (国立信州高遠少年自然の家事業課長)

1. はじめに

国立少年自然の家は、少年を自然に親しませ、団体宿泊研修を通じて家庭や学校では得がたい生活体験や自然体験を行うとともに、心身の健全な発達と豊かな情操を育てることを目的とした社会教育施設です。

「地域における生涯学習機会の充実方策について(答申)」(8.4.24生涯学習審議会)には、学校教育と社会教育は、学習の場や活動など、両者の要素を部分的に重ね合わせながら、一体となって子どもたちの教育に取り組んでいこうという「学社融合」の考え方にたって、取り組みを行うことが求められています。

そこで、大学の理念・目的と青少年教育施設の担う役割との共通性及び関連性が高いことから当所としては、地域の大学である信州大学との連携を積極的に図り、学生の学習活動の支援に視野を置き、21世紀をリードする人材育成の支援とそれに続く子どもたちの「生きる力」体得のために事業を実施しています。

2. 国立信州高遠少年自然の家における「信大YOU遊サタデー」の実施について

上記を受けて、新しい事業を計画しているときに信州大学教育学部の学生諸氏が子どもたちとの真剣な関わりを通して、人と人とのふれあいの難しさや喜びの原点を学ぶとともに自らの教師としての実践的力量的の向上を目指して、子どもたちとの体験学習講座「信大YOU遊サタデー」を実施しているのを知り、当所でも実施できないものかと思っていました。今回快く実行委員会の承諾を得て実施の運びとなった次第です。

実施に向けて数回の打ち合わせを行い、子どもを対象に自然を利用したクラフトや野外活動を実施することとし、次のプログラムが用意されました。

- ①冒険ハイク
- ②宇宙生物プルルスライム
- ③からからアート
- ④ネーチャーアート
- ⑤ペーパーライダーをとばそう

今回の「信大YOU遊サタデー」は、松本、長野地区とは違って参加者は一日中その場にいるのではなく、一過性の参加者への対応という新しい知識を吸収する違った側面からの体験の場であり、新たな子どもたちとのふれあいの方法を体得する場であったと思います。

参加者の多くは、楽しくプログラムに参加するとともに、科学に親しむきっかけづくりになったと思います。

3. おわりに

活動中の学生諸氏の顔は子どもそのものでした。自分自身子どもになって楽しんでいるようにみえました。気を張り過ぎず遊び心を大切に子どもたちの心の中に入っていくことが子どもたちを理解できるすぐれた人材となるのではないのでしょうか。

今後とも、連携を保ってこのような事業を実施していけたらと思います。

出張YOU遊サタデー in 高遠

中村 典史 (社会専攻 4年)

実施日時：1997年10月11日

会場：国立信州高遠少年自然の家 (第7回信州高遠フェスティバル)

主催者：国立信州高遠少年自然の家

1. なぜ出張するのか

高遠で出張YOU遊サタデーをやるという話が出たのは、今年の3月である。今期のYOUサタを行う日程を相談しているとき、高遠から出張して欲しいという依頼をいただいているとの話を土井先生より聞かされた。私個人としては、次の点から出張を取り入れていくべきだと考えており、この高遠への出張は絶好の機会であった。

1. 地域へのYOUサタの拡大。特に南信地域でYOUサタを実現する。
2. YOUサタの知名度をあげる。
3. 今までに行った事のない規模での出張YOU遊サタデーを実現する。

しかしキャンパスでのYOUサタとの兼ね合いで過密なスケジュールが予想され、キャンパスにかかる労力を削ってまで出張するのかどうか、という声もあった。そのため当初は出張専門組を作ってキャンパスとは切り離して準備をすることも考えていた。しかしこれは人数の関係と私たちの気分の問題から、結局キャンパスでやっていた人間がそのままやることになってしまった。

2. 高遠に向けた準備

高遠への下見は5月の終わりに1回と、10月の初めに1回の計2回行った。1回目は高遠の職員の方との顔合わせ程度のもので、施設の様子と、どんなことができそうか、ということを見るにとどまった。また4年生は教採前の忙しいはずの時期であり、10月のことよりまず7月だ、という気持ちが強く、高遠の準備は9月に入ってから、という暗黙の了解のうちに、1回目の下見は終わった。

しかも、私たちが「これはやってもいいんですか？」と聞いたことは全て「まあどうぞやって下さい」と寛容なお言葉を頂き、高遠の方針というものは無いのか、と疑問を持ってしまうほどであった。しかしこのおかげで私たちが自由にできたことはたしかである。

9月に入り、講座も順調に決まっていたが、大きな問題があった。参加者はどう集めればいいのか、という問題である。電話でのやりとりでどうも10月に入るとフェスティバルの参加者が決まるらしい、その中でYOUサタに参加する人の希望をとっているらしい、というようなことがわかってきた。そこで当初はYOUサタ参加希望の人に電話をし、講座を振り分けようということになった。その名簿をもらいに行くということも含めて、講座の下見のため直前になってもう1度高遠へ行った。

2回目の下見では講座が出そろっていることもあり、具体的にどこでどの講座をするという計画や、私たちがどこに泊まるかなどの細かい打ち合わせがなされた。

しかし結局名簿は作成中でもらえず、受付はフェスティバルの受付を済ませた人を呼び止めて

行うことにした。

3. 終わってみて

当日は今期YOUサタにふさわしくはっきりしない空模様だったが、講座は大成功であったといえる。講座の終わった後、スライムやペーパーグライダーをもって歩いている家族を見ると、「どうだった?」と聞きたくなくなってしまった。また次の日になっても私たちの配った名札をつけている人がたくさんいて、こんなに大勢の人が参加してくれたのかと嬉しくなった。また専門職員の皆さんなど多くの人に助けられ、私たちだけでは出来なかったレベルで講座が開けたのではないかと思う。

キャンパス外で私たちが講座を開くことに関しては、問題点も指摘されている。しかしその中で私たちが目標としているものに出会えるなら、積極的に取り入れていくべきではないかと思う。そして高遠はそうしたことが可能な場所であるのではないだろうか?

(『第4期「信大 YOU 遊サタデー」の実践』より転載)



ひまわりっ子ランドの創造を目指して

ほんとうがえ
本 藤 一 衛 (長野県社会部青少年家庭課長)

1 ひまわりっ子育成県民運動

次代を担う子どもを取り巻く環境が著しく変化し、時間、空間、仲間のいわゆる「三間」の縮小化が進行する中で、子どもたちが健全に成長するためには、子どもたち自身の自主性を尊重しつつ、地域ぐるみで見守り、育むことが重要です。

そこで、子どもたちが自ら考え、自ら行動する自主実践の場を数多く提供することにより、子どもたちの自主性、創造性、チャレンジ精神を伸ばすとともに、地域ぐるみで、子どもたちが伸び行く環境づくりを推進するため、県では「伸びよう 伸ばそう 青少年」をスローガンに、全県的な青少年の健全育成県民運動を展開しています。

2 ひまわりっ子ランド創造事業

事業実施方策としては、「ひまわりっ子ランド創造事業」を平成8年度に創設し、子どもたちが自ら企画、実施する「レッツちゃれん児21」や子どもたちと知事が話し合う「ひまわりっ子“夢”ひろば」の開催などを行い、青少年がのびのびと育つ環境づくりを推進しています。

3 ちゃれん児プラザ21開催

中でも、体験や遊び、交流を通じて、子どもの創造性やチャレンジ精神を養うとともに、親子のふれあいの場を提供するために、地域からの盛り上がりは何よりも重要であるとの認識の下、住民運動を支える子ども会や青少年育成県民会議が中心となって実行委員会を組織し、更埴市の県立歴史館・科野の里歴史公園で、9月13日(土)に「ちゃれん児プラザ21」が開催されました。

特に本年度は、学生が自分の得意とする分野で、単位や授業と関係なく、全く無償で自主的に教育ボランティアとして参加するユニークな活動で注目を浴びている、信大YOU遊サタデー実行委員会の皆さんにも、ちゃれん児プラザ21実行委員会に企画の段階から参加いただくことで、青少年の視点により近い皆さんの意見も踏まえることができました。

親子創作広場における「びっくりカードをつくろう」「宇宙生物スラスラスライム」の実施にあたっては、1人の子どもに最低でも1人の学生が対応していただきました。きめこまやかで、肩肘はらず、自分たちが出来ることを精一杯行う姿勢は、何よりも子どもの視点に立ったものであり、小雨が降り出しても切れることのなかった子どもたちの行列が何よりもそれを証明していたと思います。

また、学生の皆さんが社会に出る前に、県が主催するイベントに参加したことで、組織のあり方をはじめ、各団体の連携方法等に触れることにより、状況に応じた子どもたちへの柔軟な対応を体験すると共に、私たちの郷土である長野県を改めて見つめ直し、地域社会への参加意識が高まったことと思います。

今後も、学生の皆さんには、地域の交流の場に積極的にご参加いただき、豊かな郷土づくりと信州の新時代を築く原動力となり、青少年の健全育成に携わる若者の代表として、一層活躍されることを期待します。

出張 YOU サタ in 更埴

～ちやれん児プラザ21～

宮沢 元 (理科専攻 4年)

実施日時：1997年9月13日

会場：県立歴史館

主催者：長野県社会部

はじめに

今までに行ってきた出張 YOU サタは、招待していただいた学校などで講座を開くというものだった。そのため、信州大学のキャンパス内で行っているやり方で講座を開くことができた。しかし、今回の出張 YOU サタは、参加者数、講座を開く時間など不確定であり、このような YOU サタは初めてだった。

ちやれん児プラザ21について

9月13日(土)に更埴市にある長野県立歴史館・科野の里歴史公園で開催された。趣旨は次代を担う子供を取り巻く環境が著しく変化し、時間、空間、仲間のいわゆる「三間」の縮小化が進行する中で、子どもがたくましく成長するように、遊びや体験を通じて、子どもの創造性やチャレンジ精神を養い、長野県の歴史への理解を深めるとともに、親子のふれあいの場を提供することであった。参加者は1000人と予想されていた。具体的には火おこしやはにわの野焼きを体験したり、シャボン玉やブーメランを作ったりできる場所が設けられていた。その他にミニ四駆大会、パトロールカー試乗体験などのイベントが行われていた。その1つとして出張 YOU サタも参加させていただいた。

(『第4期「信大 YOU 遊サタデー」の実践』より転載)



「国大わくわくサタデー」と「信大YOU遊サタデー」の交流

中村 典史 (社会専攻 4年)

私は昨年11月15日、横浜国立大学の学生によって行われた「国大わくわくサタデー」に参加する機会を得た。これは今まで他大学との交流のなかった「信大YOU遊サタデー」に携わる学生にとっては、いろいろな面でまたとないチャンスとなった。それは単なる学生同士の交流という点からみても、またフレンドシップ事業という企画の交流という点からみても、さらにわくサタとYOUサタという学生の主催する活動の交流という点からみても有意義なものであった。そこで私が「国大わくわくサタデー」をみてどんなことを感じたか、ということをつまみながら、こうした交流がどのような意味を持つのか述べていきたい。

「国大わくわくサタデー」との交流は、「信大YOU遊サタデー」に横国の学生が見学を訪れたことから始まる。その後私たちも横浜へ行き、わくサタを、見学することで本格的な交流が始まった。というより横浜に友達ができたとするのが正しいであろう。つまりそこには同じ目的を持った学生たちの交流とか、フレンドシップ事業の中で生まれた学生同士の連携といった、格調高い意識はあまり含まれず、遠くに友達ができただけから今度遊びに行こう、といった軽い意味合いからの交流がまずあったのである。

しかしたとえ発端がそうしたもので、その関わりの中で私たちは良い影響を与えることができたのではないだろうか。私たちは彼らに、スムーズに活動するノウハウを伝えることができた。それによって国大の学生は私たちよりも何段階もレベルの高いスタートを切ったと言えよう。つまり子どもたちとふれあうという本来の目的を達成するまでに時間をとられる事務的な作業を、私たちより簡潔にすませることができたのである。

また私たちは彼らから初心に立ち返りはっきりした目的を持って活動することの大切さを伝えられた。一つの企画が4年の続いてくると、当初活動していた学生より幾分意識が低下してくるのは避けられないことである。また当初の目標からずれてきたところに目標が設定されることもある。それらのことに問題があるわけではないが、これらを国大生と比較してみると、私たちももっとしっかりと意識を持っていられるのではないか、という気がしてくる。つまり、しっかりと目的や目標を持っていられるだけの活動をしていながら、それを持たずにやるのはいかにももったいないという気がするのである。残念ながら「わくわくサタデー」を見たのは「YOU遊サタデー」がすべて終了してしまったあとだったので、この反省を直接生かすわけにはいかなかったが、来年からは常にそこを問いかけていってほしい。これはかなり面倒な作業で、何も考えずやるのが一番楽なのであるが、これをやれば「YOU遊サタデー」に違った意味が見いだせるのではないだろうか。

また、興味深いことに、私たちが今一番問題にしている点が、早くも彼らの中にもできて

ていることである。それは活動を子どもたちの遊びの場にするのか、それとも学びの場にするのか、という問題である。つまり子どもたちがそこへ来て仲間を作ったり学生とふれあい、楽しく過ごすことを目標としているのか、それとも何かに興味を覚え、それを学んで過ごすことを目標としているのか、ということである。これは常に問題になり、未解決のまま現在に至っているが、私たちの中で一番問題になったのは、出張Y O U遊サタデーとの兼ね合いの中である。その同じ問題が、わくサタでも浮上していた。これは横浜国立大外で1月に行われたフレンドシップ事業報告会のあとの慰労会で話ができたものであるが、私たちもその話しに加えてもらい、意見を戦わせた。

私個人としては、この問題が解決することはないと思っている。つまり、どちらが正しいとも言えない上に、両立が難しい問題なので、議論したところで打開策が示されるとは思えない。しかし学生がこうした問題まで考えて活動することにより、より深く講座について考えることができるという点で、この問題は私たちに試練を投げかけてくれていると言える。そうした問題を語り合える仲間が、他の大学にもできたということは、信大生のみならず他の大学にも良い影響を与えることになる。

以上のように私たちの交流は学生にも、活動にもプラスに働くことが多いということが言える。来年度以降も是非進めていっていただきたい。あえてマイナス面のを述べるなら、遠距離の交流に時間がかかり、講義にでられないということが起こりうるということであるが、これが学生本人の努力で解消できる問題である。

また進めるにあたってはあくまでも学生の自発的な交流を主体とした方が実のあるものとなる。教授陣がセッティングした上に学生を乗せても、今年のような交流を期待することはできない。学生にその意志がないときは残念ではあるがやめておいた方がいいのではないか。

そうした意味で交流を継続するのはなかなか難しいが、こういった交流がお互いの発展にプラスされるだけでなく、単純に「たのしい」ということを付け加えて、私の報告を終えたい。



初代はただ突っ走るのみ ～第1回国大わくわくサタデーを終えて～
中村早苗（横浜国立大「わくわくサタデー」実行委員長）

今年初めての試みである第一回「わくわくサタデー」を終えて、いろいろなことがありました。その今回の反省と、今後へ生かして行くべきことを以下に分析してみました。

1. 当日の全体的な流れ・雰囲気について

《反省点》“安全対策の甘さ”

細かいところはいろいろありますが、この「安全対策の甘さ」が一番でした。各グループごとの話し合いの中で、徹底されていなかったことが原因の一つだと思われます。

また、全体としての救急体制についても曖昧さがありました。結果的に大きな事故はありませんでしたが、しっかりした体制をとるべきだと痛感しました。次回からは安全に対する意識を高める必要があります。その点はしっかり引継をしていきたいと思います。

それからもう一つあげると、“子どもの人数に対するスタッフ数の少なさ”です。子どもひとりひとりに十分に目が行き届いていたかは疑問です。チームによっては、子ども30人に対してスタッフ2人というところもありました。

信大では、子ども3人にスタッフ1人で、これではいけないと思ったときには時すでに遅しでした。（当日のみスタッフが15人くらいいてくれましたが。）この事は、スタッフの人数がもっと増えてくれれば改善点が出てくるので、今回の痛みはかえってプラスになったと思います。

スタッフの人数を集めるためには、「わくわくサタデー」がどういうものであるか自信を持ってアピールできるようになればと思います。また課題が明らかになり嬉しく思います。

安全対策の面、スタッフ数の集め方（アピールの仕方）については、信大の「ゆうサタ」にしっかり学びたいと思います。良いところはしっかり吸収し、かつ自分たちのオリジナル性を出していきたいです。

《良かった点》“時間通りにいったこと”

この事は実行委員長として、第一回目にしては良い出来ではないかと思うことができた最大の要因であると言っても過言ではありません。信大の方々にとっては「当たり前」のことかもしれませんが、私たちの今の状態で「当たり前」のことができたことに大きな意味があるのです。

この原因はなんだろうか。という、実はほとんど「ゆうサタ」のおかげなのです。開会式（閉会式）のやり方、誘導（各グループごとに）の仕方など、しっかり取り入れさせてもらいました。

しかし、すべてまねではなく、私たちなりの工夫もしました。それは、

- ①開会式直前にカウントダウンをし、スムーズに式に入れるようにしたこと。
- ②プラカードで集合場所を目立つようにしたこと。グランド集合のため、収集つきにくかったのですが、なんとかカバーできました。

2. 組織力について

信大に行って、とても感動したことは「しっかりとした組織力」です。それに比べて国大の状況は…と、マイナス志向の私でした。そのとき、「まずは自分たちの力で Best を尽くすことが大切だよ。」と言われて、とても心強かったです。「それならば、もうやるしかない。」と、私の中でエンジンがかかりました。振り返ってみると、「ゆうサタ」のOBの方がおっしゃっていたとおりに、「初代はただ突っ走るのみ」であったと思います。

現時点で「国大わくわくサタデー」の組織力の問題点は大きく2つあります。

①「本部」というものが曖昧であること。

全体的なことを仕切るのは誰なのか、明確化されていません。今回は私と信大に行ったメンバーが主に「本部」的なことをしていましたが、当日「本部」がなかったため、先生方にその役目をしていただきました。次回からは、学生の中で、役割分担をきちんとしていきたいと思います。

②先生方にかなり頼っていたこと。

先生方にはかなり負担をかけていたと思います。そうなってしまったのは、学生が頼りなかったからです。だんだんと仕事を「学生主体」でやっていけるように、しっかりとした受け皿を作っていく必要があると思います。

以上が現時点での反省点です。しかしこの反省は実行委員長の「中村風味」なので、次回はみんなで改良し、もっと「まろやか」になったものを報告したいと思います。

私は、「わくわくサタデー」の反省会で、こんなことを言いました。

『世の中に知らしめよう信大のゆうサタ！ 国大のわくサタ！』

これからもお互いに切磋琢磨し、共に成長できることを願っています。

私たちの成長を今後もぜひ見守って下さい。国大わくわくサタデーの第一歩目を応援してくれたのは間違いなく信大 ゆうサタのみなさんです。

本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。



広島大学「ゆかいな土曜日」との連携

角田 正和（岡山県倉敷市立福田南中学校）

1. はじめに ー学生時代の自主的活動のもたらすものー

教員に採用されて2年目の今年、1学年の担任となり、3泊4日の自然教室に出かけた。今年は雨にたたられて、外で行うはずであった行事がすべて中止となり、屋内での竹とんぼづくりに変更になった。生徒と一緒にナイフを持ち、竹を割ったり削ったりした。「先生、ここはどうするん」「先生の羽根はきれいじゃなあ」と会話を交わしながら作っていると、生徒の様々な表情が目飛び込んできた。「生徒との距離が近いということが若い教員の特権だよ」と先輩の教員が話してくださったことがあったが、距離が近いということの重要性について、自分なりに納得できた出来事である。

私はYOU遊サタデーでは主に事務的活動を担当していたのでわからなかったが、実際に講座を開設した学生はこのような体験を学生のうちからしていたのかと思うととてもうらやましく思う。彼らは生徒の表情や活動から自分の指導のあり方を反省し、改良することで「学ぶ立場に立った指導法の工夫」をする姿勢を自然に身につけることができたのではないだろうか。

そのような意味でもYOU遊サタデーのような活動の場が各地に広がりつつあることにうれしいものを感じる。広島大学でも今年から「ゆかいな土曜日」という活動が行われている。このたび参観させていただく機会をいただいたので、そのときの様子を交えながら、教員養成学部におけるこのような学生の活動の意義と今後の展望について私見を述べさせていただきたいと思う。

2. 広島大学「ゆかいな土曜日」での活動

まず、「ゆかいな土曜日」と「YOU遊サタデー」の大きな違いは参加者募集の形態である。「YOU遊サタデー」では各回ごとに学生がそれぞれの講座を開設し、参加者を募集していたが、「ゆかいな土曜日」では年度始めに募集された参加者が毎回企画された行事に続けて参加するという形態をとっていた。今回、広島県江田島町で行われた「ゆかいな土曜日江田島青年の家宿泊研修」はすでに西条キャンパス等で行われた「ゆかいな土曜日」の特別版の企画であった。したがって、参加した多くの子供は学生スタッフとは顔なじみで、非常に和やかな雰囲気の中で全体の活動が行われていた。国立江田島青年の家を利用しての活動が組まれており、オリエンテーリングやソフトバレーボール、長縄飛びなどが行われていた。今回の活動を見学させていただいて、今後この活動を充実させるために次の2つのことを提言させていただきたい。

① 企画、運営段階に学生が参加すること

「ゆかいな土曜日」の企画は大学の教官が計画し、学生が運営するという形態をとっているとのことであった。そのため、当日になって企画の運営を任された学生たちがおり、企画の運営に際し、若干戸惑う場面も見られた。ただ、すでに数回の活動を重ねており、参加者と学生スタッフとの人間関係もできていたので、大きな混乱もなく進行されていた。今後は、行事の企画の段階から学生が参加し、企画についての準備や運営上の分担を明確にしておけば、当日に戸惑うことなく余裕を持って企画を進行できると思う。

② 行事や企画の計画、実行、反省を行うこと

ソフトバレーボール大会が開かれていたときのこと、グループによって子供の活動の活発度が大きく異なっていた。これはグループ内にいる学生スタッフの雰囲気作りによるものであると感じたが、その後、その活動を反省、評価するミーティングのようなものは特に開かれていなかった。もしかすると全企画終了後に反省会がもたれたのかもしれないが、もし、そういった会が一度も開かれなかったとすれば、それはとても残念なことである。その行事の企画、運営上の問題点について、その行事に参加した者、外から見た者が意見を交換し、次の活動に生かしていくことが、これらの活動をするものの意義であると考えられる。行事のすぐあとに反省会を持つことで、記憶の新しいうちに自分の活動を振り返ることができる。ただやりっぱなしでは学生の教育実践力には結びつかない。そういった意味で、企画を実行した後に評価、反省を行うことが必要ではないかと感じた。

以上、私の勝手な見解を述べさせていただいたが、活動の一部を見学させていただいたにすぎないので、誤解の部分があればご容赦いただきたい。教官のお話によると、参加した多くの学生スタッフは、全回参加を条件に集まっている意欲ある学生ばかりである。こういった学生の活動が、2年、3年と続いていけばきっとすばらしい実践となることであろう。またそのときに見学させていただきたいと思う。

3. おわりに ー現実を目のあたりにして思うことー

教育現場において教師は毎日がとても多忙である。十分に生徒一人一人に接する時間を作ることはきわめて困難である。同様に、生徒もまた多忙である。習い事、学習塾、社会体育、部活動など、何かに追われて生活しているようである。週明けの月曜日に聞かれる言葉は「眠い」、「だるい」といったものであり、生活ノートには「疲れた」の文字がなんと多く書かれていることであろう。本校では毎週水曜日は部活動のない日となっているが、その日に多くの学習塾が学習日を設けている。夜の10時頃になると学校周辺にある学習塾の周辺には迎えの車が多く並び渋滞が発生する。今から帰宅して学校の宿題をして…などと考えると眠いのは無理もないのであろうか。今後、完全学校週5日制が導入されても、その休日がいったいどんな使われ方をするのであろう。

その一方で、休日をただ何となく過ごしている生徒も少なくない。彼らに言わせると「何もすることがない」のである。ただ休日が増えるだけでは彼らのような者はいっこうに救われないのである。

学生主導の活動はこういった生徒を救えないであろうか。どこにも行き場のない子供たちに魅力ある講座を提供すれば彼らは集まってはこないだろうか。今後、学生主導の活動に求められるのは「参加者のニーズに対応した企画」の実施と「活動を継続して行う」ことであると思う。広島大学の教官の先生方は「来年はこんなことをしよう」という展望を熱く語っておられた。私を育ててくれたYOU遊サタデーにも教育に情熱を持った多くの仲間が集まっていた。私はそこで多くの刺激を受け、貴重な経験をさせてもらった。そのことが今の自分を支えているといっても過言ではない。人の熱意は必ず相手に伝わり、相手を動かすことができるはずである。そういった意味で、人々の熱意が活動の原動力となり、各地でYOU遊サタデーのような学生主導の活動が盛んになることを切に願ってやまないのである。



国立江田島青年の家で

5. 長野地区附属学校で始まった「教育ボランティア」

子どもとの関わりと指導者としてのけじめ

附属長野小学校副校長 加藤達人

○春の遠足

1年	古里公園	3名
2年	千曲川リバーフロント	3名
3年	旭山	3名
4年	岩松院	3名
5年	吉方面	3名
6年	松代	1名

○秋の遠足

1年	蚊里田神社	3名
2年	臥竜公園	3名
3年	菅平	3名
4年	公共施設巡り	3名
5年	飯山	3名

②参加者の様子と感想

○参加者の様子

- ・遠足ボランティアという内容がよかった。とても意欲的に取り組んでいた。
- ・子どもと仲良くなり、子どもの視線で遠足を楽しむとともに、引率者として自分のできることを行っていた。教官の指導に合わせて自分の行動を判断していた。
- ・子どもの中に入って遊んでくれたり、道路横断のおりに補助をしてくれたりした。
- ・子どもと楽しそうに触れ合ってくれた。安全に進んで配慮してくれて助かった。
- ・子どもと友だちになれ、お弁当など一緒にとったりして行動でき、楽しそうだった。
- ・前に教育実習を通して子どもを知っていたので、子どもの中に入りやすかった。

○感想

- ・子どもはいろいろな人との出会いができ感動している。
- ・子ども全体に目が行き届き、指導上留意すべきことが徹底されてよい集団行動ができる。
- ・このように奉仕していただくとありがたい。
- ・よい企画だと思うが、事前の打ち合わせや連絡方法などもっと簡素化しないと長続きしないと思う。

③来年度考えられる「教育ボランティア」メニュー

- ・公開研究会前の雪かきや窓ふき
- ・運動会準備（校庭ロープはり）
- ・自然体験園の整備
- ・草取り
- ・遠足、キャンプ補助
- ・施設等訪問時の引率、記録

④「教育ボランティア」の今後の課題

- ・仕事を明確にしたり、留意事項を確認したり、できるだけ綿密な打ち合わせのもとに行うのがいいと思うが、学校が離れているので打ち合わせがしにくい。
- ・交通費負担や事故にあったときなどの補償の問題がある。
- ・できるだけ子どもと関われるのが望ましいと思うが、指導者としてのけじめはつけるようにしたい。
- ・点字教室のボランティアをお願いしてあったがきてもらえなかった。学校行事は日が決定しているが、学級の方は日が決まるのが遅いためうまく連絡が取れなかった。学校側としても今後計画的にお願いしていく必要がある。

附属長野小学校の教育ボランティアとして児童の遠足などに参加させていただきました。小学校の遠足というなかなかその様子を見る機会がない、教育実習でも経験のできなかった貴重な場面にボランティアとして参加させていただくことは、将来教員を目指す者にとって、これほどありがたいことはありません。至らぬ所より先生方に御迷惑をおかけしたかも知れませんが、本当にすばらしい貴重な体験をさせていただいたと感謝しております。また、そのようなボランティアを企画して下さった学部にも感謝したいと思います。

さて、教育ボランティアとして小学校の遠足に参加して、遠足の行き帰りの児童の安全確保・現地での児童の掌握、活動などに関わるわけですが、危険回避のための支援（声掛け）、また、道中の列を組んで行く時における列から外れる児童に対する支援などに教員になるための学びがありました。ボランティアとしての参加ですが、教員の力を蓄えることができたような気がします。また、先生方の支援の在り方なども、学ぶことができました。そして、なによりも自分の中で、遠足における児童の意識・視点・想い・興味関心などの児童理解に関する点でいい学びを得ることができたと思います。教育ボランティアは、そのような面で、ただ言葉だけのボランティアではなく中身が伴った、大いに意義のあるものであると思われます。

それでは、参加すれば良いのかと言うと、それは間違いなのです。ボランティアの気持ちと意識が、重要なのです。ボランティアの気持ちと意識をしっかり持つことで初めて児童と自分にとって意義のあるボランティアとして成り立つのです。では、どのような意識が必要かと言うと、これらは教育ボランティアに参加するための今後の課題としても成立しますが、①ボランティアは先生のサブアシスタントであり、その立場をわきまえるということです。小学校の遠足は児童にとって、学校内では学べない事を学べる場でもあります。また、それをねらった先生方の考えがあります。特に低学年では生活科があり、そのきっかけ作りにと考えておられる先生方もいます。その事を考え、それを邪魔してはならないということです。次に、②遠足では児童の安全をしっかり考えないとならないということなのですが、行き帰りの道だけに危険があるわけではなく、自然の豊かな所に行くことの多い遠足では、かぶれる草木や、蛇、蜂などの危険もあるわけです。それらも把握しないといけないと考えます。そのためにボランティアは、しっかりと知識（草木の名、対処法など）を増やす必要があると思われます。そして、③その場にあった遊び方を知っていくのも大切だと感じられます。遠足に行く先での遊び方、学校ではできない遠足ならではの遊び方（草木、小石などを使うなど）があるはずで、子どもはきっかけがあれば遊びを膨らませる達人なので、そのきっかけを作れば良いと思います。そのための知恵が必要になるでしょう。後は、ゴミの始末や、必要になるであろうと考えられる物（袋、救護のための物など）を携帯していく意識などを持って教育ボランティアに参加すればきっと学びの多い、役に立つボランティアができると思います。今後もこのようなボランティアの機会が増え、参加する人が増える事を祈って実践報告を終えたいと思います。

①平成9年度の公開（中学校教育研究会）の全容

平成9年度の公開は、～共に学び合い、「確かな学力」を身につける授業の実践～を研究テーマに、4必修教科（国語・数学・音楽・保健体育）に加えて、2選択教科（選択社会・選択理科）、2総合的な学習、と多くの授業を公開した。また、選択・ティーム・ティーチング・外部講師をキーワードに先見性の高い研究を求めたものであった。全体講師は、関西大学の水越敏行教授にお願いし、21世紀に生きる子ども達に必要な教育課程を、必修教科・選択教科・総合的な学習のあり方からご指導いただいた。

先駆的な授業公開に、540名を越える前例にない多くの参会者があった。前年を100名以上上回るもので、講師の水越先生からは、「全国でも中学校の研究会に500名を越える会はない。素晴らしいことだ。」とご挨拶の中でお話しいただいたほどであった。参会者の増加の大きな原因は、信州大学教育学部教官と共に参加した学生の増加であった。教育実習を終えた4年生を中心とした必修教科への参加や学部小学校課程「国際理解」の学生や英語科学生の選択教科への参加が大きく増加した。早朝から教科ごとまとまったの参加で、熱心に授業参観した。

時代のニーズに応えた授業公開であったことは、TVや新聞など報道機関の取材の多さや、選択教科の授業をもとに学部で新たに当校教官が講義をおこなうこととなったことからわかる。学部と附属学校の連携の深さが示された公開でもあった。

②活躍した教育ボランティア

この公開授業に、10名のボランティア学生が参加した。副校長の発案で、渡邊学校長と連携を図り、各教科で当校・学部の教官が連絡を取り合ってボランティア学生を募集した。英語科から8名、保健体育科から2名の学生が参加した。受け付け案内の係を生徒と共に活動した。初めは生徒よりも緊張した面持ちであったが、はきはきした生徒の対応に刺激を受けたのか、徐々に生徒へのアドバイスや参会者への積極的な対応が見られるようになった。もともと、ボランティアとして参加しようとする意欲的な学生であり、慣れるにしたがって参会者に対するよりよき対応を生徒と共に研究し合うようになり、明るく爽やかな雰囲気を作り出していた。女性のボランティアの一人は、係活動終了後に、「初めはどこまで私が出ていけばいいのかわからなかったんですが、生徒と同じ活動をしているうちに、こうした方がいいって言えるようになりました。一緒に行動することが大切なんですね。」と嬉しそうに語った。教育実習時の立場とは異なった、共に参会者を迎えるという同じ目的で行動するよさを実感していた。生徒は、「最初は緊張してたみたいで、頼りなかったけど、一緒にやっているうちに自然に友達になったみたいで楽しかった。」と話してくれた。

③教育ボランティアへの期待

当校では、教育実習が終了した学生を招待する場として体育祭がある。毎年多くの学生が実習配当学級の応援に駆けつけていた。学生に戻った自分のことや、実習時の

気持ちを生徒と共に明るく語り合う場であった。実習によって自分の教育に対する考え方が広まったり、深まったりした姿を見ているように思える。このように、生徒と共に同じ時を過ごしたいと考えて、当校の教育活動に積極的に参加している学生もいる。

学生生活の間を利用し、部活動のコーチを積極的に引き受け、練習だけでなく大会にも駆けつけてくる学生。自分の配当学級であった生徒と先生がどのように共に生活し、卒業していくのか最後まで見守ろうと、卒業式に参列し、その後の学級活動も参観していく学生など、意欲的な学生がいる。このような学生の姿から、多くの教育活動への参加の場を提供することで、教員をめざす学生の資質の向上、自己理解、教育に対する熱意を高めることができると考える。

2002年には、週5日制が実施される。また、2003年には、選択教科・総合的な学習の時間を大きく取り入れた教育課程が実施される。学校・地域・家庭の結びつきが強く求められる。この三者を結びつける存在として、学生による教育ボランティアに期待したい。

学部では、「YOU遊サタデー」が開催され、学校で学んだことを家族と共に大いに活用し、大好評を得ている。学生も、様々な年齢の子どもと触れ合い、子どもへの対応を体感し、自分の個性を発見している。見事な活動である。一方で、学校で行なわれていることと地域を結びつける活動は、教育実習中の総合的な学習での体験以外ないのではないかとと思われる。私たちは、週5日制の中で、学校教育で学んだことを、いかに「ゆとり」の中で生かしていけるか問われている。学校で学習したことを幅広く土・日の生活に生かしてほしいと願っている。実現に向けて、大切なのは私たちの発想と経験である。教育ボランティアには、総合的な学習に参加する場を提供したいと思う。地域の人々と共に課題に取り組む生徒・教師と共に発想と経験の場で共に活動して欲しい。変化の大きな社会において、あらゆる新たな課題に対応するには、経験が必要だと考える。これは、一例であるが、自分の受けた教育を大切にすることは重要であるが、いま求められているものは何かを知ることがさらに重要なことだと考える。

生徒の目でものを見て、教育者の心で考えるために、学校行事への参加や総合的な学習への参加を積極的に行なうことで、21世紀を生きる教師としての資質向上を教育ボランティア活動に期待する。

裏方ではなく貴重な実践、経験の場

尾澤真由美（英語専攻 4年）

先日、信州大学付属長野中学校で行われました研究発表会に受付補助として参加させていただきました。

教育ボランティアというと遠足の引率や体育大会への参加であったりと、どちらかという表舞台での子ども達との交流会がとりだたされます。今回受付または、駐車場整備の補助という形での参加を通じて、いわば、表には見えない裏方の一部を垣間見る貴重な体験をさせていただきました。

私達学生ボランティアは生徒達と正面玄関に立ち、研究会に参加される先生方をお出迎えしました。ただ一言で受付と言っても、参加費を集めたり、間違いのないよう、資料をお渡して、先生方を会場にお連れしたりと、生徒達にとっても私達にとっても責任のある仕事でした。私達は当日会場に行き、簡単なお手伝いしかできませんでしたが、会場には、参加される先生方に合わせて授業の資料がきちんと用意され、生徒達も何度もこの日のためにミーティングを開いた様子で、何回も確認をとりあっていました。ここまでくるには、多くの人の努力があったのだと改めて感じました。

また、授業を参観される先生方への挨拶について、付属中学の先生がおっしゃった言葉も忘れられません。挨拶は一言でその日、一日の気分をもかえてしまうものだから、おはようございますの一言がとても大切になるのだと。

この経験を通じて、多くのことを学ばせていただきました。一つには、何かをする時には必ず多くの人の支えがいるということ。それが目立つものであっても、目立たないものであっても、沢山の人の手が加わって成り立っていること。もう一つは、さきほど、裏方の仕事と形容しましたが、教育現場において、または、生徒達にとっては、それは裏方ではなく、実は、貴重な実践、経験の場であるということ。今回の受付の仕事一つとっても、お金の計算をしたり、間違いなく先生方の参観される授業の資料を用意したり、学校の顔となって、失礼のないように先生方をお迎えしたりと机の上だけでは学ぶことのできない責任感や礼儀を育む大変貴重な場であったと思います。

この4月から私も教師として教壇に立たせて頂くことになりました。教育ボランティアで得た経験を忘れずに、子ども達と一緒に迷いながらも、一歩、一歩、前進していきたいと思います。

私達、学生にとって、教育自習を除いて子ども達との交流をもったり、教育現場を垣間見ることのできるチャンスはごくわずかです。教育ボランティアといっても、私達ができることは、ほんの小さなことです。それでもそこから、本当に多くのことを感じ、思い、考え、学んでいくことができたと思います。

これからもこのような機会が多くの学生の皆さんにいかされることを期待しています。

ひまわりの会の取り組み

信州大学教育学部附属養護学校

副校長 中山 邦彦

1 平成9年度の取り組み

月/日	内 容	参 加 教 官 名	ボランティアの数	人数
4/20	職場報告	中山副校長、春原教頭、一之瀬教頭、東條、永野、岸田、柿崎、桜井、木下、西澤、松嶋、浦澤、村田、深澤、本多、小沢、五味	13人	51人
5/18	あすなる山	佐々木、中塚	7人	26人
6/8	ボウリング	小沢、松木、中村、齋藤	7人	50人
7/20	水泳	西澤、勝山、宮坂	4人	38人
9/13	運動会	(全職員)	8人	32人
11/16	ディスコ大会	五味、桜井、浦澤	6人	48人
12/14	クリスマス会	永野、岸田、松嶋、村田	10人	45人
1/18	ボウリング	小林、前嶋、関、柿崎	11人	48人
3/1	卒業を祝う会	東條、春原教頭、一之瀬教頭、清水、深澤	5人	37人

※ ひまわりの会…昭和54年度卒業生保護者が中心になって発足。現在、「あすなる会」(本校同窓生及び在校生の保護者の外、この会の趣旨に賛同する者で結成)の一機関となっている。

2 課題

- ボランティアとして参加している信州大学の学生の代表者が、毎回、ひまわりの会を運営する保護者と連絡を取り合い、参加希望の他の学生に連絡を取るようになっている。運営上、特に問題は無かった。その一方で、直接、学校にボランティアの申し込みが何回かあった。事前にボランティアの人数を把握したいという保護者の声もあるので、連絡ルートを一つにしていくことが必要だと考える。
- 学生以外にも、広くボランティアの参加を呼び掛けていくことも考えていきたい。

1. 参加の動機

私は、教育ボランティアの「あすなろ会」のボーリング大会に参加した。私としては、特に「教育ボランティア」ということは意識していたわけではなく、単に昨年教育実習をさせていただいた附属養護学校の児童・生徒たちと一緒にボーリングを楽しもうと思い参加した。昨年、教育実習で障害を持った子どもたちと接したときには、日常生活の指導や生活単元学習など、主に、学習活動中心に子どもたちと接していたわけであったが、今回は、その様なことは抜きで、教育実習とは違ったことを楽しもうと思った。

2. ボーリング大会の様子

今回は、「あすなろ会」のボーリング大会ということもあり、私の見知った附属養護学校の児童・生徒は少なく、その面では残念であったが、むしろ、初めてであった子どもたちと仲良くなる絶好の機会であったので私にとって良いことだったと思う。

初めて接する子どもたちであるので、少し緊張していたが、子どもたちのほうから話しかけてくれたので、緊張がほぐれ、こちらからも積極的にコミュニケーションをとることができた。各レーンに別れたあと、「あすなろ会」の親子たちと一緒に、我々学生たちもボーリングを楽しんだ。子どもたちは、ピンが倒れる度に喜び、特に、ストライクやスペアを取ったときの笑顔は格別であった。同時に、私たち学生がストライクやスペアを取ったときに、「すごい」と喜んでくれて、ボーリング大会が素晴らしいものとなった。また、保護者の方とも楽しくボーリングをすることができて良かったと思う。

3. 反省と今後について

今回は、保護者の方と接することができたのであるが、残念なことに、保護者の方いろいろとお話を伺うことができなかった。もちろん、ボーリング場での子どもたちへの接し方などを学ぶことができたのは大きかったと思うが、やはり、直接に「子どもたちとこのように付き合ってほしい」など、保護者の立場からのメッセージを聞くことができなかったことは非常に残念に思っている。

また、ボーリング場という特殊な空間であった事もあり、ほかのレーンの子どもたちとなかなか話すことができなかったのは残念であった。特に、ボーリング終了時に「今日はどうだった」などと声を掛けていれば少しは仲良くなった子どもが増えていたかもしれない。

反省もあったが、楽しく過ごすことができて良かったと思う。このような機会は滅多にあるものではないので、今後は積極的に参加していきたい。そして、健常な子どもたちと障害を持った子どもたちとが、このように楽しく遊ぶ機会が増えれば良いと思う。

ひまわりの会 「あすなろ山遠足」報告

宮下 美保（社会専攻 4年）

ひまわりの会は付属養護学校卒業生による会で月に1回程度の割合で開かれています。4月は「あすなろ山」での作業が行われました。あすなろ山は飯綱山山麓にある山で、主に椎茸などを栽培しているそうです。今回の作業の目的は冬の間にとまった落葉の片付けと椎茸の摘み取りでした。その中で、昼食を一緒に食べたりレクリエーションを行い、親睦を深めていきました。

当日は、養護学校に集合しバスで出かけます。この日のメンバーは20人の卒業生、5人のお母さん方、養護学校の先生2人、学生ボランティア5人でした。初めて参加する私でもすぐに溶け込めるほど、和気あいあいとした雰囲気でした。正直なところ、私のような障害児教育の講義も受講したことが無いような者がうまく気持ちをつかむことができるのかという不安もありました。しかし、積極的に話し掛けていかなければと考えていたことを忘れるほど彼らからの働きかけが多く、とても嬉しいことでした。

道路工事の関係で少し歩くことになり、そこでもほとんど全員と言葉をかわすことができたように思います。この日は汗ばむような陽気で気分も晴れやかになっていました。山も登らなくてはならないため、励まし合いながら頑張ったように思います。

作業は到着した後、休憩を挟んで行われました。椎茸栽培の木組み（以下木組み）の間にたまっていた枯葉は想像以上に多く、決して楽な作業ではありませんでした。処理した後の枯葉は3箇所にとまどめましたが、どの枯葉の山もかなりの量になっていました。1時間以上も枯葉処理にかかったように思います。そのせいもあってかひまわりの会のメンバーはかなり疲れてしまっていました。

作業の後、大きくなった椎茸を採集し、昼食を食べました。やはり、今、自分たちが取ったばかりの椎茸を食べることができるということはかなりの喜びのようでした。このためにさっき頑張ったんだという様子です。この後、いろいろなレクリエーションを通してさらに仲良くなれたように思います。これから1年、私はひまわりの会に参加しました。

私がこの作業の中で学んだことは、障害を持った人とも協力すれば何かを達成できるということです。作業することの意味やその後にある成果がわかってさえいれば障害を持っていても嫌がらずに取り組むことができるのです。何も知らない健常者（それまでの私のような人も含めて）はこのことには気付にくいのかも知れません。教育学部で勉強していた私でも気付かないということを考えても、障害者の自立と現実との壁はまだまだ大きいと感じざるを得ません。

ただ、障害者のことを私自身が理解していく良いきっかけになったことは確かです。障害者としてみる以前に人間として接することがまず大切です。そうすることを通して、健常者も障害者とともに成長できるのだと思います。

6. 「教育参加」の学生を送り出した側からの実践報告

「教育参加」での松本地区教官の関わりと学生の状況

国語教育講座 上條 厚

1. 始めに

地元教育機関のご協力により、昨年度（平成8年度）から行っている本学教育学部の「教育参加」の授業は、今年度（平成9年度）、2年目を無事に終えることができた。今年度は各方面からご協力をいただき、学生が参加できるメニューを、昨年度より大幅に増やすことができた。これは非常にありがたいことである。本学部学生の授業のためにご協力をしてくださる各方面に、心より感謝申し上げる次第である。参加メニューが増えたことにより、学生の選択の幅が広がった。また学生は、単位取得条件として2つの行事に参加しなければならないことになっているが、メニューが多数になったことにより、希望する学生は3つ以上の行事に参加できることになった。こうして昨年度以上に充実した「教育参加」の授業を実施することができ、ありがたいことであった。

2. 「教育参加」の効果

「教育参加」の授業は、1年次の学生に学校現場・児童生徒に触れさせるものであるが、そのことを通じて教育に対する自覚を向上させることができ、その点効果の大なるものがある。授業の全体会では、行事に参加した学生の報告の場を設けている。そこで報告するほとんどの学生は、行事を通じて学校現場・児童生徒に接したときの、新鮮な感情を語っている。また学生の提出したレポートを見ると、（今年度わたしがレポート評価を担当した専攻は、障害児教育と幼児教育であるので、今年度読んだもののほとんどはその専攻であるが）大多数の学生が、目を見開かされた、学校のことが分かった、参加できて良かった、等のことを書き、半数以上の学生が、将来教員になりたいという決意を新たにすることを述べている。そうした決意を持って、学生たちはこれからの学習をするわけであり、大学での学習の効果も大きくなることが期待できよう。

こうして学生が「教育参加」の行事に参加したとき、学生にやる気が起こって来たりして、一定の変化がもたらされることがあるわけだが、その1つの例として、昨年度わたしは、教育実践研究指導センターの発行した冊子『平成8年度 臨床経験の授業科目「教育参加」の開設と学生の反応』に、次のような内容のことを書いた。

昨年も附属学校園での教育実習参観が、メニューにあった。附属小学校での参観は、多数の学生が同じ時間帯に、それぞれの学級に分かれて参観する方式であるが、集合時と解散時には学生全員が玄関に集まって、これから参観する学級の学年毎に並んだ。その集合時の学生の様子を見ていると、普段の大学の授業と同じような雰囲気であった。普段の大学の授業と同じとはどういうことかということ、教官の話しを注意して聞かない者がいる、よそ見をする者がいるという、だらしない状態だということである。そうした中で、参観開始前の会が行われたが、附属小学校の先生のあいさつのときも私語をする学生がいる有様であった。さてその後参観が終わってから、再度集合したときはどうだったかということ、学生の雰囲気が、1時間程前の集合時とは打って変わっていた。教室の遠近の関係もあって、学生たちは玄関にばらばらに戻って来たが、歩く様子は落ち着いて見えた。戻って来

ると特にだれに指示されるまでもなく、静かにさつき集合した時の隊形に並んだ。そしてそのまま全員そろおうのを待った。そのとき私語をする者は一人もいなかった。ふと、だれかが隣の学生に何かしゃべろうとすることがあったが、そのとき近くの別の学生がそれを制し、しゃべろうとした学生は気付いたように口を閉じて、姿勢を正した。そこは全く静寂の空間となっていた。そうした中で終わりの会が行われた。

授業を参観した後の学生たちは、こういう真剣な態度に、自然になっていたのである。これに類することは時々あることであろうが、「教育参加」での参観も学生に変化を及ぼすわけである。(なお今年度の附属小学校の教育実習参観ではどうだったかという、今年度の終了時は、参観が終わったら大教室へ行って感想文を書き、書いた人から解散して、終わりの全体会がなく、昨年度のような機会はなかった)「教育参加」による効果は、もちろん学生個人個人によって違いがあろうが、全般的には大と言ってよいであろう。

3. 松本地区研究棟教官の関わりと反省

「教育参加」の授業は、生涯スポーツ課程以外の課程の学生は必修である。生涯スポーツ課程の学生は必修ではないが、ほとんどが受講している。今年度受講していないのは2名だけである。今年度1年生全体の合計は、受講者数352名であった。

授業は松本で行われており、松本地区研究棟の教官全員が関わっている。学生と松本地区教官の関わりを挙げると、次のとおりである。昨年度と今年度、基本的に同じ。

- ・学生たちはそれぞれの行事に参加後、2週間以内にレポートを提出する。計2つ提出する。
- ・レポートの様式はA4判、提出先である副担任名を書く。――松本の教官(昨年度8名、今年度7名)全員が各専攻の副担任になっており、副担任がレポートを受け取り、評価を行った。なお副担任制は来年度(平成10年度)より変更あり。
- ・提出場所は上條(厚)研究室、もしくは事務室(南支援室)。――提出する学生が多いと見込まれる時は、事務室に依頼して提出用の箱を事務室前に置いた。
- ・上條が提出を確認した上で、それぞれの副担任に回す。
- ・2ヶ月または1ヶ月に1回程度、レポートの提出状況を公用掲示板で示し、間違いがないかどうか確認する。
- ・レポートの最終期限の明示、未提出者への督促等を、公用掲示板などで適宜行う。
- ・松本の教官はそれぞれのレポートに評価を付け、長野の土井教官に回す。
- ・学生の質問・相談に適宜応ずる。――松本での質問・相談は、対処できる範囲で上條が応じたが、上條が対処できないものは土井教官の方に回した。

以上を踏まえた上で、主として今年度のことについて反省を書く。学生に対する指導のこと、教官側の留意すべきこと、等々、述べる。

a. 授業の全体会での学生の態度

全体会は毎月1回、計5回行った。今年度の受講登録者数は前述のように352人、その人数を、備え付けの固定席数もちょうどそれと同じである、352席の大教室に入れて、授

業を行った。

これだけの人数だと苦勞が伴う。まず前の方から詰めて座るべきであるのに、先に来た学生が後ろの方に座ってしまう、それから固定席の後ろに折り畳みパイプいすが置いてあるため、それを利用してしまう、という状況である。わたしは再三、先に来た人は前から座るように、折り畳みパイプいすは使わないように注意した。全体会の回数を重ねるにつれて、その注意は少なくて済むようになった。

次に集合に時間がかかる。人数が少ない授業でも遅れて来る者はいるが、人数が多いと、それに比例して集合に手間取る。

次に人数が多いとどうしても、注意力が散漫になったり、私語が多かったりという傾向が大きくなる。たとえ受講人数が多かろうとも、教官の話は静粛に、注意深く聞かなければならないものである。相手は分別をわきまえたはずの大学生である。小さい子供だったら話しは別だが、大学生は教官が話し始めたら、静粛に聞いて当然だと思う。ところがその「当然」は通用しない。強く注意を与えないかぎり、教官の話しに集中しないのである。こうした現実を踏まえた指導が必要である。それ相応に対応しなければならない。

さてこういうとき静かにすべきだというのは常識であるが、その常識のない人は、大学生よりも分別をわきまえているはずの中年の世代にもいる。例えば小中学校の父兄参観のとき、授業をやっている教室の中でひそひそ話しを始める親がいる。非常識も甚だしいことであり、授業をしている先生にとっては迷惑千万であるが、悲しい現実としてそういうことがある。それを考えれば、大学生ばかりをだらしなくと言って責めるわけにいかない。こういう現実に基づいた指導が必要である。

わたしは学生に重ねて注意をしたが、必ずしも十分であったと言えない。もっと厳しくすべきであろう。

b. 行事参加時の学生の様子

普通の大学の授業は、遅刻する学生が多く、困りものである。それでは「教育参加」での行事の場合はどうか。わたしがこれまでに学生と一緒に出席した行事は、昨年度の附属小・附属中の教育実習参観、松本キャンパスで行われたYOU遊サタデー（昨年度はこれも参加メニューに入っていた）、それと今年度の附属小・附属中の教育実習参観である。そのときの学生の集合状況はどうだったかという、昨年度の附属小の教育実習参観では遅れた者が1、2名いたように記憶しているが、それ以外は遅れた者がいなかった。YOU遊サタデーは1年生の参加人数が多く、多い人数であるので集合するときの様子が気になる場所であったが、時間どおり、しかもやる気を態度に表してさっと集合した。こういう行事のとき時間正確であるということは、とても良いことである。

c. 行事参加時の学生の服装・身だしなみ

今年度、附属幼稚園が書いた反省の中に次のようなことがあった。運動会を保護者や家族、入園希望者が見に来ることがあるが、そのときは「教育参加」の学生も幼稚園職員の一員として見られることになる。だからそれにふさわしい服装・身だしなみをするように制限したい、と。それは当然のことである。またそれは、外部の人が見に来るときでなくても注意すべきことである。参加する学生は、教員に準ずる者として、児童生徒の前に立

つ者としてふさわしい身なりをすべきである。

学生たちは、行事参加のときはきちんとした身なりをするように注意されていた。大体は守られたと思う。ところが中にはひどいものもあった。今年度の附属小学校の教育実習参観のとき、男子で、耳に穴をあけて付ける耳飾りを、片方の耳にしているのがいた。それはわたしが、解散時になって気が付いたものであった。非常識なことをさせないように、なんとか徹底したいものである。

大学での普通の学生の身なりについては、とやかく言いたい先生もいるだろうし、どうでもいいという先生もいるだろうが、児童生徒の前に立つ場合には、きちんとした形でなければならない。それは常識として指導したい。附属学校園の先生からも常に言われることだが、「小さい子供は大人のすることを真似る」

d. 参加メニュー選択での問題

今年度の学生の中で、教育実習参観に小学校と中学校の両方に参加し、それで2つの規定の参加を終了したとする者が、数名あった。また運動会で前日準備と当日に参加し、それで2つ終了したとする者もあった。確かにそれらは独立のメニューとなっており、そういう参加の仕方はいけないということは言われていなかった。また学生からそれに関する質問も受けなかったので、注意もしなかった。したがってそれらの学生は、それで終了としてよいことになる。しかし非常識に思える。メニューが多いのだから、もっと別のものに参加して当然と思う。ただしそれを非常識だと言ってかたづけるのではなく、そういうことをも考慮に入れた指導が必要であろう。

e. 無断欠席について

無断欠席がいくつか見られた。その理由の1つは、今年度は参加メニューに余裕があって、3つ目以上に申し込んでおいた学生が、必要性の薄さから欠席し、連絡しなかったというものであろう。それにしても無断で休むのは、受け入れ側に対して失礼なことである。大学の授業では無断欠席は問題にされることが少ない。特に受講者数が多い授業ではそうである。行事に無断欠席した人たちは、それと同じように考えていたのであろうか。行事参加では、いいかげんな考え方をしないようにさせたい。

f. レポート提出に関して

学生の大多数は規定のとおり提出した。一部分の学生は規定を守らなかった。レポートの提出に関して守るべき事項は、配布したプリントに記し、また授業の全体会で繰り返し述べた。規定を守らなかった学生は、注意力散漫と言うほかない。ただしどうすればうまく守らせられるかを、考えることも必要である。

i) レポートの提出で守られなかったこと

どういう違反があったか、次に見る。

- ・レポートに受取人である副担任名を書かなかった。

これについては全体会で再三注意し、またレポート提出場所に副担任名を書いておくことにより、守られるようになった。

- ・レポートをA4判にしなかった。

ごく少数であったがB5判で提出した者がいた。これも全体会で注意したが、1月になってもB5判で提出した者があった。

・上條(厚)研究室、もしくは事務室の規定の場所に提出せず、副担任に直接提出した。

こういうのが少数あった。上條(厚)研究室に提出させるのは、全体の提出状況を把握するためであるが、このことについては副担任全員の協力が必要である。

・提出期限を守らなかった。

期限に少し遅れるだけならともかく、相当に遅れる者もあり、中には提出を全然忘れていた者もあった。そういう者には督促をした。まず公用掲示板で督促したが、それだけでは不十分で、電話によっても行った。

規定を守らず、レポートを出さない者の評価は、不可にしてかまわない。学生もそうされて当然と思うであろう。しかしこの単位は、生涯スポーツ課程以外の学生にとって必須である。長野に移った学生が、来年度また松本まで受講に来ないですむように、寛大とも言えるべき措置で未提出者には督促した。土井教官とわたしがそれを行った。

今年度、最終提出期限は、評価を事務に提出する日程の関係から、1月30日(金)とした。ただし1月31日(土)にも参加行事があり、そのみは締め切りを2月5日(木)とした。その期限に遅れる者はだれもいなかった。

ii) レポート作成に関するその他のこと

・2枚以上にわたるレポートで、本人の氏名・副担任名を最後に書く、または副担任名を最後に書き、そこまで見なければだれか分からないというのがあった。これは違反ではないが、事務能率上、困るものである。レポートの合理的構成法の指導も必要であろう。

・ワープロの使用に関して。これについて学生から質問を受けた場合には、使用を可としたが、来年度以後は基準を設けておくべきであろう。

iii) レポートの最終提出状況

これについて、最終期限までに、退学等を含めて、規定の2つのレポートを提出しなかった人数は次のとおりである。

・退学・休学・受講取り消し	5名
・上記以外で全然提出なし	1名
・1つのみ提出	1名

上記以外は規定のとおり2つ(以上)提出した。提出なしをごく少数に押さえることができたが、長期間未提出の学生に対して督促をしなければ、こうはならなかったであろう。

前に述べたように、今年度、希望する学生は3つ以上の行事に参加することができた。その場合のレポート提出は、2つだけでも、参加したものの全部でもよいとしておいた。結果的には、レポートを4つ提出した者が3名いた。レポートの提出だけで評価はできないとしても、このように積極的に取り組む学生がいることは、喜ばしいことである。

g. 若干のレポートのから

昨年度わたしが評価を担当したレポートの中に、参加した行事を批判的に見て書いているものがあった。批判的に見ることは良いことである。行事の良い面ばかりを書かなけれ

ばならないわけではない。今年度、レポートの未提出者に督促をした後、その内の1人と話す機会があった。その学生はレポートに書くことがないから今まで書かなかったと言っていた。なぜないのかというと、先生たちと話しをしたいと思って参加したのだが、終わってからの反省会は時間がなくて、先生とほとんど話しができなかったからだと言う。それでもそれ相応にレポートを書かなければいけないのだが、こういう学生もいるのである。レポートに良かったことを書く学生が多いが、満足感を持たない学生もいるわけで、それは心に留めておくべきであろう。

4. 今年度の学生のレポートから

昨年度も今年度も、学生のレポートには、自分の観察に基づいてよく書いているものが多かった。次に今年度わたしが読んだ学生たちのレポートの中から、印象深い部分を、原文をできるだけ生かしながら再構成して示したい。これをもって結びとする。

「教育参加」の授業は体験を通して実感できるから、とても良いものだ。

教育現場では教科書どおりにいかないことが多いという。「教育参加」は実際に体験できるから良い。

頭だけでは理解しにくいことが、たった1回の体験で理解できた。

子供たちが元気に返事をしている。わたしも小さいころは、それと同じように元気に返事をしていたはずだった。

遠足で見ていると、いろんな子供がいる。ちゃんと手をつないで歩かない子、1人で先に行ってしまう子、もう3回泣いた子。

子供はこま回しも、竹馬も、すぐ覚える。また大人にはない感性がある。

子供には下手に手をかけすぎてもいけない。子供のやりたいことは、危険なことでもただ禁止するだけではいけない。

盲学校の生徒もバレーボールやサッカーをする。これは知らなかったことだ。

全盲の生徒が柔道をする。その生徒は、畳が正方形であることを直ちに理解した。わたしにとっては驚くべきことだった。

全盲の生徒に「太陽はどこにある？」と聞いたら、その方向を正確に指すことができた。

子供がかわいいだけでは、先生は務まらない。明るい部分も苦しい部分もあると思う。

子供と遊んでいても、楽しいことばかりではない。また陰の仕事も沢山ある。

子供と遊ぶことは忍耐力のいることだ。

子供の視点に立つことは、なかなか難しいことだ。

先生になりたいと感じた。頑張ろうという気持ちが一層強くなった。

身に付けなければならないことが見えてきた。これからの4年間を有効に過ごしたい。

地元教育機関での行事のとき、元教員の年輩の指導員が子供に、「そんなじゃだめだよ」と言っていたが、それはわたしの小学校の時の先生と同じ言い方で、暖かさの感じられるものだった。わたしもそういう言い方ができるようになりたい。

終わりに花束をもらった。思わず抱きしめた。それはわたしがいい先生になろうと決心した瞬間だった。

異文化から学ぶ

国語教育講座 徳井厚子

不登校やいじめ、殺傷事件・・・教育をめぐる様々な暗い事件がおこっている今、現場が求めている教師とはどんな人間だろうか。

この「教育参加」では、体験の重要性、多様性を理解していく寛容さや思いやりといった教室では学べないようなことを学ぶことができたのではないかと思う。そうして、こういった体験が教育者としての原点になっていくのではないかと思う。

学生たちのレポートを読んでいると、参加前・参加後の自己変容の気づきが描かれていて興味深い。幼稚園生に「ひとりぐらし」という言葉を説明しようと思ってついにうまくいかなかった体験、盲学校でアイマスクをして学生たちに助けられながらバレーをした体験、遠足ではじめは全くしゃべってくれなかった幼稚園生がついに話しかけてくれた体験など、ひとりひとりの体験は多様である。

しかし、共通していえることはこのプログラムそのものが「異文化を理解する体験」ではないかということである。つまり、今現在生活している日常と少し異なった世界に身をおくことによって自分とは異なった立場にたつことができる体験ではないかと思う。こうした体験は、多様性の理解につながっていくのではないかと思う。

私はこの体験が、将来教育の現場に立った時にエネルギーのもととなっていくように願っている。将来の教育現場が明るいことも。



教育参加のレポートを読んで

理科教育講座 中村正人

学生の教育参加についてのレポートを読んで思ったことは、学生ができるだけ生徒と触れ合うことを希望し、真摯な態度で参加し、将来教育に関わる学生として得たものが非常に大きかったと一様に認めていることから、この教育参加という試みは大変に有意義であると思いました。

大学1年の時にこのような機会を持ったことは、2年後の教育実習への心の準備をする意味でも大変に良いことと思いました。

生徒にとっては、そんなに年齢の離れていない大学1年生は親しみやすく、大変に良い影響を与えることと思いました。できればこの教育参加を契機として、生徒たちと学生たちが日常的な交流を持つことができればよいと思います。

学生たちはこの教育参加を契機として、将来良き教育者になる自覚を高め、質の高い、確かな知識、知性を養い、また豊かな情緒、感性を磨くように努めて欲しいと思います。

受け入れ側の先生方には親切に学生たちをご指導くださいましたことに、副担任として心から御礼を申し上げます。



教育参加 (Teaching Experience) は、松本市旭キャンパスの教育学部一年生を対象に昨年度から施行されているが、彼(女)らのレポートに目を通すのが私の主な仕事の一つである。少なくとも次の3点に於いてこのプログラムが有効である事を強調しておきたい。

- ① 地域(附属)の児童、生徒たちのことをよく知る。
- ② 教師の(特に裏方としての)仕事を認識する。
- ③ 身体に障害をもつ人との接し方を学ぶ。

①に関する背景として、子供たちの扱いが苦手という学生が意外に多いという現状がある。単なる遊び相手ではなく、将来教師として統率しながらクラスをまとめるのは容易な事ではない(私自身海外の日本語補習校で7年程経験がある)。遠足や運動会、「You 遊サタデー」などを通し、学生達は新鮮な目で児童、生徒の行動を観察し改めて、何らかのショックを受けるようだ。児童たちの素直さ、率直な言動、積極的な態度などを、学生たちは「自分たちが忘れかけていたもの」と表現する。りっぱな教師になるには険しい道程だが、やっぱり挑戦してみたいと多くの学生は報告している。②は一つのものごとを多面的にみることに貢献する。一つの行事(例えば、オリンピック)を成功させるには表舞台と裏舞台がある。表舞台は華やかで誰の目にも清水や里谷はあこがれの選手になる。しかし、裏舞台というべき裏方の地道で周到な努力なしには、大会そのものすら存在しないはずだ。学生たちがこの裏方の仕事に気付かされるのが教育参加(運動会や学指研など)の長所である。幼い頃運動会の看板を見て、よしががんばるぞと表舞台に向かった学生が、同じ看板を見て今度はこれを取り付けるのは結構大変だっただろうな、という見方ができるようになったということなのである。③は具体的には、主に盲学校や知的障害をもつ子供たちとの交流を通しての経験を指す。既成概念から、一般の人々は神経質なまでに気を使う。1から10まで何もかも彼らのために面倒を見なければならぬと錯覚してしまう。教育参加前の学生たちも例外ではなく、眠れないほど緊張する人もいるようである。しかし一日を一緒に過ごし、彼らの独立しようとする態度に感心した、とかその明るさに逆に励まされたとかいう学生のレポートがほとんどである。つまり、身体に障害をもつ人を弱者として扱うのではなく、一緒に付き合う社会の一員として温かく迎え入れる自覚が学生に芽生えるのである。私の父も盲学校と聾学校に長い間勤務したことがある。障害者にもいろんな可能性が備わっているのに、勝手に既成概念という囲いを作って彼らを閉じ込めようとしているのは社会のほうだ、とよく言っていた。

お陰様で教育参加も順調にすべりだし、協力機関も数を増すことによって今後さらに充実したものになっていくのは、大変ありがたいことである。私は個人的には「ふれあい」という表現が好きではない。非常に artificial に聞こえ、そんな場をわざわざ求めなければいけないほど、裏では人間は利己的になって付き合いが希薄になっているように聞こえるからである。その証拠に一昔前には近所付き合いがなければ成り立たない社会だったから、いちいち「ふれあい」などという言葉は必要ではなかった。そんな人間性を取り戻すためにもこの教育参加は大きな役割を担って行くことと思う。

学生への励ましの言葉と教育実習への橋渡し

附属教育実践研究指導センター 土井進・東原義訓

「教育参加」の開設母体である実践センター教官の大きな役割は、学生と受け入れ側の間に入って、「教育参加」メニューが実施される日時に参加予定の学生がきちんと出席するように、必要な情報が一人一人の学生のもとに届くようにすることである。学生が無断欠席したり遅刻したりすることは、受け入れ機関に多大なご迷惑をかけ、ひいてはこの授業への不信感を生み、「教育参加」自体を崩壊させる危険性をはらんでいる。このことの重要性が学生一人一人に分かるように様々な工夫に努めているところであるが、実に難問題である。

350名近くの学生が5月～1月の期間に大学キャンパスから出て、それぞれの学生が異なる日時に、異なる場所で様々な教育活動に参加するというのが「教育参加」の授業である。しかも、4月当初に参加メニューを決定するため、学生の側にも受け入れ機関の側にもその後の状況の変化に伴う変更がしばしば生じるのもやむをえないことと言わなければならない。これらの情報を素早くキャッチし伝えることが実践センターの大きな役割である。また、変更はなくても全体会が行なわれなくなる11月以降のメニューともなると、学生の中にはすっかり忘れてしまっている者も出てくる。

このような難問に対処していくために、これまでの2年間は掲示、電話連絡、FAX等を活用してきたが、来年度からは「教育参加」のホームページを開設し、最新情報を提供することに着手したいと考えている。

さて、情報伝達の手段を工夫していくこととともに、一人一人の学生の心に届くメッセージを工夫することも更に一層重要である。学生は「教育参加」から学んだことをレポートとして我々教官に提出してくれる。このレポートを単に成績評価のためだけに用いないで、教官のメッセージを添えて3年次に教育実習に行く時に返却してやりたい。こうすることによって「臨床経験」の授業科目である「教育参加」と「教育実習」が結ばれるのではないかと考えるのである。

レポートは松本地区の教官と実践センターの教官が読むのであるが、それぞれの教官が学生への励ましの気持ちを込めて様々なメッセージを欄外に書いてくださっている。その中からいくつかを次に掲げることにした。

「驚きや感動を自分のものにしようとしている気持ちが感じられます。」

「まとめの部分はまったく同感です。彼らに必要以上に障害を意識させるのは、同等に扱っていないということの表れですからね。」

「過去の経験と現在の教訓がうまく表現されています。」

「裏方の仕事の大切さや自然の価値を見直せたようですね。」

「大学生活とは違う貴重な経験により、自分を見詰め直すことができたようですね。」

「子どもたちのもっている集中力、発想力を観察できたようですね。」

「人とのふれあいを通しての新しい発見がよく書かれています。」

「感動の連続だったこのキャンプ。きっと君の将来により影響を与えてくれると思います。触れ合う人間の素晴らしさが感じられるレポートです。」

7. シンポジウム「フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか」



日時：平成9年11月28日(金) 13:00～18:00

主催：信州大学教育学部

後援：国立大学教育実践研究関連センター協議会
長野県教育委員会

あいさつ

信州大学教育学部

学部長 漆戸邦夫

本年度文部省により初めて全国48の教員養成系大学を対象に「教員養成学部フレンドシップ事業」が導入された。教職を志す学生が種々の体験活動等において児童生徒と直接ふれあい、ともに学ぶことは、教員としての実践的指導力の向上を図る上で大変有効である。そのふれあいの場や機会を、教員養成大学と地元教育委員会等が連携・協力して提供することがこの事業の主なねらいと思われる。

今回このフレンドシップ事業を成功させるためのシンポジウム「フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか」を企画いたしましたところ、本シンポジウムの趣旨にご賛同いただき、秋田大学、福島大学、新潟大学、上越教育大学、横浜国立大学、広島大学の6大学からご発表いただけることになり、盛大に開催することができますことは、主催いたしました信州大学といたしまして大変心強く深く感謝申し上げます次第でございます。

本学部附属教育実践研究指導センターでは、本事業と同様な趣旨ですでに平成6年度より学生が自主的に行う「信大YOU遊サタデー」を実施してきております。4年目を迎えた本年は、従来の大学内に子どもたちを迎えていた活動から、「出張YOU遊サタデー」と銘打って、大学キャンパスから出て地域の青少年の体験活動諸施設などでも実施いたしました。地域の関係機関との連携活動へと大きな広がりを見せ、一歩一歩着実に成長しております。

このシンポジウムをきっかけに各大学間ならびに大学と地元教育機関の間の情報交換が深まりますように、また、今後フレンドシップ事業が成功するように着実に推進され、優れた教師が育っていくことを念願して、ごあいさついたします。

〔講演〕

教員養成とフレンドシップ事業

小林 輝 行（教育職員養成審議会臨時委員
同カリキュラム等特別委員会委員
信州大学教授）

はじめに

信州大学の小林でございます。本日は、こうしたフレンドシップ事業のシンポジウムにお招きをいただきまして誠にありがとうございます。私も、5、6年前にセンター長として教育実践研究指導センターに関わりをもっておりましたので、今日は身内の会のような気持ちで参りました。どうぞ宜しくお願いを申し上げます。

さて、本日のテーマである教員養成とフレンドシップ事業ということに関しましては、本日までご参会の皆様、特に全国各地からご参加くださいました諸先生方の方が、私どもよりも遥かに深いご理解と関心をおもちになっておられる方々ばかりでございますので、ここで私がこの問題について何かお話しいたしましても、釈迦に説法の類いで大変戸惑っておる訳でございます。

そんな次第で、本日の講師としてはどうも適任ではございませんが、私、これまで文部省の「大学における教員養成の改善に関する調査研究会」という委託研究の研究会や、「教育職員養成審議会」などの審議に参加して参りましたので、そうした機会に勉強をさせていただいてきた中で感じたことや、考えてきたことの一部について若干お話をさせていただき、本日までご参会の皆様方からフレンドシップ事業の活動について、いろいろとご教示をいただければと思っておる次第でございます。

1. 高橋竹山（津軽三味線の初代家元）について

今年の文化の日であったかと思いますが、NHKの「人間ドキュメント」というテレビ番組で津軽三味線の初代家元である高橋竹山を取り上げておりました。私は、全く偶然にこの番組をみたわけではありますが、本日までご参会の皆様の中にもご覧になった方がいらっしゃるのではないかと思います。

津軽三味線の初代家元の高橋竹山という方は、ご承知の方も多いかと思いますが、人生の初期に視力を失い、食べていくためにこの津軽三味線の世界に入り、大変な苦勞をされた方です。本当の津軽三味線の心を引き出すために、あらゆる音楽を聞き、あらゆる楽器を弾き、それを津軽三味線に生かして「名人」の名を獲得した人です。しかし、名人の地位を獲得するまでには、津軽の地では、津軽三味線の正統ではなく異端だという風評も一時あって大変苦境におかれた時期があったということでもあります。

その初代家元の高橋竹山が沢山いる弟子の中から高橋竹与という一人の女性に2代目家元を襲名させたことを、この番組では取り上げておりました。竹与という2代目を襲名した弟子は、高校生の頃、初代高橋竹山の津軽三味線をCDか何かで聞いて、自分の一生をこの津軽三味線にかけることに決めて、初代竹山のもとに単身弟子入りしたのだそうで

あります。

竹与という他県出身のその女性の弟子に2代目を襲名させた理由が、私には大変印象的でありました。初代竹山が言うのには、他の弟子たちの中にも、2代目を継いだ竹与に勝るとも劣らない技量の持ち主は沢山いる。しかし、他の弟子たちは、自分で立派な職業をもっていたり、その夫の職業で食べて行ける人ばかりである。けれども2代目を襲名した竹与は5年か、10年は世間を渡り歩いて津軽三味線をやってみたいという。だから俺と同じ苦勞した道を歩むことになるから継がせたのだ、と淡々と語っていたのであります。

また、初代高橋竹山は、2代目が襲名後初めて演奏会を開いた時、ガンで身体の自由が十分きかなくなっているにもかかわらず、その演奏会に駆けつけ、「古いものをただ継ぐだけでは駄目だ、古いものを拵げて常に新しいものを持たなくては駄目だ」と、身をもって自分の津軽三味線を演奏し激励しているのであります。

こうした初代高橋竹山並びに2代目竹山の姿には、いろいろと教えられ、考えさせられる点がございませう。その第1は、2代目竹山のように退路を断ち背水の陣をしかなければ、芸の継承ができないという伝統芸の継承の厳しさという点であります。第2には、「古いものを継ぐだけでは駄目だ、古いものを拵げて常に新しいものを」というもたなくては駄目だ」と弟子たちに言い続けた点であります。

ところで、何故、冒頭にこうした高橋竹山の話を持ち出したかと申しますと、皆様ご承知のように、現在、教育界、とりわけ教員養成大学、学部は、未だかつてないような大変厳しい環境におかれているからでございます。津軽三味線の2代目高橋竹山のように、私どもは退路を断ち背水の陣で臨まなければ、現在、私どもの目の前に立ちはだかる困難な課題、困難な状況を克服することはできないと考えるからであります。また、これまでの古い慣習やしきたりにしがみついているだけでは、決して新しい21世紀への教員養成の展望は開けて来ないと考えるからであります。

私は、高橋竹山のドキュメントをみながら、今の私どもに一番必要なのは、こうした退路を断った背水の陣の覚悟を一人一人がもつことであり、「古いものを受け継ぐだけでは駄目だ、古いものを拵げ常に新しいものをもたなければ駄目だ」という確固とした決意と気概をもって進むことが必要ではないかと考えていた次第であります。

2. 都道府県教育委員会・学校教育関係者からの教員養成機関に対する要請と批判

さて、前置きが少々長くなりましたが、本題の方に入りたいと思います。私は、平成7年10月、文部省が東京学芸大学に、「大学における教員養成の改善に関する調査研究」を委託し、その調査研究会が設けられました。教養審会長である東京学芸大学学長の蓮見先生を議長として、大学関係者、小中高の関係者、都道府県教育委員会関係者、研究機関の関係者、それに文部省の関係者などが加わり、合計18名という規模の研究会でございます。月に1回ほど東京で研究会が開かれ、その研究会から平成8年3月と平成9年3月に、ここにもってきましたような2冊の報告書が出されております。これらの報告書は、文部省から全国の関係大学、教育委員会などの教育関係機関に配布されたものでございます。

また、平成8年12月からは、文部省の教育職員養成審議会、普通、教養審と略称で呼

んでいる審議会がございますが、私、その審議会の臨時委員を委嘱されました。また、その審議会のもとに文部大臣の諮問に対する答申の原案を作成するために、カリキュラム等特別委員会という特別委員会が設けられましたが、その委員は教養審の委員の中から会長の指名で選ばれ、15名で構成されました。私もその委員の中の一人として、教員養成のカリキュラムの改善に関する審議に参加して参りました。お手元に差し上げてある『フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか』という緑色の冊子の55頁に「教養審第1次答申の概要」というものがございますが、それがこうしたカリキュラム等特別委員会や総会での審議の結果でてきたものの概要でございます。

冊子の56頁の上の方の最初の○印の箇所をご覧いただきたいと思います。そこに昭和62年の答申に掲げられた教員の資質能力の内容は、どの時代にも求められる一般的なものである、とあります。そして、その下の○印の箇所には、社会の変化が激しい時代には、社会の変化に対応する資質能力が必要である、として3点ほどあげられております。次に、その下の○印には、従来、一人の教員に完全な教師像を求めて来たが、現実的ではないので、それぞれの得意分野をもった教師が集まって全体として、完全な教師像に近づけばよいという考え方を提示しております。こうした点ではさして委員の間に異論がございませんでした。

そして、この冊子の1頁をご覧いただきたいと思います。本日の私の話のレジюмеを掲げておきましたが、そこに記してありますように、

- ① 教育者としての使命の自覚を持たせること
- ② 自主的・自発的な進取な態度を育成すること
- ③ 子どもを理解し指導できる実践的指導力の向上を図ること
- ④ 社会的体験・直接体験の不足を克服すること
- ⑤ 人間関係調整能力を体得させること
- ⑥ 情報化・国際化社会の進展等の今日的課題に対応する資質・能力を育成すること 等

といった事項などが、そうした研究会や教養審の場における教員養成カリキュラムの改善に関する審議の中で、共通に話題にされてきた事柄でございます。その審議の過程において、都道府県教育委員会や義務教育学校の関係者など、学校教育の実践の場に関わっておられる方々から、私ども教員養成機関に対し、そうした教員に現在求められている資質能力というものに対して、「教員養成の大学・学部は、応えているのか」といった、厳しい批判が多くでて参りました。こうした現代の教師に、また明日の教育を担う教師に要請される資質・能力に対して、教員養成に携わっている大学・学部が、これまで何もしていないのではないかという大変厳しい批判であります。

3. 教養審カリキュラム等特別委員会における教育委員会へのアンケート調査結果

実は、教養審のカリキュラム等特別委員会におきましては、文部大臣の諮問に対する答申の原案を作成するにあたり、新聞等ではあまり報道されてはおりませんが、現状を把握するための幾つかの実態調査を実施しているのであります。この度の第一次答申に対しまして、さしたる根拠もなく答申が作成されたのではないか、といった批判が一部にないわ

けではございませんが、決して、何の根拠もなく答申案が出てきているわけではございません。

さて、そうした実態調査の一つが、都道府県、政令指定都市の教育委員会を対象とした調査であります。本日お手元にお届けしたも封筒の中に「『教員養成の実施状況等に関する調査（都道府県・政令指定都市対象）』調査結果」という綴じ込みの資料がございますので、ご覧いただきたいと思ひます。その資料がそうした実態調査資料の一部でございます。この調査は全体では20頁にも及び、かつ学校種別に調査したもので、文部省からの依頼でなければ、都道府県教育委員会には、とてもまともには対応していただけないようなかなりの分量の調査でございます。

昨日、教養審のカリキュラム等特別委員会が東京でありましたので、その折に、この実態調査資料の一部を本日のこの会で使用することについて、文部省で了解を得て参りました。大変興味深い調査かと思ひますので、少し時間をいただいて、この実態調査について皆様方と一緒に見て参りたいと思ひます。

この調査は、平成9年2月に、47都道府県、12政令指定都市の教育委員会を対象として実施したもので、回答率は96.6%でございます。この資料の1頁には、現在の教員採用状況を示す数値が掲げられておりますが、現在の教員採用の厳しさが、端的にあらわれております。

次に、2頁をご覧いただきますと、教育委員会が養成機関に期待するものとして、高等学校だけは、当然と言えば当然のことですが、教科の専門知識・技能が一番高い数値を示しております。しかし、小・中・特殊学校では、「教職に着く明確な意志、教員の使命の自覚」という項目、「教職に関する専門知識」という項目、「幼児・児童・生徒を把握し、指導に適切に反映していく能力」という項目の3項目が、総体的に高い数値を示しております。

これに続く、2の「採用時に既に身につけておくべき必須の資質（不足している資質）は何か」という質問に対しては、小・中・高、特殊学校のすべてが、「教職に限らず、大学、短期大学での学生生活全体を通じて得られる幅広い教養」という項目、「幼児・児童・生徒を把握し、指導に適切に反映していく能力」という項目、「学校内の同僚、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力」という項目の3項目が、高い数値となっております。

次に資料の3頁をご覧いただきたいと思ひます。そこにはそうした必須の資質が不足している原因を教育委員会がどのように見ているかを質問したものであります。

(1)の「教職に就く明確な意志、教員の使命の自覚」の不足という点では、小・中では、「原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある」という項目が90.9%、95.0%で一番高く、高校では、「原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある」とい項目が78.6%で一番高い数値であります。また特殊学校では、「原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育も含め、学校教育全体にある」という項目が80.8%で一番高い数値になっており、この(1)の問いに対しては、学校種により原因の見方に若干の違いが現れております。

(2)の「指導する教科の内容に関する専門知識・技能」の不足の原因に対する質問には、学校種を問わず全て「原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある」という項

目が100.0%であります。

(3)の「教職に関する専門的知識」の不足、並びに(4)の「学問的専門知識・技能ではなく、現場に即した知識・技能」の不足という項目の問いに対しても、いずれも学校種を問わず「原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある」という見方をしているのであります。

次に4頁をご覧くださいと思います。(5)の「教職に限らず、大学、短期大学、での学生生活全体を通じて得られる幅広い教養」が不足している原因に対する問いに対しては、「原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育も含め、学校教育全体にある」という項目が、学校種を問わず一番高い数値となっております。

(6)の「幼児・児童・生徒を把握し、指導に適切に反映していく能力」が不足している原因に対する問いに対しては、小・中・高校は「原因は、少子化、家庭教育力の低下など、家庭環境の変化による」という項目が一番高く、特殊学校では、「原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある」の項目が一番高くなっております。

(7)の「学校内の同僚、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力」が不足している原因に対する問いに対しては、小・中では、「原因は、家庭環境の変化による」という項目が一番高く、高校では、「原因は、社会環境の変化にある」の項目が一番高くなっております。また、特殊学校では、「原因は、学校教育全体にある」の項目が一番高くなっており、この(7)の問いに対しては、学校種により原因の見方に若干の相違が現れております。

しかし、総じて、これらの資質が不足している原因として、「原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある」とみる回答が、結構高い数値を示している点にご留意願いたいと思います。

それでは、養成カリキュラムをどのように改善すべきであると教育委員会では、考えているかのかを調査した結果が、5頁から7頁にかけて掲げてあるものでございます。

5頁の(1)の「教職に就く明確な意志、教員の使命の自覚」が不足していることに対する改善策については、中学校では「教育実習期間の延長や内容の充実を図る」という項目が一番高い数値となっておりますが、しかし、全体的には、「教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する」ことが効果的であると見ていることが判明するのであります。

(2)の指導する教科の内容に関する専門的知識・技能」が不足していることに対する改善策、及び(3)の「教職に関する専門的知識・技能」が不足していることに対する改善策については、かなり学校種によりばらつきが目につきますが、総じて、「理論中心のカリキュラムから学校現場のニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する」という項目、および「教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する」という2項目が高い数値を表しているのであります。

こうした2項目の数値がしだいに高くなって行くのが6頁から7頁にかけての(4)から(7)の問いに対する回答であります。(4)の「学問的な専門的知識・技能ではなく、現場での実践に即した知識・技能」の不足に対する改善策、(5)の「教職に限らず、大

学・短期大学での授業全体を通じて得られる、幅広い学問に関わる教養」の不足の改善策、(6)の「幼児・児童・生徒を把握し指導に適切に反映していく能力」の不足に対する改善策、さらには(7)の「学校内の同僚、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーションを保つことができる能力」の不足に対する改善策、といった問いに対しては、全部の項目に共通して高い数値を示しているのが、「理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的内容を重視したカリキュラムに転換する」、「教育方法について、子供と直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する」という2項目であります。

これらの実態調査結果からも、都道府県教育委員会が、実践的な内容を重視したカリキュラムへの転換とともに、「子どもと直接ふれあうなどの体験」を、教員養成の機関に強く求めていることが明らかになるのであります。この度の平成9年度から実施された文部省のフレンドシップ事業は、この実態調査実施以前に既に施策化されたものであります。いずれにせよ、こうした都道府県教育委員会などの強い要望を背景として、登場してきたものであるということができるとは思いません。

4. 文部省の「フレンドシップ事業」

ご承知のように、平成9年度から文部省は、こうした子どもとの触れ合いの機会として、新たにフレンドシップ事業を設けたのであります。教員養成機関に学ぶ教員志望の学生達に、教育実習以外の場において、実際に子どもたちと触れ合うことにより、子どもの理解、子どもへの対応の仕方などを学ばせ、実践的指導力を向上させる目的で予算措置を講じて発足したものでございます。

こうしたフレンドシップ事業の概要につきましては、お手元の緑色の冊子の54頁に文部省が作成し各教員養成機関等に配布したその概要図がございまして、その概要図に記載されておりますフレンドシップ事業の骨子は、次の3点でございます。

- ① 教員養成大学・学部において、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができる機会を設定すること。
- ② この趣旨の実現を内容とする授業科目を開設すること。
- ③ 教育委員会や社会教育施設等の教育関係機関と連携・協力をはかること。

文部省よりいただいた資料によりますと、こうした趣旨で当初、14,215千円という予算額で数大学程度において実施するという事を考えていたようであります。しかし、実際に平成9年度のこうしたフレンドシップ事業の計画について各大学に照会したところ、40大学から総額107,834千円という要求書が提出されてきたという事でありまして、文部省では、こうした多数の大学からの要求に対して、当初の計画を大幅に上回り、実際には、39大学に対して、70,950千円(1大学平均 約180万円程)の予算を配分したという事でございます。

ところで、こうした文部省のフレンドシップ事業について、教員養成という点から、私なりにもう少し考えてみたいと思うわけでありまして。こうしたフレンドシップ事業の活動が、第一には、先程の実態調査での教育委員会などの学校教育の実践の場からの強い要望をふまえて、教員養成機関が子どもとの直接的「ふれあい」の機会を設定し、それを教員

養成カリキュラムに反映させて、教員志望者に子どもに対する理解、子どもへの対応の仕方を身につけさせるという、一言で言えば、実践的指導力の向上を図るということであり、第2には、文部省が期待しているように、大学と各都道府県の教育関係機関との連携協力体制の構築という点であります。

この2点が、このフレンドシップ事業の大きな2本の柱であることは、申すまでもないことかと思えます。それでは、この2点の外に何があるのかと考えてみますと、私は、第1には、教員養成機関と地域社会とが協力して子どもの教育にあたるという、子どもに関する教育ネットワークの構築ということがあげられるかと思えます。子どもや地域社会の人々が、こうしたフレンドシップ事業という大学の活動に参加し、他方では大学の学生達が、地域社会の活動に飛び込んで行くことにより、このフレンドシップ事業の活動が、大学と地域社会との相互交流の活性化の契機となりうるということであり、教養審におきましても、特別非常勤講師制度を従来よりも拡大し、全ての教科において教員免許状をもたない地域の優れた人材を学校教育の中で非常勤講師として活用する方向がうちだされております。こうした特別非常勤講師制度の拡大も、学校と地域社会の緊密化の一方策であります。この度のフレンドシップ事業は、教員養成機関と地域社会との緊密化に、より一層大きな役割を果たす可能性が秘められていると、いいのではないかと、思うわけであり、あります。

次に、第2には、協力的態度や連帯感という点において、ややもすれば不足しがちな現代の学生達に、こうした活動をとおして協力的態度や連帯感を育成するということであり、わが国の初代文部大臣、森有礼は、教師に必要な資質として、「順良(Obedience)、信愛(Friendship)、威重(Dignity)」という3つを掲げました。「順良」、「威重」という点についてはいろいろ議論があるかと思えますが、「信愛」(Friendship)という点については、当時も現在も、教師に必要な資質であることには、さして異論がないのではないかと、思えます。とりわけ最初の方で申し上げましたように、一人の完全な教師ではなく、多くの人々が連携・共働して、全体として、完全な教師、完全な教育活動に近づけばよいという考え方に立ちますと、こうした教師間のフレンドシップということが、益々重要なものになってくるのではないかと、考えております。

従いまして、このフレンドシップ事業における「フレンドシップ」は、単に教員志望学生と子どもたちとの間の友情を意味するだけではなく、学生達相互間の友情、連帯感の育成という意味においても、重要な意味をもつものであると受けとめておるわけであり、聞くと、ところにより、今年度、横浜国立大学の学生達と私ども信州大学の学生達とが、このフレンドシップ事業の活動を通して交流が始まったということであり、こうした大学間の学生相互の交流活動が、今後このフレンドシップ事業の活動を媒介として益々盛んになることを大いに期待しておる次第であります。

次に、フレンドシップ事業の教員養成に果たす役割の第3として、こうしたフレンドシップ活動を単位として認めるという体験的授業を大学の正規のカリキュラムとして導入にすることにより、大学の教員養成カリキュラムおよび教育方法の改善が促進される契機となるということが指摘できるのではないかと、思えます。ご承知のように、文部省は、各大学に対して自己点検評価を強く求め、大学の授業内容や授業方法の改善をこれまでも強く求めてきたわけであり、諸般の事情によりなかなか教員養成大学・学部の授業内容、

方法の改善が、思うように進捗していないのが実情であります。こうした大学の授業内容、方法の改善を積極的に促進する契機として、このフレンドシップ事業が機能する可能性が十分あるように思われるのであります。

このように、この度の文部省のフレンドシップ事業には、子ども達との直接的なふれあいの機会の提供による、教員志望者に対する実践的指導力の向上をはかるということ、及び教育委員会や青少年施設等の教育関係機関、団体との協力体制を構築するということの2本の大きな柱の外に、こうした今申し上げたような3点の可能性を秘めているのではないかと私は考えております。

従いまして、こうしたフレンドシップ事業のどこに重点おいて実施していくかということにより、フレンドシップ事業の実施の形態、内容も多様なものになっていくものと予測されるのであります。今後のフレンドシップ事業の活動においては、それぞれの大学がそのおかれている状況により、何に重点をおいてフレンドシップ事業の活動を展開していくかということが、次第に問われていくようになるのではないかと考えている次第であります。

5. 教員養成の実践的課題とフレンドシップ事業の活用

ところで、お手元のレジュメに掲げてあります「教員養成の実践的課題とフレンドシップ事業の活用」という問題につきましては、まさに、すぐこの後のシンポジウムでご協議いただく内容そのものであるかと思っておりますので、時間もなくなって参りましたので、この問題は、この後のシンポジウムの方に譲らせていただき、私の方からは、この後のシンポジウムにおいてご教示願いたい問題として、とりあえず3点ほど提出させておいていただきたいと思っております。

その第1は、大学と各教育機関との連携協力体制構築の問題であります。フレンドシップ事業の活動が継続して実施されていく場合には、「いかにして各教育関係機関、団体との協力連携体制を作り上げて行くか」ということが、今後当面する重要な課題となっていくのではないかと考えられます。

その第2は、フレンドシップ事業と大学での授業の開設、単位化に関わる問題であります。単位化することと学生の自主性・自発性との係わりの問題であります。この問題が今後大きな問題の一つになるのではないかと推測されます。

このことと関連して、第3には、学生達の自主的、自発的活動をどのように組織化し、支援していくかという問題であります。学生たちの自主性、自発的活動ということ、キーワードにすることができるか否かで、このフレンドシップ事業の活動が随分違ったものになるのではないかと考えております。こうした諸点について、この後のシンポジウムにおいて、諸先生方からいろいろとご教示願えればありがたいと思っておる次第であります。

おわりに

さて、最後に一言申し上げて「まとめ」に代えさせていただきたいと思っております。18世紀後半から19世紀の前半にかけて活躍したペスタロッチという有名な教育者がおります。

そのペスタロッチに、『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』という教育関係者には広く知られた著作がございます。その著作は、ゲスナーという友人に宛てた書簡形式をとって書かれているものでありますが、彼は、その友人のゲスナーに宛てて、当時、来るべき国民教育の時代を展望して、次のようにこれまで自分が行なってきた教育活動について書き送っているのであります。

「願わくば、（今私たちの行く手を阻んでいる）この逆茂木がわたしの死後燃えさかる炎のなかで焼き尽くされんことを！ なるほど今わたしは自分が細々と燃える炭火を濡れた藁のなかに入れるだけに過ぎないことを知っている。だがわたしには風が見える。そして風は、炭火を吹き起こし、わたしの周囲の湿った藁は次第に乾き、熱くなり、やがて火がつき、やがて燃え上がるだろう。そうだ友よ！ わたしの周囲が今どんなに濡れていても、燃えるのだ、きっと燃えるのだ。」

このペスタロッチの書簡の言葉ではありませんが、今先生方が始められたフレンドシップ事業という活動は、現在、教員養成機関が抱えている様々な困難な課題を前にしては、「細々と燃える炭火を濡れた藁のなかに入れるだけに過ぎない」ような活動であるかも知れません。しかし、先生方が取り組まれた、また今後取り組まれようとしているこのフレンドシップ事業の活動は、現在、たとえ「濡れた藁の中に入れる炭火に過ぎない」ような微々たる活動であっても、必ずや「教員養成カリキュラムの改善」という炎、「新しい教員養成システムの確立」という炎を燃え上がらせずにはおかないものと、私は確信いたしておるのであります。

先生方が今なさっておられるフレンドシップ事業の活動は、21世紀の新しい教員養成の扉を開ける開拓的仕事であり、活動である、ということに深く思いをいたされ、今後ともより内容の充実したフレンドシップ事業の活動を展開して行って下さるようお願いを申し上げます。

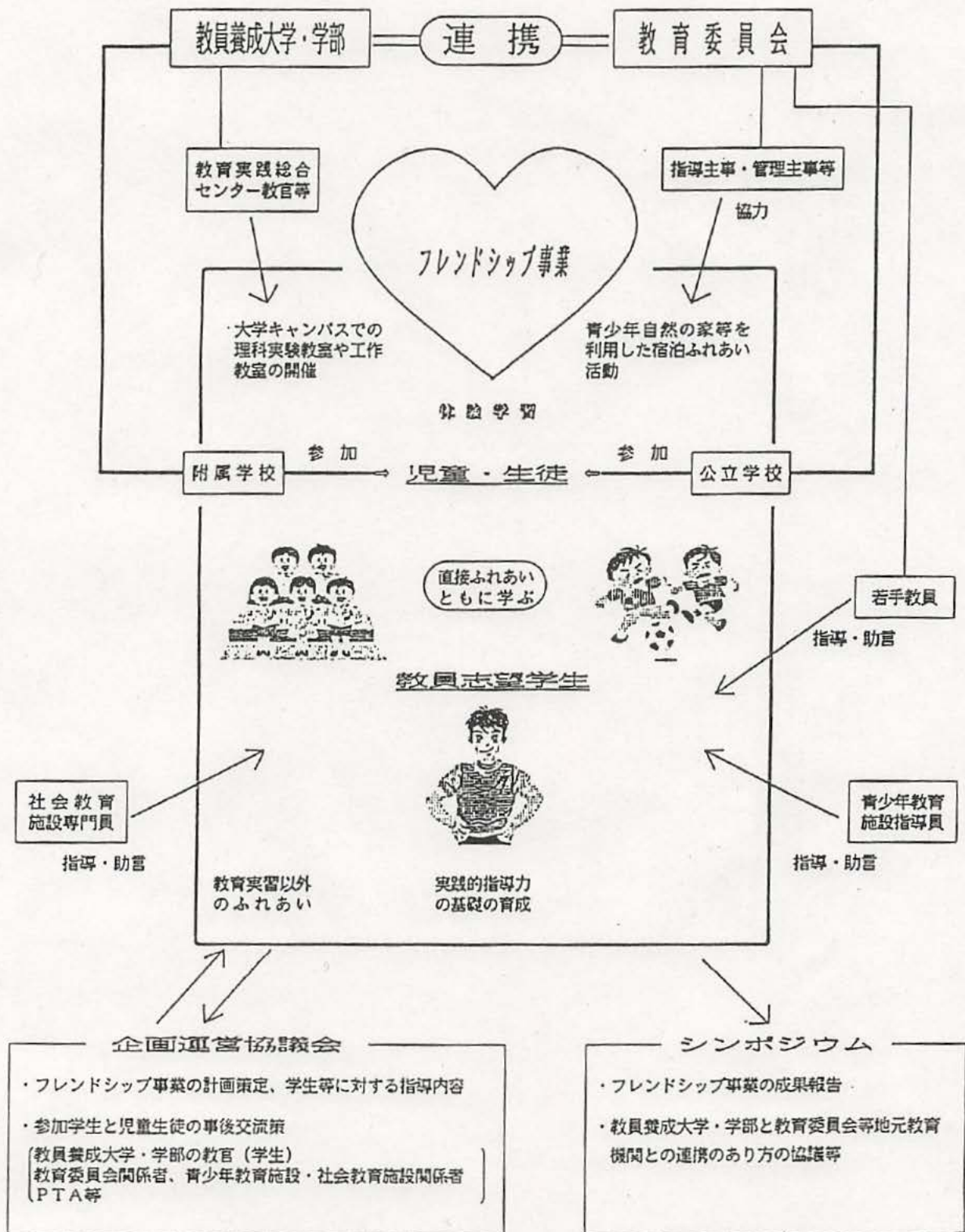
最後に、初代高橋竹山の言葉をもう一度お贈りして終わりにいたします。

「古いものを継ぐだけでは駄目だ、古いものを抜げて常に新しいものをもたなくては駄目だ」。

ご静聴ありがとうございました。

(別紙資料1)

教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費の概要図



(別紙資料2)

「教員養成の実施状況等に関する調査（都道府県・政令指定都市対象）」調査結果

平成9年5月8日

I. 調査実施時期

平成9年2月

II. 調査対象

調査票送付先：47都道府県，12政令指定都市

回答都道府県：57都道府県・政令指定都市（回答率96.6%）

III. 各都道府県・政令指定都市の採用に関する基礎データ

1 採用者数，養成系・非養成系の別

小学校	合計	新規学卒	臨採経験	非常勤講師	それ以外
合計	5,772人	47.9%	31.1%	7.0%	17.3%
養成系出身	70.9%	80.9%	64.3%	57.7%	60.8%
それ以外	29.1%	19.1%	35.7%	42.3%	39.2%

中学校	合計	新規学卒	臨採経験	非常勤講師	それ以外
合計	5,759人	45.6%	33.6%	11.1%	15.0%
養成系出身	42.7%	54.5%	35.1%	31.4%	28.6%
それ以外	57.3%	45.5%	64.9%	68.6%	71.4%

高等学校	合計	新規学卒	臨採経験	非常勤講師	それ以外
合計	3,641人	40.3%	39.5%	14.3%	17.0%
養成系出身	18.7%	22.5%	17.5%	19.5%	12.8%
それ以外	81.3%	77.5%	82.5%	80.5%	87.2%

特殊教育諸学校	合計	新規学卒	臨採経験	非常勤講師	それ以外
合計	1,337人	35.0%	40.2%	13.6%	18.3%
養成系出身	44.7%	59.9%	36.7%	35.1%	34.7%
それ以外	55.3%	40.1%	63.3%	64.9%	65.3%

(注：新規学卒，臨採経験，非常勤講師経験，その他は複数該当する場合があるため，合計が100%を越える場合がある。)

IV. 新規採用教員の資質と養成カリキュラムの在り方について

1 養成段階に期待するもの

(%)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
教職に就く明確な意思、教員の使命の自覚	70.2	64.9	61.8	61.8
指導する教科の内容に関する専門知識・技能	28.1	45.6	70.9	32.7
教職に関する専門知識	64.9	61.4	52.7	50.9
学問的な専門知識・技能ではなく、現場に即した知識・技能	29.8	24.6	18.2	34.5
教職に限らず、大学・短期大学での学生生活全体を通じて得られる幅広い教養	26.3	22.8	23.6	20.0
幼児・児童・生徒を把握し指導に適切に反映していく能力	54.4	52.6	50.9	63.6
学校内の関係、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力	24.6	26.3	21.8	12.7
その他	0.0	0.0	0.0	3.6

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

2 採用時点で既に身につけておくべき必須の資質(不足している資質)

(%)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
教職に就く明確な意思、教員の使命の自覚	39.3	35.1	25.0	46.4
指導する教科の内容に関する専門知識・技能	12.5	17.5	19.6	16.1
教職に関する専門知識	42.9	47.4	50.0	41.1
学問的な専門知識・技能ではなく、現場に即した知識・技能	21.4	17.5	30.4	21.4
教職に限らず、大学・短期大学での学生生活全体を通じて得られる幅広い教養	69.6	64.9	69.6	64.3
幼児・児童・生徒を把握し指導に適切に反映していく能力	69.6	70.2	62.5	67.9
学校内の関係、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力	69.6	64.9	69.6	64.3
その他	1.8	1.8	1.8	1.8

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

3 必須の資質が不足している原因

(1) 「教職に就く明確な意思、教員の使命の自覚」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育諸学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	90.9	95.0	64.3	73.1
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	59.1	55.0	64.3	80.8
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	31.8	20.0	42.9	38.5
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	36.4	40.0	78.6	61.5
その他	9.1	5.0	0.0	3.8

(注：複数回答のため、合計が100％を越えることがある。)

(2) 「指導する教科の内容に関する専門知識・技能」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育諸学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	100	100	100	100
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	57.1	70.0	81.8	77.8
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	28.6	20.0	18.2	22.2
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	42.9	20.0	45.5	66.7
その他	0.0	0.0	0.0	22.2

(注：複数回答のため、合計が100％を越えることがある。)

(3) 「教職に関する専門知識」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育諸学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	100	100	100	100
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	55.6	52.6	61.1	61.1
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	22.2	31.6	16.7	22.2
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	33.3	42.1	27.8	33.3
その他	5.6	0.0	0.0	11.1

(注：複数回答のため、合計が100％を越えることがある。)

(4) 「学問的な専門知識・技能ではなく、現場に即した知識・技能」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育諸学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	79.2	81.5	71.4	78.3
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	58.3	51.9	64.3	65.2
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	62.5	70.4	50.0	52.2
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	50.0	44.4	60.7	60.9
その他	4.2	0.0	3.6	4.3

(注：複数回答のため、合計が100％を越えることがある。)

- (5) 「教職に限らず、大学・短期大学での学生生活全体を通じて得られる幅広い教養」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	50.0	40.0	47.1	25.0
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	83.3	90.0	100	100
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	33.3	50.0	52.9	66.7
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	50.0	70.0	58.8	91.7
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100％を超えることがある。)

- (6) 「幼児・児童・生徒を把握し指導に適切に反映していく能力」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	59.0	50.0	42.9	60.5
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	59.0	57.5	74.3	57.9
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	87.2	90.0	85.7	78.9
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	66.7	70.0	77.1	86.8
その他	2.6	2.5	2.9	0.0

(注：複数回答のため、合計が100％を超えることがある。)

- (7) 「学校内の同僚、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	17.9	24.3	15.4	13.9
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	74.4	73.0	79.5	94.4
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	94.9	91.9	92.3	86.1
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	92.3	89.2	94.9	80.6
その他	0.0	0.0	2.6	2.8

(注：複数回答のため、合計が100％を超えることがある。)

- (8) 「その他の資質」が不足している原因 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
原因は、大学・短期大学の養成教育の在り方にある。	0.0	0.0	100	100
原因は、大学・短期大学のみならず、義務教育や高等学校教育も含め、学校教育全体にある。	100	100	100	0.0
原因は、少子化、家庭の教育力の低下など、家庭環境の変化による。	100	100	0.0	0.0
原因は、メディアの発達・普及や地域社会の教育力の低下など、社会環境の変化にある。	100	100	100	0.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100％を超えることがある。)

4 養成カリキュラムの改善方策（大学・短期大学の教員養成カリキュラムをどう改めるか）

(1) 「教職に就く明確な意思、教員の使命の自覚」が不足しているための改善方策 (%)

	小学校	中学校	高等学校	特別教育諸学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	40.4	36.8	33.3	21.1
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	70.0	78.9	66.7	42.1
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	30.0	26.3	11.1	31.6
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	0.0	0.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	60.0	57.9	55.6	73.7
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	75.0	73.7	77.8	94.7
その他	0.0	0.0	0.0	10.5

(注：複数回答のため、合計が100%を超えることがある。)

(2) 「指導する教科の内容に関する専門知識・技能」が不足しているための改善方策 (%)

	小学校	中学校	高等学校	特別教育諸学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	42.9	30.0	36.4	55.6
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	71.4	80.0	36.4	33.3
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	14.3	20.0	9.1	11.1
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	42.9	40.0	36.4	44.4
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	57.1	70.0	63.6	66.7
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	71.4	60.0	54.5	88.9
その他	0.0	0.0	9.1	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を超えることがある。)

(3) 「教職に関する専門知識・技能」が不足しているための改善方策 (%)

	小学校	中学校	高等学校	特別教育諸学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	33.3	26.3	55.6	16.7
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	38.9	42.1	27.8	27.8
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	61.1	57.9	55.6	83.3
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	5.6	10.5	0.0	0.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	83.3	68.4	55.6	44.4
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	61.1	52.6	55.6	72.2
その他	5.6	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を超えることがある。)

(4) 「学問的な専門知識・技能ではなく、現場での実践に即した知識・技能」が不足しているための改善方策 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	50.0	59.1	65.0	50.0
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	50.0	45.5	40.0	50.0
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	25.0	27.3	25.0	16.7
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	0.0	0.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	90.0	90.9	90.0	72.2
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	75.0	59.1	60.0	83.3
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

(5) 「教職に限らず、大学・短期大学での授業全体を通じて得られる、幅広い学問に関わる教養」が不足しているための改善方策 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	50.0	50.0	50.0	33.3
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	16.7	25.0	37.5	33.3
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	33.3	25.0	25.0	0.0
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	12.5	0.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	100	100	87.5	66.7
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	66.7	50.0	75.0	33.3
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

(6) 「幼児・児童・生徒を把握し指導に適切に反映していく能力」が不足しているための改善方策 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	34.8	35.0	40.0	17.4
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	43.5	50.0	33.3	43.5
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	34.8	30.0	13.3	26.1
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	6.7	8.7
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	91.3	85.0	93.3	78.3
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	87.0	90.0	93.3	95.7
その他	0.0	0.0	0.0	4.3

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

(7) 「学校内の同僚、保護者、学校外の関係者と円滑なコミュニケーション、人間関係を保つことができる能力」が不足しているための改善方策 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	57.1	55.6	66.7	20.0
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	42.9	44.4	33.3	20.0
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	28.6	22.2	0.0	20.0
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	0.0	20.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	71.4	55.6	100	80.0
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	85.7	77.8	100	80.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

(8) 「その他の資質」が不足しているための改善方策 (％)

	小学校	中学校	高等学校	特殊教育学校
いじめへの対応や国際化・情報化への対応など、学校現場が抱えている課題に直接対応する科目を教員養成カリキュラムに取り入れる。	0.0	0.0	0.0	100
教育実習の期間の延長や内容の充実を図る。	0.0	0.0	0.0	0.0
教職課程において、「教科に関する科目」よりも「教職に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	0.0	0.0
教職課程において、「教職に関する科目」よりも「教科に関する科目」をより重視する。	0.0	0.0	0.0	0.0
理論中心のカリキュラムから、学校現場の実態やニーズを踏まえた実践的な内容を重視したカリキュラムに転換する。	0.0	0.0	0.0	100
教育方法について、子どもと直接ふれあうなどの体験的な実習や事例研究など効果的なものを工夫する。	0.0	0.0	0.0	100
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

(注：複数回答のため、合計が100%を越えることがある。)

フレンドシップ事業を契機とした信州大学と地元教育機関との連携

土井 進（信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター）

doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

貝原 豪（長野県阿南少年自然の家）

〈キーワード〉 教育参加 附属学校園 長野県松本盲学校 国立信州高遠少年自然の家
長野県青年の家・少年自然の家

1. 平成9年度信州大学教育学部におけるフレンドシップ事業の概要

	名 称	配当年次	単位数	受講者数	必修・選択の別
授 業 科 目	「教育参加」	1年	1単位	300人	必修
	免許法上の位置づけ				
	「教育実習」（事前事後指導を含む）とともに臨床経験に位置づける。				
連携・協力機関 企画運営協議会の 構成	<ol style="list-style-type: none"> 「教育参加」の連携機関・・・附属教育実践研究指導センター長 教育学部松本分室教官、附属松本学校園長・副園長、長野県松本盲学校長 国立信州高遠少年自然の家所長など16名。 「附属長野フレンドシップ体験」の連携機関・・・附属教育実践研究指導センター長、附属長野学校長・副校長など6名。 「長野県フレンドシップ体験」の連携機関・・・附属教育実践研究指導センター長、長野県教育委員会生涯学習課長、長野県青年の家・少年自然の家所長（松本・小諸・松川・須坂・望月・阿南）など9名。 「信大YOU遊サタデー」の連携機関・・・附属教育実践研究指導センター長、長野県テクノハイランド開発機構事務局長など4名。 				
フレンドシップ 事業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 「教育参加」・・・1年生約300名が5月～1月に、附属幼稚園、附属松本小学校、附属松本中学校、長野県松本盲学校、国立信州高遠少年自然の家での教育活動に参加し、教育への意欲・関心を高める。1単位を認定する。 「附属長野フレンドシップ体験」・・・教育実習を修了した4年生約50名が4月～12月に、附属長野小・中学校、附属養護学校での教育活動に参加し、指導経験を深める。単位認定はない。通称「教育ボランティア」 「長野県フレンドシップ体験」・・・1年生～4年生の希望者約100名が4月～3月に、長野県内の6つの青年・少年自然の家（松本・小諸・松川・須坂・望月・阿南）での教育活動に参加する。1年生は「教育参加」のプログラムとして加える。 「信大YOU遊サタデー」・・・単位認定はない。 				

2. 信州大学におけるフレンドシップ事業の経過

- (1) 平成6年6月、「信大YOU遊サタデー」実行委員会発足
- (2) 平成7年4月、教養部廃止にともなう教育学部4年一貫カリキュラムの編成にあたり、「臨床経験」という授業科目の枠組みを設定
- (3) 平成8年4月、「教育参加」（1年生必修、1単位）を臨床経験の授業科目として開講
附属幼稚園、附属松本小学校、附属松本中学校、長野県松本盲学校との連携
- (4) 平成9年4月、「教育参加」に新たに国立信州高遠少年自然の家との連携を追加
- (5) 平成9年4月、教育実習を修了した4年次生を対象とした「教育ボランティア」の開設
附属長野小学校、附属長の中学校、附属養護学校との連携
- (6) 平成9年5月、平成9年度教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費の配分通知
- (7) 平成9年6月、「長野県フレンドシップ体験」を開設
松本青年の家、小諸青年の家、松川青年の家、須坂青年の家、望月少年自然の家、阿南少年自然の家との連携
- (8) 平成9年9月、長野県自然保護研究所を会場として「第12回信大YOU遊サタデー」を実施
長野県立歴史館を会場とした「出張YOU遊サタデー」を実施
- (9) 平成9年10月、国立信州高遠少年自然の家を会場とした「出張YOU遊サタデー」を実施
- (10) 平成9年11月、小諸市文化センターを会場とした「出張YOU遊サタデー」を実施

3. 「長野県フレンドシップ体験」に参加した学生の実感

- (1) 学生に参加を呼びかけるポスター



短期キャンプ

※期 日	7月12日(土)~13日(日)	締切6月28日(土)
※対 象	小中学生及びその保護者(家族)	合計100名

長期キャンプ

※期 日	8月2日(土)~7日(木)	締切7月19日(土)
※対 象	小学5~6年生と中学生	合計50名

☞場所 長野県阿南少年自然の家
〒399-15 下伊那郡阿南町西条2332
☎0260-22-3315 FAX 0260-31-1015

- ・保健室登校、不登校の子どものためのキャンプです。
スタッフとしてかわつていられる教育学部生が求められています。
- ・関心のある方は、土井まで、詳しい資料をお渡しします。
交通費等は支給されます。

(2)阿南少年自然の家での「ふれあい自然体験キャンプ」の報告書から

○長野県阿南少年自然の家

「学生等スタッフは、信大17名（内4年生11名、1年生6名）、長野県短大9名、長野県福祉大2名、長野大2名、飯田女子短大1名（養護）、不登校民間施設のぞみ学園1名、一般から阿南第二中の講師1名の33名で、信大が文部省のフレンドシップ事業に取り組んだ関係で、信州大学教育学部生が半数を超えた。」

○ふれあい自然体験キャンプ感想用紙 for スタッフ

6日間の長期キャンプ、とことん子どもたちとつきあってくれた皆さん。本当にありがとう！キャンプに参加してみて、感じたこと・考えたことが数多くあったことと思います。今回の長期キャンプに参加した皆さんの自由な感想を聞かせてください。

信州大学教育学部1年生

「子どもと肩をくみ、手をつなぎ、子どもをおんぶしてやり、肩車してやり、常にスキンシップをとりました。不思議と子どもはなついてくれます。中学生も例外ではありません。一人にいる子には、バレーやバドミントンの輪の中へどんどん誘いました。そのうちに自分から入ってくるようになりました。違う班の子どもたちとも仲良くなれました。

私自身すごくいろいろ学べました。スタッフミーティングの時の貝原先生の話や子どもと直接ふれあうことで、すごい大きなものを得ることができました。教育学部に入ったのに全然教師に近づいたという実感がありませんでしたが、今回キャンプに参加して改めて自分は子どものことが好きで、子どもと遊ぶ楽しさがよくわかりました。短期、長期の両方に参加して、自分が大学4年間で勉強すべきこと少しづつ分かってきたように思います。

頭のいい教師よりも、子どもと上手に接することのできる教師をめざして、来年もこのキャンプに来たいです。」

信州大学教育学部4年生

「今回のキャンプで、私は初めて不登校の子どもと触れ合いました。といってもどの子もそんなことを感じさせないとても明るくいい子ばかりではないかという第一印象を受けました。しかし、一晚班の子ども3人の話の中にまぜてもらい、一緒に様々な話をした中で、どの子も皆各々に現在、そして将来の自分自身について考え悩み、まだ幼いのに大きなものを背負っているのだな、と感じさせられました。また、様々なイベントを行うごとに、班の中では平気なのに、大勢で何かをすると一歩さがってしまうといった子どもの様子を見て、集団生活の中で自分をうまく出せないのだな、と感じました。

このような中で私は、今回のスタッフとしてどのように子どもに接していったら

良いのか（例えばどこまで子どもの意思を尊重し、どこまで集団の中へ入っていかせるか等）、また将来教師となりこのような子どもと接していくことになった場合、どうしていったら良いのか等、今まであまり考えたことのなかったことについて、考え行動できるとても良い機会となりました。そして、何より子どもと一緒にとても楽しく過ごせました。ただ、最後に家へ帰っていく子どもが、＜（今までの生活に戻るから）家に帰りたくない。＞と言っているのを聴いて、ふとこのキャンプは子どもたちにとってどんな意味をもっていたのかがわからなくなってしまいました。

多くの友達をつくり、みんなで様々な経験をしたということは大きなことだったと思います。しかし、これから先、自分が抱えているものを乗り越えていくのは彼女たち自身で、私たちは頑張ると見守ってあげるしかないのかなと感じてしまったのです。もちろんこれから彼女たちと手紙のやりとりをするなどして、力になれることがあったらそうしていきたいとは思いますが、彼女たちには、今回のキャンプの中から何かを見出し、それを自分自身で自分の生活の中で活かして欲しいと思います。

この経験は、私にとって本当に貴重なものとなりました。ありがとうございました。」

信州大学教育学部4年生

「私の長期キャンプは、やはり初日の出来事からすべてが始まりました。あの出来事のおかげでというのも妙な言い方ですが、世の中にはいろんな子どもがいるということを身をもって知り、また、私たちが子どもと接する時、温かさをもって触れ合うとは一体どんなことだろうと考え、同時に実践できる良い場となりました。今まで私が体験してきた教育実習やYOU遊サタデーにもそれぞれ利点はありますが、今回はそれとは全く違った点で学ぶものが多く、是非来年もこのキャンプを続けていただきたいと思います。

来年続ける時のポイントとして、運営の面から一つ述べさせていただきます。それはスタッフの中で経験者と未経験者の間に多少の心の隔たりがあるということです。具体的に言うと班編成でもめていた時、新参の私たちが口をはさめない域に議論が達してしまっただけのことです。私たちの行っているYOU遊サタデーにも多分にその傾向があり、その点でも参考になったのですが、出てくる意見だけを聞いているのではなく、指名して意見を求めても良いのではないかと思います。この隔たりがなくなれば、子どもを迎える時の雰囲気も違ってくると思います。それでは、来年も続きますように。ありがとうございました。

4. 「教育参加」メニューと参加学生数

(1) 附属幼稚園

①春の遠足	5月12日(月)	9:00~14:00	23名
②こいのぼり運動会前日準備	5月29日(木)	15:30~17:30	5名
③ 同上 当日の係り活動	5月30日(金)	8:50~12:00	24名
④誕生会の参観(6月)	6月20日(金)	10:35~11:00	7名
⑤ 同上 (7月)	7月22日(火)	10:35~11:00	5名
⑥ 同上 (9月)	9月25日(木)	10:35~11:00	6名
⑦ 同上 (10月)	10月22日(水)	10:35~11:00	12名
⑧ 同上 (11月)	11月25日(火)	10:35~11:00	10名
⑨ 同上 (12月)	12月24日(水)	10:35~11:00	4名
⑩ 同上 (1月)	1月26日(月)	10:35~11:00	3名
⑪ 同上 (2月)	2月20日(金)	10:35~11:0	1名
⑫保育実習の参観	8月26日(火)	9:00~12:00	14名
⑬秋の運動会前日準備	9月9日(火)	15:30~17:30	5名
⑭ 同上 当日の係り活動	9月10日(水)	7:40~11:30	13名
⑮幼年教育研究会に向けての準備	10月7日(火)	15:30~17:30	8名
⑯ 同上 前日準備	10月17日(金)	13:30~15:30	6名
⑰ 同上 参観	10月18日(土)	8:30~15:30	10名
⑱落ち葉掃き・遊具のペンキ塗り(1)	11月6日(木)	14:30~15:30	11名
⑲ 同上 (2)	11月13日(木)	14:30~15:30	5名
⑳ 同上 (3)	11月21日(金)	14:30~15:30	6名

(2) 附属松本小学校

①運動会前日準備	9月5日(金)	13:50~	27名
②運動会当日	9月6日(土)	7:10~	24名
③教育実習の参観(1)	8月26日(火)	10:35~12:00	61名
④ 同上 (2)	8月28日(木)	10:35~12:00	44名
⑤秋の遠足(全校縦割り、8コース)	10月8日(水)	7:50~15:20	47名
⑥学習指導研究会各係りの仕事	1月31日(土)	7:30~	19名

(3) 附属松本中学校

①プールの清掃とペンキ塗り	5月17日(土)	14:00~16:00	7名
②松本城清掃(春)	6月7日(土)	7:20~8:30	10名
③松本城清掃(秋)	11月8日(土)	7:20~8:30	9名
④プール開きの模範水泳	6月3日(火)	14:30~15:30	1名
⑤市中体育大会の写真撮影と応援	6月14日(土)	8:00~16:00	8名
⑥燕岳登山の付き添い	7月24日(木)~25日(金)終日		1名
⑦男女バスケットクラブ指導	7月30日(水)	8:00~10:00	5名
⑧ミシンの調整	8月1日(金)	10:00~12:00	2名
⑨吹奏楽クラブ指導補助	8月2日(土)	8:00~11:00	7名
⑩教育実習生の実習授業の参観(1)	8月21日(木)		31名
「国語」13:25~14:15	「数学」11:45~12:35		
「美術」10:45~11:35	「技術」11:45~12:35		
⑪ 同上 (2)	8月22日(金)		17名

	「理科」 9:40~10:30	「体育」 10:45~11:35	
⑫	同上	(3)	8月25日(月) 12名
	「社会」 11:45~12:35	「家庭」 9:40~10:30	
⑬	同上	(4)	8月27日(水) 8名
	「音楽」 10:45~11:35		
⑭	同上	(5)	8月28日(木) 8名
	「英語」 10:45~11:35		
⑮	男女バレークラブ指導補助	9月4日(木)~5日(金)16:30~17:25	6名
⑯	英語授業のTT	9月16日(火)・11月13日(木) 11:00~13:00	10名
⑰	女鳥羽川清掃	9月30日(火) 15:40~17:00	14名
⑱	陸上クラスマッチの補助	9月19日(金)7:00~17:00	12名
⑲	X階段のペンキ塗り	10月4日(土)14:05~15:20	8名
⑳	写生会補助	9月29日(月)8:00~16:00	15名
㉑	演劇クラブの大道具作り	8月11日(月)10:00~12:00	6名
㉒	木材加工授業のTT	11月20日(木)8:30~10:30、21日(金)9:30~11:30	4名
㉓	落ち葉運び	11月18日(火) 2:00~2:45	21名
㉔	社会科の教材作りとTT	11月13日(木)13:00~15:00	5名
㉕	先輩の話	11月6日(木)~11月21日(金)	12名
㉖	リサイクル物の積み込み	12月20日(土)13:00~13:30	7名

(4) 長野県松本盲学校

①	小学部体育祭	6月13日(金)8:30~	5名
②	部活動「グランドソフトボール」	6月9日(月)15:50~	2名
③	部活動「バレーボール」	4月~6月 毎日 15:40~	5名
④	普通科キャンプ	7月22日(火)~23日(水)	1名
⑤	小学部秋の遠足	9月3日(水)	5名
⑥	小学部と旭小との交流遠足	10月14日(火)	4名
⑦	小学部体育の授業	10月~12月 月3校時、火4校時、木3校時	4名
⑧	中学部秋の遠足	11月4日(火)	5名
⑨	中・普合同体育	10月20日(月)~12月中旬 月の5校時	9名
⑩	中学部クラブ活動	11月7日(金)~2月 金6校時	5名
⑪	スケート教室 (幼・小・中)	1月13日(火)	5名
⑫	スキー教室 (小・中・普)	1月26日(月)	6名

(5) 国立信州高遠少年自然の家

①	案内標示板設置	5月24日(土)~25日(日)	3名
②	土はともだちー親子農業体験クラブー (3回シリーズ)	6月14日(土)~15日(日) 7月12日(土)~13日(日)、9月13日(土)~14日(日)	2名
③	花かおる高原につどう	6月28日(土)~29日(日)	3名
③	君は自然環境調査員ー子ども自然探検クラブー (3回シリーズ)	7月20日(土) ~21日(日)、9月27日(土)~28日(日)、2月28日(土)~29日(日)	7名
④	冒険への旅立ち (10泊11日)	7月25日(金)~8月4日(月)	2名
⑤	信州高遠フェスティバル	10月11日(土)~12日(日)	8名
⑥	わくわく信州高遠秋物語	10月25日(土)~26日(日)	4名
⑦	同上 冬物語	12月13日(土)~14日(日)	6名

(6) 長野県松本青年の家

- ①お城不思議探検－松本城の七不思議－
9月27日(土)8:30～16:00 4名
- ②アウトドアライフ・イン・OHMINE
10月25日(土)～26日(日)14:00～翌日15:30 2名
- ③めざそう！コスモポリタン－国際交流－
11月15日(土)～16日(日)9:00～翌日14:00 10名
- ④昔の遊びにチャレンジ！－竹馬・凧作り・こま回し－
1月24日(土)9:00～16:00 13名

(7) 長野県小諸青年の家

- ①レクリエーションのつどい 晩秋！浅間山麓周遊の旅
11月8日(土)～9日(日) 4名

(8) 長野県須坂青年の家

- ①峰の原高原ふれあいゴルフ基礎講座 9月7日(日)～8日(月) 3名
- ②秋の高原植物のつどい 9月20日(土)～21日(日) 3名
- ③クラフトのつどい 11月8日(土)～9日(日) 2名
- ④ベイシックスノーボード 2月20日(土)～21日(日) 4名
- ⑤青年スキーのつどい 1月17日(土)～18日(日) 4名

(9) 長野県阿南少年自然の家

- ①ふれあい自然体験キャンプ(短期) 7月12日(土)～13日(日) 13名
- ② 同上(長期) 8月2日(土)～7日(木) 17名

5. 「附属長野フレンドシップ体験」(通称「教育ボランティア」)の活動内容と参加学生数

(1) 附属長野小学校

- ①遠足の引率援助(1年生、古里公園) 5月9日(金)9:00～15:00 3名
- ②遠足の引率援助(2年生、千曲川川が-フロント) 5月9日(金)8:30～15:30 3名
- ③遠足の引率援助(3年生、旭山) 5月9日(金)8:00～16:00 3名
- ④遠足の引率援助(4年生、小布施) 5月9日(金)8:00～16:00 3名
- ⑤遠足の引率援助(5年生、山千寺) 5月9日(金)7:30～16:00 1名
- ⑥遠足の引率援助(6年生、松代町) 5月9日(金)7:30～16:30 1名
- ⑦遠足の引率援助(1年生、蚊里田神社) 10月8日(水)9:00～15:00 3名
- ⑧遠足の引率援助(2年生、臥竜公園) 10月8日(水)8:30～15:00 3名
- ⑨遠足の引率援助(3年生、菅平) 10月8日(水)8:00～15:30 3名
- ⑩遠足の引率援助(4年生、公共施設) 10月8日(水)7:30～16:00 3名
- ⑪遠足の引率援助(5年生、飯山) 10月8日(水)7:30～16:30 3名

(2) 附属長野中学校

- ⑫中学校教育研究会の参会者の案内援助 5月16日(金)7:50～11:00 8名
- ⑬サッカー部指導援助 都合のつく日 16:30～17:30 2名

(3) 附属養護学校

- ⑭ひまわりの会(職場報告会) 4月20日(日)13:00～15:00 1名

⑮ひまわりの会 (あすなろ山作業)	5月18日(日)13:00~15:00	4名
⑯ひまわりの会 (ボウリング)	6月8日(日)10:00~12:00	1名
⑰ひまわりの会 (水泳)	7月20日(日)13:00~15:00	1名
⑱ひまわりの会 (運動会)	9月13日(土)8:00~15:00	1名
⑲ひまわりの会 (ディスコ大会)	1月16日(日)10:00~12:00	1名
⑳ひまわりの会 (クリスマス会)	12月14日(日)10:00~12:00	1名
㉑ひまわりの会 (ボウリング)	1月18日(日)10:00~12:00	1名
22運動会種目援助	9月13日(土)8:00~12:00	4名
23公開研究会ステージ発表補助・着替え補助	11月1日(土)	2名

学生が創造する「信大YOU遊サタデー」

中村 典史（信州大学教育学部社会専攻 4年）

e941109@edu.shinshu-u.ac.jp

佐々木美恵（信州大学教育学部家庭専攻 4年）

e943802@edu.shinshu-u.ac.jp

〈キーワード〉学生主体、キャプテン、スタッフ、遊学プラン、出張YOU遊サタデー

1. なぜYOU遊サタデーをやるのか

学生がYOU遊サタデーに参加する理由は様々であるが、現場へ出た時の経験を積みたいということが大まかな共通項として挙げられる。しかしその具体的な経験は立場により様々で、したがって参加する意義も違ってくるのである。私は2年生からYOUサタに参加して、アシスタントスタッフ、キャプテン、実行委員長と経験し、それぞれどんな役割と意義の違いがあるのか見てきた。そこでそれぞれの立場から見たYOUサタの意義について述べていきたい。

まずアシスタントスタッフであるが、これはキャプテンの開いている講座の手伝いをするだけのものである。したがって講座の当日突然現れて何かやらせてくれとあってアシスタントスタッフとなることも可能である。しかしアシスタントスタッフとしてYOUサタに参加するだけでも、十分意義はあるのである。つまり子どもと関わりたいとか、子どもとの接し方を勉強したいという人にとってはアシスタントスタッフとしてスタッフに参加するだけで目的は達成されるのである。

次にキャプテンであるが、アシスタントスタッフとキャプテンの違いは何ととっても講座を仕切るかどうかということである。キャプテンは講座を開きたいと言ったばかりに様々なことを要求される。2時間という講座の中で何をやるかという流れをかけた遊学プランの作成に始まり、その遊学プランを読み合わせてお互い意見を出し合うキャプテン会議へ出席しなければならない。受付が始まれば参加者の名札づくりをしたり、定員がいっぱいで希望の講座に入れなかった子どもには電話で連絡を取り別の講座に移ってもらうなど参加者の調節の役目も担う。つまりアシスタントスタッフと比べると、その役割はいっきに拡大し、それに伴い責任も出てくるのである。

しかし講座を開いていく中で、前回の問題点が克服されたり、子どもの予想外の動きの中で新しい発見があったりと、キャプテンとして講座を考えていなければ得られないものである。また講座を考え、子どもの前で2時間仕切っていくという経験は将来必ず役に立つと考えられる。

最後に実行委員長を含む本部¹であるが、本部にはまたキャプテン、アシスタントスタッフにはない役割と意義がある。その第1は組織の運営を考えられる、ということである。ス

¹ 図1参照

スタッフへの連絡や意識の徹底をどうするかという問題から、各講座の相談、備品などの整理、受付のシステムづくりなど、キャプテン、アシスタントスタッフが円滑に講座を開けるような体制を作っておく必要がある。そうした役目を担うのが本部であるため、YOUサタ当日は子どもと接することができない人も出てくる。それでも私は、80人にもものぼるスタッフをまとめるということに携われたということが貴重な経験であったと考えている。

このようにそれぞれの役割からYOUサタの意義について考えてみたが、人それぞれ意義を感じているからこそ、毎回80人近くの学生が自主的に参加してくれるのである。来年本部に携わる人、また他大学でも同様の活動をしてみようという人は、そのことを意識し、常に学生同士で問い掛けていく必要がある。(中村 典史)

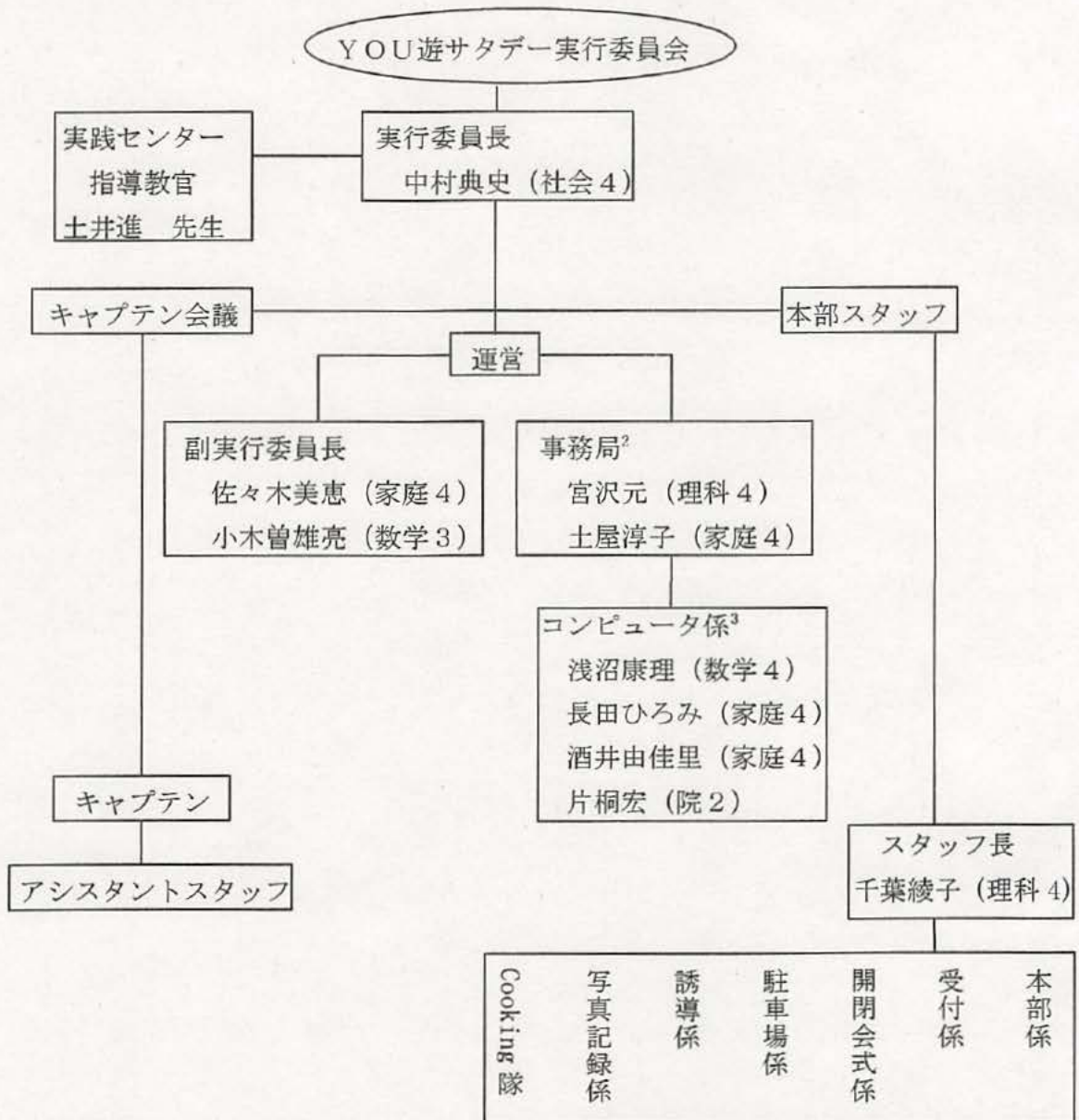


図1：実行委員会組織

² 備品係、会計係などを兼任し、物的側面を担う。資料9参照

³ ホームページ(URL <http://cert.shinshu-u.ac.jp/st/you/>)、YOUサタ通信の作成などに携わる。

2. YOU遊サタデー当日までの活動内容

ここでは10月31日(土)にYOU遊サタデーを行うと仮定して、それまでにどんな準備が必要かを書き出した。

9月10日(木)	講座募集【毎週木曜日お昼休み20分間の定例会で連絡、YOUサタ通信などの配布物を適宜用意する】	
⋮		
24日(木)	講座決定、会場決定	
25日(金)	各マスコミへ講座一覧発送	
⋮		
10月9日(金)	キャプテン会議(遊学プラン用意)*資料1・2、各講座スタッフ決定	
10日(土)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 当日の講座の流れや子どもとの関わり方などを書いたもの(遊学プラン)を中心に、キャプテン間でそれらを客観的に検討しあい、より良い講座を開けるようにするための会議。 </div>	
11日(日)		
12日(月)		
13日(火)		
14日(水)		
15日(木)		
16日(金)		
17日(土)		受付(講座一覧・講座紹介・申込方法返送、ゆうゆうカード返送、名札・終了証・領収証作成)*資料3・4・5・6・7
18日(日)		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 参加者本人との細かなやり取り(電話など)を通して、各参加者が当日楽しく参加できるように準備をする期間。 </div>
19日(月)		
20日(火)		
21日(水)		
22日(木)	スタッフマニュアル配布*資料2・3・8・9、備品を講座ごとに配布	
23日(金)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> スタッフ間での共通した確認事項(当日の流れや意識など)をおさえ、YOUサタが円滑にすすむようにするための冊子。 </div>	
24日(土)		
25日(日)		
26日(月)	みんなでやろう DAYS (各講座準備・予備実験、各本部係準備)	
27日(火)		
28日(水)		
29日(木)	前日設営(各会場・準備、本部テント設営、打ち合わせ、Cooking 隊)	
30日(金)		
31日(土)	YOUサタ当日 看板・受付設営、各会場後片付	

表の中にあげた作業以外に当日までに行なうこととして、次のものが挙げられる。

- ・ HOW TOサタデー作成⁴ *資料 11・12
- ・ アンケート（参加者用・キャプテン用・スタッフ用）作成⁵ *資料 13
- ・ スタッフ用名札作成 ・ 会場案内の貼り紙作成
- ・ 看板作成 ・ 雨案作成
- ・ 開閉会式内容検討・準備 ・ 救急箱・マイク・テントなど借用
- ・ 昼食を生協へ依頼

3. 実践から学んだこと

(1) 子どもの募集方法

子どもの募集方法については試行錯誤の連続であった。新聞社に掲載の依頼をし、加えて学校をまわって資料を配ったり、児童センターをまわったりしたが、効果的な方法が見付からなかった。しかし12回の終わった後のアンケートに「次回の案内の発送手続きを今回したい」⁶という意見があった。そこで13回では次回の資料請求のための用紙⁷を配布した。また、12回では対象学年が高学年に偏っていたため、低学年の選択の余地が狭まり、結果として参加者減につながった。そこで、13回では対象学年設定の理由を明らかにし、できる限りどの年代の人も参加できるように配慮した。

(2) 会場の整備

11回の会場は松本キャンパスであったがOBの方から会場の汚さについて指摘があった。確かに子どもの目に触れることを考えるとたばこの吸い殻などはかたづけたほうがいい、ということで、12回、13回は会場周辺のゴミをかたづけた。さらに開会式場も飾り付けをして、YOUサタの雰囲気盛り上げた。

(3) 開会式の内容面

開会式の始まるまで、早く来た子どもの中には30分近く待つ子もいる。そうした子どもを飽きさせないため、開会式前の前座を考えた。そのおかげで開会式前にはすっかり和んだ雰囲気ができあがっていた。

(4) 子どもに接する姿勢

11回の開会式後、迎えが来るまで一人でいる子どもがいた。幸い迷子や事故はなかったが、安全という観点から私たちは、子どもひとりひとりが帰りの車に乗り込むまでしっかり見送ろうということを徹底することにした。それに対して12回の保護者のアンケ

⁴ HOW TOサタデーとはその日の講座で作ったものなどの作り方を掲載した冊子で、家庭でも楽しんでもらおうという主旨で作られている。資料11参照

⁵ アンケートは毎回キャプテン、スタッフ、参加者に書いてもらい、次回の参考にしている。参加者のものは講座の中で配布し、後日郵送してもらう。

⁶ 参加者アンケート、ア参照

⁷ 資料10参照

ートに「最後まで見送ってくれて助かった」⁸ という内容のものがあった。

(5) 1年生との連絡⁹

11回の反省で松本にいる1年生に対して安全面や子どもと接する時の意識について、コンセンサスが取れていないという指摘があった。YOUサタに初めて参加するスタッフに、「ただ自分が楽しいだけではYOUサタは成り立っていかない」ということが、徹底されていなかったのである。そこで12回からは1年生スタッフにも事前に長野に来てもらい、細部にわたる打ち合わせを行った。

4. 出張YOU遊サタデー¹⁰の意義と問題点

出張YOU遊サタデーを行うきっかけは、地域の皆さんからの要望にあった。キャンパスで行っているYOUサタに関心を持ってくださった地域の皆さんからのお誘いは、嬉しいものであり、こちらの可能な範囲で、小規模ではあるがその声にお応えしていこうという方針を決めた。それは、「YOUサタは地域の皆さんと作り上げていくものだ」という考えがあったからである。また、そこには、「YOUサタを更に広い範囲に広めていきたい」「キャンパスでのYOUサタだけでなく、自分たちのフィールドを越えた新分野に挑戦してみたい」という私たちの意見もあった。

以上の点に、出張YOUサタの意義を感じ、今期は3回の出張YOUサタを行うことにした。このような中で行うYOUサタは、その場の状況に応じて柔軟に対応出来るようになったという点や主催者側の皆さんの意見をお聞きしたり、ノウハウを学ぶことができたという点で勉強になった。

その一方で実際の活動をとおして、さまざまな問題も見えてきた。まずは、イベントを行う主催者側の意図の中で、YOUサタがどう関わっていくべきかが、大きな問題であった。主催者側との数回の連絡の中で、双方の意見をまとめていくのは大変なことであったし、備品準備の調整なども難しかった。また、会場を細部に至るまで把握できなかつたり、参加者が確実に把握しきれない分、当日に予定が急きょ変更するということが少なくなかった。このように準備不足とスタッフ内の連絡不足には、安全面からいっても不安を感じた。更に、この出張YOUサタを行う分、キャンパスで行うYOUサタに影響が出ることは決してあってはならないことである。しかし、その可能性がないとはいえないことに、今後どこまでこの出張YOUサタを行っていくかを考える必要を感じた。 (佐々木 美恵)

5. 参加者及びスタッフのアンケート

(1) 参加者アンケートより

ア 次回の案内を今回手続きをして送ってもらうようにはできませんか。

⁸ 参加者アンケート、イ参照

⁹ 信州大学では1年生が松本キャンパスで生活しているため、木曜日に行っている定例会などに出席してもらう訳に行かないため、打ち合わせがスムーズに行かなかった。

¹⁰ 出張YOU遊サタデーは、新聞などでYOUサタの存在を知り、学校や公民館から学生の派遣依頼が来たことが始まりである。

イ 学校の先生とは違う年代のお兄さん先生達との交流が楽しくていい経験になった様です。朝から帰り迄きちんと先生がついて下さったので、子供も私も安心できました。午前・午後だけでなく、2つの講座に参加できる様にして欲しいです。子供だけでなく母親にとっても”今どきの大学生”を知るいい機会でした。子供達にもやさしく、おばさんにも親切で何となくうれしくなった1日でした。

(2) スタッフアンケートより

ア 練習で自分でやってみたときは、結構難しいなあと感じていたのですが、今日子どもたちはすすいやっていて、すごいなあと感心してしまいました。子どもから教わるということはこういうことなんだと身をもって感じました。今回のしゃぼん玉でいいなと思ったことは、子どものやりたいことをやりたいようにやらせてあげたことです。しゃぼん玉の講座なのだから、しゃぼん玉をやるのが当たり前といえば当たり前なのですが、「あきてしまったり、しゃぼん玉をやりたくないという時はその子のやりたいようにやらせてあげて」というキャプテンの方針に感心しました。(女性スタッフ・3年)

イ 修了証を渡す時は、みんな頑張ってくれてありがとうという感謝の気持ちと、さみしさがあつた。やはり、子どもがいての講座なので、31名(2人大人含む)の人達がスライムの講座に集まってくれて本当にうれしかった。(男性キャプテン・3年)

ウ かたづけをやらない子に対して、どのように接すればよいかわからず、名前を呼ぶことしかできませんでした。しかし、このような問題も、YOU遊サタデーをやらなければ経験できなかったもので、これも一つの成果だとうれしく思います。(男性スタッフ・4年)

エ スタッフと子供は仲良くなれたが、子供同志が、なかなか打ちとけていないみたいなのが、残念でした。(女性スタッフ・1年)

6. 本年度の「信大YOU遊サタデー」

(1) 主催：「信大YOU遊サタデー」実行委員会

信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター

(2) 実施日時：

第11回-1997.5.24(土) 松本キャンパス

第12回-1997.9.27(土) 長野キャンパス、長野県自然保護研究所

第13回-1997.11.8(土) 長野キャンパス

出張YOU遊サタデー

1997.9.13(土) 長野県社会部主催 ちゃれん児プラザ21 長野県立歴史館

1997.10.11(土) 国立信州高遠少年自然の家主催 高遠フェスティバル

国立信州高遠少年自然の家

1997.11.9(日) 長野県教育委員会佐久教育事務所主催 乙女の森フェスタ

小諸市文化センター

資料 1

第 (13) 回 信大YOU遊サタデー遊学プラン

講座名	ー本日 わたあめ屋さんー	平成9/11月8日(土) (午前・午後・終日)
キャプテン	宮下 聡 (理科 専攻112年)	アシスタントスタッフ数 名 参加者数 名
指導教官	梁 教官	使用教室 教室

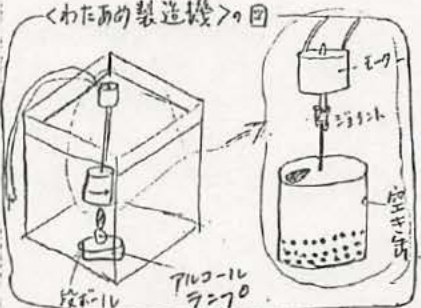
何をするのか (具体的に)

- ・空き缶にシャフトをつけ、モーターと連結し、缶が回転するようにする。缶の中にざらめを入れ、アルコールランプで缶を熱し、溶けたところで、回転させ、わたあめをつくる。

どんなことを伝えたいか (キャプテンのわがい)

- ・手軽に手に入る材料を使って、楽しいことができること。
- ・仲間と助け合って作業することの大切さ。・けがをしないように工夫して、作業すること。

講座の流れ

活動内容	子どもの動き	スタッフの支援	時間	備考
①自己紹介	・グループに分かれる。 ・自己紹介をしながら仲間を確認。	・キャプテン→スタッフ→子どもの順に行く。 ・緊張している子どももいると思うので、リラックスさせるために、明るい雰囲気。	15分	・大きな声で。
②作業手順の説明	・今日、これからどんなことをするのか分かる。	・キャプテンが、作業の概要を説明する。 ・スタッフがどのグループを担当するか確認。	5分	・手順は作業を進めながら順次説明するので、ここに簡単に。
③作業開始	(1) アルミ缶の下部3~5cmに小さな穴をたくさん開ける。 (2) アルミ缶にシャフトをつける。 (3) シャフトとモーターをつなげる。 (4) モーターを電池につなげる。	・スタッフは自分の担当するグループを責任を持って支援する。安全に最も留意する。 ・(1)の穴を開けるのは、針が針通しを使う。手も怪我しないように、支援する。	60分	・作業を左の缶に分けて段階的に進める。 ・グループの足並みがそろっているようにする。
④わたあめをつくる	・ざらめを缶の中に入れ、アルコールランプで熱し、溶けたところで、モーターのスイッチを入れ缶をまわす。	 <p>・火傷をしないように支援する。</p>	25分	・缶がとて熱くなるので、火傷に注意。
⑤後片付け	・ゆがいて後片付けする。	・道具を元に戻す。 ・全員で行う。	10分	
⑥終了証	・終了証を返す。 ・わたあめづくりを思い出す。	・今日の成果を認め合う。	5分	

・使用する道具 (例: セロテープ2巻)

釘、かなづち、針通し、ドライバー、ペンチ、ドライヤー、ざらめ、ダンボール
アルコールランプ、バケツ、ぞうきん

・希望する教室 (例: 水が使える教室)

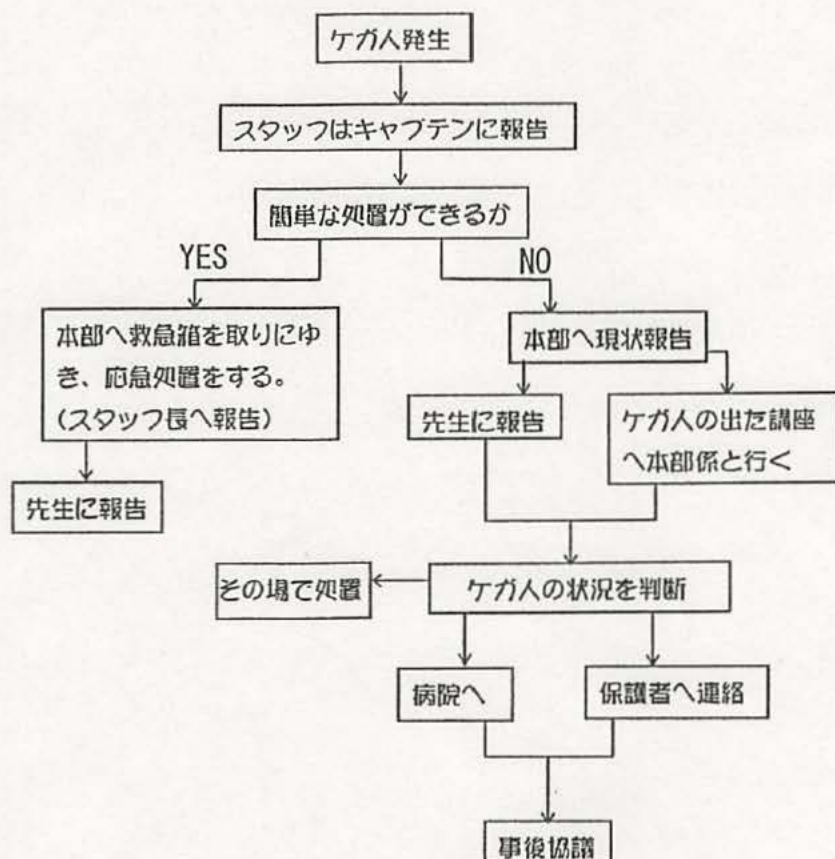
水が使える教室

資料 2

キャプテン・スタッフへの注意事項

- ① 安全第一 絶対ケガ人にならないようにしてください。万一、ケガ人が出た場合には、非常事態マニュアルに従い、迅速かつ冷静に対応してください。その際は、他の子どもが動揺しないように配慮して講座を運営してください。また、どのような状況が起こるか分からないので、その時々に応じ、臨機応変に対処してください。
- ② 一期一会 参加者には笑顔で気持ちよく接して下さい。最後に参加者が笑顔で帰れるように、そして今日の出会いが次の出会いにひろがるように、素敵な一日にしましょう。
- ③ 用意周到 キャプテンとスタッフの打ち合わせ(遊学プラン・備品・時間配分など)をしっかりしておいて下さい。
- ④ 時間厳守 特に講座終了時間(午前 11:30、午後 4:00)は厳守し、閉会式が時間通り行えるよう注意して下さい。
- ⑤ 整備美化 来た時よりも美しくしましょう。特に後片づけに時間のかかる講座は、終了時間に間に合うよう打ち合わせておいて下さい。

非常時(ケガ人発生時)の流れ



資料 3

第 13 回信大 YOU 遊サタデー (11 月 8 日) 講座一覧表

No.	講座名	キャプテン	対象学年	午前	午後	定員	材料費、持ち物、服装
1	タオルマジック ～タオルを使って動物をつくろう～	小倉佐知子 (家3)	小4～一般成人	○		10	さいほう道具、500円
2	フィルムロケット ～えっ!!フィルムケースがとぶの?～	登坂武人 (社3)	小1～小4	○		15	はさみ、体育館シューズ、200円
3	宝さがし (ネイチャーゲーム)	小池裕介 (実4)	小3～一般成人	○		20	なし、カップ (雨天のとき)
4	こまであそぼ!	竹下雅道 (数4)	小1～おじいちゃん おばあちゃん	○		20	なげごま (持っている人)、100円 (こま を持っていない人)
5	みんなでジャンプ	佐野美佳 (保4)	小4～中3	○		20	運動できる服装、体育館シューズ、タオル、 休憩の時ジュースを買うお金
6	でっかいでっかい しゃぼん玉をつくろう	金井弘子 (理3)	なし	○		40	汚れてもいい服装
7	いい紙つくろう! 世界でたった1枚の自分の紙を。	真島紀章 (数3)	小1～一般成人	○		10	新聞紙3日分、タオル、400円
8	モコモコデンキパン	清水麻紀子 唐木紫織 (家3)	小1～一般成人	○		12	牛乳パック (1L)、はさみ、エプロン、 三角巾、200円
9	作ってうれしいカレンダー	阿部利恵 (実3)	小1～小4	○		15	はさみ
10	天まであがれぼくのたこ	小木曾雄亮 (数3)	なし		○	10	はさみ、竹ひご2本 (1mくらいの太いも の)、体育館シューズ
11	これで私も パパパPUFFYでイイ感じ!	山木隆行 (数4)	なし		○	10	ジーパン着用、無地のTシャツ (長袖可)、 古着
12	気分はめいたんてい	平林徹 (数3)	なし		○	20	動きやすい服装、えんぴつ、カップ (雨天 のとき)
13	つくってみよう銀の鏡	中條悟 (理4)	中1～一般成人		○	5	汚れてもいい服装
14	スラスラスライム	吉沢麻衣子 (国3)	なし		○	30	汚れてもいい服装、200円
15	一本日わたあめ屋さん	宮下聡 (院2)	小学生		○	15	アルミ缶、軍手、200円
16	からカラ・ア～ト	森下房枝 (家3)	小1～一般成人		○	10	筆記用具
17	あけてびっくり! 飛び出す絵本作り	武末裕子 (美2)	なし		○	10	はさみ、カッター、のり、鉛筆 色鉛筆、クレヨン、マーカーなど
18	永久ゴマをつくろう	柚木亘 (理4)	中1～一般成人		○	5	300円

#裏面もご覧ください

資料 3

信大YOU遊サタデー実行委員会からのお願い

- (1) 信大YOU遊サタデーは雨天決行ですが、一部の講座で使用教室（場所）などが変更になります。
- (2) お申し込みの際は午前か午後のどちらか一つの講座でお願いします。講座によっては定員いっぱいまで締め切りとさせていただきますので、講座は第2希望までお書き下さい。お申し込みは1人につき1枚でお願いします。
- (3) 大学構内の駐車場には限りがありますので、できる限り公共の交通機関をご利用ください。長野駅からバスでお越しの際は「若槻団地經由若槻営業所行き」「西条、若槻営業所行き」「宇木行き」のいずれかにご乗車いただき「信大入口」で下車してください。運賃は大人150円、子ども80円です。下車した後は大門交差点で西へまがり約500メートルほどです。
- (4) 当日は、大学周辺および大学構内に「黄色い腕章」をつけた学生を配置し、誘導いたします。お困りの点がございましたら、遠慮なくお尋ね下さい。
- (5) 午後の講座終了後、昼食に信大内の生協食堂をご利用いただけます。
- (6) 欠席の場合には、当日までに、必ず信州大学教育学部附属教育実践研究センター（電話番号：026-237-6127〈留守電あり〉）までご連絡下さい。
- (7) 保護者の方は参加していただいても結構ですし、送り迎えだけでも結構です。安全には十分配慮いたしますので、安心しておあずけ下さい。
- (10) ご家族、お友達と一緒に申し込みの際も、ひとりにつきハガキ一枚で申し込み下さい。

井お申し込み方法

- ①参加費/100円（傷害保険料と教材費）、また講座によっては別途材料費が必要になる場合があります。
- ②日程/[午前の部] 8:30 受付 9:00 開会式 9:30~11:30 講座 11:40 閉会式 12:00 解散
[午後の部] 13:00 受付 13:30 開会式 14:00~16:00 講座 16:10 閉会式 16:30 解散
- ③申込期間/10月20日~11月4日
- ④往復はがきに郵便番号、住所、氏名、(ふりがな)、電話番号、学年、参加を希望する講座名を記入し、下記のあて先までお送りください。左図参照→
- ⑤あて先/〒380 長野市西長野6-1-0 信州大学教育学部実践センター
信大YOU遊サタデー係 TEL/FAX: 026-237-6127

	ゆうびんばんごう	
返信	じぶんのな みえ	じぶんの じゅうしよ
		① なまえ(ふりがなもつけて)
		② ゆうびんばんごう・じゅうしよ
		③ ぜんわばんごう
		④ がくねん
		⑤ さんかしたいこうざ
		だい1きぼう
		だい2きぼう
		だい3きぼう

資料 4

No. 11

講座名 てっかい てっかい
シャボン玉をつくらう

講座紹介



資料 5

ゆうゆうカード (入場券)
YOU遊サタデーへのお申し込みありがとうございます。
あなたが参加する講座は次のとおりです。
当日は忘れ物をしないように気をつけてお越しください。
それでは、会場で会えるのを待っています。

講師氏名

キャプテン ()

持ち物

ゆうゆうカード (入場券) ……このカードです
100円 (傷害保険料、参加費)、靴を入れるビニール袋

開催日 日寺 5月24日 (土) (雨天決行)

受付 12:30~12:50

終了 16:10(予定)

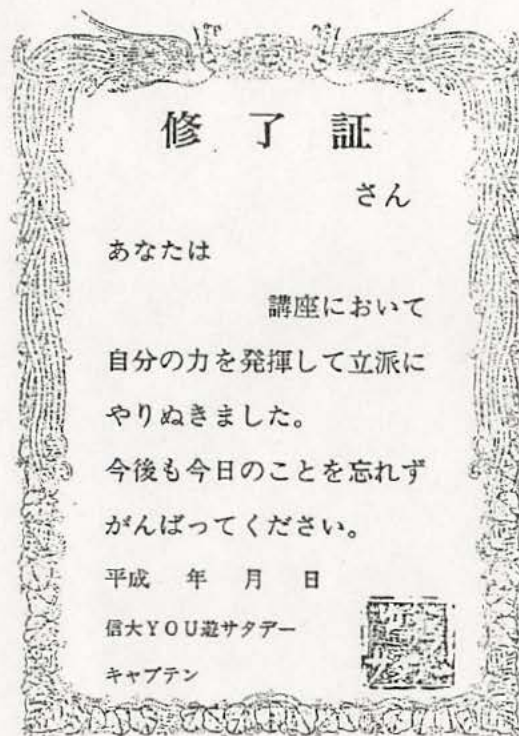
※欠席の場合は、必ず前日までにご連絡ください。

当日は遅れまいようお願いいたします。

なお、教材費などにつきましてはお持ちの少ないよう未領
い致します。

〈連絡先〉〒380 長野市西長野6-10
信州大学教育学部附属教育実践センター
信州大学YOU遊サタデー係
TEL/FAX 026-237-6127

資料 7

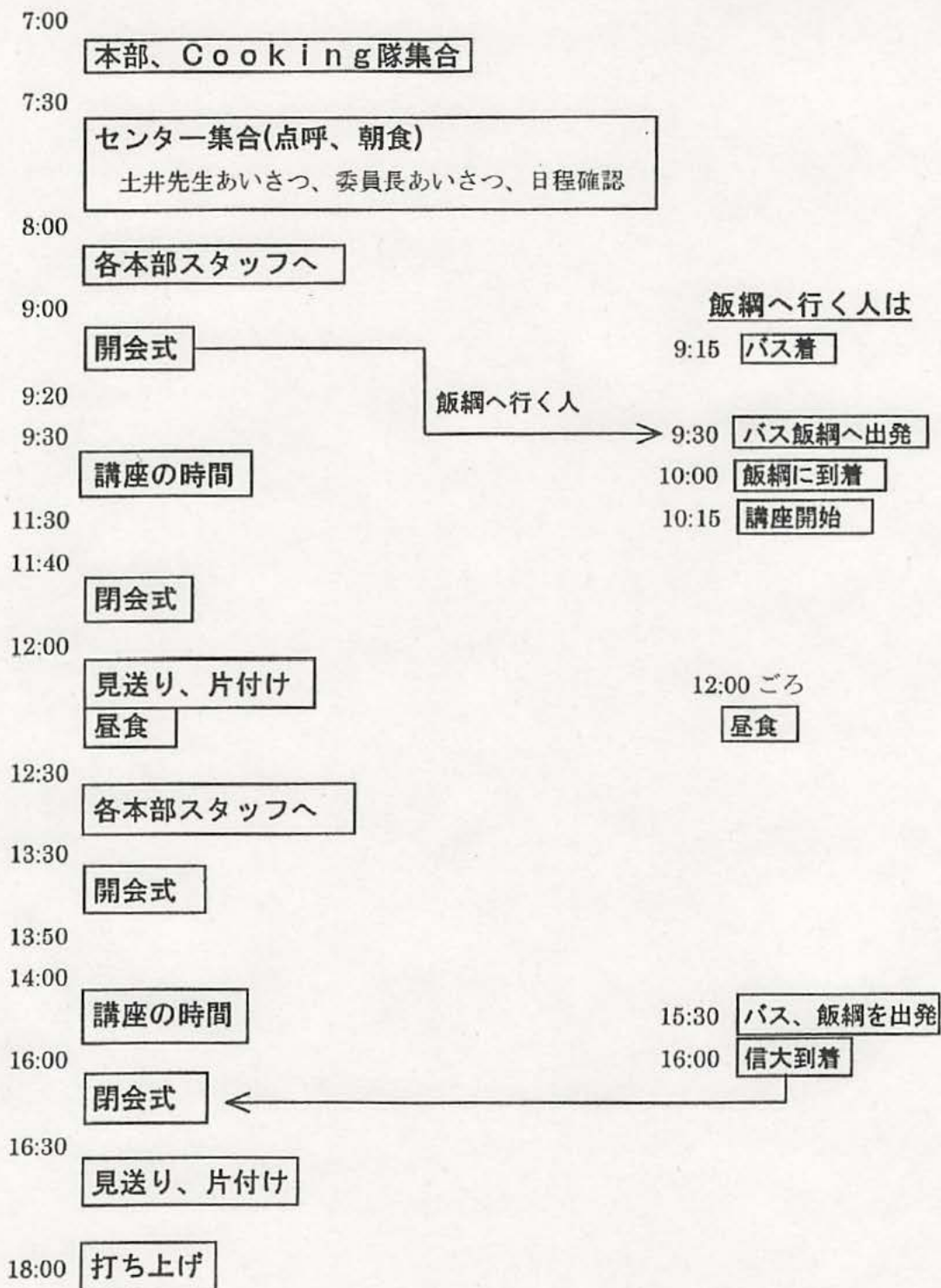


資料 6

なかむら のりふみ
中村典史

資料 8

当日予定



資料 9

【午後】

講座スタッフ

NO.	講座名	キャプテン	アシスタントスタッフ
11	ブーメランを飛ばそう	柚木亘(理4) 長谷川直紀(理4)	佐野美佳(保4)
12	ガチャガチャ演奏会 ～打楽器を作って鳴らそう～	小木曾雄亮(数3)	井上千昌(数3) 青柳友美(聴講生) 那須良寛・ 山田理恵・齋藤健美(教1)
13	ステンシルって何? ～君もやってみよう～	土屋淳子(家4)	増田紀子・高戸美佳子(家3)
14	モコモコ デンキ パン	唐木紫織(家3) 清水麻紀子(家3)	大島智子(音3) 源城拓(理学4)
15	世界の言葉と 世界の遊びを楽しもう	北澤勝規(教官) 矢澤由紀子(英4)	岡田大輔(理4) 池雅子(英3) 三沢恵美(院 2) 竹下雅道(数4) 白畑陽子(障2) 渡辺美 雪・花岡佑美・早川嘉美・波間美咲・土屋亜也・ 表志帆・高梨彰央・坪井郁恵・小林葉穂子・平 林恵奈(音2) 岡部真美・矢沢恵美子(国際2) 伊東裕美(幼4) 永田勝嗣(数4) 福島章浩(技 2)
16	いじめ・不登校フォーラム '97秋	北島茂樹(数4)	岡田和泉(音4)
17	銅が金になる!? 鍍金術の秘密	中條悟(理4)	桃沢啓(理4) 下村晴彦・小市有希(理3)
18	楽しく作ろう 簾かご作り	澤田奈奈(理3)	溝口久仁子(社4) 井口佳美(家3) 武末裕子 (美2)
19	カンカンアイスクリーム	長田ひろみ(家4)	吉池志帆(社4) 齊藤聖子(家3) 登坂武人(社 3) 白井裕莫・深澤典子(家1)

本部スタッフ

係名とその活動内容	スタッフ名
スタッフ長【全体の支持にまわる】	佐々木美恵(家4)
受付係【参加者の受付を行う】	◎真島紀章(数3) 11、源城拓(理学4) 16、岡田和泉(音4) 12、井上千昌(数3) 17、小市有希(理3) 13、高戸美佳子(家3) 18、溝口久仁子(社4) 14、大島智子(音3) 19、吉池志帆(社4) 15、池雅子(英3)
駐車場係【車を誘導する】 13:35 まで持ち場にいる。帰りは 16:20 ごろ持ち場につく。	◎登坂武人(社3) 桃沢啓(理4) 永田勝嗣(数4) 下村晴彦(理3) 高梨彰央(音2) 福 島章浩(技2) 岡部真美・矢沢恵美子(国際2) 渡辺美雪・花岡佑美・平 林恵奈(音2) 伊東裕美(幼4)
誘導係【参加者を誘導する】	◎平林徹(数3) 佐野美佳(保4) 井口佳美・齊藤聖子(家3) 三沢恵美(院2) 早川嘉 美・波間美咲・土屋亜也・表志帆・坪井郁恵・小林葉穂子(音2) 那須 良寛・山田理恵・齋藤健美(教1) 白井裕莫・深澤典子(家1)
開閉会式係【会場の準備をする】	◎土屋淳子(家4) 竹下雅道(数4) 岡田大輔(理4) 白畑陽子(障2) 武末裕子(美2) 青柳友美(聴講生)
写真・記録係【写真・ビデオで撮影 する】	◎成田英直(理4) 浅沼康理(数4)
本部係【当日受付、テントで待機】	中村典史(社4) 佐々木美恵(家4) 真島紀章・平林徹(数3)
Cooking 隊【前日=スタッフの朝食 準備、当日=朝食配布】	◎佐々木美恵(家4) 吉池志帆・溝口久仁子(社4) 井口佳美・高戸美佳子(家3)
前日設営係	◎中村典史(社4) 全員
備品係【当日までの備品管理、講座 後備品回収】	宮沢元(理4)
会計係【会計】	土屋淳子(家4)
飯綱本部係【救急、連絡、写真など】	宮沢元(理4)

資料 10

お知らせ

いつもYOU遊サタデーに参加していただき有り難うございます。今回のYOU遊サタデーはいかがでしたか？

ところで、第12回のアンケートに「次回のYOU遊サタデー申込案内の資料請求手続きを事前にしておきたい」というご要望がありました。そこで、ご希望の方はこちらから第14回の資料をお送りしたいと思います。つきましては、以下の申し込み用紙に必要事項をご記入のうえ、80円切手を同封し、アンケートとともにお送りください。

.....キリトリ.....

住所 〒

電話番号

氏名

資料 11

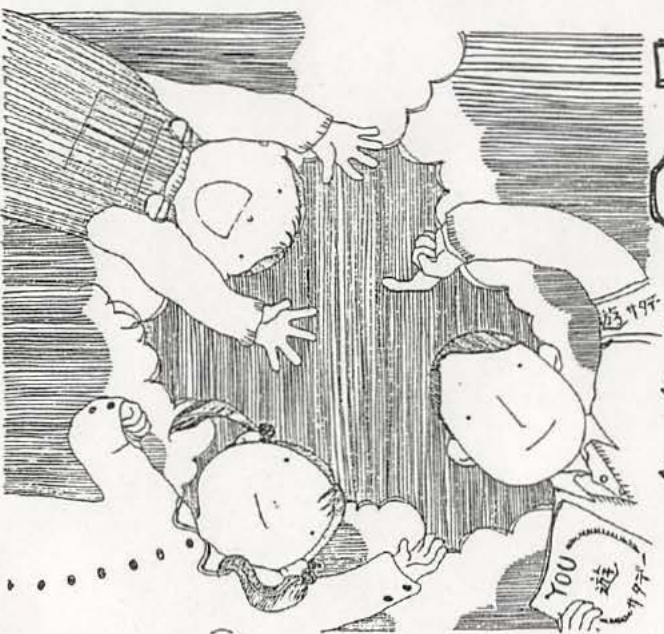
HOW TO サタデー

この「HOW TO サタデー」は、
YOU遊サタデーの講座の中で、
御家庭や地域でも手軽にできる
講座を紹介したものです。ぜひ
御活用ください。

第4期 信大YOU遊サタデー

実行委員会

発行日 1997.9.27



宇宙からやって来た

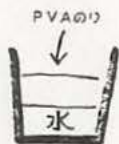
Sura Sura スライム君

よういするもの

- ☆PVA せんたくのり
- ☆四ホウさんナトリウム
- ☆みず
- ☆ビニールコップ 2コ
- ☆わりばし

さあ スライム君をたんじょうさせよう!

① ビニールコップに、おみずをいれる。



② PVAせんたくのりを おみずと おなじりょういれる。

※おみずは、PVAせんたくのりより すこしおおくいれてもいいよ。

水：PVA洗濯のり=1：1

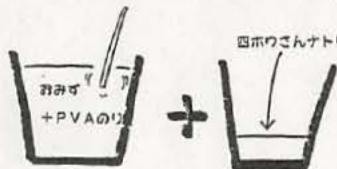
③ 色をつける。よくまぜてね。



※色は、しよくべに(あか、きいろ、みどり)、えのく、チョークのこな、などでも色がつくよ。

いろんな色をつくってみよう!

④ きれいにいろがついたら、四ホウさんナトリウムすいようえきをいれて...

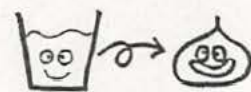


※四ホウさんナトリウムは、みずにとがして、とけなくなるまでとがしてね。

四ホウ酸ナトリウム飽和水溶液は、コップの1/4

⑤ かたまったら、コップからだして まるめる。

※バたバたは、四ホウさんナトリウムをすこしづつけるとなくなるよ



スライムくんの できあがり

お家の方へ

スライムの保存法

…ビニール袋や、冷凍用バック袋にいれて水分を保てるようにして下さい。また、袋のままおいて置いてもいいし、冷凍してもかまいません。

スライムの利用法

…スライムとして遊ぶほかに、夏の暑い日の保冷剤、熱さましのアイスノンとしてご利用下さい。

スライムの処理法

…可燃ゴミとして捨てて下さって結構です。また、乾燥させて捨てたり、土に埋めてしまっても問題ありません。(ビーズが入っていたりするスライムは、土に埋めないで下さい。)

※四ホウ酸ナトリウム水溶液は、ペットボトルなどの底に残るぐらいいに水に混ぜ、飽和状態(もうそれ以上溶けない状態)にしてください。

※食紅は、ほんのすこしでかなり色が付きまますので、気を付けて入れて下さい。

※四ホウ酸ナトリウムを購入する場合は、薬局で、「ホウ砂」と頼んで下さい。

※小さいお子さんが、口に入れてしまわないように注意して下さい。

資料 13

平成 9 年度佐久地区家庭教育のつどい実施要項

佐久教育事務局

<テーマ> 「豊かな心を育む子育てをどう進めるか」～父親の家庭教育参加を考える～

1 趣 旨

子育てに関する不安や悩みを持つ親を対象に、家庭教育に関する学習の機会の提供、親子の共同体験並びに父親の家庭教育参加支援等とおして、家庭の教育力の充実を図り、次代を担う子どもたちの育成を支援する。

- 2 主 催 長野県教育委員会
 3 共 催 小諸市教育委員会 小諸市PTA連合会 小諸市保育園保護者会連合会
 4 後 援 小諸市
 5 主 管 家庭教育のつどい実行委員会
 6 日 時 11月9日(日) 午前10時～午後3時
 7 会 場 小諸市文化センター(11月小諸市公民館919)

- 8 参加対象者 <父親を考えるフォーラム> 午前
 乳幼児・児童生徒及び保護者、保育園・学校関係者、育児サークル関係者
 市町村教育委員会家庭教育担当者
 <家庭教育を語る会> 午後
 PTA関係者、乳幼児の保護者、学校関係者、保育園・幼稚園関係者、
 育児サークル関係者、市町村教育委員会家庭教育担当者

NO	活 動	指導者・担当スタッフ	備考(材料道具準備など)
①	ピエロさんの風船細工	おうちで 大井 悠夫	風船は用意してあります。
②	ハイパー糸電話	にこにこ塾 佐藤 恵子	材料は用意してあります。
③	木で作ろう	小諸市木造匠会 大工 和之	材料、道具は用意してあります。
④	自転車に乗れた記念日	友誼クラブ	日本記念日協会認定のコース、写真撮影
⑤	天井まで上がる飛行機 Uコン飛行機の体験体験	航空飛行機アサナマ 占部 じー フジスタッフ	材料は用意してあります。 三角定規とものさし持参
⑥	パパは僕しくて力持ち	アイアイクラブ	親子で参加
⑦	魚つりゲーム	上田女子短期大学 レクリエーション研究会	材料、道具は用意してあります。
⑧	おりばしでっぼう		
⑨	宇宙生物対スライム	信州大学YOU遊サタデー	材料は用意してあります。
⑩	でっかいでっかいシャボン玉		
⑪	お父さんバンドの演奏 <道草草野ひとし>	おとととバンド 大井 悠夫 大井 悠夫	
⑫	火おこし体験	中村 幸司 佐田 徳光	火起こし機3台借入

出張 YOU 遊サタデー in 小諸

当日日程

- 7:30 センター集合
 8:00 前 出発
 9:00 小諸着
 9:10 準備開始(打ち合わせ、各講座準備、会場飾り付け、名札作り)
 10:00 開会式
 10:30 頃～12:00 頃 講座
 12:00 頃～14:00 頃 片付け、昼食
 14:30 小諸発
 15:30 長野着

スタッフ一覧

No.	講座名	キャプテン	スタッフ
1	宇宙からスライムが やってきました	佐々木 典恵 (家4)	片桐 宏 (院2) 土屋 洋子 (家4) 浅沼 康理 (教4) 桐山 潤 (園4) 小木曾 雄亮 (教3) 藤城 拓 (理學4)
2	でっかいでっかい シャボン玉をつくらう	山田 尚美 (家3)	中村 典史 (社4) 谷川 美佳 (家3)
3	フィルムロケット	登坂 武人 (社3)	美斉 津礼奈 (教4) 尾沼 直也 (幼2) 土井 進 (教官)

*本部: 佐々木 典恵 写真係: 土井 進

*卒: 土井 進・中村 典史・登坂 武人・浅沼 康理

連絡

- ・はきはき、印鑑を持参してください。(昼食は出していただけです)
- ・会場は、スライムとフィルムロケットは体育館内、シャボン玉は外(雨天時はテントをはる)となります。寒いことも考えられるので注意してください。
- ・このイベントは親子の触れ合いを大切にしようという考えのもと行われています。そこで参加者も親子と考えられます。実際に講座に参加するのは子どもでも、親子の関わり合いを大切にもらえるよう働きかけてください。
- ・当日の参加者がどのくらいの人数なのかはわかりません。そこで、急ぎよ予定変更ということもあると思いますがよろしくお願いします。

秋田大学におけるフレンドシップ事業の試み

—これまでの自主的な学生活動と秋田市教育委員会との連携を通して—

浦野 弘 (秋田大学 教育学部)

urano@ipc.akita-u.ac.jp

キーワード：自主的参加，教育委員会との連携，はばたけ 秋田っ子

1. はじめに

教育職員養成審議会の第一次答申(1997)には、「休業土曜日を活用した子どもたちとのふれあいの機会の設定，学校・教育委員会・大学の連携による子どもたちとの合宿・交流事業の実施，教育委員会の協力による教員を志願する者が毎週学校の授業等の補助を行う試みなど，近年，教職課程において様々な取組みが工夫されている。……単位認定することも含め，教員養成カリキュラムへの適切な位置付けについて検討する必要がある。必修部分を超える教育実習については，……ボランティア体験……体験的実習を広く含めることが可能であり，各大学の創意工夫が期待される。」とある。これは，これまで各大学が独自に工夫し，実践してきた教育実習以外での子どもとの触れ合いのための活動に対して，ある程度の評価が出されたとも解釈できるが，一方で，そのような取組みが義務化されることにもなろう。ところで，これは教員養成における学生という立場から子どもに接する論理であり，逆に子どもの立場に立った視点からこれらを考える必要もある。

臨時教育審議会の教育改革に関する第一次答申(1985)において、「個性重視の原則」が提唱されてから10年以上が経過する。その間，新学習指導要領の趣旨に即して，個性豊かで創造力，判断力，表現力に富む子どもの育成という視点から，小学校では，教科，特別活動，課外クラブにおいて，中学校では，教科（選択教科），特別活動，部活動において，創意を生かした特色ある教育活動の改善がなされてきた。しかし，改善に結びつく「個性重視の原則」の具現化が十分であるとは言い難い。とりわけ，具体的に個性の伸長を図る効果的な教育の場と考えられる正課クラブや部活動においては，指導者の不足や活動の場の確保等が隘路となり，子どもの要望を十分取り入れることができないというのが現状である。

一方，中央教育審議会の第一次答申(1996)にもあるように，地域社会における教育力の形成も重要な課題となっている。すなわち，学校・家庭・地域社会との連携による新しい教育の創造である。学校週5日制に伴う土曜休業の実施は，学校の中で閉じていた教育の枠組みを見直し，市民参加という意識の変革をも求めるものである。地域社会，家庭，学校が一体となる生涯学習体系へという視点から，学校教育の在り方を再検討し，連携から融合への移行を意図した三者の協業体制の中から新しい教育を創造することが問われているといえる。すなわち，フレンドシップ事業は，このような視点に立脚した運営も必要といえる。

ところで，本学では，十数年前から，学生の所属する研究室単位で教育ボランティア的活動がすでに行われてきている。ここでは，それらを引き継ぐ形式で発展させようとしているいくつかの取り組みを紹介するとともに，新たな視点にもとづき平成8年度から実施を開始した秋田市教育委員会の「はばたけ 秋田っ子」教育推進事業との連携について，述べる。

2. 本学の学生による触れ合い体験の事例

本学においては，十数年前から，研究室（一般に教室と言われるものと思っただきたい）単位で，教育ボランティア的活動の試みは行われてきており，その事例を3つ挙げる。これは，あくまで，自主的な学生のボランティア活動であり，該当する授業単位の授与もこ

れまでは無かった。

2-1. 「ひだまりの会」の活動

教育学研究室内の所属学生が1984年から継続しているボランティア活動である。「秋田県立岩城少年自然の家」の小学生から中学生を対象とした宿泊を伴う主催事業に指導協力員として参加するものである。表1に平成9年度に学生が指導協力員として参加した事業を示す。

表1 平成9年度の秋田県立岩城少年自然の家における学生の活動（含む予定）

事業名	期間	対象	主な活動内容
わくばく大集合	5月3日(土) ～5日(月)	小学校4年 生～中学生	・ふれあいゲーム・観音森ハイキング ・選択活動(紙の工作, 木の工作)
岩城アドベンチャー ー広場ー鳥海高原 をトレッキングしようー	8月4日(月) ～8日(金)	小学校5年 生～中学生	・文化, 史跡探訪・鳥海高原トレッキング ・高原で遊ぼう・テント生活・キャンプファイヤー ・私はカメラマン
秋の自然に親しむ	10月10日(金) ～12日(日)	小学校4年 生～中学生	・ネーチャーゲーム・自作ちようちん作り ・ナイトハイク・選択野外活動・野外クッキング
岩城クラフト教室	11月8日(土) ～9日(日)	小学校4年 生～中学生	・フレンドリーゲーム・竹細工①② ・竹で遊ぼう・わんぱく祭り
冬の自然に親しむ 少年のつどい	2月14日(土) ～15日(日)	小学校4年 生～中学生	・雪中探検・雪遊び・歩くスキー ・たいまつナイトハイク・雪上キャンドルパーティー ・雪,氷ウォッチング・天然シャベットづくり
春のいぶきにふれる 少年のつどい	2月28日(土) ～3月1日(日)	小学校4年 生～中学生	・自然散策・バードウォッチング・フレンドリーゲーム ・星空ウォッチング



図1 ひだまりの会の活動様子

2-2. 「秋田すずめの会」の活動

特殊教育研究室の所属学生によるボランティア活動であり、1985年より、障害児と家族(家族班)、学生などの支援者(協同班)が地域の中で一緒に活動を行うという実践を積み重ねてきている。月例会、学習会、会報と文集の発行、遊ぼう会やクリスマス会などの余暇活動、古紙回収、障害の重い子どもへの家庭訪問等、とりわけ、余暇活動、会報発行、家庭訪問等に学生が主力となって活躍している。これらの活動は、学生が障害児への対応のあり方や障害児の家族の心情及び問題について深く学習できる貴重な場となっている。

2-3. 秋田県ハートケア教育相談活動への参加

文部省の委託を受け、秋田県教育委員会が実施するもので、専任指導員の指導のもとに、学生ボランティアが適応指導「さわやか教室」において指導の補助及び通級児童生徒への訪問指導等を行うものである。本年度は、本学学生5名と他大学学生4名が参加している。この「さわやか教室」への参加も、心理学研究室において教官共々、継続的に支援してきた活動である。なお、同様な取り組みは、秋田市教育委員会とも行っている。

3. 新たな学生による触れ合い体験への試み-「はばたけ 秋田っ子」教育推進事業への参加- 3-1. 「はばたけ 秋田っ子」教育推進事業の理念と意義

特別活動のねらいである「望ましい人間関係の育成」を目指して、学校や児童の実態に応じて、学年や学級の所属を離れて、同好の児童をもって組織し、共通の興味や関心を追求する活動を行う「クラブ活動」を、一つの学校という枠組みをはずし、複数の学校間において実施するものである。すなわち、学校教育の制度や内容の大きい変革が予想される過渡期にある現時点において、学校間の垣根を取り払い、複数の学校が協力し合うことにより、子ども一人一人の個性の伸長を目指すものである。

このような目的に対して、秋田市教育委員会が調整機能を発揮することにより、学校と地域社会との連携が深まることもねらっている。子どもが地域社会の優れた指導者に出会い、また、地域の施設・設備を積極的に活用する素地を養うことを目指すものである。このことは、地域社会の教育力を高め、学校における教育がよりスリム化されるであろう将来に向けての試みでもある。

具体的には、複数の学校が協力して、合同でクラブ活動を実施する。その際に、社会教育施設を始めとした学校内外の諸施設・機関を積極的に活用し、学校内外で子どもの体験を重視した活動を行う。また、地域の人材を活用し、専門的な外部指導者を依頼した協業体制での指導を実施するというものである。

これらの活動は、次のような効果を期待するものである。

- ① 多くの活動種目を準備することにより、子どもの多岐にわたる興味関心に応え、さらに、子どもに自分の適性やよさを自覚させ、自己理解や自立を促すこと。
- ② 学校間の交流により、子ども同士の人間関係を豊かにし、社会性の育成を図ること。
- ③ 充実した施設設備の活用や地域の人材・外部指導者の指導により、子どもたちに新たな視点を与えるとともに、感性を磨き、よさを伸ばすこと。
- ④ 地域の人材や外部指導者の指導により、子どものよさをより専門的な見地から引き出し、伸ばすこと。

3-2. 具体的な事業の内容

本事業は、小学校及び中学校で実施しているが、表2に示すように、多様な種目が設定されている。各グループは、3校より構成されており、各グループ毎に3回ずつ実施するものである。各種目の収容人数は、種目の特性、外部指導者の希望、施設収容状況等から設定したが、最終的には子どもの希望にできるだけ添えるように、調整したため、人数がやや多め

の種目もあった。また、中学校は2グループ（3校と2校の組み合わせ）で実施した。

表2 平成9年度「はばたけ 秋田っ子（小学校）」実施計画の一部

グループ	種目	№	希望会場	№	1回目	2回目	3回目	希望外部指導者	№
A 1	サッカー	11	八橋球技場ほか	16	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	サッカー指導者	11
A 2	バスケット	21	市立体育館	11	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	バスケット指導者	21
A 3	野球	18	八橋球場（1回は是非）	15	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 4	陸上	19	八橋球場（1回は是非）	14	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（金東職員に専門家）	91
A 5	卓球	22	八橋球場（1回は是非）	11	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 6	一輪車	26	（グループ）校	81	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	一輪車指導者	26
A 7	パソコン・インターネット	41	秋田大学ほか（2施設）	51	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	インターネット指導者	41
A 8	科学	71	県立博物館（1回は是非）	33	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 9	料理	55	（グループ）校	81	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 10	手芸	60	（グループ）校	81	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 11	工作	61	（グループ）校	81	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	（グループ）校職員	91
A 12	焼物	53	（グループ）校	74	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	すえざわ焼き職人	110
A 13	音楽（合唱・リコーダー）	31	アトリわ・児童館（1-2回）	31	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	アトリわの「アトリわ」奏者	31
A 14	演劇	51	児童会館・文化会館等	31	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	演劇指導者	51
A 15	アウトドア（野外活動）	16	（秋田県立）つづみ（秋田）	39	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	演劇指導者	72
A 16	ボランティア	81	（グループ）校（2回程度）	73	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	手話指導者	86
A 17	手品	56	（グループ）校	81	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	手品指導者	56
A 18	放送（ニュースの作り方）	81	RHK, ABS, AKTY（1-2回）	61	6/25(水)	9/30(火)	10/23(木)	放送指導者	81
B 1	油絵	62	（明徳小）	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（工藤敬子）	94
B 2	パペット	41	秋田大学ほか	51	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	パペット指導者	41
B 3	自然観察	73	（千秋公園）	78	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（工藤敬、地域人材）	94
B 4	ドミノ	23	東部公民館	37	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（ドミノ協会）（郷）	23
B 5	ダンス（フォーク等）	29	市の施設（指導者による）	10	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	市体育館職員	29
B 6	バスケットボール	21	花岡公園（朝日小）	12	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	外国人プレーヤーほか	21
B 7	サッカー	11	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	外国人プレーヤーほか	11
B 8	卓球	22	茨島体育館（2回程度）	12	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（グループ）校職員	94
B 9	ローリング（ローリング）	14	（旭川小）	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（旭川小職員）	94
B 10	一輪車	26	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（一輪車協会）	26
B 11	ドッジボール	24	（下北手小）	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（ドッジボール協会）	24
B 12	クッキング	55	（グループ）校	37	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（グループ）校職員、地域	94
B 13	漫画・イラスト	54	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	美術職員	54
B 14	茶の湯	63	（旭川小）	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（旭川小職員）	94
B 15	紙工作	57	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	斎藤静夫	57
B 16	科学クラブ	71	子ども博物館	34	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	子ども博物館職員	71
B 17	音楽（合唱・リコーダー等）	31	アトリわ・児童館（朝日小）	31	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（明徳小職員）	94
B 18	室内ゲーム	64	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（グループ）校職員	94
B 19	リズムダンス	25	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（リズムダンス指導者）	25
B 20	けん玉	59	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	協会指導者	59
B 21	手芸	60	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（グループ）校職員	94
B 22	英会話	58	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	A L T	58
B 23	動物飼育体験	72	大森山動物園	39	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	動物園職員	72
B 24	人形劇	65	（グループ）校	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（旭川小地域）	94
B 25	七宝焼	52	美短	52	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	美短職員	52
B 26	折り紙・リョウ	15	（千秋公園）	78	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（相澤良平ほか）	15
B 27	水泳	27	（グループ）校	72	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（グループ）校職員	94
B 28	手話	87	（下北手小）	84	6/26(木)	10/ 9(木)	11/ 7(金)	（下北手小）	86

3-3. 本事業と学生との関係

このように、「はばたけ 秋田っ子」教育事業は、基本的には外部指導者との協業指導である。そこに、学生が補助者として参加するもので、概念的に示すと、図2のようになる。

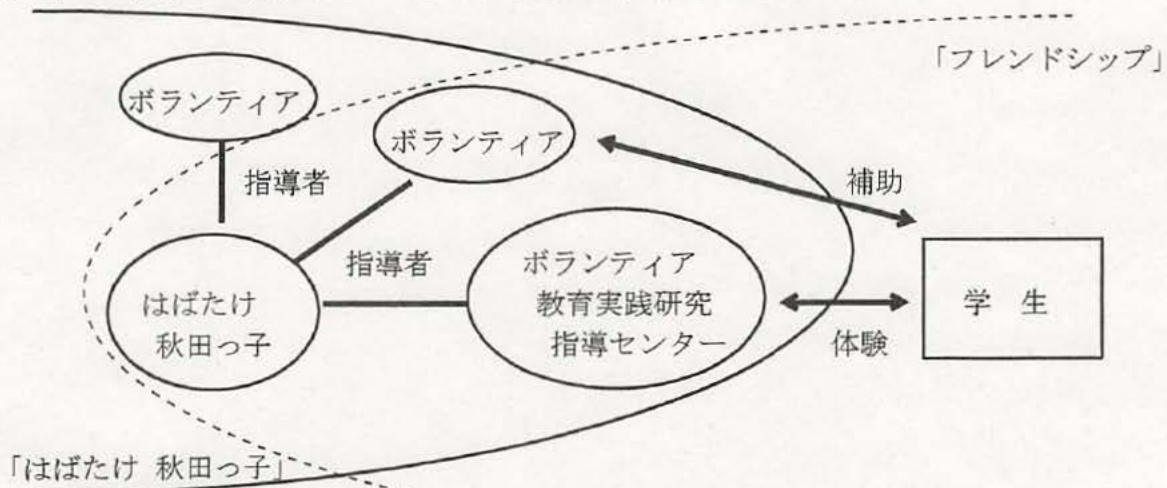


図2 「はばたけ 秋田っ子」事業における学生ボランティアの位置づけ

図3 「はばたけ 秋田っ子」を紹介する記事（読売新聞, 1997/11/4朝刊）

このように秋田大学におけるフレンドシップ事業は、学生が主体的にボランティア活動をするというよりは、むしろ、外部指導者としてのボランティアの活動を支援するボランティア（補助者）として関わることを通して、子ども理解や指導者の機能を体験的に学ぼうとするものといえる。本年度は、小学校のA～Dグループでの「インターネット」、B～Dでの「オリエンテーリング」及び中学校のBグループの「プラスバンド」に参加した。

この「はばたけ 秋田っ子」教育事業は、県内の新聞はもとより、全国紙の第一面に紹介されるなどしている（図3参照）。

3-4. 成果と効果

昨年度は、筆者が外部指導者の一人としてこの事業に参加し、学部の3年及び4年生の学生が補助として、この活動に参加した。筆者が指導した種目は「インターネット」でネットサーフィンの活動をするので、学生の主たる活動は、サーチエンジンや感想の入力時に、キーボード操作や入力変換について子どもから援助の要請があるときに、その支援をするというものが多かった。

この活動の子どもへの効果として、次のようなものがあった。1台のコンピュータを各校1名ずつの3人で使用したことにより、協同作業や意見の交換を通して、学校間の交流やコミュニケーションの広まりが効果的に図られた。さらに、ふだん接することのない大学の教職員に学んだことや大学施設を利用したことが強く印象づけられており、外部指導者を導入した効果がみられた。事業の終了後も手紙、そして電子メールでの子どもとの交流が続いている。この点だけを取り上げても、地域の人材である外部指導者との交流が効果的であるといえる。

本年度は、まだ全体の反省や感想等を取りまとめていないが、新たに実施した「オリエンテーリング」に参加した学生からは、「どんなことを手伝えばよいのか不安があったが、数人のグループなので打ち解けて話しができた」「子どもたちが周りにある木々などを見て、素直に思っていることを発言するのに感心した」「6年生では男子が先に走って行き、女子が後から歩いていくというように男女が多少離れて行動するが、4年生は男女が一緒に行動するというパターンの違いに気付いた」「教室外での教師の指導を見ることができ、参考になる」等々の感想や発見があった。

また、「大学の授業で“概論”ばかりやっているのだから、実践することで意欲が増す」「教育実習前に、子どもと接することに慣れることができる」等の指摘もあった。

さらに、岩城少年自然の家での事業にも参加している学生は、「日数も短く、一定時間しか子どもたちと一緒にいない“はばたけ 秋田っ子”の方でも、得るものが多い」という感想を述べている。

4. まとめにかえて

「はばたけ 秋田っ子」事業について、浦野・石橋(1997)は、専門的な分野で活躍している人やその道に長けた人、地域のお年寄りなど、地域の人材を活用した外部指導者と触れ合うことにより、各種目毎にそれぞれの子どもの発見があることを指摘している。同様に、外部指導者の中でも、仕事の第一線から退いた方や主婦等からは、自らも得るものがあるので、このような交流を今後も続けて欲しいという声が聞かれたことも指摘している。すなわち、学校教育からの要請と地域社会の人材が活躍できる場の提供とが、相互に機能するものであるといえる。

2節に述べた3つの活動や、3節で述べたこの2年間の「はばたけ 秋田っ子」事業に関わった学生は、自主的に参加したものである。そのような背景から、上記の外部指導者の立場に近い感想を持つものが多い。

しかし、今後、フレンドシップ事業が単位化し、単位の取得を目的とした参加が増えると、影の部分が問題となろう。

参考文献

秋田市教育委員会, 1997: はばたけ 秋田っ子 教育改革 - 秋田市からの報告 - . 秋田市教育委員会

秋田県教育委員会, 1996: ふるさと教育指導の手引. 秋田県教育委員会

浦野弘・石橋英一, 1997: 学校間交流と地域の人材を活用した特別活動の実践的研究 - 「はばたけ 秋田っ子」における実践を通して - . 秋田大学教育学部研究紀要, 教育科学部門, 第52集, p.77~88

教育職員養成審議会, 1997: 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(第1次答申).

中央教育審議会, 1996: 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申).

臨時教育審議会, 1985: 教育改革に関する第1次答申.

「実践的指導力」の中身を問う フレンドシップ事業—福島大学教育学部の場合

鈴木庸裕 (nobuhiro, SUZUKI)

E-MAIL nsuzuki@educ.fukushima-u.ac.jp

1. 1997年度フレンドシップ事業の概要

(1) 3つの取り組み

本年度福島大学教育学部では下記の3つの行事を柱にしてフレンドシップ事業を実施した。

A. 創造の森・自然体験学校（7月24～26日、2泊3日）

国立磐梯青年の家（猪苗代）を舞台に、福島市内の小学生5・6年生、中学校1・2・3年生104名と学生46名、院生（アドバイズ）6名、引率・指導教官12名（附属学校を含む）、青年の家所長をはじめ専門職員、自然観察指導者等の構成員で実施。開校式、出会いの集い（ふれあいゲーム）、自然観察ウォークラリー、野外炊飯、野外創作活動（ソーラーバルーンづくり）、火おこし、キャンプファイヤー、テーマ別自然学習を通じて、児童生徒との諸体験活動をおこなった（別紙資料1参照、学生の様子や感想は当日資料で）。

この取り組みは、学校長、副学校長はもとより、全体の企画、運営、実施を学生が担当し、「夏がひろがる、君がひろがる」をメインテーマに感動の取り組みを展開した。

B. オープンキャンパスフェスティバル（11月2日）

自然体験学校参加学生に加え、7月より参加学生（グループ）を公募、自主参加型イベントとして、大学キャンパス施設を会場に「講座」を開講（別紙資料2参照）。手づくり楽器づくりやわら細工、影絵遊び、理科学実験、クッキングなどの体験講座をおこなった。学生が指導者となり教官等は後方支援。学部学生・院生の参加は125名、受講者は小学生、中学生を中心に幼児から一般（保護者を中心に）まで445名。学外からの協力者（理科実験講座—現職教員、わら細工—地域の老人会）と各講座の指導教官を含め約600名の参加であった。

C. 公開シンポジウム（12月3日）

「体験学習を通じて実践的指導力の何を、どう育てるのか」をテーマにして、基調講演では「教員養成における実践的指導力の育成について」（立教大学藤田昌士教授）、体験報告では、フレンドシップ事業実行委員の学部教官、参加学生代表、国立磐梯青年の家専門職員、地域の保護者、現場教師の5者から報告を受け、その後、パネルディスカッション（実施予

定)。この公開シンポジウムの目的は1997年度フレンドシップ事業の成果総括と今後の課題について論議を深めることにある。

(2) 実施体制

上記の取り組みに対して、以下の諸体制で実施した。

*フレンドシップ事業企画運営協議会（連携協力機関一年数回、12名）：教育学部教育実践総合センター、附属学校園、福島県教育委員会、福島市教育委員会、県北教育事務所、国立番台青年の家、福島県PTA連合会

*フレンドシップ事業対応特別委員会（学内実行組織16名）：センター長・専任教官、教育学部教官、関係委員会委員

*学生組織

A. 自然体験学校：「教科外活動論」（教職科目必修・2単位、2年生以上）の受講生、協力院生。

B. オープンキャンパスフェスティバル：自然体験学校参加学生の自発的参加型、教官の呼びかけによる学生組織参加型（ゼミ、教科教育法等の受講生）、学生の自発組織が教官を巻き込んだ参加型によるもの。サークルなどの単位による参加型によるもの。全体統括コーディネートは教育実践総合センター専任教官。

2. 「体験」と「参加」の意味を問い直す

以上、本事業の概略であるが、実際に本事業の企画・立案・実施にあたった立場から、私見を含めて中間総括してみた。

学部改組の動きと同時並行中の本学部では、当初からフレンドシップ事業を教育学部のあり方を総合的に検討してみる大切な機会であるという視点からこの事業に着手した経緯をもつ。ちょうど総合センター化の直後という時期でもあり、教育臨床領域の充実と学生の体験学習や総合的学習、大学と地域との連携への視野を拡大する意図があった。やや具体的には、①学生と児童生徒が直接ふれあうことによって、学生の子ども理解能力や自己表現能力の形成、具体的な交わりのための社会的教育的スキルの習得を促すこと。②教員養成が教育委員会を含め、地域の社会資源と組織的かつ有機的に結びつき、これまでにないあるいは連携が弱かった機関や個人と共同で、学生の「学びの場」を作り出していくこと。③教員養成に資するという面だけでなく、学生の社会参加・ボランティア活動の教育的意義と地域の学習や活

動（遊び）のニーズとの結合を図ること。④大学教員の学生指導の向上、などがあり、同時にこれから一層課題になると思われる。

体験という営みは決してある活動の「部分参加」や「いいとこどり」ではない。科学や真理に裏付けられた人間的営みという文脈を理解ないし意識しながらの一連の実際的活動である。また、参加とはある時間空間に身をおくという活動であると共に、「何のための参加なのか」を同時に追求する行為である。したがって、体験や参加とはそれまでそうした機会や目を奪われていた現実を、我が身で取り戻す営みであると理解したい。そのことによって、学生たちはある者は抽象的な「わかる」とう世界から抜け出して、具体的な「できる」という世界をくぐり、そこで身につけた自己の姿や自信を基礎体力として、再度、科学性や論理性の世界と向き合っていく。自己の視野や外部情報に左右されがちな学生にとって、みずから何事をも確かめてみる、あるいは確かめてみる術を身につけることは学習指導や生活指導の両面において重要となる。

3. 「実践的指導力」とは方法ではない

その場合、こうした術を習得する上で、フレンドシップ事業は「実践的指導力」の内容を浮き彫りにしてくれるのではないだろうか。教員としての資質能力（使命感や子ども理解、愛情、専門的知識理解、教養）を基盤にして「実践的指導力」が位置する。今日、教員の養成・採用・研修の体系化の中で、ややもすると新任研修・現職研修に重点がかかる傾向がある。この「実践的指導力」が個別な方法技術ではなく、育ちゆく「観」をめぐる自主的な形成能力であると考えたい。「多様な資質能力を持つ個性豊かな人材」の育成を言う「教養審第一次答申」は具体的な資質能力が実践的指導力であると指摘する。しかし、個別な技能や知識理解をモザイク的に「所有」することがこの能力にあてはまるものではない。それは、系統だった知識理解と技術の結合を支える見通し能力と自己実現能力である。子どもたちへの問題解決能力をいうのと同様に、どのようにある事柄を解いていくのかとなぜそれを解いていくのかという両者がセットされた意味で、この能力を理解したい。

4. 教育実習の多様化・自由選択化とカリキュラム改革

その具体化や構造化という点で、まず、教育実習の多様化・自由選択化という問題への肉薄がある。本学では教育実習とのつながりを意識しつつも、進行中の実習改革と来る「介護体験実習」との関連をじっくり検討するため、今年度は全体として今後の課題を明らかにする

フレンドシップ事業元年として位置づけた。あくまでもこの事業を教育学部のサバイバル事業であったり、一部の教官（委員会）のオブリゲーションとしないためにも、学部全体でこれから何をすべきかを構想していきたい。ただ、現段階での方向性としては、学部の1・2年生段階でのプレ教育実習という位置づけで、参加・実践型実習、課程共通科目「教育参加論」として、「講義」部分（1単位）、「参加実習」部分（1単位）合計2単位で構成し、課程学生全員の選択によりグループをつくる。講義部分（製作実習を含む）は教職、教科教育・教科専門科目、障害児教育、幼年教育等の教官、施設・機関の関係者、関係領域教官、外部講師の現地指導講師による講義・演習。「参加実習」では、自然体験活動グループ（現行のものを継承）、社会教育・体育活動グループ（児童館や地域子ども組織の行事、体育・健康・レクレーション施設等へのアシスタント参加、科学実験体験活動グループ（大学施設での実験・工作体験活動）、芸術・表現体験活動グループ（アートスクール、表現活動）、社会・文化体験活動グループ（公開授業方式、社会科学、人文科学の領域）、教育臨床活動グループ（地域福祉・医療活動を含み、個人・施設での実習）。あえて今回のオープンキャンパスフェスティバルを自主参加型にしたのも、このグループを小中統合の学校教員養成課程内のコースで担当するように位置づけていく基礎体力づくりが必要と考えたからである。

こうしたことは、学部カリキュラム（編成）改革をめぐるわれわれのアイデンティティーの形成をめざすという意味からも大切に思う。もはやこれはカリキュラム開発という次元で考えていくべきものかもしれない。大学教育における「専門性」の追求が学問領域縦割りの「蝸壺的」な硬直した知の体系を生み出しかねない状況にある。こうした点への勇気ある対応が迫られているのではないだろうか。

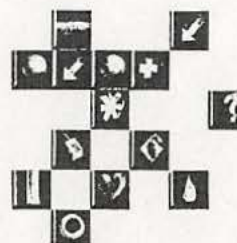
5. 今後の課題

本学では学部改組、自然系学部増設などの議論の最中という状況もあり、現行の教育実習との関連やカリキュラム全体との関わりはまだ浮上していない部分が多い。しかしながら、どういった教師（教育者）あるいは次代を担う青年を育てるのかという全学的議論を構築しながら、地球的視野での教員養成のあり方を追求する絶好の機会であり、そういったプロセスに学生が参加し同時に学内外からの声を真摯に受け止め、内発的な発展をめざすことが不可欠であると考え。それ以上に、教員養成のみならず大学教員の学生に向けた実践的指導力をトレーニングする機会として、今回の取り組みを積極的に活かしていくこと。とりわけファシリテーターとしての大学人養成として大きな一歩でありたいと考える。

福島大学教育学部フレンドシップ

創造の森

自然体験学校 in 磐梯



日程

	8:30	9:00	10:30	12:00	13:00	16:00	19:00	22:00					
1日目 7月24日	受付	大学出発	自然体験学校開校式(校名の歌い)	昼食	自然観察ウォークラリー	野外炊飯	グループ活動	野外テントで就寝					
2日目 7月25日	起床・朝食 グループ活動	9:00	野外創作活動パートI	昼食	12:00	13:00	野外創作活動パートII	夕食・入浴	17:00	18:30	22:00	キャンプファイヤー	本館で就寝
3日目 7月26日	起床・朝食 グループ活動	9:00	テーマ別自然学習	昼食	12:00	13:00	自然体験学校開校式(校名の歌い)	青年の家 出発	14:30	16:00	大学到着 解散		

趣旨

この自然体験学校は、福島大学教育学部のフレンドシップ事業の一環として、子どもたちと教師をめざす学生が、大自然の中であらゆるふれあい、ともに学ぶことを目的として開催するものです。自然観察や野外レクリエーション、創作・製作活動、キャンプファイヤーなどの野外体験活動を通して自然体験できない感動と創造の世界をつくりあげていく機会を準備しています。

この事業は右図のような諸機関の連携協力のもとに実施するものです。

またこの秋には、福島大学を会場にした(オープンキャンパスフェスティバル)を開催する予定です。こちらにもご参加ください。



開催日時

平成9年7月24日(木)
～7月26日(土)
＜2泊3日＞

開催場所

国立磐梯青年の家
〒969-31 福島県耶麻郡猪苗代町
五輪原 7136-1

対象

福島市の小学校5～6年生、
中学校1～3年生

募集定員

100名 (定員をこえた場合は、各学年の均衡等がとれるように抽選を行います。)

申し込み方法

■受付期間

平成9年6月9日(月)～6月27日(金)

■申込先

福島大学教育学部庶務係
〒960-12 福島市松川町浅川字直道2
☎0245-48-8103 (お問い合わせは月曜日から金曜日、午前9時～午後4時30分)

■参加費用

4,000円(食事代・保険加入代の費用です。バス代等は福島大学で負担します。)

■申込方法

右の応募用紙に児童生徒の氏名、学校名、学年、保護者氏名、連絡先住所・電話番号、裏面(子どもさんへの配慮事項及び参加への期待・要望等)を記入の上、返信用封筒(80円切手を貼付)を同封して封書にて、申込先に郵送してください。

※「応募にあたっての留意事項」をご参照ください。

キリトリセン

応募用紙

氏名	生年月日	性別	学校名・学年	住所・電話番号

保護者氏名 _____

—裏面にも記入—

福島大学教育学部 フレンドシップ事業

みんなあつまれ！オープンキャンパスフェスティバル

福島大学教育学部ではこの日、「オープンキャンパスフェスティバル」を開催します。これは本年度フレンドシップ事業として7月におこなった「自然体験学校」につづく体験学習活動です。

さあ、福島大学教育学部生のお姉さんやお兄さんといっしょに、理科の実験やおもちゃの工作、表現活動など、いろいろな「講座」に参加しませんか。秋の1日、おもう存分大学キャンパスであそびましょう。

日時・場所：11月2日（日曜日） 福島大学金谷川キャンパス

午前タイプ	午前10時～12時
午後タイプ	午後1時～3時
1日タイプ	午前10時～午後3時（昼食をはさんで）

（JR金谷川駅下車すぐ）

参加対象：福島県内の小学生・中学生を中心に、幼児から大人一般の方までどなたでも参加自由です。

なお、それぞれの「講座」には受講者の年齢や定員の制限があります。幼児・小学生低学年の方は保護者等の付き添いをお願いします。

受付：11月2日の当日、「受付テント」でおこないます（場所は学内に掲示をします）。

午前の部・午後の部とも講座開始時間の15分前までに受付に集合し、どの講座に出るか決めてください。午前タイプと午後タイプを組み合わせると2講座参加可能。

講座参加費：1人100円（1日保険加入代等として）。受付時にいただきます。

持ち物：「講座」によって各自でご持参いただくものがあります。一覧表をご確認ください。

どの「講座」も動きやすい服装で。

*この日は大学祭の期間中ですので、昼食は各自、弁当持参か出店でお済ませください。

*安全でたのしい1日が過ごせるよう、保護者の方々のご協力をお願いいたします。

講座一覧（この他にもたのしい講座があります。）

	講座名	対象	定員	時間	持ち物
1	折り紙であそぼう	小学生・中学生	40名	午前タイプ	切り抜きのできる雑誌を2～3冊
2	手づくり楽器で遊ぼう	小学生	30名	1日タイプ	
3	親のためのワークショップ （親が元気になる活動）	保護者	20名	午後タイプ	空ペットボトル1本
4	わら細工教室	小学生・中学生	40名	午前タイプ	
5	影絵であそぼう	幼児・小学生	30名	午後タイプ	エブロン
6	あたためるとあら不思議！ カメレオンみたい・・・	中学生・高校生	20名	1日タイプ	
7	水ロケットをとばそう！	小学生	60名	1日タイプ	エブロン
8	強さの秘密 一物が壊れないようにつくるには一	小学3年生以上から中学生	25名	午前タイプ	
9	牛乳パックでハガキをつくろう！	小学生・中学生	50名	1日タイプ	エブロン
10	ちょっと早めの クリスマスクッキング	小学4年生以上から中学生	30名	午後タイプ	
11	ビリビリ戦隊電気マン！！ 一電気を起こそう	小学生	20名	午前タイプ	エブロン
12	自分の火をつくってみよう	小学校4年生以上	40名	午後タイプ	
13	「自然体験学校」写真展	自然体験学校 参加児童生徒		12時～13時	

主催：福島大学教育学部

主管：フレンドシップ事業対応特別委員会

〒960-12 福島市松川町浅川字直道2 電話 0245-48-8103（問い合わせ先）

「教員養成学部フレンドシップ事業」の概要

—— 平成9年度・新潟大学の場合 ——

岡野 勉

(新潟大学教育学部附属教育実践研究指導センター)

E-mail ; okano@ed.niigata-u.ac.jp

〈キーワード〉 体験的カリキュラム/教師の力量形成/子ども文化/野外実習/科学実験

1. 事業の目的

(1) 地域の自然・社会・文化に触れ、子どもとともにこれらを体験的に学ぶことを通して、教育の実践的研究に対する問題関心の基礎を培い、教育実習に直結する力量形成の出発点とする。

(2) 教師に求められる資質、力量形成のための有効な方策、連携のあり方等について、関係諸機関とともに協議する。

2. 内容

(1) 授業科目として「教育実践体験研究」(教育実習に関する科目・1単位)を新設する。

この授業科目の特徴は、教員を志望する学生が、学校を離れた場において子どもと触れ合い、ともに活動することを通して、学校という枠組み、教師-子ども関係からは自由な場で、子どものものの見方、考え方、感じ方などを体験的に学ぶことができる点にある。

(2) 実施に当たって、附属学校、公立学校、教育委員会、地域の父母等による企画運営協議会を設置するとともに、それらの参加による全体シンポジウムを実施する。

3. 履修形態

「教育実践体験研究」に以下の4コースを設定する。学生は、A,B,Cから一つを選択する。Dについては必修とする。

A. 「子ども文化体験コース」

子どもの遊びコーナーを、子ども・親との協力によって運営・実施する。それにより、子どもとの人間関係づくり、子どもの興味関心などを体験的に学ぶ(5月に実施、参加学生約

35名)。

B. 「野外実習体験コース」

野外活動を子どもとともにを行うことを通して、子どもとの交流を深めるとともに必要な技術を修得する(6月に実施、参加学生約65名)。

C. 「科学実験体験コース」

大学の実験室に子どもを招待し、科学上の不思議な現象、コンピュータによるバーチャルな自然などを子どもとともに体験する(7月に実施、参加学生約20名)。

D. 「共通コース」

「教師の実践的力量的形成」をテーマとしたシンポジウムを開催する。参加学生は体験学習の成果と今後の課題について報告し、討論へ参加する(2月に実施予定)。

4. 学生の反応

5月中旬にポスターを掲示し、オリエンテーションを行ったところ、こちらの予想を大きく上回る希望者があり、コースによっては当初の募集定員を大きく上回って学生を受け入れた。実施後に提出されたレポートからも、多くの学生がこのような機会の提供を希望していることがわかり、教員養成教育における体験的カリキュラムの必要性が確認された。

5. 今後の課題

- (1) 多様な内容のコースを数多く設定すること、継続的な交流体験を保障できるようにすること。
- (2) そのための学内外との協力体制の形成・強化。
- (3) 教員養成教育における体験的カリキュラムの位置・役割の明確化。
- (4) 追跡調査による、教員としての力量形成過程における今回の体験の意味の解明。

《資料》 学生のレポートから

私は教員を目指して、教育学部に籍を置いているわけですが、1年次は教養科目の履修が主であるために、実践的な教育を学ぶ前に、自分の本来の目標を見失ってしまうのではないかと思い、その対策としてこの科目を履修しました。(小学校教員養成課程・社会科・1年)

なぜこの授業を履修したかといえば、学校を離れた子どもたちの生の姿を見てみたいと思ったからである。大学の講義だけでは、実際の子どもの姿は見えてこない。子どもたちがどのような考えを持ち、どのような行動を取るのか、机に向かっていただけでは分からない様々な疑問があった。このような疑問は、直に子どもたちの中に飛び込んでみなければ、解答を得られない。「教育実践体験研究」は、私の疑問に少しでもヒントを与えてくれるのではないかと思い、履修を決めた。(中学校教員養成課程・英語科・2年)

今回、「OH!さわぎ」のイベントに参加して、「子どもの視点でものをみつめ、考える」こと、「子どもが理解できるように教える」ことが、どれほど難しいか実感できた、充実した一日を過ごすことができた。これから先、教員を目指すにあたって、いい体験ができた。(中学校教員養成課程・技術科・2年)

教員の資質や能力の向上のために、ボランティア活動やその他の体験活動がもっと重視されるべきだと考える。しかし、そのような機会を自主的に探すことは意外と難しいので、今回のような授業科目をもっと増やし、様々な体験実習を行う機会を与えてほしいと思う。(小学校教員養成課程・国語科・4年)

自然体験からフレンドシップへ

濁川 明男 (上越教育大学学校教育研究センター)
akion @ juen.ac.jp

1. 本学の取組みの概要

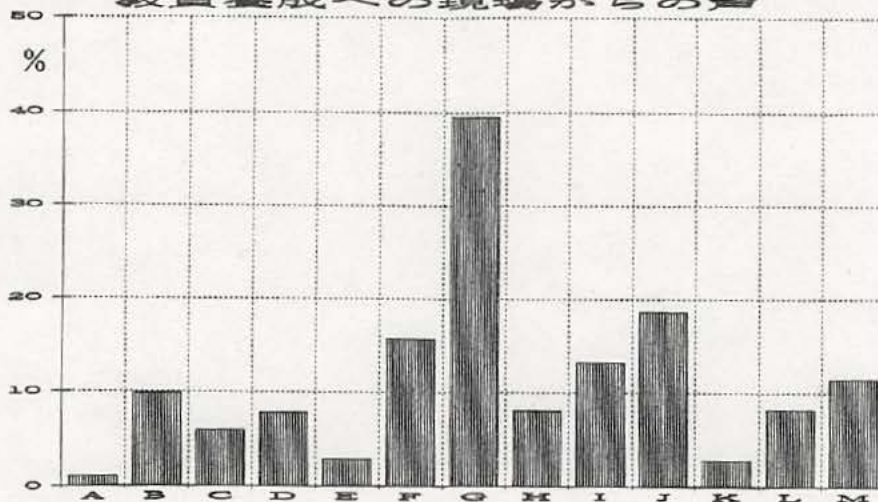
本学でのフレンドシップ事業は、まだはじまってはいない。学年の中の10名前後の学生は、自発的に各種サークル活動、妙高少年自然の家へのボランティア活動等に参加している。本学もフレンドシップ事業を前向きに考えてきているが、介護体験、教育実習の期間延長と多くの課題が同時に出了たために、教員養成課程の全カリキュラムの見直しが必要と慎重に対応してきている。そんな中で当学校教育研究センターは、一日も早いフレンドシップ事業の実現を目指して、平成9年に、自然体験プログラム開発研究プロジェクトを立ち上げ、自然体験実習を試みた。その結果、参加学生の反響がきわめて大きく、確かな手応えに支えられて、今、体験的な科目の開設と平成10年からのフレンドシップ事業実現を目指して一歩踏み出した段階である。したがって、ここでは、自然体験と構想している本学のフレンドシップ事業の概要について述べる。

2. 教員養成への教育現場からの声

本学の教育実習は、1年次で2日間の観察・参加、2年次で1週間の幼稚園実習、3年次で小学校実習、4年次で中学校、幼稚園専修実習を位置づけている。本学のその特徴は、すべての実習が附属中学校だけでなく、周辺の公立学校(小学校30校、中学校13校)で同時実施していることである。受入れ校との事前・事後の打合せ会、校長会の教育実習担当社との話合いが随時もたれている。

表1は、これからのカリキュラム検討のための資料として、上越管内102校の学校長に対し

表1 教員養成への現場からの声



A…現在のままで十分 B…人間性の豊かさ C…個性の豊かさ
D…社会人としての資質を E…感性の豊かさ F…逞しい実践力
G…子供の理解・接し方 H…教職への使命感 I…対人関係
J…もっと幅広い体験 K…カウンセリング技術 L…一つでも得意なものを M…教科指導力を

て実施したアンケートの中から、特に教員養成への要望に関する自由記述を分析した結果である（回収率74％）。

校長は若手教員の実態を一番把握できる立場にあるが、あくまでも自校の教員を通しての意見であることは否めない。

結果は、かなり多岐にわたっているが、最も多い指摘は、子供の理解、接し方に関わる教育への要望である。そこには、子供にどう接し、どう指導してよいか分からず、騒然として治まることのない学級の姿が浮かび上がる。毅然とした姿勢を堅持しつつも、常に子供たち一人一人の心に寄り添い、喜怒哀楽を共にし、温かい人間関係に支えられた学級経営のできる教師が求められているのである。

- ・児童と共に活動しようとする意欲はあるが、児童のわがままに押し切られ、問題が発生しても対応できない場面がしばしば見られる。児童を理解し、児童に頼りにされる真の教師の養成を期待したい。
- ・他人に迷惑をかける子を諭せない。ほめもせず叱りもせず、学級を燃えたせる迫力もない。児童の掌握力の乏しさを痛感している。（記述内容の中から）

第二の指摘は、体験の乏しさに起因する実践意欲の乏しさである。豊かな教育活動は教師の経験の幅に支えられる創造的な実践力によって生み出される。

- ・植えれば植えばなし、飼えばそのまま、すべての管理を教頭、校長が行っている。
- ・飼育、栽培を嫌がり、「やらねばならない」気持ちで取り組んでいる。ヒナを死なせ、雑草だらけの畑、額に汗することを嫌う若手が大変多い。
- ・経験の不足は、教育活動の単調さを生み、子供の意欲を引き出せない。自然豊かな裏山があっても、ドリル、市販教材に頼り、屋外に踏み出せない教師が多い。

3番目の指摘は、対人関係の希薄さである。地域民、保護者への対応、接客態度に多くの問題が指摘されている。問題が発生しても家庭訪問さえできない現実もあると聞く。

3. 学生の実態

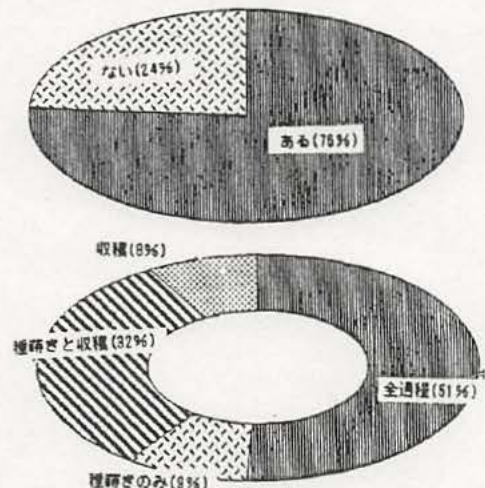
現場からの声は、これからの教員養成課程に、① 子供と活動を通して触れあい、子供を理解する場 ② 実践力、創造的教育活動を生み出す土台としての幅広い体験活動の場 ③ 社会的活動を通して様々な社会人と接触し、社会性、対人関係を身につける場 を位置づけることの必要性を指摘していると受けとめた。

当センターとしては、今、何ができるかと判断したときに、狭視野ではあるが自然体験であろうと考えた。そこで、経験の拠り所として各種社会活動に学生たちが参画してほしいと願った。

そこで、入学間もない1年生全員206名を対象に、これまでの自然に関わる経験の実態を把握するためにアンケート調査を実施した。ここでは、その一部を紹介する。

野菜栽培の経験についての集計したのが、表2である。経験者は学生の76%を占める。しかし、その半数は幼稚園・小学校の体験であり、半数は主に種蒔き、種蒔きと収穫、収穫の体験である。また、ジャガイモの植え付けに関する設問では、「イモを植える、半分に切って灰をつけて植える」としたのは、62名で全体の30%にとどまった。石灰巻きや耕しか

表2 野菜栽培経験の実態



ら収穫までの栽培経験をもつ学生は、全体の30~40%と推定された。

身近な草についての設問では、ナズナ、スギナ、ヒメジョオンを知る学生は25%以下であり、エノコログサ、カタバミは6%以下、12種の身近な植物すべてを知らない学生は全体の29%を占めた。

登山体験をもたない学生は37%であり、近年、学校における登山やキャンプが行事精選の対象となっている理由には、学校5日制への対応もあるが、指導スタッフの不足という問題もあるのである。

次に、星座や月の実天観察経験に関する設問では、経験を有する学生は33%にとどまった。指し示せる星座については、オリオン座が54%であったが、夏や冬の大三角形は20%前後、七夕の星座にいたっては、8%以下と低率であった。

幼少期から再三見てきたものとして「鯉」を取り上げ、その描写を設問した。鯉のシンボルであるひげを描いたのは30%のみであった。また、ひれを含めて、魚としての正しい姿を描いたのは、全学生中12名にとどまった。

以上の実態に基づき、次のような内容で自然体験実習を試行した。

4. 自然体験実習の概要

(1) 実施体制

ア、前期；2泊3日（夏期休業） 後期；1泊2日

イ、会場 妙高少年自然の家

ウ、参加者 前期：20名（1学年+3学年）

指導スタッフ； 学校教育研究センター3名、自然系2名、現場教師2名

後期；28名（1, 2, 3学年）

指導スタッフ： 学校教育研究センター2名、現場教師2名

エ、単位 なし

オ、交通機関 大学のマイクロ

(2) 実施内容

○○○前期○○○ 8/3-8/5

◇1日目

ア、キャンプテント張りの実習

イ、グランドシートを用いて、本部の設営。

ウ、林間活動上の注意すべき植物・動物についての学習

エ、ナタの使い方実習

オ、ロープワーク

カ、林間のブッシュ内に一人一人野営小屋づくり

キ、炊事体験

ク、キャンプファイア指導体験

ケ、一人一人野営小屋にて就寝

（あいにくの集中豪雨となり、4張りのテントで就寝）

・テント結び

・雨を考慮した屋根づくり

・ツタウルシ、ヤマウルシ
ハチ、毒ヘビ

・ナタの安全な使用法

・雪囲い結び

・木の切り出し、草刈り、
組立

・原始火おこし・火たき

・ファイア薪のセティング

・セレモニーの進め方

・レクレーションの進め方

◇◇1日目の評価◇◇

・野営小屋づくりは、最もインパクトが大きかった。自分が1晩就寝すること、周囲と10

m以上離れて野営することという条件が効果的であった。慣れないナタ裁きであったが徐々に上達し、汗だくになって小屋づくりに取り組んだ。屋根を杉枝でふく学生、香りを大切にオオバクロモジでふく学生、ススキで束ねてふく学生、生きた木を曲げて骨組みとした学生など、それぞれに工夫が見られた。集中豪雨のため、小屋での就寝を中止する指示に、ほとんどが悔しさを顔に表していた。しかし、ホット胸をなで下ろした女子学生も2名いた。

・炊事体験でのシャガイモ剥きでは、親指で包丁を誘導して皮むきのできない女子学生が2名、男子学生2名がいた。

◇2日目

ア、朝の炊事体験

イ、野営小屋での仮眠（野営小屋で寝たいという学生の要望に応じて仮眠を指示）

野営小屋撤収作業、テント撤収と乾燥作業、借用物品等の返却作業

ウ、ネイチャーテーリング

【自然散策として身近な植物学習】

- ・3グループにボライドカメラ各1台
- ・各自野帳にメモを取れながら学習

【草遊び】

【崖の昇降】

- ・地層学習や学校の裏山でのアステック遊びを想定して、急な崖の昇降とロープワーク体験

【植物分類テスト】

- ・基本的な植物15種を準備し、各自10種を解答

【竹工作体験】

- ・ヤダケを用いた竹鉄砲の製作
- ・竹トンボの製作

・ワラビ、ゼンマイ、ウド
シシウド、ナナカマド、ススキ、ヨモギ、タケニグサ、イタドリ、オオイタドリ、コナラ、ミスナラ、リョウブ、ヤマウルシ他

- ・タラ、ハウノキの風車づくり
- ・ススキの鉄砲
- ・各種草笛
- ・ハウノキの飛行機づくり

- ・もやい結び技術
- ・ロープを使用した昇降

- ・切り出しナイフの使用法
- ・竹割り技術

◇◇2日目の評価◇◇

・植物学習では草遊びができる植物、食べられる植物、身近な植物、危険な植物に限定した。繰り返し同じ植物を研修したこともあり、全員がテストにどうにか合格した。

会場が妙高山麓ということもあり山地性植物が多く、学校周辺の身近な植物を研修させてやるべきという意見が多かった。また、ドングリはドングリという木になると思っていた学生が大半であり、コナラ、ミスナラなどを知り、認識を新たにしていた。

・竹細工は、竹鉄砲がもっとも人気を呼んだ。昼間採集してきた木の実を玉にして破裂音を楽しみながら、飽きることなく子供のように的当てに熱中していた。切り出しナイフの使用は全員初体験であったが、徐々に慣れ、怪我をする学生も出なかった。

◇3日目

ア、オリエンテーリングセッティング

少年自然の家には、オリエンテーリングが常設させているが、ポイントを早く発見してタイムを競うものである。

学校での学級活動や行事等で生かせるようにと、方位と距離、ポイントでの課題を盛り

込んだテーリングのセッティングを実施した。

- ・様々なテーリングのやり方指導
- ・2名1組でのセッティング
- ・他グループのセットを体験
(セッティングで方位を誤り、
1グループが迷走)

イ、凧づくり体験

- ・菱形凧づくり，連凧づくり

ウ、山中の用水池での釣り体験
(30cmサイズのマブナを3匹
つり上げた女子が優勝)

◇◇3日目の評価◇◇

・オリエンテーリングの課題には、クイズ、植物分類、木登り、俳句づくり等様々な創意が組み込まれていた。セッティング段階で方位を誤ると、チャレンジャーがもどれなくなることも体験できた。3年生は教育実習の学級活動に取り入れたいと感想を述べていた。

〇〇〇後期〇〇〇

10/9-10/10

《 秋の星座観察学習 》

- ・祝日前の平日 4時半大学出発、
現地到着 5時30分

ア、天体望遠鏡の基本的操作の実習

- ・2人1組で1台の赤道儀を使用して、基本的操作技術の講習

イ、惑星の見分け方(輝く多くの星の中から惑星だけを見つけ出す)

ウ、金星の望遠鏡観察

エ、土星、木星の観察

オ、月面観察

カ、北極星の見つけ方の実習

キ、北の代表的星座と星座物語の学習

ク、夏の代表的星座と星座物語の学習

ケ、秋の代表的星座と星座物語の学習

コ、テスト；北極星の見つけ方と夏の代表的星座

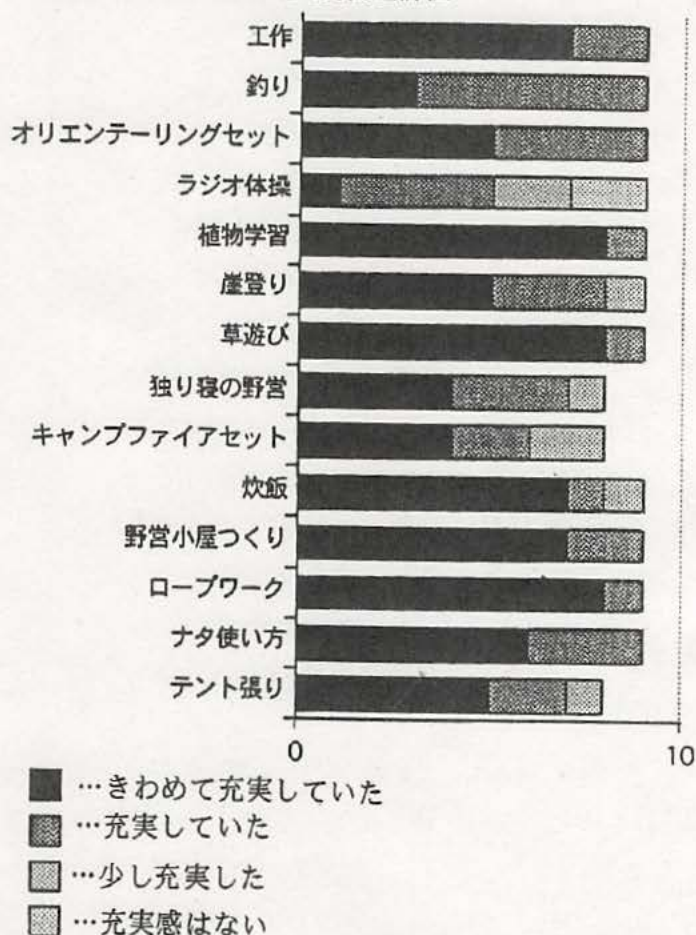
サ、月の満ち欠けと実天での動きについてのモデル学習(室内)

◇◇後期の評価◇◇

・日の設定が的中し、夜半過ぎまで雲一つないみごとな星空となった。全員が初体験の実天観察であり、一つ一つに歓声を上げて感動していた。惑星の見分け方、惑星の望遠鏡観察、北の星座と夏の大きな三角形、七夕の星などを知ったことで、この体験への学生の評価は高かった。

・関門標識と課題の作成

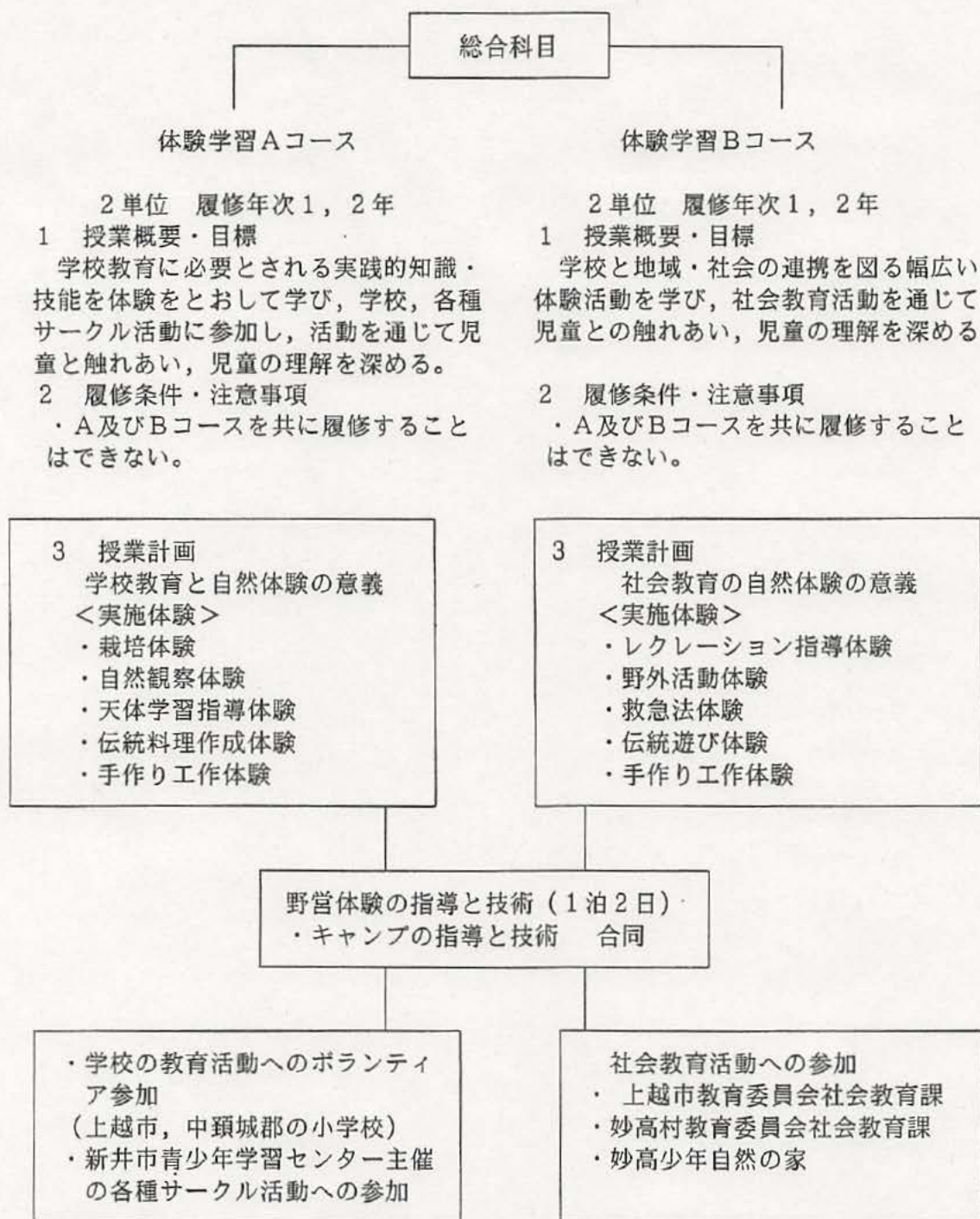
表3 自然体験の充実度自己評価



5. 本学でのフレンドシップ事業構想

科目も選択幅を広くして何コースも立ち上げ、もっと学生や大学が主体となって子供たちを招いての触れあい事業を進めたいという願いはあった。しかし、本学が山際に位置し公共交通手段が乏しいこと、大学周辺の交通が激しく交通事故等の心配があること、全学的理解が得られていない段階にあり、予算面や仕事面で一部に負担加重となる心配もあることから、一步踏みだし、徐々に発展させるということで、下記のように構想した。

選択履修であること、自然という狭い体験であることから、フレンドシップ事業としては認められない心配もあるが、本学としては、まず、このような形でスタートを切ることにした。



平成11年度以降は、各系でコースを立ててもらい、選択幅を拡大していく予定である。

「学外活動体験」の実践-その内容と運営-

小泉秀夫（横浜国立大学） 山本光（横浜国立大学）

hig1508@ed.ynu.ac.jp kou@ed.ynu.ac.jp

〈キーワード〉学外活動体験、実践体験、国大わくわくサタデー、ホームページによる支援

経緯

横浜国立大学においては、平成9年10月1日より、教育学部を改組し、横浜国立大学教育人間科学部として発足した。学部改組に伴いカリキュラムも改革し「教育環境科目群」を設け、その科目群の1つとして「学外活動・学外学習」科目を設定した。この科目を推進するために学外活動関連専門委員会を発足させ、本フレンドシップ事業は本委員会が取り組んできた。

【1】基本的な進め方・考え方

フレンドシップ教育の基本的な進め方・考え方として、次のような点を確認した。

1. 教育や教師の仕事および児童生徒の理解につながる体験を重視する。
2. 教職に夢や意欲を持てるような体験・活動を重視する。
3. ある程度の活動の継続性の維持ができるよう努める。
4. 大学における学習・研究としての位置づける。
5. 教育実習とは異なる性格であり、補助的活動を通しての体験と位置づける。
6. なるべく学生自身による主体的な活動を重視する。

【2】活動の概要

1. 活動内容と目的

次に示すような数種類の活動を企画・推進してきた。

(1) 実践体験

- ・学校における様々な教育活動に補助的に参加し、子ども・教師・学校の実際の様子に触れ、教職に対する関心・意欲を高めるとともに、学習への問題意識を喚起する。
- ・また、児童生徒に対する学校以外での様々な教育・援助活動を体験し、教育をより広い視野で考えるとともに、様々な場面における児童生徒の理解を深める。

・実践体験では次のような活動を準備した。

① 学校教育に関する活動 (ア)教材作成や授業準備の補助

(イ)授業観察

(ウ)学校行事等、特別活動に関わる補助

小学校、中学校、養護学校の中から2種類の学校での体験をする。

2つの中で、メインとサブを選択する。

② 社会教育に関する活動 社会教育活動等の指導補助員としての体験等

「浜っ子ふれあいスクール」での指導補助

(2) 「国大わくわくサタデー」

- ・学生の特技・アイデア・専門を生かして子どもたちにミニ授業を行う。指導の内容は学校のカリキュラムには限定しないで、1回毎に完結できる、ものづくりや実験教室のようなものにする。具体的企画・実施については学生の主体的な活動を重視し、学部教員は必要に応じて助言する。この活動を通して、教材開発の仕方や工夫・苦勞、子ども理解、授

業の楽しさ等について体験する。

2. 活動場所等—上記活動について、本年は次のように進めた。

(1)-①については、附属学校において実施

(1)-②については、教育委員会を通して依頼（公立小学校32校）

(2) については、教育委員会及び校長会を通して依頼（公立小学校1校）

3. 授業科目として

・科目名：「学外活動体験」 単位数（2単位）

「実践体験」及び「国大わくわくサタデー」、それぞれの活動に関して、所定の時間数に亘り活動を行い、所定の成果が認められた場合。

・活動内容、活動時間

(1) 実践体験

① 学校教育に関する活動

(ア)教材作成や授業準備の補助 3時間×4日=12時間

(イ)授業観察 2時間×1日=2時間

(ウ)学校行事等、特別活動に関わる補助 2時間×3日=6時間

② 社会教育に関する活動 4時間×4日=16時間

(2) 「国大わくわくサタデー」 2時間×5日（準備）+8時間=18時間

大学における講義

2時間×3日

計

60時間

4. 参加学生の決定、事前・事後指導及び成績評価

・参加学生の決定、事前・事後指導及び評価については、学外活動関連専門委員会が行う。

・なお、成績評価をあたっては、実際の活動時における指導・助言者の意見を尊重する。

5. フレンドシップ教育運営協議会の設置

学部教員、附属学校教員、教育委員会代表で構成し、基本的な考え方・進め方や実施していく上での協力体制について協議した。協議会の設置により、公立学校等における実施が円滑に進められた。

6. 傷害保険

参加する学生は、傷害保険に加入していることを要件とした。

【3】「学外活動体験」の実施にあたっての注意事項

実施に当たっては、次のような点を特に注意するよう参加学生へ指示をした。

・「責任感—約束は守る。仕事はきちんと行う」

・「傷害保険への加入の確認」

・「安全には十分注意する」

・「連絡を確実に行う」

参加人数は32名

【4】学校教育に関する「実践体験」の取り組み

1. 各附属学校に学生が参加可能な活動（メニュー）の提出を依頼した。その際、特に基本的な考え方・進め方の第1項、第2項について配慮してもらうよう依頼した。

2. 活動内容の記入表の作成

以下のような枠組みを作成し、表への記入を依頼した。作表の意図は、活動の内容が一部の領域に偏らないように、バランスがとれるようにすることである。

・教科に関わる領域 —教材作成や授業準備の補助、授業場面での補助・観察

・特別活動に関わる領域—学校行事や学級活動の補助、授業場面での補助・観察

・その他

想定しうる活動領域等 (参考として用意した内容)

・教科に関わる領域

教材作成や授業準備の補助

各教科 実験・実習 飼育・栽培

見学・調査などの引率補助 (含、生活科)

児童生徒に関わるもの

ノートの記録の整理・分類・特徴の洗い出し

つまずきや誤りの原因の考察・分類

提出物の整理・分類・特徴の洗い出し

授業中の児童生徒の様子記録と提出

・特別活動に関わる領域

校舎内、体育館などでの活動、学校内での活動、学校外での活動

授業時内での活動

授業時・授業観察

休み時間・給食・清掃の時間

放課後の時間(部活など)

・授業とは異なる場面での児童生徒の様子

3. 連絡体制の確立

「実践体験」を円滑に進めるためには、連絡体制を確立しておくことが特に重要である。複数の方法により確実な連絡が可能になるよう意図した。

(1) 附属学校からメニューを提出してもらい学生に示し、附属学校と学生の打ち合わせの会を設けた。

(2) 個々の活動の実施に当たっては、附属学校の責任者は学生の連絡責任者または参加する学生本人へ直接連絡する。

直接連絡を主とするねらいは次のような理由による。

・予定の変更などに臨機に対応する。

・予定の変更を柔軟にできるようにする。そのことにより学生の補助としての役割がより効果的に果たせるようにする。

(3) ホームページによる支援一別に示すようなホームページを作成し、ホームページ上で連絡ができるようにする。上記、3-(2)に記した柔軟な変更と対応にも対処しうる。

(4) 連絡ができない場合は大学キャンパスにおいて掲示する。

【5】「国大わくわくサタデー」の取り組み

平成9年11月15日、横浜市内公立Y小学校で実施。

オリエンテーションを基に学生自身で企画を提出し、グループを構成し取り組んだ。

【6】今後の検討事項

- ・学校教育に関する活動を公立学校で実施する場合の連絡体制
- ・「国大わくわくサタデー」を大学キャンパスで実施する場合の諸問題
- ・大学の授業との調整
- ・単位取得と参加形態

ようこそ!
フレンドシップ教育活動のホームページへ

●お知らせ

●活動予定表

- 附属鎌倉中学校
- 附属鎌倉小学校
- 附属横浜中学校
- 附属横浜小学校
- 附属養護学校

●参加学生情報

●質問箱

このページに関するお問い合わせは下記へメールでご連絡ください。
friendship@ed.ynu.ac.jp

質問箱

名前:

E-Mail:

タイトル:

内容:

送信

リセット

質問箱名前: こう 97年10月03日22時44分

これは質問箱です。
自由に質問してください。

附属 小学校予定表

登録したい活動のボタンにマークをつけてから [登録] ボタンを押してください。

登録

区分	登録	活動内容	活動日時	必要学生数	登録者
a1	<input type="radio"/>	学習プリントの作成 1～6年	—	—	
a2	<input type="radio"/>	理科教材準備 3～6年実験器具、観察器具等の準備片づけ	—	—	
a3	<input type="radio"/>	学校農園、学級園の整備 1～6年土おこし、草むしり、農園栽培計画の立案等	—	—	
a4	<input type="radio"/>	家庭科授業準備 5, 6年ミシンの整備・段階見本の製作	—	—	
b1	<input type="radio"/>	社会科(3～6年)・生活科(1, 2年)等の校外学習時における引率補助	—	—	
b2	<input type="radio"/>	生活科学習 1, 2年生活科めあて別グループ学習時におけるグループごとの支援者または記録者	—	—	
b3	<input type="radio"/>	図工等作品へのコメント 1～6年	—	—	
b4	<input type="radio"/>	家庭科授業の補助 5, 6年調理実習のグループごとの安全指導グループごとの買い物の学習の付き添い	—	—	
b5	<input type="radio"/>	クラブ活動の補助(第1以外の火曜日) 4～6年運動系クラブでは記録者及び審判など文化系クラブではアドバイザー	—	—	
b6	<input type="radio"/>	授業観察、教育実習時の参観教材研究との絡みで担当教官との事前の打ち合わせから行っても良い	—	—	
c1	<input type="radio"/>	運動会前日準備(9/20)ロープ張り、校庭整備、テント張り等	—	—	
c2	<input type="radio"/>	水泳大会(～8/22) 5, 6年体育大会(～10/21) 6年に向けての練習補助・役員補助	—	—	
c3	<input type="radio"/>	国際教室横浜見学時(7/22)の引率補助 4, 6年	—	—	
c4	<input type="radio"/>	鎌倉小との交歓会における補助(7/22) 5年	—	—	
c5	<input type="radio"/>	清掃補助	—	—	
c6	<input type="radio"/>	下校指導補助	—	—	
c7	<input type="radio"/>	休み時間、放課後の遊びの仲間	—	—	
d1	<input type="radio"/>	テスト採点漢字・計算などドリル、演習問題の採点	—	—	
d2	<input type="radio"/>	ラーニングセンターの図書整理	—	—	
d3	<input type="radio"/>	データベースのバックナンバーの整理(専門書)	—	—	
d4	<input type="radio"/>	理科室・理科準備室の整理	—	—	

区分の記号の意味

- a:教材作成や授業準備の補助
- b:授業場面での補助・観察
- c:学校行事・学級活動の補助
- d:その他

登録者のうち、付属の担当教官から許可をもらった人の学生番号は、赤色で示してあります。

[トップページへ](#)

保護者向けプリント用資料

1. 趣 旨

横浜国立大学においては、教員養成系学生の児童理解、基礎的な教育実践力の育成を目指して、本年度から学校教育・社会教育の場面に学生を派遣する『フレンドシップ教育』を企画・実施することといたしました。その一環として、学生の自主企画による「国大わくわくサタデー」を本校で実施することになりました。

2. 日 時：

(雨天の場合も実施：内容は若干変更あり)

3. 場 所：

4. 集合時間・集合場所：

5. 参加申し込み

- ・参加は事前申込制（右ページの申し込み用紙で）
- ・提出期限：
- ・提出先：

6. 主な活動

- ①人形劇の公演（低学年向けの創作劇を3話、各15分、所要時間は約1時間）
- ②ゲーム（ ）
- ③シャボン玉（ ）
- ④指人形づくり（ ）
- ⑤ペットボトルロケット（高学年向き、 ）
- ⑥牛乳パックを使った紙すき（ ）
- ⑦牛乳パックでつくる望遠鏡（高学年向き、 ）

愉快的な土曜日

広島大学学校教育学部附属教育実践総合センター 高橋 超

stakaha@sed.hiroshima-u.ac.jp

キーワード

自然体験, 勤労体験, 実践的指導力, 生きる力, 地域づくり

1. 趣旨

教員養成学部の学生と地域の子どもたち, 住民が自然体験や勤労体験等の直接体験を通じた活動を継続的に行うことにより, 学生が教師としての豊かな資質を培うと同時に, 子どもたちに豊かな生きる力を育て, 地域住民と児童、学生の交流を深める。

2. 運営組織 (○委員長, *地域住民)

本事業を進めるに当たり, 本学部では, 「フレンドシップ事業実行委員会」を組織している。

伊藤圭子 (学校教育学部助教授, 生活科学教育: 家庭科)

上田邦夫 (学校教育学部教授, 生活科学教育: 技術)

*植田是賢 (下見総区長)

*木原眞治 (地区民生・児童委員総務)

*日下研介 (三井建設: 地主)

*河内昌彦 (東広島市社会福祉協議会専門員)

*河野孝行 (JA下見支店長)

白根福栄 (学校教育学部教授, 教育実践総合センター)

*菅原 茂 (農業: 住民代表)

*高藤秀信 (JA広島中央営農センター)

高橋 超 (学校教育学部教授, 教育実践総合センター)

*竹岡訓子 (東広島市教育委員会指導課長)

○土井利樹（学校教育学部助教授，学校教育：社会教育学）

林 孝（学校教育学部助教授，学校教育：学校経営学）

林 武広（学校教育学部助教授，理科教育）

*藤島達則（J A広島中央営農センター）

*柘形 守（下見財産区議員）

*光本充晴（下見振興協議会事務局長）

若元澄男（学校教育学部助教授，美術教育）

<オブザーバー>

木上尊子（学校教育学部事務長補佐）

灰田郁男（学校教育学部会計係長）

松浦邦男（学校教育学部教務係長）

3. 連携機関

本事業は、下記の各機関・団体との連携のもとに行っている。

広島県教育委員会 東広島市教育委員会 J A中央

広島市教育委員会 東広島市社会福祉協議会 下見振興協議会

4. 該当授業名

本事業は、「社会教育演習（1単位，2 Semester開設）」の一貫として行い，参加学生数は60名である（うち，単位取得を希望する学生数は，30名である）。

5. 事業概要

本事業は，学校5日制によって休日となる土曜日を活用して，以下のような内容の活動を行っている途上である（各回とも，原則として，午前10時から午後4時まで）。

- 9月27日：開講式「みんなでなかまになろう」
- 10月25日：「工作で遊ぼう：相手は大空か，風か」
- 11月 8日：「秋のしゅうかくを楽しもう。ほりたてのいもを味わおう」
- 11月22日：「秋の味を楽しんで，星を見よう」
- 12月25日：「早く来い来いお正月」
- 1月24日：「ゆかいな工作となかま遊び。木はあたたかいかな」

○2月14・15日：「社会見学と野外活動」（希望者のみ）

畑については、大学周辺の住民から休耕田の提供を頂き、6月末に実行委員（JA）が耕し、参加希望の学生も手伝って、そば、じゃがいも、小豆の種まきを行った（「フレンドシップ農場」と名付けている）。

6. 参加児童

本事業に参加している児童は、東広島市内の小学生4年生以上の120名である。参加児童の募集は、以下の手順で行った。

- ①東広島市教育委員会への事前説明（8月下旬）
- ②教育委員会から市校長会にて、本事業の概要説明と協力・支援依頼（9月上旬）
- ③各学校を通して、案内パンフレットを配布（9月上旬）
- ④保護者を通して参加申込み（葉書）を行う（9月中旬、最終希望者総数は、355名）
- ⑤先着順に参加者を決定し、保護者宛に連絡（9月20日）

参加の決定した児童の保護者には、「スポーツ安全保険」への加入、及び参加誓約書の提出を求めた。

7. 活動の概要

開講式終了後に、児童を12班に分け、各班に学生を5名ずつ配置し、以後の活動は、原則として班を単位として行っている。各回の活動が終了した際には、「ニュース・レター」を作成し児童が持ち帰り、保護者に各回の活動の概要についての理解を深めてもらっている。

8. 今後の課題

現在、事業が進行中であるが、全事業が終了した後、参加学生、児童、及び保護者を対象とした調査を行い、成果の点検を行うとともに、問題点等を明らかにし、次年度以降の改善を図ることとする。

広島大学学校教育学部では、学生と子どもたちと地域の人々が一緒になって活動するフレンドシップ事業を実施することになりました。

この事業は 教員養成学部の学生と地域の子どもたち、地域住民のみなさんが自然体験・勤労体験等の直接体験を通じた活動を行うことにより、学生が教師としての豊かな資質を養うと同時に、子どもたちに豊かに生きる力を育て、地域の人々と児童、学生の交流を深めることを目標として行うものです。できるだけ、児童の主体性や自発性を大切にしながら、人や自然、文化との体験を豊かにしていくための事業です。

参加資格は東広島市の小学校に在学する4年生以上で、定員100名です。

参加希望の児童の保護者の方は、表の事業計画及び下記の応募要項をご参照の上、9月16日までに官製はがきでお申し込み下さい。(先着100名で締め切らせていただきます。)

参加者

東広島市小学校児童4年生以上	100名程度
広島大学学校教育学部学生、教職員	60名程度 (登録済み)
東広島市下見地区有志	有志の皆さん

フレンドシップ事業 「愉快的土曜日」 応募要項

- 参加資格**
- ① 参加できるのは東広島市在住の4年生以上の小学生です。
 - ② 参加は、病気などを除いて、原則として第1回から第6回までの毎回到参加出来る事が条件です。(第7回の「社会見学と野外活動：江田島青年の家で野外活動とボランティア体験：2月14日15日)は自由参加です。
 - ③ 参加者は、原則として午前10時から午後4時までの通して参加できること。
- 活動・集合場所**
- ① 活動は広島大学学校教育学部及び大学近くの畑で行います。いつの場合も、児童の集合・解散場所は広島大学学校教育学部玄関前です。
- 参加手段**
- ① 参加児童の集合・解散場所までへの移動は、保護者の責任において、公共交通、自家用車、徒歩等を利用して下さい。
 - ② 最寄りのバス停留所
西条駅 - 広島大学線 広大北口 徒歩3分
八本松駅 - 広島大学線 広大二神口 徒歩3分
 - ③ 11月22日の「第4回 秋の味覚と星を見る会」は午後1時から始まり、午後8時に終わります。必ず、保護者が迎えに来て下さい。
- 保険**
- ① 参加者は全員スポーツ安全保険に加入していただきます。
 - ② 本フレンドシップ事業中に起こった事故については、救急措置以外については、基本的にスポーツ安全保険の範囲、限度内において対応します。
(掛け金400円、死亡後遺障害2,000万円、入院1日4,000円、通院1,500円)
- 経費**
- ① 参加者費用は全体で1,500円を必要とします。
内訳：食費 1,100円
スポーツ安全保険 400円
 - ② 費用の払い込み方法につきましては、参加が決定した段階でご連絡します。
- 自由参加活動**
- ① 2月14日(土)、15日(日)の両日は1泊2日で、江田島青年の家での宿泊活動となりますが、これは希望者のみの参加になります。詳しくは、開講式で説明しますが、別途食費(4回)が2,000円必要となります。
- その他**
- ① 活動は、児童10名、学生6名、下見地区の有志・広島大学教職員若干名を1グループとして行います。原則として、保護者の参加はご遠慮願いますが、事情のある方はご相談下さい。開講式への保護者の参加はこの限りではありません。
- 応募方法**
- 参加希望の方は次の8つの事項を明記の上、下記まで官製はがきでご応募下さい。兄弟で応募の際は配慮しますが、1名ずつご応募下さい。
- ① 小学校名 ② 学年 ③ 児童名 ④ 性別
 - ⑤ 保護者名 ⑥ 住所 ⑦ 保護者連絡先電話番号 ⑧ 兄弟姉妹応募者の有無
- 応募先**
- 739 東広島市鏡山1丁目1番1号
広島大学学校教育学部 フレンドシップ事業委員会 御中
- 締め切り**
- 平成9年9月16日 (ただし、先着順100名になり次第締め切ります。)
- 決定通知**
- 参加決定者には、9月17日中に決定書、開講式案内の文書を発送します。
- 問い合わせ先**
- 広島大学学校教育学部 フレンドシップ事業委員会
電話0824-24-7195, 24-7198, 24-7182

参加誓約書

私は下記の事項を承知して、広島大学学校教育学部の行うフレンドシップ事業に児童を参加させます。

記

- 1：広島大学学校教育学部は、不慮の事故・けが等が生じた場合、救急措置以外はスポーツ安全保険の範囲内において対応すること。
- 2：集合まで及び解散後の児童の交通手段については、保護者の責任にあること。
- 3：11月22日の第4回には、保護者が夜8時に必ず迎えに行くこと。
- 4：天候や作柄など、やむをえない場合の事業内容の変更がありうること。
- 5：病気など、やむをえない事情で欠席する場合は、当日事業が始まるまでに必ず連絡すること。

広島大学学校教育学部
学部長 間田 泰弘 殿

保護者氏名 _____ 印

参加児童名 _____

保護者住所 _____

保護者自宅電話 _____

活動時間中の連絡先電話 _____

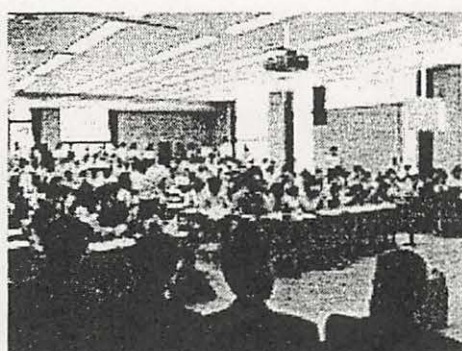
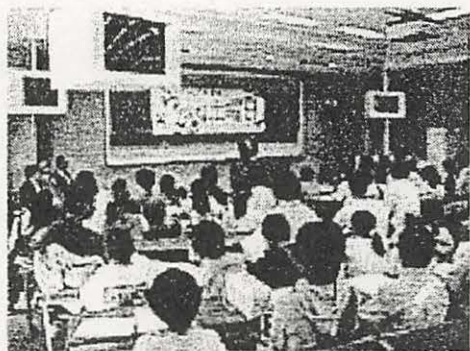
広島大学学校教育学部フレンドシップ事業

ゆかいな土曜日

ニュースレター 第1号 (1997年9月27日)

今日から、いよいよゆかいな土曜日が始まりました。

受付をすませたあと、開講式が行われました。開講式では、東広島市教育委員会山内教育長、広島中央農業協同組合の谷光次長、下見地区代表の菅原さん、および学校教育学部の間田学部長があいさつされ、ゆかいな土曜日にあつまった皆さんに、楽しく活動するよう激励されました。その後、実行委員の紹介、これからの活動の説明、および諸注意がありました。



開講式のようす。みんな、真剣に聞いています。

開講式の後、班ごとに、畑にあいさつに、出かけました。畑では、真っ白いそばの花が満開でした。豆（小豆）の花も咲いていました。新しい友達とも仲良くなれたようです。その後、みんなで、大学食堂に行って昼ごはんを食べました。



広い食堂だ！おいしいぞー！

シンポジウム報告—子どもを媒介とした大学と地域社会の連携—

北信濃の秋が深まり行く11月28日(金)、「フレンドシップ事業は優れた教師を生み出すか」をテーマとするシンポジウムが教育学部第一会議室を会場として開催された。

参加者は全国16の教員養成大学・学部の教官31、学生18、教育委員会関係者12、教員11、事務官2、一般市民5の合計79名であった。他大学からもたくさんの参加申し込みをいただき、ながのコンベンションビューローのご協力を得て、長野駅前と教育学部前に案内看板をたてた。

漆戸邦夫教育学部長の挨拶のあと、教育職員養成審議会臨時委員をつとめる小林輝行・信州大学教授から「教員養成とフレンドシップ事業」と題する講演が行なわれた。冒頭で津軽三味線の継承にまつわるエピソードを取り上げた同教授は、教育学部改革においても、退路を絶ち背水の陣を敷いて、新しいものを創り出していこうとする確固とした決意・信念なくしては活路は開かれないと厳しく訴えた。次いでフレンドシップ事業の意義として、実践的指導力の基礎を育てる有効な一つの手だてであること、連携・協力体制の構築作業を通して地域社会の教育ネットワークが推進されることを指摘した。一方課題としては、教育機関との連携・協力体制をどのようにして構築するか、フレンドシップ事業と単位認定の問題、学生の自主的・自発的活動をどのように支援していくかの3つをあげた。結びに今年度から始まったフレンドシップ事業の火は今はまだ小さいけれども、21世紀の新しい扉を開く活動となり、教員養成カリキュラム改善への炎となることに期待を寄せた。

次に行なわれた8本の実践報告は、それぞれの大学のおかれた状況の違いにより、授業科目も様々であり、どの取り組みも個性的で大変興味深い内容であった。小休憩のあとこの実践報告者をパネリストとしてパネルディスカッションが行なわれた。フロアから出された質問・意見の要点は次のようなものであった。フレンドシップ事業実行委員会に地区住民やJAが関わっているのはどういう意図からか。YOU遊サタデーは今後どうありたいと思っているのか。地域の子ども会にも大学生に入ってきてほしい。大学の教官の中に学校現場での教育経験を有する者を採用していく必要があるのではないか。フレンドシップ事業が大学改革の一環として根づいてほしい。学生たちには幼稚園児とともに遠足に出かけたり、運動会で汗を流すことによって見えてくるものがある。また、このような関わりをしている学生たちを見る地域社会の見方に変化が生じてきている。附属学校のこれからの在り方を考える上でもフレンドシップ事業は重要である。「優れた教師を生み出すか」という題がついているが、むなしいものを感じず。学校現場の実情を見るとときあまりにも悪しき教師の姿が多い。先生たちに現実の子どもの姿が見えていない。そのような先生のもとで過ごさなければならぬ子どもたちがかわいそうである。優れていなくてもよいから、せめて子どもの心がわかる先生がここから育っていくように、大学の先生方に頑張ってもらいたいと思う。

これに対してパネリストからは、次のような発言があった。これからの学校の教師には一

人の人間として、地域づくりにも参画できる力を身につけていくことが望まれる。YOU遊サタデーは一応の形ができてきたがマンネリ化してはおもしろみがない。後輩たちには敢えて新しいことに挑戦してってもらいたい。大学キャンパスを出て地域に出張したことによって得たものは大きい。学生たちはその成長過程において地域と切れることによって大学まで進んできているという現実がある。フレンドシップ事業を通して学生が子どもたちと関わることは、少年期時代を取り戻すことにもなっている。様々な体験を通して学生に自信がつかえることが重要である。フレンドシップ事業の内容としては、学生と子どもたちが一緒によろこび、一緒に発見するものがよい。教育実習では学生は教える立場になり、指導案を立て計画的に取り組むことになる。フレンドシップ事業では体験を重視し、学生が子どもと一緒にやってやることによって、子どもから学ぶという姿勢が大事になってくる。

最後にコーディネーターの藤沢謙一郎・信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター長から次のようなまとめが行なわれた。

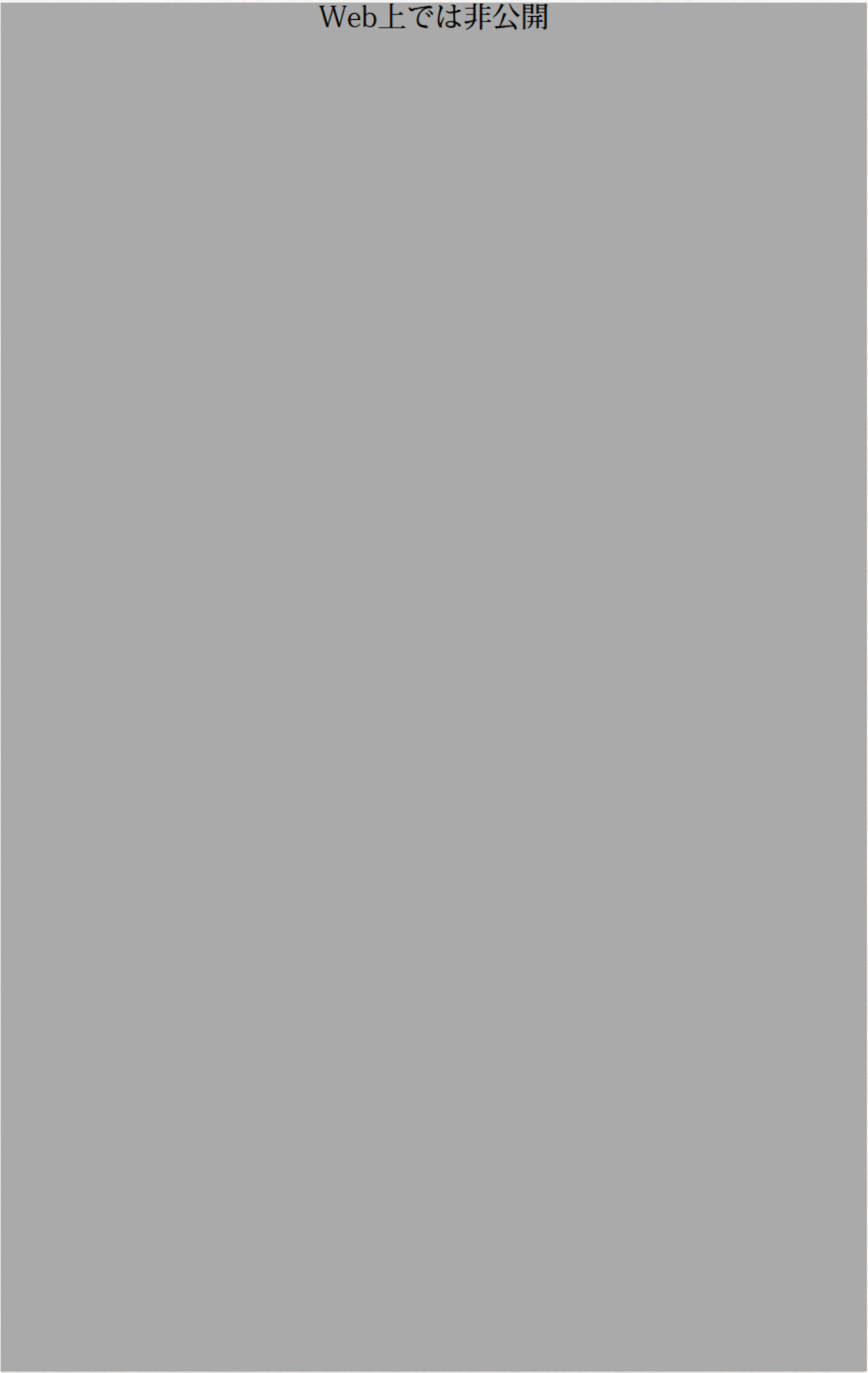
「本日のシンポジウムを通して教員養成学部に向けかけられている問題の大きさを改めて自覚しました。フロアから出された貴重なご意見を大学として真摯に受け止め、フレンドシップ事業を教育学部改革、カリキュラム改革に結び付けていくよう新たな決意で取り組んでまいりたいと思います。良い教師を生み出していくという教員養成学部で課せられた大きな使命は、大学の力だけで果たせるものではありません。フレンドシップ事業を契機として大学と地域社会の緊密な関係が構築されていくように、これらも皆様のご協力をお願い申し上げます。本日は本当にありがとうございました。」

(文責 土井進)



8. 信州大学のフレンドシップ事業に関する新聞報道

Web上では非公開



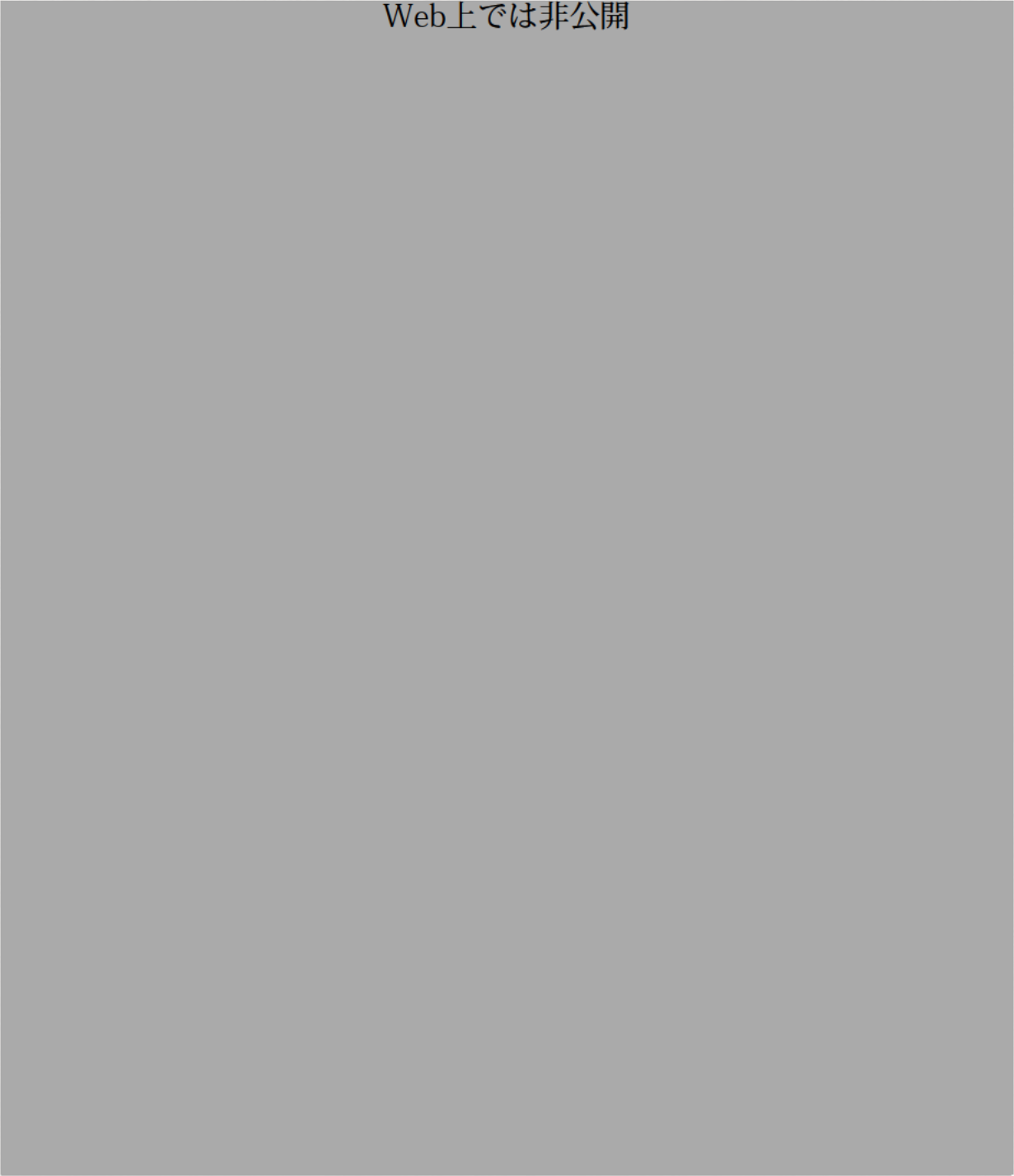
Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開



Web上では非公開



Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

あとがき

新設された「教育参加」の授業は、関係協力機関の温かいご理解とご協力により、無事2年目を終えることができた。平成9年度から文部省の教員養成学部フレンドシップ事業が始まり、本学部では「教育参加」がその対象となったのを機会に、長野県教育委員会生涯学習課ならびに県内6つの青年・少年自然の家と国立信州高遠少年自然の家との連携が始まった。これにより土曜日・日曜日の「教育参加」メニューが大幅に増加し、教員養成カリキュラムとしての内容が充実してきた。したがってこれからの第一の課題は、大学と地元教育機関との連携を大事にし、一層緊密にして、学生にとっても受け入れ側にとっても有意義なカリキュラムとなるように共同研究の態勢を整えていくことである。

第二の課題は、平成8年度に入学し「教育参加」の最初の受講生となった学生が平成10年度に「教育実習」を行うことになるので、「教育参加」と「教育実習」が連動するように工夫していくことである。そのための第一歩として「教育実習事前・事後指導」において「教育参加」レポートを学生に返し、教職への志向と一体感の形成に役立つようにしたいと考えている。本学部における「臨床経験」を重視した「教育参加」という授業が、果たして学生の教職志望度にどのような影響をもたらすか、深い関心をもって見守ってきたい。

平成9年10月3日の第5回目の全体会において実施したアンケート調査（303名の回答）では、「教育参加は学生にとって有意義な授業科目であると思う」という項目に対して「非常にそう思う」と答えた者が165名（55.1%）「そう思う」と答えた者が80名（26.7%）であった。80%を超える学生が有意義であると感じた理由は一体何なのか。

第三の課題は、「教育参加」のメニューごとに学生が「子どもの様子」「教職員の様子」「学校や社会教育施設の様子」をどのようにとらえたのか、また「参加して得たこと」は何であったのかを分析することによって、「教育参加」の教員養成カリキュラムにおける意義を明らかにすることである。

最後に、この報告書をまとめるにあたり、年度末のお忙しい中原稿をお寄せ下さいました関係協力機関の皆様にご心から御礼申し上げます。

編集委員 藤沢謙一郎（附属教育実践研究指導センター長）
土井 進（附属教育実践研究指導センター）
東原 義訓（附属教育実践研究指導センター）

【参考文献】

- 小林輝行・土井進「授業科目『教育参加』の開設について」 信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要第5号 pp.143～150 1997年6月
- 漆戸邦夫・土井進・東原義訓・小林賢一「臨床経験の授業科目『教育参加』の開設」『平成8年度日本教育大学協会研究集会発表論文・全体討議要旨』pp.53～56 1997年3月
- 土井進編『平成8年度臨床経験の授業科目「教育参加」の開設と学生の反応』
信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター 72pp. 1997年3月
- 土井進「使命感・熱意をもつ教師のたまごを育てる、いま、教員養成の現場から—信州大学教育学部1年生の『教育参加』の可能性—」
総合教育技術第52巻第11号 pp.67～70 小学館 1997年10月、
- 土井進「臨床経験の授業科目『教育参加』の開設と効果」 日本教師教育学会年報第7号 1998年（予定）

平成9年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書

信州大学教育学部における
地元教育機関と連携した「教育参加」の実践

平成10年3月31日 発行

編集・発行 信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

〒380-8544 長野市西長野6-10

TEL/FAX 026-237-6127

TEL/FAX 026-237-9296

HomePage : <http://cert.shinshu-u.ac.jp/>

E-Mail : doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp